九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— XI —

福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

昭和52年3月

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— XI —

福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

昭和44年度に開始した九州縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和51年度をもって終了しました。この8年間に膨大な経費と人力をもって南は大牟田市年ノ神遺跡から北は鞍手郡後牟田遺跡までの計159遺跡の調査を実施しました。

この報告書は昭和49年度および昭和50年度に調査を行った鞍手郡若宮町小原に所在する小原遺跡と小原古墳群についての記録であります。

若宮町には装飾古墳として有名な竹原古墳があり，八幡塚古墳や汐井掛遺跡など重要な遺跡の多い地域であります。縦貫道関係だけでも汐井掛遺跡を含めて十指にあまる遺跡について調査を実施しました。

しかしながら，調査の期間が十分でなく，その成果は意を尽しえておりません。この状況を御理解のうえ，本書を御活用頂ければ幸甚に存じます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　森　田　　實

例　　言

1. この報告書は，九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，昭和49年度および昭和50年度に発掘調査を実施した鞍手郡若宮町小原所在遺跡群の調査報告書である。
2. 発掘調査は，日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は次のとおりである。

Ⅰ …… 酒井仁夫・児玉真一

Ⅱ …… 酒井仁夫・副島邦弘・佐土原逸男・児玉真一

Ⅲ …… 酒井仁夫・松村一良・児玉真一

Ⅳ …… 児玉真一

4. 昭和49年度および昭和50年度に行った九州縦貫自動車道関係の調査は，主として山本文和主事と，栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・川述昭人・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明各技師が担当した。
5. 本書の編集は，児玉が行った。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅺ—

福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

目　　次

Ⅰ　小原遺跡・小原古墳群の歴史的環境……1

Ⅱ　小原遺跡の調査……7

1. 調査の経過……7

2. 調査の内容……11

3. 弥生時代の遺構と遺物……12

4. 古墳時代の遺構と遺物……46

5. 歴史時代の遺構と遺物……65

Ⅲ　小原古墳群の調査……71

1. 調査の経過……71

2. 調査の内容……73

1　小原1号墳……74

2　小原2号墳……81

3　小原3号墳……86

4　小原4号墳……89

5　小原5号墳……95

6　小原6号墳……97

7　小原7号墳……102

8　小原8号墳……107

9　土壙群の調査……112

Ⅳ　結　　語

1. 弥生時代の小原集落……121

2. 古墳時代の小原集落と小原古墳群……126

図　版　目　次

小　原　遺　跡

本文対照頁

PL. 1　遠園遺跡・茶臼山城跡・小原古墳群・小原遺跡航空写真……1
PL. 2　小原遺跡第1次調査航空写真（酒井撮影）……7
PL. 3　（1）小原遺跡航空写真（池辺撮影）……11
　　（2）小原遺跡第Ⅱ次調査東半部航空写真（池辺撮影）……11
PL. 4　（1）小原遺跡第Ⅱ次調査西半部全景（上野撮影）……11
　　（2）小原遺跡第Ⅱ次調査西端部（上野撮影）……11
PL. 5　小原遺跡第Ⅱ次調査東半部航空写真（池辺撮影）……11
PL. 6　小原遺跡第Ⅱ次調査航空写真全景（上野撮影）……11
PL. 7　（1）小原遺跡第1次調査全景（酒井撮影）……12
　　（2）小原遺跡第1次調査東半各住居跡（酒井撮影）……12
PL. 8　（1）小原遺跡第1号住居跡（酒井撮影）……46
　　（2）小原遺跡第2号住居跡（酒井撮影）……49
PL. 9　（1）小原遺跡第3号住居跡（酒井撮影）……12
　　（2）小原遺跡第4号住居跡（酒井撮影）……50
PL. 10　（1）小原遺跡第7号住居跡（児玉撮影）……17
　　（2）小原遺跡第8・9号住居跡（児玉撮影）……18. 52
PL. 11　（1）小原遺跡第10号住居跡と第1号貯蔵穴（舟山撮影）……53
　　（2）小原遺跡第10号住居跡と第1号貯蔵穴（舟山撮影）……53
PL. 12　（1）小原遺跡第11～第14号住居跡（児玉撮影）……19～23
　　（2）小原遺跡第11・12号住居跡（児玉撮影）……19.56
PL. 13　（1）小原遺跡第11号住居跡鉈出土状態（児玉撮影）……20
　　（2）小原遺跡第13・14号住居跡（児玉撮影）……22.56
PL. 14　（1）小原遺跡第15号住居跡（副島撮影）……24
　　（2）小原遺跡第16号住居跡（児玉撮影）……57
PL. 15　（1）小原遺跡第17号住居跡（副島撮影）……24
　　（2）小原遺跡第18号住居跡（副島撮影）……26
PL. 16　（1）小原遺跡第19号住居跡（児玉撮影）……59
　　（2）小原遺跡第21号住居跡（副島撮影）……30
PL. 17　（1）小原遺跡第22号住居跡（児玉撮影）……62
　　（2）小原遺跡第1号貯蔵穴遺物出土状態（副島撮影）……31

PL. 18　（1）小原遺跡第1号貯蔵穴（児玉撮影）……31
（2）小原遺跡第2号貯蔵穴（副島撮影）……40
PL. 19　（1）小原遺跡第3号溝状遺構（SD3），第1号竪穴遺構（SX1），
第10号住居跡航空写真（池辺撮影）……42.53.62
（2）小原遺跡第3号溝状遺構（児玉撮影）……42
PL. 20　（1）小原遺跡掘立柱建物群航空写真（池辺撮影）……66
（2）小原遺跡第7号掘立柱列（副島撮影）……66
PL. 21　小原遺跡第1次調査出土土器（酒井撮影）……13
PL. 22　小原遺跡第7号・第17号・第18号住居跡出土土器（石丸撮影）……17.25.27
PL. 23　小原遺跡第1号貯蔵穴出土土器①（石丸・児玉撮影）……33～40
PL. 24　小原遺跡第1号貯蔵穴出土土器②（石丸撮影）……33～40
PL. 25　小原遺跡住居，第3号溝状遺構出土土器（石丸撮影）……43
PL. 26　（1）小原遺跡第10号住居跡出土土製模造鏡（児玉撮影）……54
（2）小原遺跡第10号住居跡出土土鈴（児玉撮影）……54
PL. 27　小原第1号竪穴遺構出土土器（石丸撮影）……63
PL. 28　（1）小原遺跡出土土器（石丸撮影）……55.56.57.62
（2）小原遺跡出土鉄器（石丸撮影）……17.20.29
PL. 29　小原遺跡出土石器①（石丸撮影）……
PL. 30　小原遺跡出土石器②（石丸・児玉撮影）……

小　原　古　墳　群

PL. 31　（1）小原古墳群全影（児玉撮影）……71.73
（2）小原古墳群第1次調査全影（児玉撮影）……71.73
PL. 32　（1）小原古墳群6～8号墳全影（酒井撮影）……73
（2）小原古墳群6～8号墳航空写真（池辺撮影）……73
PL. 33　（1）小原1号墳全景（酒井撮影）……74
（2）小原1号墳石室全景（酒井撮影）……75
PL. 34　（1）小原2号墳全景（酒井撮影）……81
（2）小原2号墳石室全景（酒井撮影）……82
PL. 35　（1）小原3号墳全景（酒井撮影）……86
（2）小原3号墳石室掘方全景（酒井撮影）……88
PL. 36　小原3号墳石室掘方全景（酒井撮影）……88
PL. 37　（1）小原4号墳全景（酒井撮影）……89
（2）小原4号墳石室掘方全景（酒井撮影）……91

PL. 38　（1）小原4号墳遺物出土状態（酒井撮影）……94
（2）小原4号墳遺物出土状態（酒井撮影）……94
PL. 39　（1）小原5号墳全景（酒井撮影）……95
（2）小原5号墳石室全景（酒井撮影）……96
PL. 40　（1）小原6号墳全景（酒井撮影）……97
（2）小原6号墳石室掘方全景（酒井撮影）……98
PL. 41　（1）小原6号墳遺物出土状態（児玉撮影）……99
（2）小原7号墳全景（児玉撮影）……102
PL. 42　（1）小原7号墳石室掘方全景（酒井撮影）……103
（2）小原7号墳石室掘方全景（池辺撮影）……103
PL. 43　（1）小原8号墳全景（酒井撮影）……107
（2）小原6～8号墳と8号墳掘方全景（酒井撮影）……108
PL. 44　小原1号墳出土土器①（池辺・児玉撮影）……78.79
PL. 45　小原1号墳出土土器②（池辺・児玉撮影）……78.79
PL. 46　小原2号墳出土土器①（池辺・児玉撮影）……84
PL. 47　（1）小原2号墳出土土器②（池辺・児玉撮影）……84
（2）小原3号墳出土土器（児玉撮影）……88
PL. 48　（1）小原4号墳出土土器（児玉撮影）……93
（2）小原5号墳出土土器（児玉撮影）……96
PL. 49　小原6号墳出土土器①（児玉撮影）……99
PL. 50　小原6号墳出土土器②（児玉撮影）……99
PL. 51　小原7号墳出土土器①（児玉撮影）……103
PL. 52　小原7号墳出土土器②（児玉撮影）……106
PL. 53　小原7号墳出土土器③（児玉撮影）……106
PL. 54　小原8号墳出土土器（石丸撮影）……109
PL. 55　（1）小原5号墳出土装身具（石丸撮影）……97
（2）小原7号墳出土石器（石丸撮影）……103
（3）小原8号墳出土装身具（石丸撮影）……108
PL. 56　（1）小原3号墳墳丘北裾土壙群（酒井撮影）……112
（2）小原3号墳墳丘南西裾土壙群（酒井撮影）……112
PL. 57　（1）第1号土壙（酒井撮影）……112
（2）第2号土壙（酒井撮影）……112
PL. 58　（1）第3号土壙（酒井撮影）……112

（2）第4号土壙（酒井撮影）…… 112
PL. 59　（1）第6号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第7号土壙（酒井撮影）…… 112
PL. 60　（1）第9号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第10号土壙（酒井撮影）…… 112
PL. 61　（1）第11号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第12号土壙（酒井撮影）…… 112
PL. 62　（1）第17号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第13号土壙（酒井撮影）…… 112
PL. 63　（1）第14号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第15.18号土壙（酒井撮影）……112
PL. 64　（1）第16号土壙（酒井撮影）…… 112
（2）第19号土壙（酒井撮影）…… 113
PL. 65　（1）第21号土壙（酒井撮影）…… 113
（2）第22号土壙（酒井撮影）…… 113
PL. 66　第23号土壙と3号墳の切り合い状態（酒井撮影）…… 113
PL. 67　（1）第25号土壙（酒井撮影）…… 113
（2）第26号土壙（酒井撮影）…… 113
PL. 68　（1）第28号土壙（酒井撮影）…… 113
（2）第29号土壙（酒井撮影）…… 113

挿　図　目　次

小　原　遺　跡

本文対照頁

Fig. 1　九州縦貫自動車道と小原遺跡・小原古墳群の位置（二神和子製図）…… 1
Fig. 2　若宮・宮田地区遺跡分布図（池辺元明作成）…… 1
Fig. 3　小原遺跡周辺地形図（二神製図）…… 7～12
Fig. 4　小原遺跡昭和49年度調査地形図（酒井仁夫製図）…… 7～12
Fig. 5　小原遺跡昭和49年度調査遺構配置図（酒井製図）…… 7～12
Fig. 6　第3号住居跡実測図（酒井実測製図）……12
Fig. 7　第5号住居跡実測図（酒井実測製図）……14
Fig. 8　昭和49年度調査出土土器実測図（酒井実測製図）……15
Fig. 9　第7号住居跡実測図（佐土原逸男実測，二神製図）……17

Fig. 10 第7号住居跡出土鉄器実測図（舟山良一実測，児玉真一製図）……17
Fig. 11 第7号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……17
Fig. 12 第7号住居跡出土土器実測図（児玉実測製図）……18
Fig. 13 第8・9号住居跡実測図（酒井実測，二神製図）…… 18.52
Fig. 14 第9号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……19
Fig. 15 第9号住居跡出土土器実測図（宮原真裕美実測，児玉製図）……19
Fig. 16 第11号住居跡出土鉄器実測図（児玉実測製図）……20
Fig. 17 第11号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……20
Fig. 18 第14号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……22
Fig. 19 第15号住居跡実測図（副島邦弘・児玉実測，二神製図）……24
Fig. 20 第17号住居跡実測図（副島実測，二神製図）……24
Fig. 21 第17号住居跡出土土器実測図（舟山・宮原・児玉実測，児玉製図）……25
Fig. 22 第18号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……27
Fig. 23 第18号住居跡出土土器実測図（宮原・児玉実測，児玉製図）……28
Fig. 24 第20号住居跡実測図（副島実測，二神製図）……29
Fig. 25 第20号住居跡出土鉄器実測図（舟山実測，児玉製図）……29
Fig. 26 第20号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……29
Fig. 27 第21号住居跡実測図（副島実測，二神製図）……30
Fig. 28 第1号貯蔵穴実測図（副島・川述公紀実測，二神製図）……31
Fig. 29 第1号貯蔵穴出土石器実測図（宮原・児玉実測，児玉製図）……32
Fig. 30 第1号貯蔵穴出土土器実測図①（児玉実測製図）……33～40
Fig. 31 第1号貯蔵穴出土土器実測図②（児玉実測製図）……33～40
Fig. 32 第1号貯蔵穴出土土器実測図③（舟山・児玉実測，児玉製図）……33～40
Fig. 33 第1号貯蔵穴出土土器実測図④（舟山・宮原・児玉実測，児玉製図）……33～40
Fig. 34 第1号貯蔵穴出土土器実測図⑤（児玉実測製図）……33～40
Fig. 35 第2号貯蔵穴実測図（副島・佐土原実測，二神製図）……40
Fig. 36 第2号貯蔵穴出土石器実測図（児玉実測製図）……41
Fig. 37 第2号貯蔵穴出土土器実測図（舟山実測，児玉製図）……41
Fig. 38 第3号溝状遺構出土石器実測図（舟山実測，児玉製図）……42
Fig. 39 第3号溝状遺構出土土器実測図①（児玉実測製図）……42
Fig. 40 第3号溝状遺構出土土器実測図②（宮原・児玉実測，児玉製図）……44
Fig. 42 その他の出土土器実測図（酒井実測製図）……45
Fig. 43 第1号住居跡実測図（酒井実測製図）……46

Fig. 44 第2号住居跡実測図（酒井実測製図）……49
Fig. 45 第2号住居跡出土石器実測図（酒井実測製図）……49
Fig. 46 第4号住居跡実測図（酒井実測製図）……50
Fig. 47 昭和49年度調査出土土器実測図（酒井実測製図）……51
Fig. 48 第8号住居跡出土土器実測図（児玉実測製図）……52
Fig 49 第10号住居跡実測図（酒井実測，児玉製図）……53
Fig. 50 第10号住居跡出土石器実測図（児玉実測製図）……53
Fig. 51 第10号住居跡出土土製品実測図（舟山実測，児玉製図）……54
Fig. 52 第10号住居跡出土土器実測図（舟山・宮原・児玉実測，児玉製図）……55
Fig. 53 第12号住居跡出土土器実測図（児玉実測製図）……56
Fig. 54 第13号住居跡出土土器実測図（宮原実測，児玉製図）……56
Fig. 55 第16号住居跡出土土器実測図（船山実測，児玉製図）……57
Fig. 56 第16号住居跡実測図（副島・児玉実測，児玉製図）……57
Fig. 57 第19号住居跡出土土器実測図（宮原・児玉実測，児玉製図）……59
Fig. 58 第19号住居跡実測図（副島・児玉実測，二神製図）……59
Fig. 59 第22号住居跡出土土器実測図（舟山実測、児玉製図）……62
Fig. 60 第1号竪穴遺構出土土器実測図（児玉実測製図）……63
Fig. 61 その他の出土土器実測図（宮原実測，児玉製図）……65
Fig. 62 第1・2号掘立柱建物実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 63 第3号掘立柱建物実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 64 第4号掘立柱建物実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 65 第5号掘立柱建物実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 66 第6号掘立柱建物実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 67 第7号掘立柱列実測図（酒井・佐土原実測，二神製図）……66
Fig. 68 出土遺物実測図（宮原実測，児玉製図）……69

小　原　古　墳　群

Fig. 69 茶臼山古墳群分布図（児玉作成，伊東製図）……71
Fig. 70 小原古墳群地形実測図（児玉・高田・田平・野見山実測，児玉製図）……71
Fig. 71 小原1・5号墳墳丘実測図（高田・田平・野見山実測，伊東製図）……74．95
Fig. 72 小原1・5号墳地山面地形実測図（田平・松村実測，伊東製図）……74．95
Fig. 73 小原1号墳遺物出土状態実測図（松村実測製図）……77
Fig. 74 小原1号墳出土土器実測図①（伊東実測，児玉製図）……77～80
Fig. 75 小原1号墳出土土器実測図②（伊東実測，児玉製図）……77～80

Fig. 76 小原2号墳墳丘実測図（高田・田平・野見山実測，伊東製図）……81
Fig. 77 小原2号墳地山面地形実測図（田平・松村実測，伊東製図）……81
Fig. 78 小原2・3号墳出土土器実測図（伊東実測、児玉製図）……83. 88
Fig. 79 小原3号墳墳丘実測図（高田・田平・野見山実測，伊東製図）……86. 87
Fig. 80 小原3号墳地山面地形実測図（田平・松村実測，伊東製図）……86. 87
Fig. 81 小原4号墳墳丘実測図（高田・松村・伊東実測，伊東製図）……90. 91
Fig. 82 小原4号墳地山面地形実測図（田村・松村実測，伊東製図）……90. 91
Fig. 83 小原4号墳出土土器実測図（伊東実測，児玉製図）……92
Fig. 84 小原4号墳遺物出土状態実測図（松村実測製図）……92
Fig. 85 小原5号墳出土装身具実測図（伊東実測，宇野製図）……97
Fig. 86 小原6号墳墳丘実測図（酒井・児玉・高田実測，舟山製図）……98
Fig. 87 小原6～8号墳地山面地形実測図（高田実測，児玉製図）……98.102.107
Fig. 88 小原6号墳墳丘断面実測図（児玉実測，二神製図）……97. 98
Fig. 89 小原6号墳石室実測図（土屋・出利葉・松田実測，二神製図）……98
Fig. 90 小原6号墳出土遺物実測図（児玉実測製図）……99
Fig. 91 小原7号墳墳丘実測図（酒井・児玉・高田実測，舟山製図）…… 102
Fig. 92 小原7号墳墳丘断面実測図（酒井実測，児玉製図）…… 102
Fig. 93 小原7号墳石室掘方実測図（児玉・出利葉実測，二神製図）…… 103
Fig. 94 小原7号墳出土石器実測図（舟山実測，児玉製図）…… 103
Fig. 95 小原7号墳出土土器実測図①（児玉実測製図）……103～106
Fig. 96 小原7号墳出土土器実測図②（児玉実測製図）……103～106
Fig. 97 小原8号墳墳丘実測図（酒井・児玉・高田実測，舟山製図）…… 107
Fig. 98 小原8号墳墳丘断面実測図（酒井実測，二神製図）…… 107
Fig. 99 小原8号墳石室掘方実測図（児玉・出利葉実測，二神製図）…… 108
Fig. 100 小原8号墳装身具実測図（舟山実測，児玉製図）…… 108
Fig. 101 小原8号墳出土土器実測図（児玉実測製図）…… 110
Fig. 102 小原土壙群配置図（高田・田平・松村実測，松村製図）…… 112
Fig. 103 小原土壙実測図①（田平・松村実測，伊東製図）…… 112
Fig. 104 小原土壙実測図②（田平・松村実測，伊東製図）…… 112
Fig. 105 小原土壙実測図③（田平・松村実測，伊東製図）…… 112.113
Fig. 106 小原土壙実測図④（田平・松村実測，伊東製図）…… 119
Fig. 107 小原土壙実測図⑤（田平・松村実測，伊東製図）…… 119
Fig. 108 小原土壙実測図⑥（田平・松村実測，伊東製図）…… 119

付　図　目　次

Fig. ① 遠園遺跡・茶臼山城跡・小原古墳群・小原遺跡周辺地形図（伊東製図）…… 1
Fig. ② 小原遺跡地形実測図（酒井・副島・児玉・佐土原・川述実測，児玉製図）……11
Fig. ③ 小原遺跡遺構配置図（酒井・副島・児玉・佐土原・川述実測，岩瀬製図）……11
Fig. ④ 第11・12号住居跡実測図（副島・川述実測，二神製図）……19. 56
Fig. ⑤ 第13・14号住居跡実測図（副島・川述実測，二神製図）……22. 56
Fig. ⑥ 第18号住居跡実測図（副島・佐土原実測，二神製図）……26
Fig. ⑦ 第22号住居跡実測図（富永実測，二神製図）……62
Fig. ⑧ 小原1号墳石室および墳丘断面実測図（酒井・松村実測，伊東製図）……75
Fig. ⑨ 小原2号墳石室および墳丘断面実測図（酒井実測，伊東製図）……82
Fig. ⑩ 小原3号墳石室および墳丘断面実測図（酒井実測，伊東製図）……88
Fig. ⑪ 小原4号墳石室および墳丘断面実測図（高田実測，伊東製図）……91
Fig ⑫ 小原5号墳石室および墳丘断面実測図（松村・高田実測，伊東製図）……96

表　目　次

Tab. 1 鞍手郡若宮町宮田町所在遺跡地名表（池辺作成）…… 1
Tab. 2 土壙一覧表（松村作成）……112. 113
Tab. 3 小原遺跡各住居跡計測表（児玉作成）…… 125

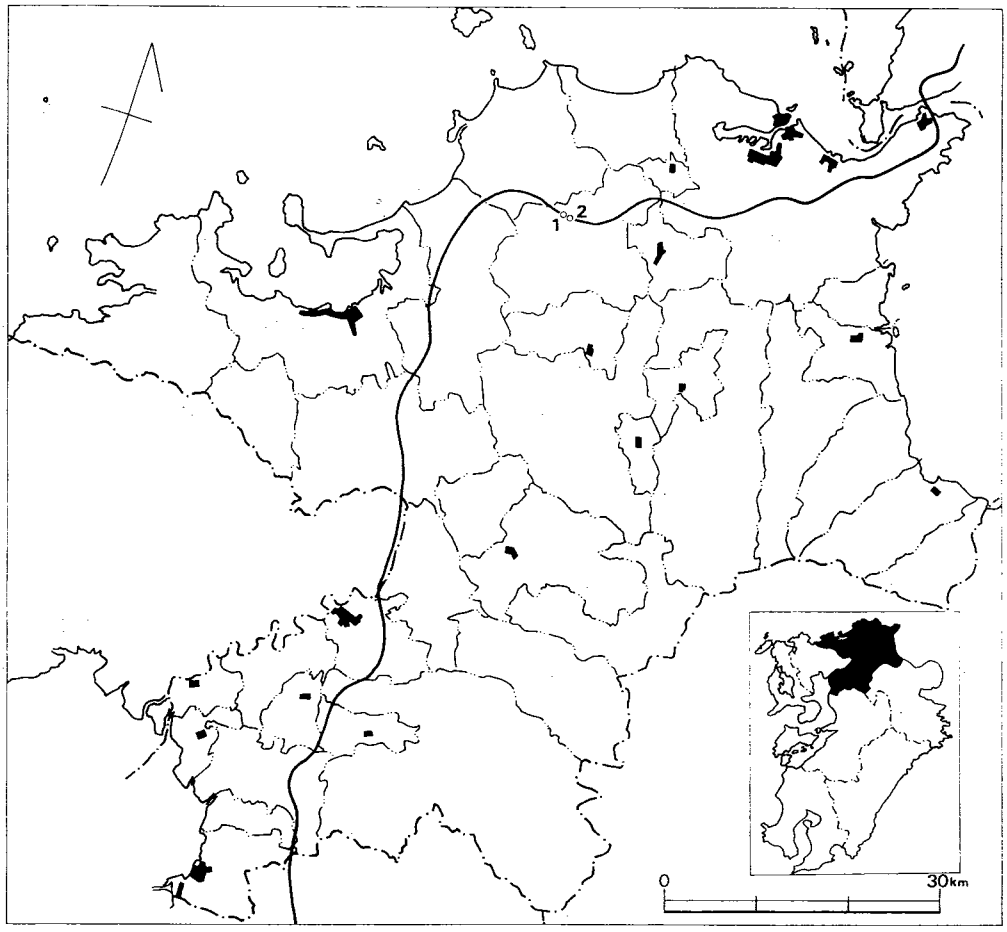


Fig. 1　九州縦貫道と小原遺跡(2)・小原古墳群(1)の位置

I　小原遺跡・小原古墳群の歴史的環境

Ⅰ 小原遺跡・小原古墳群の歴史的環境

小原遺跡・小原古墳群は鞍手郡若宮町大字山口字小原に所在する。地目は，前者は水田，後者は山林である。

若宮町の平野は，犬鳴峠に源を発する犬鳴川両岸と，見坂峠に源を発する山口川両岸に開けている。両河川の合流点付近，すなわち両平野の接点たる交通の要衝に，竪穴系横口式石室を内部主体とする八幡塚古墳[1]，装飾古墳として著名な竹原古墳[2]が存在する。前者は小原古墳群築造開始前の古墳であると思われ，後者は，小原古墳群の形成期と重なる。また，装飾古墳については，犬鳴川左岸の間組の造成する西日本ファミリーランド内で，「竹原古墳のごとある」装飾古墳が破壊されたという噂がある。これは単なる噂とは思われず，我々の調べた所，西日本ファミリーランドの作業員は工事施行主体者からきつく口止めされているふしがあり，西日本ファミリーランド内にかって装飾古墳が存在し，現在，心なくも破壊されたであろう可能性は大いにある。

尚，両河川合流点付近には，内部主体は不明であるが，帆立貝式前方後円墳たる高野1号墳および，剣塚前方後円墳がある。前者は恐らく5世紀代に構築された可能性がある。このように，犬鳴川，山口川の合流点は少なくとも5世紀後半代以降交通の要衝としての位置を保ち，恐らく，山口川に沿った旧道は見坂峠を越えて宗像方面に通じ，犬鳴川に沿った旧道は犬鳴峠を越えて，太宰府および現在の福岡市方面に通じていたと思われる。

小原古墳群東方約1㎞の地点に汐井掛古墳群[3]がある。すべて円墳からなり，総数30基を超え，そのうち20基以上が調査された。内部主体は横穴式石室と竪穴系横口式石室および土壙であった。土壙を内部主体とする古墳の築造年代は明確ではないが竪穴系横口式石室を内部主体とする24号墳から第Ⅲ型式よりも古い須恵器が出土し，6世紀中葉以前に比定される。この古墳群は遅くとも6世紀前半には築造が開始されていたと思われる。

昨近，小原古墳群内に含まれると思われる，若宮町大字山口字里で前方後円墳が確認され，内部主体は石棚を持つ横穴式石室である[4]。

また，沼口部落内にも円墳がいくつか知られており，そのうちの1基からは鉄刀が出土したようである。

小原遺跡に関係する遺跡として柳ケ谷遺跡[5]がある。弥生時代中期からはじまる集落跡で，弥生時代後期および古墳時代後期の住居跡が主に検出されている。

更に中世には，小原古墳群と部分的に重複して山城たる茶臼山城[6]が存在する。平安時代末期に構築されたであろうと考えられ，この城跡に対応する集落として遠園遺跡[7]が調査され，掘立

柱建物遺構や土壙，土壙墓等を検出し，青白磁類や土師器・瓦器・鉄器が出土している。

小原遺跡，古墳群はこのような歴史的環境にあり，小原遺跡の弥生時代後期の集落は汐井掛遺跡[8]の木棺墓，石蓋土壙墓・箱式石棺墓群を営んだ集落とは無縁ではなかったろうし，小原遺跡の古墳時代の集落も小原古墳群を構築する母体になったであろうと考えられる。

小原遺跡・小原古墳群は犬鳴川の支流，見坂峠から流れ出た山口川の右岸に位置する。宗像郡東郷から低い峠を越えた旧道は，小原集落で見坂峠越えの道と合流する。その合流点に遺跡は面しており，遺跡地より峠側の沖積地は急に狭くなる。

山口川右岸，小原集落後背には2支の丘陵がせまっており，下の東側丘陵は緩く，上の西側丘陵は1 1/6～1/10勾配とやや急である。その間の谷は狭いが，かなりの深田である。東側丘陵上には小原遺跡が，西側丘陵上には小原古墳群が立地する。現在の小原集落の中心は，小原遺跡の北側に接しており，現集落地の下層にまで遺跡が広がる可能性がある。つまり，山口川に向って舌状に突出した丘陵突端緩傾斜地に古来より集落が営まれていたと想定される。標高は調査地内では73mから66mまであり，現集落地を含めると58mまで広がり，面積約40,000m^2である。

小原古墳群は小原集落の西側後背丘陵中腹に弧状に分布する。丘陵の東端に近い南北およそ二面に分かれ，北側斜面に約12基，南側斜面に約20基がそれぞれ小群をなして分布する。これらは殆どが大規模な盗掘を受けており，里集落に近い1基のみがかろうじて天井石まで残している。

小原古墳群立地地域の上には，中世山城が築かれており，その当時に破壊された古墳も多いと考えられる。中世山城については，縦貫道関係調査報告書第16集を参照されたい。

（酒井仁夫・児玉真一）

註　①　昭和50年度，福岡県教育委員会調査

②　森　貞次郎「竹原古墳」中央公論美術出版　1968.

同　「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『九州考古学』1　1957

小林　行雄「装飾古墳」平凡社　1964

斉藤　忠編「古墳壁画」日本原始美術5　1965

酒井　仁夫「金丸古墳付，竹原古墳出土遺物」若宮町教育委員会　1975

③　福岡県教育委員会「鞍手のむかしその3」若宮町所在遺跡の報告会資料1976，報告書近刊

④　小方良臣氏による

⑤　③に同

⑥　③に同

⑦　③に同

⑧　③に同

Fig. 2 若宮・宮田地区遺跡分布図(縮尺1/25,000)

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物	
縄文時代							
1	鶴ヶ谷	若宮町小原字鶴ヶ谷	丘陵先端	縄文	散布地	石族・後期土器片	
弥生時代							
2	柳ヶ谷	若宮町水原字柳ヶ谷	丘陵	弥生～奈良	住居跡・貯蔵穴 掘立柱遺構	弥生式土器・須恵器・土師器 石器	1・2
3	小原	〃　山口字小原	〃	弥生～古墳	住居跡・貯蔵穴	弥生式土器．須恵器・土師器 鉄製品・土器　石	2
4	都地原	〃　沼口字都地原	丘陵平垣地	〃	住居跡	弥生式土器，須恵器・土師器	1
5	汐井掛	〃　沼口字汐井掛	〃	弥生～歴史	土拡墓・木棺墓 石蓋土拡墓 箱式石棺墓・円墳 蔵骨器	弥生式土器・土師器須恵器 後漢鏡・玉類・鉄製品	2
6	小金原	〃　高野字小金原	段丘上	弥生	散布地	石斧・石庖丁	3
7	東禅寺	〃　脇田字湯原	〃	〃	〃	〃	3
8	金丸	〃金丸	丘陵	〃		銅戈・銅剣	3．4．8
9	先尾高	〃　高野字先尾高	〃	〃	住居跡	弥生式土器	5
10	上大隈	宮田町上大隈	河岸段丘	〃	弥生式土器散布地	石包丁・鏃・石斧	3．6．7
11	薬師丸	〃　磯光字薬師丸	〃	〃	〃	弥生式土器	3
古墳時代							
12	小原古墳群 里古墳	若宮町山口字小原・里	丘陵	古墳	円墳80基(内8基調査) 前方後円墳1基	須恵器・土師器・馬具・玉類 鉄製品	1．2．5
13	剣塚古墳	〃　高野字剣塚	丘陵先端	〃	前方後円墳	円筒埴輪	3
14	高野古墳群	〃　高野	丘陵	〃	前方後円墳4基 円墳9基		
15	浦源古墳群	〃　金丸字浦原	〃	〃	円墳16基		
16	天神山古墳群 金丸古墳群 西の浦古墳群	若宮町金丸字天神山	丘陵	古墳	円墳4基	鉄剣・鉄斧・鎌・刀子・人骨	10・11
17	沼口・萩野古墳群	〃　沼口	〃	〃	円墳		
18	竹原古墳	〃　竹原字諏訪神社	丘陵先端	〃	装飾古墳	馬具具・玉類・鏡片・鉄鏃	3.12～18
19	稲光古墳群	〃　稲光字沖	丘陵	〃	円墳3基		
20	上金生古墳群 白山神社裏古墳	〃　金丸字上金生	〃	〃	円墳32＋a基		
21	庄屋村東古墳群	〃　下字庄屋村	〃	〃	円墳11基		
22	庄屋村西古墳群	〃　〃	〃	〃	円墳(5基残存1部開口)		
23	大浦東古墳群	〃　原田字大浦	〃	〃	円墳2基		

Tab.　1　鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡地名表

24	大浦西古墳群	〃　〃	〃	〃	円墳15基(現存12基)		
25	八幡塚古墳	〃　平字竹原	丘陵先端	〃	円墳	円筒埴輪片・須恵器片	19
26	越後古墳	〃　金丸字越後	〃	〃	〃	須恵器	
27	向田古墳	〃　原田字越後	丘陵	〃	〃		
28	損ヶ熊古墳群	〃　原田字損ヶ熊	〃	〃	円墳５基		
29	宮永古墳群	〃　宮永	〃	〃	円墳20基		
30	東禅寺古墳群	〃　庄屋村	〃	〃	円墳10基		
31	平古墳	〃　平	〃	〃	円墳		
32	伊野古墳	〃　平字竹村	〃	〃	円墳		
33	竹原	〃　〃	〃	〃	箱式石棺	鉄器	3
34	古賀の原	〃　銅字古賀の原	段丘	〃	散布地	須恵器・鏡片・玉類・人骨 金銀環	3
35	田尻	〃　金丸水原	〃	古墳～歴史	住居跡	須恵器・土師器	19・21
36	浦宮古墳群	宮田町本庄字浦宮	丘陵	古墳	円墳２基 前方後円墳１基		
37	上屋敷横穴群	〃　上大隈字上屋敷	〃	〃	横穴３基		
	下有木古墳群	〃　下有木	〃	〃	円墳９基(現存５基)		
39	下有木北古墳群	〃　〃	〃	〃	円墳・箱式棺	人骨・鉄刀・鉄鏃・須恵器	
40	百塚古墳群	〃　上有木字向の畑	〃	〃	円墳(現存50基)		28
41	井堀古墳群	〃　上有木字井堀	〃	〃	円墳		
42	四ッ塚古墳群	〃　上有木字向の畑	〃	〃	円墳６基(現存５基)		
43	生見古墳群	〃　宮田字生見	〃	〃	円墳２基		
44	本白古墳 上大隅古墳	〃　本城字本白	〃	〃	円墳２基	鉄器・玉類	
45	亀石古墳群	〃　本城字亀石	〃	〃	円墳２基		
46	谷古墳群	〃　龍徳字谷	〃	〃	円墳３基(現存１基)		
47	龍徳古墳群	〃　龍徳	〃	〃	円墳５基		
48	倉山古墳 谷頭古墳	宮田町上大隅字谷山頭	段丘	古墳	前方後円墳	同筒埴輪・管玉・鉄鏃	23
49	向の畑	〃　下有木字向の畑	丘陵	〃	箱式石棺	鉄剣	
50	神田	〃　上有木字坂元	〃	〃	〃		
	歴　史　時　代						
51	咲花	若宮町沼口字咲花	丘陵平垣地	奈良	集落・住居跡	須恵器・土師器	1
52	遠園	〃　山口字里	〃	中世	建物跡・掘立柱・土拡 土拡墓	青磁・白磁・土師器・瓦器 合子・鉄器	1・2
53	茶臼山城跡	〃　山口字里小原	丘陵	〃	山城跡・空濠・土塁	圭師器・須恵器・青磁	1・2
54	宮永城跡	〃　宮永	山頂	〃	〃		

55	明専寺城跡	〃　野中	丘陵	〃	〃		
56	天の坊城跡	〃　天の坊	山頂	〃	〃		
57	清水城跡	〃　清水	〃	〃	〃		
58	熊ヶ城跡	〃　大鳴	〃	〃	〃		
59	草場城跡	〃　乙野字草場	〃	〃	〃		3
60	友池城跡	〃　原田字友池	丘陵	〃	〃		
61	賢鏡山城跡	〃　金生字賢鏡山	山頂	〃	〃		
62	山口神社経塚	〃　沼口		〃	経塚	経筒・銅鏡	3
63	清泉寺跡	〃　金丸字岩崎	段丘	〃	寺跡	土師器片	
64	金丸墓地	〃　金丸	〃	江戸	近世墓		25
65	若宮条里	〃　若宮平野	〃	奈良			26
66	稲光城跡	〃　稲光	山頂	中世	山城跡		
67	下村城跡	〃　下字乙藤	丘陵	〃	〃		
68	金丸城跡	〃　金丸	丘陵上	〃	〃		
69	杉園遺跡	〃　稲光字杉園	段丘		土師器散布地	土師器片	27
70	平原	宮田町芹田字平原	丘陵平垣地	奈良	掘立柱	土師器・須恵器	
71	城崎砦跡	〃　阪元字城崎	丘陵上	中世	砦跡・木戸跡		
72	上有木城跡	〃　上有木字井堀	〃	〃	山城跡		
73	山崎城跡	〃　山崎	山地	〃	〃		
74	山内城	〃　山内	〃	〃	〃		
75	白山城跡	〃　白山	山頂	〃	〃		
76	祇園山園山城跡	〃　竜徳寺字城山	〃	〃	〃		
77	竜ヶ岳城跡	〃　竜徳寺竜ヶ岳	〃	〃	〃		
78	稲筑城跡	〃　竜徳寺字間の内	〃	〃	〃		
79	笠置山城跡	〃　宮田字笠置山	〃	〃	〃	刀・剣	3・26
80	本城山城跡	〃　竜徳寺字城山	〃	〃	土塁		
81	真光寺跡	〃　上大隈字寺の下		〃			

（遺跡番号はFig.2の番号に対応する。）

註1　福岡県教育委員会「鞍手のむかし」若宮町所在遺跡の調査報告会資料　1974.9

2　福岡県教育委員会「鞍手のむかしその3」若宮町所在遺跡の調査報告会資料　1976.3

3　鞍手教育研究所「鞍手郡郷土史」　1965.6

4　森本六爾「日本考古学研究」　1943.1

5　小方良臣氏教示

6　九州考古学会「北九州古文化図鑑」　第1輯　1950.2

7　「日本考古学講座　4　弥生時代」　1955.4

8　高橋健自「銅鉾銅剣の研究」　1923

9　直鞍文化財を守る会の実測による

10　佐野一・亀井明徳「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」『九州考古学』36・37　1969

11　浜田信也「金丸古墳」若宮町教育委員会　1975.3

12　森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」美術研究194　1957

13　森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『九州考古学』1　1957

14　小林行雄編「装飾古墳」平凡社　1964

15　斉藤忠編「古墳壁画」日本原始美術5　1965

16　森貞次郎「竹原古墳」中央公論美術出版　1968.3

17　酒井仁夫『金丸古墳』付，「竹原古墳出土遺物」若宮町教育委員会　1975.3

18　森貞次郎「北部九州の古代文化」明文社　1976.5

19　井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会　1973

20　浜田信也氏教示

21　靏久嗣郎・小池史哲・宮崎貴夫「田尻遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会　1976.3

22　石山勲氏教示

23　大神邦博氏発見

24　鞍手郡教育会「鞍手郡誌」　1934.11

25　靏久嗣郎「下松尾墓地付金丸墓地」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会　1976.3

26　靏久嗣郎「若宮条里遺構の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会　1976.3

27　靏久嗣郎「杉園遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会　1976.3

28　小方氏によると、石棚を有する複室の横穴式石室が一基存在する。

Ⅱ　小原遺跡の調査

鞍手郡若宮町所在遺跡の調査

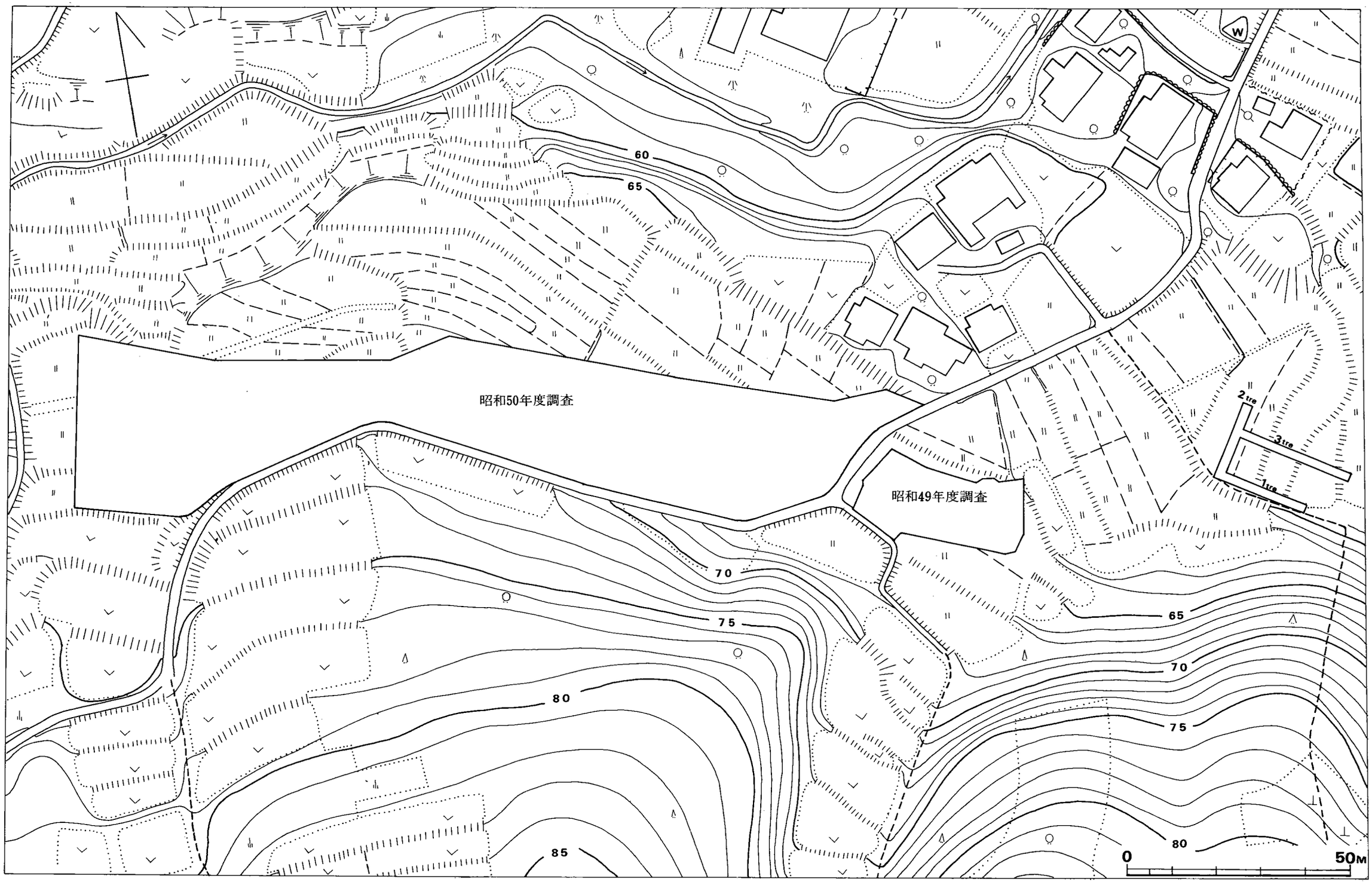


Fig. 3 小原遺跡周辺地形図（縮尺 1/1,000）

Ⅱ　小原遺跡の調査

1　調査の経過

(Fig.3・4・5付図Fig.②・③)

用地買収の関係で，農道をはさんで東側を昭和49年度に，西側を昭和50年度に調査した。両年度で調査面積は5,800㎡に及んだ。昭和49年度を第1次調査，同50年度を第Ⅱ次調査とした。

なお，調査担当者等については，「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅶ―」を参照されたい。

第Ⅰ次調査（昭和49年度）

4月1日，業者と調査方針について打ち合わせ，3日より彼等の重機を利用して表土を剝ぎ始める。まず谷頭に当る部分にF字形トレンチを設ける。土層は，表土直下が黒色土，以下茶褐色土となり，遺物は黒色土中に多量に含まれており，弥生時代後期の土器が多い。茶褐色土層になると，遺物の出土量は減り，須恵器，青磁を含む，つまり谷堆積の逆転層である。

4月10日までトレンチ部分の調査を続行して，谷巾及び方向の確認を行なう一方，谷頭の北側に面する緩斜面の表土を剝ぐ。住居跡と思われる遺構が検出されたため，同地点は全面的調査を実施すべく，10日にベルトコンベアーを入れ，翌日より地山面での遺構検出作業を開始する。南側より作業を進めていき，第1号住居跡を掘り終える。水田耕作に際して削平されたものであろうか。周溝の一部を残すのみである。13日，東側に下がった位置から3軒の住居跡を検出する。15日までに全てを掘り終える。計4軒のうち，1軒はベット状の台状部をしつらえた弥生時代後期に，2軒は竈を持つ古墳時代後期の住居跡と考えられる。1軒は弥生時代の住居跡を切っているが，床面の約¾が水田耕作に際して破壊されており，遺物の少ないところから，時期は定かでない。17日になって弥生時代後期住居跡をさらに1軒追加する。18日までに全ての遺構を掘り終え，全景及び各遺構の写真撮影，1/20平板測量を終えて，機材を柳ケ谷遺跡へ移動する。

22日より各遺構の1/20平面実測を開始する。咲花遺跡表土剝ぎの立ち合いや，柳ケ谷遺跡の遺構検出作業，写真撮影等で何回か中断しつつも，5月13日に平面図を完了し，15日に断面図を取り終えて，全て完了した。なお，6月14日に航空写真を撮影した。

北側の約5,200㎡の調査予定地は，用地買収未了とのことで，今年度は手をつけなかった。

（酒井仁夫）

第Ⅱ次調査（昭和50年度）

縦貫道建設によって破壊される約5,200㎡について，昨年度にひき続き東側から調査を開始

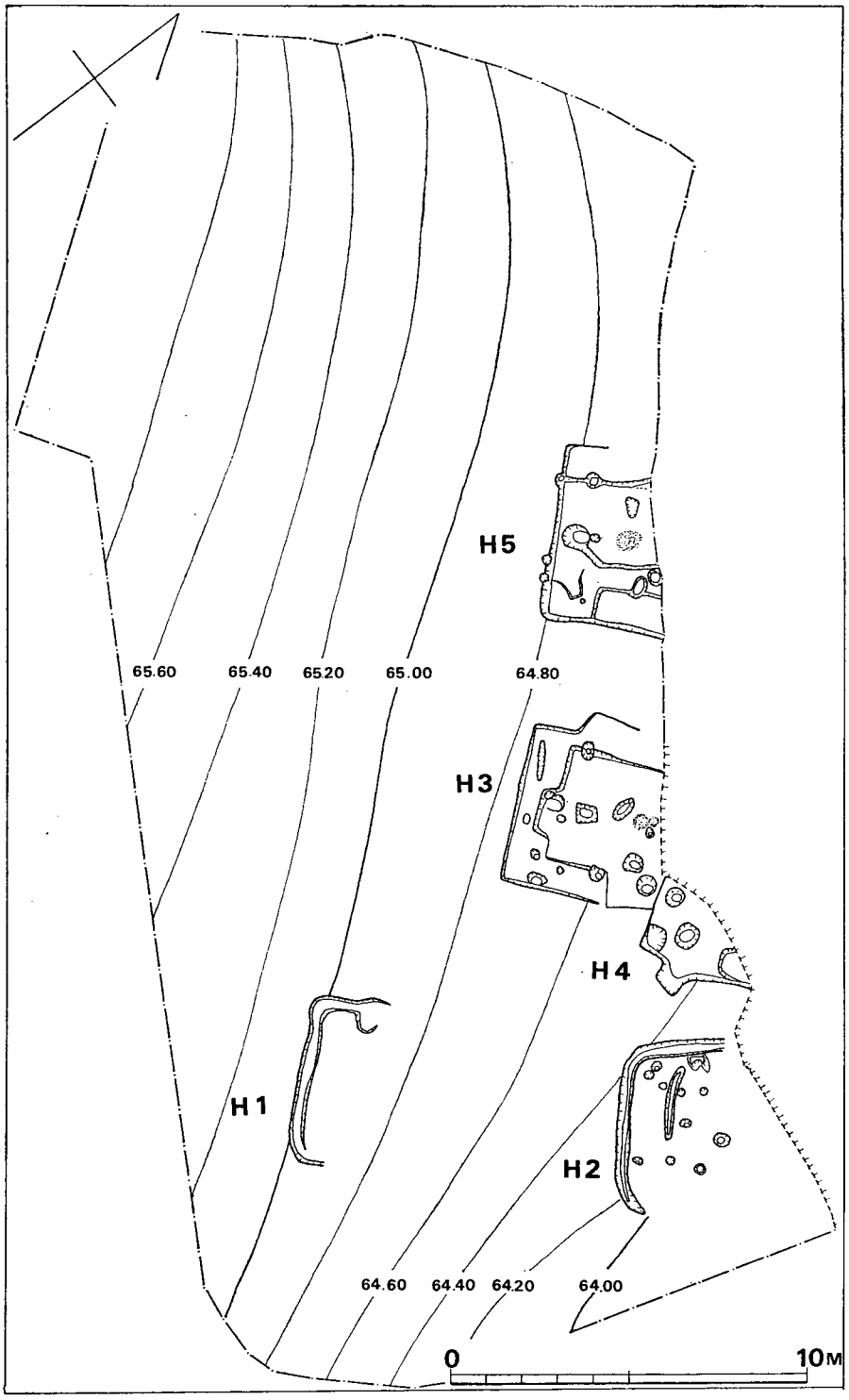


Fig. 4　小原遺跡昭和49年度調査地形図（縮尺1/200）

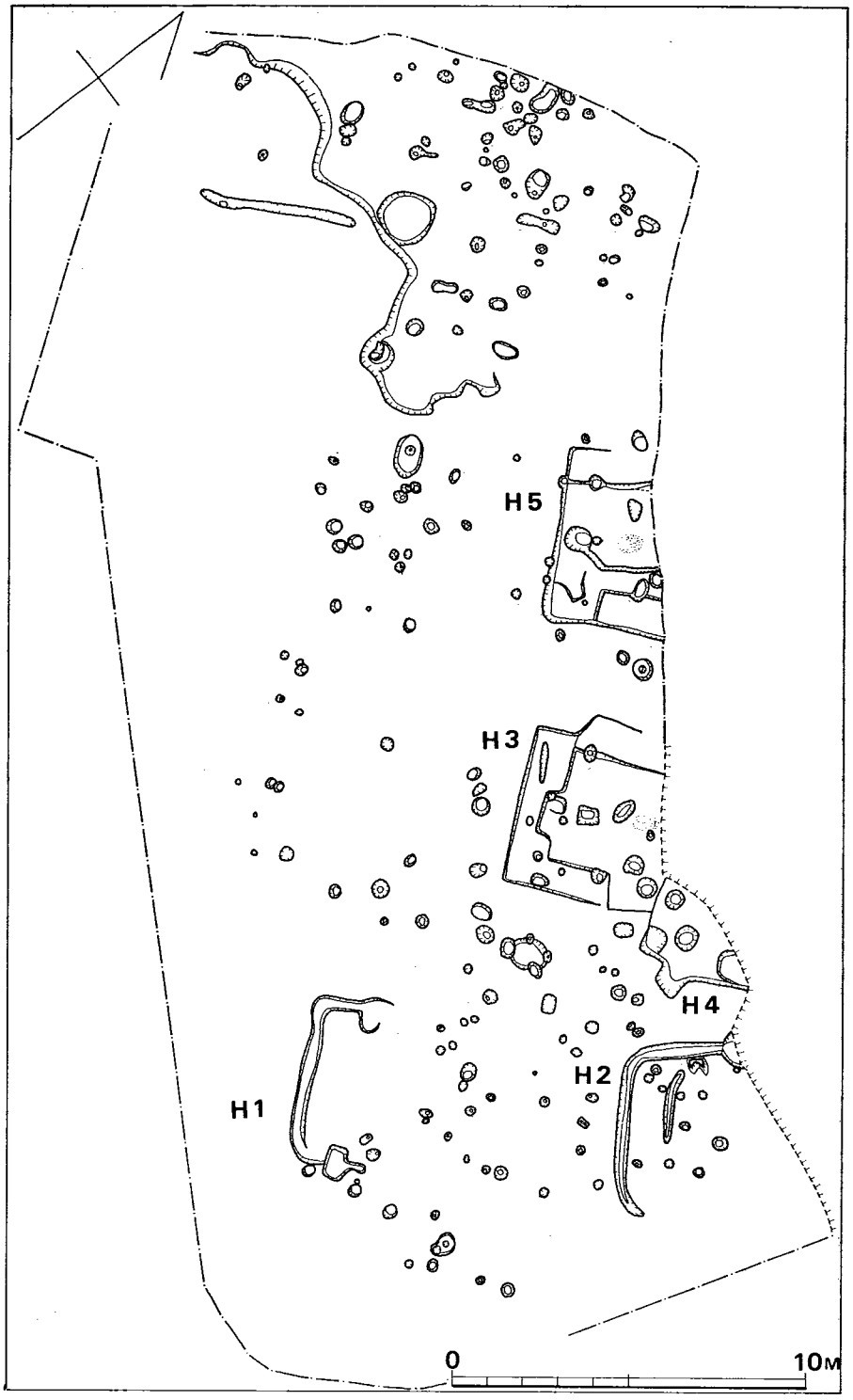


Fig. 5　小原遺跡昭和49年度調査遺構配置図（縮尺1/200）

する。現地は丘陵緩斜面を階段状に改変して水田化しているため，遺構の残存状態は余り良くないと予想された。

8日29日から重機を投入して表土をはぎはじめる。9月1日に小原古墳群で使用したベルトコンベヤー・発掘器材を小原遺跡に移動し，表土をはぎ終わった発掘区東側から遺構検出を開始する。表土下約50㎝で遺構面に到り，弥生時代後期の土器を中心に土師器・須恵器・磁器が出土する。その殆んどは小破片で，風化・磨滅している。遺構は小ピット群を中心に溝2条（**SD1・SD2**）を検出し，更に西へ進むにつれて6・8・9号住居跡，掘立柱建物（**SB1・SB2・SB3・SB7**）を検出した。6号住居跡については周溝状の溝が全体の⅓弱検出されたにとどまり，削平のはげしい部分でもあるため，壁は全く残ってなく，炉跡あるいはカマドや柱穴は検出できなかった。住居跡として番号は付したが，後の遺構と遺物を記述した部分からは省いた。住居跡としての可能性を認めながらもその確証がなかったからである。切り合い関係にある8・9号住居跡も北側壁は殆んど残ってなかった。

10号住居跡床面下に貯蔵穴を検出し，1号貯蔵穴とする。丹塗の弥生式土器を含め，土器を多量に検出した。

更に，13・14号住居跡付近までの遺構検出を終了した時点で航空写真を撮影した。写真撮影後，発掘区東側から縮尺1/20で実測を開始する。11月にはいり，九州縦貫道鞍手地区から副島・上野および調査補助員川述公紀・佐土原逸男が調査に加わって実測をする。特に副島・佐土原は調査終了時まで小原遺跡にとどまり，写真撮影・実測を行う。

西に調査の手を伸ばし，掘立柱建物（**SB6**），住居跡等を検出する。19～21号住居跡については削平がはげしく特に20・21号住居跡の壁は全て破壊されていた。また，16・17号住居跡はその床面を½以上失っていた。**SB5**以西のピットの密度は8・9号住居跡周辺のそれにくらべて薄かった。

12月初旬，プラントオパールの調査のために宮崎大学農学部助教授藤原宏氏に御足労願い，2号貯蔵穴・18号住居跡の土壙と焼土内等から資料の採取をして頂く。

再度のヘリコプターによる写真撮影を行い，12月26日に写真・実測の全ての調査を終了し，器材・作業員共に汐井掛古墳群・汐井掛遺跡に移動する。

小原遺跡調査中の11月に，発掘調査地域の北東平坦部約3,000㎡が，名糖パブリックの造成するゴルフ場の駐車場予定地であることが判明した。駐車場については土盛りするとのことであり，特に遺構を破壊される心配はなかった。しかし，ひとたび遺跡の上に何らかの建築物が作られれば，半永久的に調査の手が伸びることはなく，未調査のままで破壊されたのに近い状況になる。遺跡の広がりが駐車場予定地まで伸びることは確実であり，一応の調査を実施した。

昭和51年2月から，汐井掛遺跡より発掘器材を移動して調査を開始した。実際に調査したのは造成予定地3,000㎡のうち約1000㎡である。調査は表土から遺構検出面まで排土し，遺構は掘

り上げずに遺構検出面で平板実測を行った。

検出した遺構は方形プランの住居跡5軒以上とピット群である。

住居跡は第10号住居跡北側に4軒，同7号住居跡北側に1軒検出した。他に住居跡かと思われる遺構を検出した。過半は弥生時代後期末の住居跡と推定される。

ピットは多量に検出した。密度は8号，9号住居跡集辺の濃さに匹敵する。

なお，10号住居跡東にある溝状遺構SD3は駐車場予定地内には伸びてなかった。

出土遺物は，弥生時代後期末の土器を中心に土師器・須恵器・石包丁等であった。皮肉なことに，縦貫道路線内出土の土器よりも残りは良好であった。

実測は縮尺1/100で平板測量を行った。3月11日に調査を終了した。

この調査は変則的な調査であり，遺構の実体も詳細にはわからないので，本報告書には収録しなかった。

2　調　査　の　内　容

(Fig.5，付図Fig.③)

遺跡は鞍手郡若宮町大字山口字小原に所在する。地目は水田である。小原部落の西方緩斜面のうち，北側の谷と南側の小谷に狭まれた地域のうち約5,800㎡について，昭和49年度，同50年度の2年度にわたって調査を実施した。

昭和49年度，50年度の調査で検出した遺構は住居跡・貯蔵穴・溝状遺構・竪穴・掘立柱建物・ピット群である。遺跡は丘陵緩斜面に立地したが，階段状の水田がつくられた際にかなり削平された。特に住居跡については旧状を保って検出された例は1軒もなく，20・21住居跡は壁を全く残さず，16・17号住居跡は床面の½以上を失っている。

住居跡は22軒検出し，弥生時代のもの11軒，古墳時代のもの10軒，不明1軒である。

貯蔵穴は2個検出した。共に隅丸長方形の床面である。1号貯蔵穴は10号住居跡から上端部を破壊されているが，埋土中より丹塗土器を含めて多量の弥生式土器と石器を検出した。2号貯蔵穴も丹塗土器を包含していたが，土器の出土量は1号貯蔵穴にはるかに及ばなかった。

溝は3条検出した（**SD1～SD3**）。**SD1・SD2**は共に同じ土が埋まって新しいものであり，往年の水田耕作に伴う可能性が強い。遺物は殆んど出土していない。**SD3**は溝底に小石が多量にあった。遺構の形状から溝と断定するには心もとないが，一応溝状遺構とした。石にまじって土器小片を多量に検出した。

10号住居跡の東に竪穴（**SX1**）がある。須恵器・土師器が比較的まとまって出土した。住居跡としての確証がないので竪穴状遺構として取り扱った。

掘立柱建物（**SB1～SB7**）については不明な部分が多いが，4棟以上は立つと思われる。柱穴のまとめ方がむつかしく十分な調査ではなかった。古代末から中世の建物と考えるが

確証はない。

他に多数のピット群を検出した。その約半数は弥生式土器を中心に土師器・須恵器の小破片を数片ずつ包含していた。

今回の調査ではかなり多量の砥石を検出した。弥生時代後期後半に所属するものが過半数を占め，鉄器との関係で注目に値する。更に1・2号貯蔵穴で検出した丹塗土器の存在は，それらが祭祀と関わりあるものならば，今回の調査範囲内に明確な祭祀に関する遺構を検出できなかったが，かって，小原の集落を営んだ弥生時代の人々の人間関係において丹塗の土器を必要とする〝祭祀〟がそれが共同幻想であるにもかかわらず，厳然として必要な時代が存在したことを示唆する。

3　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構は，住居跡11軒（3号・5号・7号・9号・11号・14号・15号・17号18号・20号・21号の各住居跡），溝状遺構1条（SD3），貯蔵穴2（C1・C2）およびピット群である。

住居跡はすべて弥生時代後期後半から終末にかかる時期の所産である。住居跡の分布状態はかなり分散的である。砥石の出土数が多く，鉄器の普及がかなり進んでいたであろうと考えられる。鉄器も出土しており，鉋，刀子状のものなどを検出した。なお，住居跡埋土中から石庖丁が出土しているが，流れ込みと思われる。

貯蔵穴は共に長方形の平面プランを示す。埋土中から土器を検出したが，床面からの出土は1点もなく，使用時期は明確ではない。特に第1号貯蔵穴からは多量の丹塗り土器が出土している。

第3号溝状遺構は，ジョッキ形土器を出土しており，弥生時代終末から古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

土器については，耕作土中からも多量に出土したが，水田化した折に土砂と共に原位置を移動し，小片となり風化磨滅が著しい。総じて本遺跡出土の弥生式土器は焼成の軟弱なものが大勢を占めている。

以下，各遺構について記述していく。　　（児玉真一）

第3号住居跡　H3（Fig.6　PL.9）

一辺約5.1 *m*の方形住居跡である。北東側壁は水田崖法面によって切られている。三方にベッド状の造り出し段部を持つ。床面は炉と不正長方形ピットを持ち，そのうち中央の底面からは礫が出土した。中央の長方形ピットは弥生時代中期住居跡に一般的に見られるそれの名残りとも考えられる。柱穴は床とベッド段部の境付近に計8本数えられる。このうち，南東壁側中

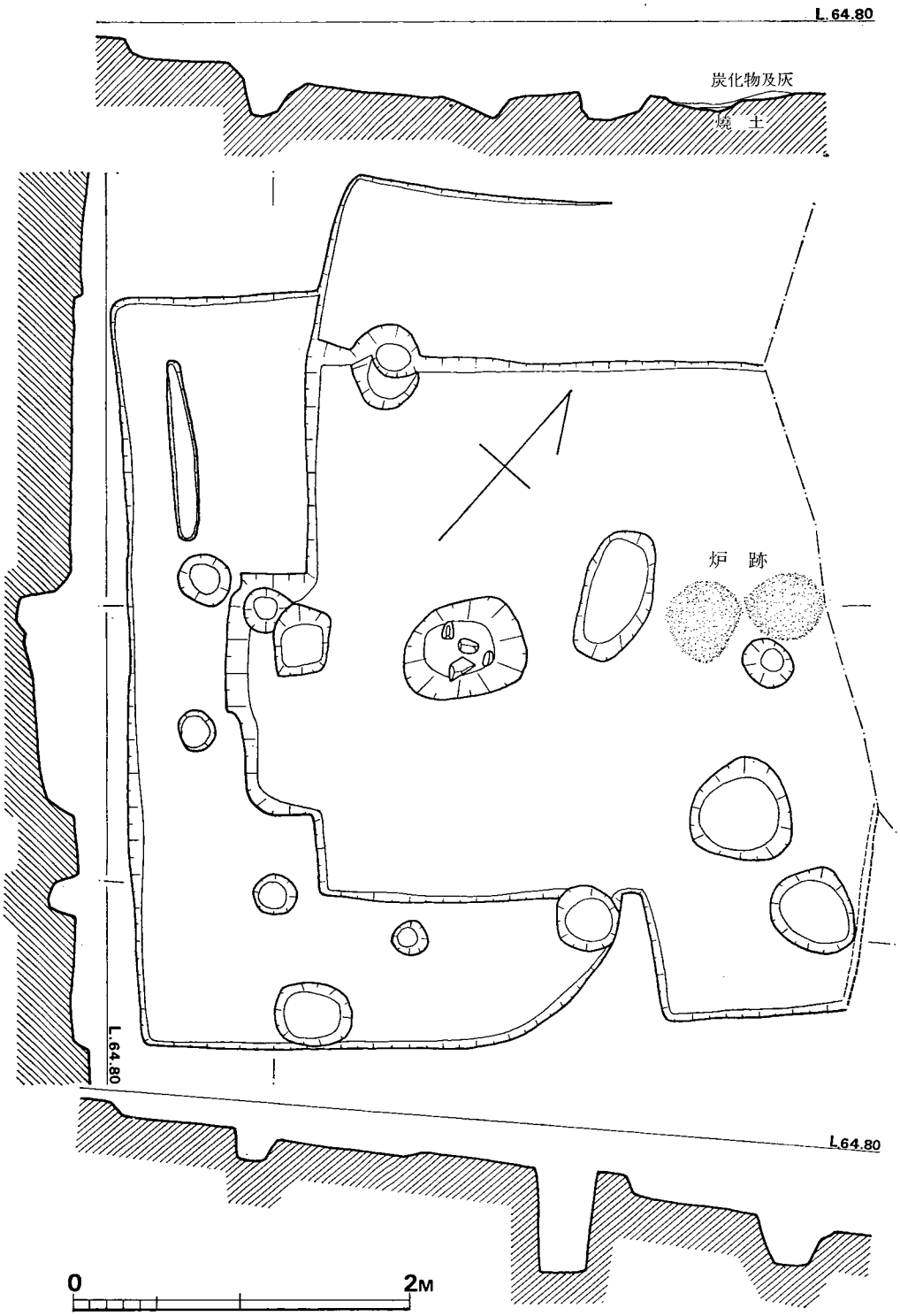


Fig. 6　第3号住居跡実測図（縮尺1/40）

央のそれが最も深く，径も大きい。周溝はない。

出土遺物 (Fig.8—1～5)

少量の土器が床面から密着して出土した。

1は甕口縁部片である。外反する口縁部は端部が尖がり，内側は強いナデのためやや窪んでいる。焼成が悪いため，器壁の剝落が著しい。

5も甕の底部で，丸味を持った平底を呈している。底面に刷毛目が施されている

2の鉢は胎土が緻密で，器厚は均一に均されている。口縁部はやや内彎しながら立ち上がり，端部は丸味を持つ。

3の高坏は胎土中に砂粒を多く含み，焼成も悪い。杯部の脚との継ぎ目に刻みが入れてある。

4は丸底に近い壺底部である。胴部を作った後に底部を張って作られたもので，その貼り付けに際してであろう，内面に回転によるナデ痕が付されている。胴部はかなり薄くなろう。

第5号住居跡　H5 (Fig. 7)

一辺約5*m*の方形住居跡である。北西壁及び南東壁側にベッド状段部を持つ。床面の中央に楕円形炉跡がある。南西壁側に円形ピットがあって，それに溝が続いている。柱穴は壁上及び床とベッド状段部の境に並んでいる。また，北西壁及び南東壁外に，相対するピットがある。あるいはこの住居跡の上部構造に関係するものかもしれない。

出土遺物 (Fig.8—6・7)

落込み土中から壺の小片が出土したのみである。

6は丹塗りの口縁部片である。内外を丁寧にヘラでナデている。焼成はあまりよくないが，胎土は精良である。

7も小片である。カーブしながら外反する口縁部は端部下でやや窪む。口縁部のヨコナデによるものであろう。口唇部は若干脹らみながらも，平坦に近い。　　(酒井)

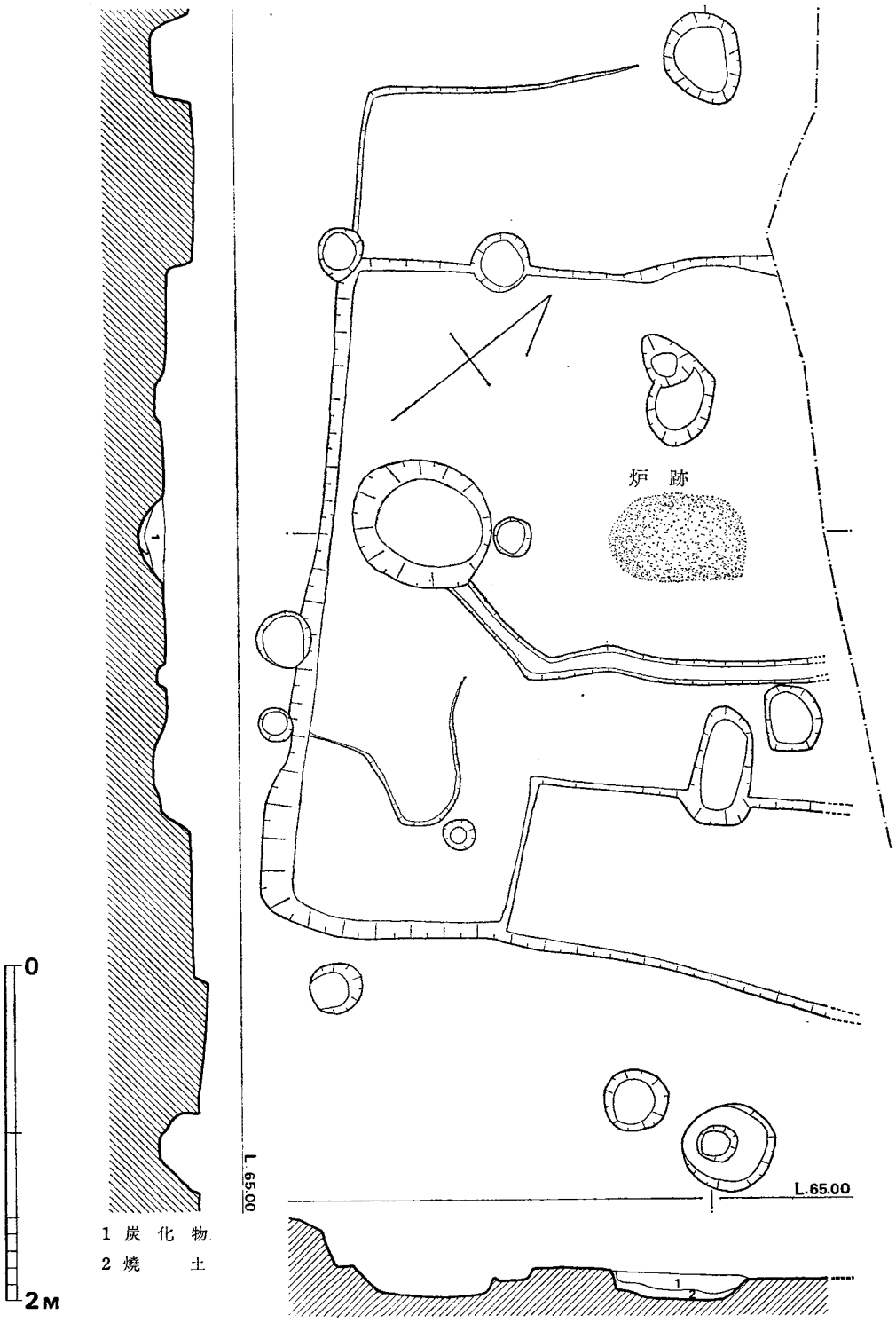


Fig. 7　第5号住居跡実測図（縮尺1/40）

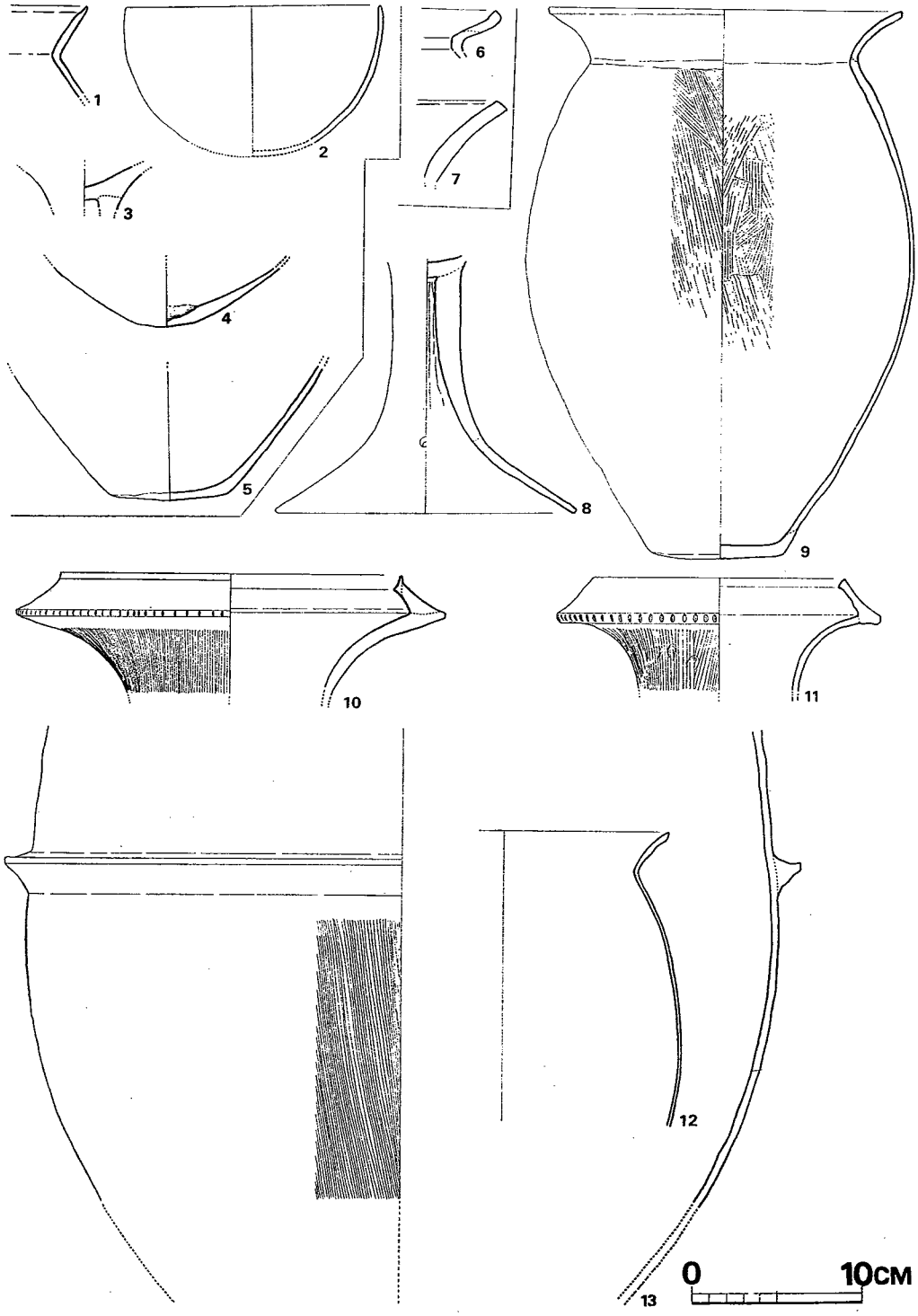


Fig. 8　昭和49年度調査出土土器実測図（縮尺1/4）

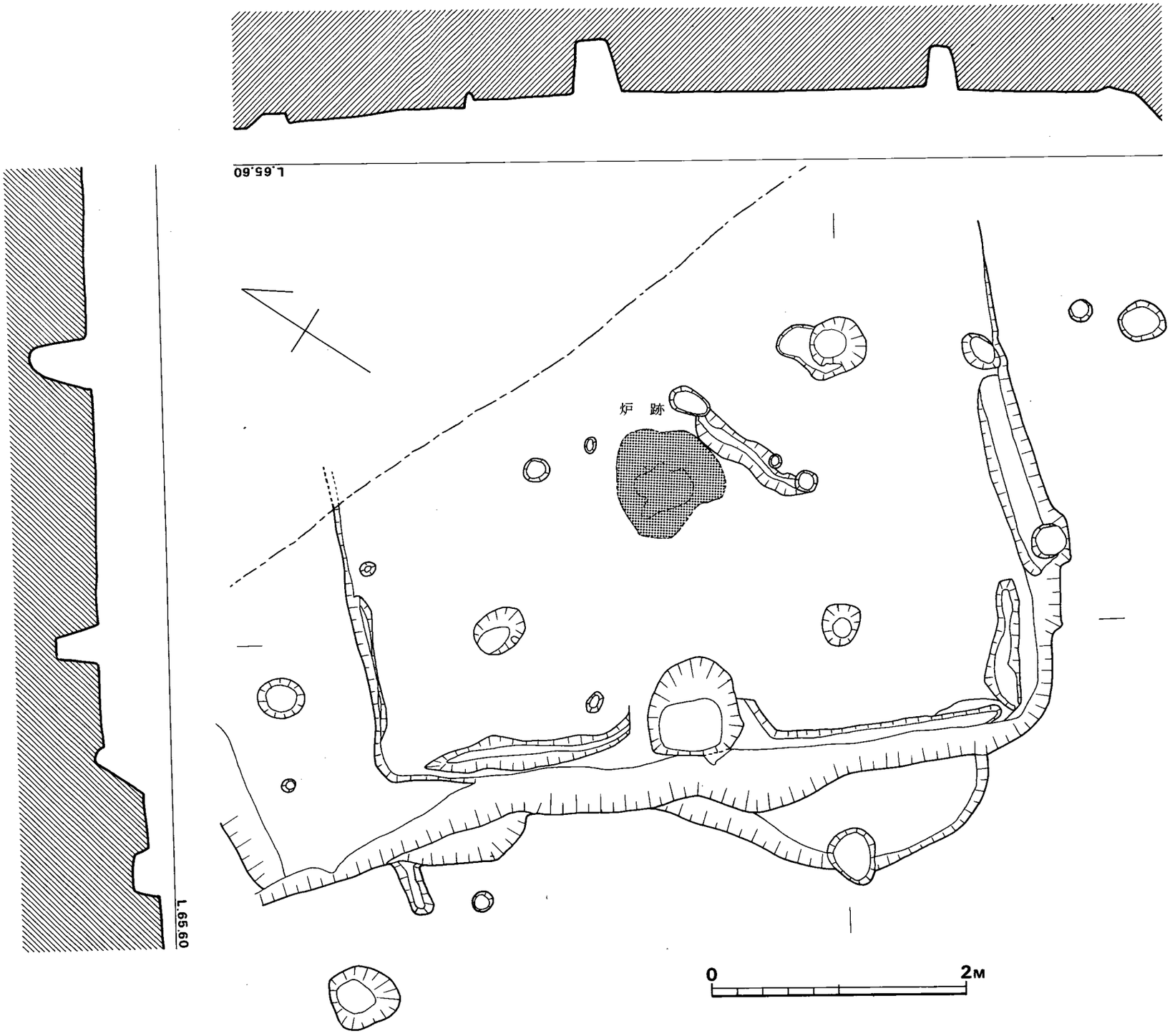


Fig. 9 第7号住居跡実測図(縮尺 1/40)

第7号住居跡　H7　(Fig.9　PL.10)

北辺，北東隅，北西隅は敷地外で未調査のため平面形状は定かではないが方形を呈するものと思われる。

規模は東辺42m以上，西辺2m以上，南辺5.2m，北辺は不明で床面積はおそらく27m²前後となろう。残存する壁高は南側30cm，西側10cm，南側40cmである。

住居跡内には炉跡，ピット9，土壙1を検出した。炉跡は住居の中央部に不整円形で径80cm，深さ約10cm，断面すり鉢状に掘られ，掘り込み中心に焼土が径40cmで広がっていた。

ピットは9個検出した内，組合せとして1～3ができ四本主柱が考えられる。各柱穴は次の様になる。

1.	径30cm	不整円形	床面より深さ	30cm
2.	径40cm	円形		44cm
3.	長径40cm	短径30cm	楕円形	40cm

主柱穴間は東西2.7m，南北2.2mで東西間が長い。

出　土　遺　物

当住居で鉄製品1，石庖丁1，土器（壺，器台）の破片を検出した。

鉄製品 (Fig.10, PL.28)

埋土中より検出した用途不明の鉄製品で長さ8.5cm，最大幅1.2cm，最大厚1.1cmを測る。

石庖丁 (Fig.11, PL.29)

鉄製品と同じく埋土中より検出，石質は輝緑凝灰岩で片側刃部を欠損している。穿孔は両面よりなされ，刃部も両面より研ぎだされている刃部には使用痕とも思われる欠損部が見られる。

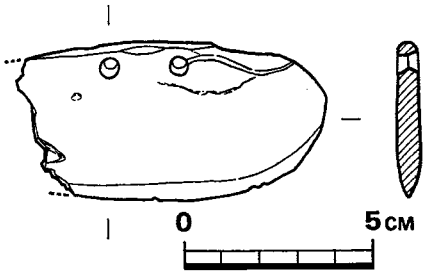


Fig. 11　第7号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）

壺 (Fig.12, PL.22)

口径19cmで頸部から胴部にかけ「く」の字状に外反する。色調は橙色から淡茶色で胎土に砂粒を多量に含み器面はざらついている。焼成は良好であるが器面に亀甲状の剝離

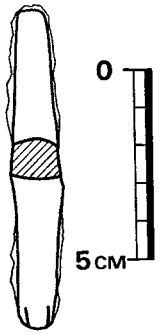


Fig. 10　第7号住居跡出土鉄器実測図（縮尺1/2）

が見られ器面が荒れているため仕上げ調整の痕跡が見られない。口唇部から内面にかけ一段の線が入る。また頸部と胴部の境に一段の線が入る。

器　台 (Fig.12　P L.22)

埋土中より検出した。復元底径7㎝，器高は不明，色調は赤褐色で胎土は砂粒を多量に含み焼成は良好である。外面は剝離がひどくザラついているため仕上げ調整は不明である。内面には指圧痕が若干見られる。

以上の出土遺物より，7号住居跡の時期は弥生時代後期後半頃と思われる。（佐土原逸男）

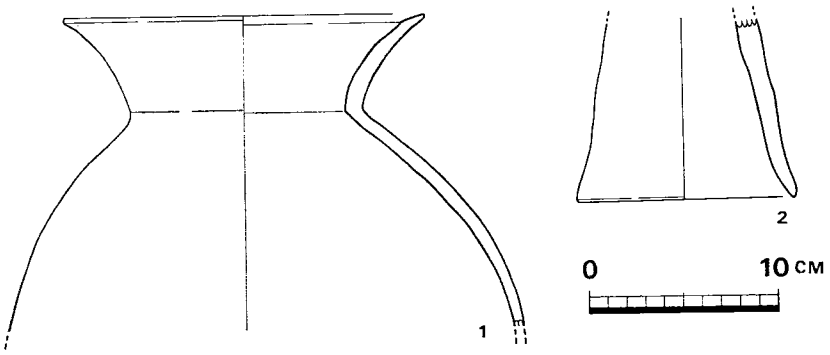


Fig. 12　第7号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

9号住居跡　H 9 (Fig.13, P L.10)

8号住居跡から切られ東側は破壊されている。南辺2.8m，西辺3.8mで長方形の平面プランを呈する。全面にわたって削平が行き届いており，壁高は10㎝前後を残すにすぎない。

炉跡は検出できなかったが，南壁に沿って幅1mの焼土面があった。この焼土内に丹塗土器を含め弥生時代後期の土器が残存していた。柱穴は **A—A'** の切断面にかかる2個のピットが該当すると思われ，屋根は切妻造りの住居であったと思われる。周溝やベッド状遺構は検出することができなかった。

出　土　遺　物

焼土中から弥生式土器を，埋土中から石庖丁未製品と土器片を検出した。尚，焼土中に丹塗の大形の高坏破片を検出したが，小片で実測できなかった。

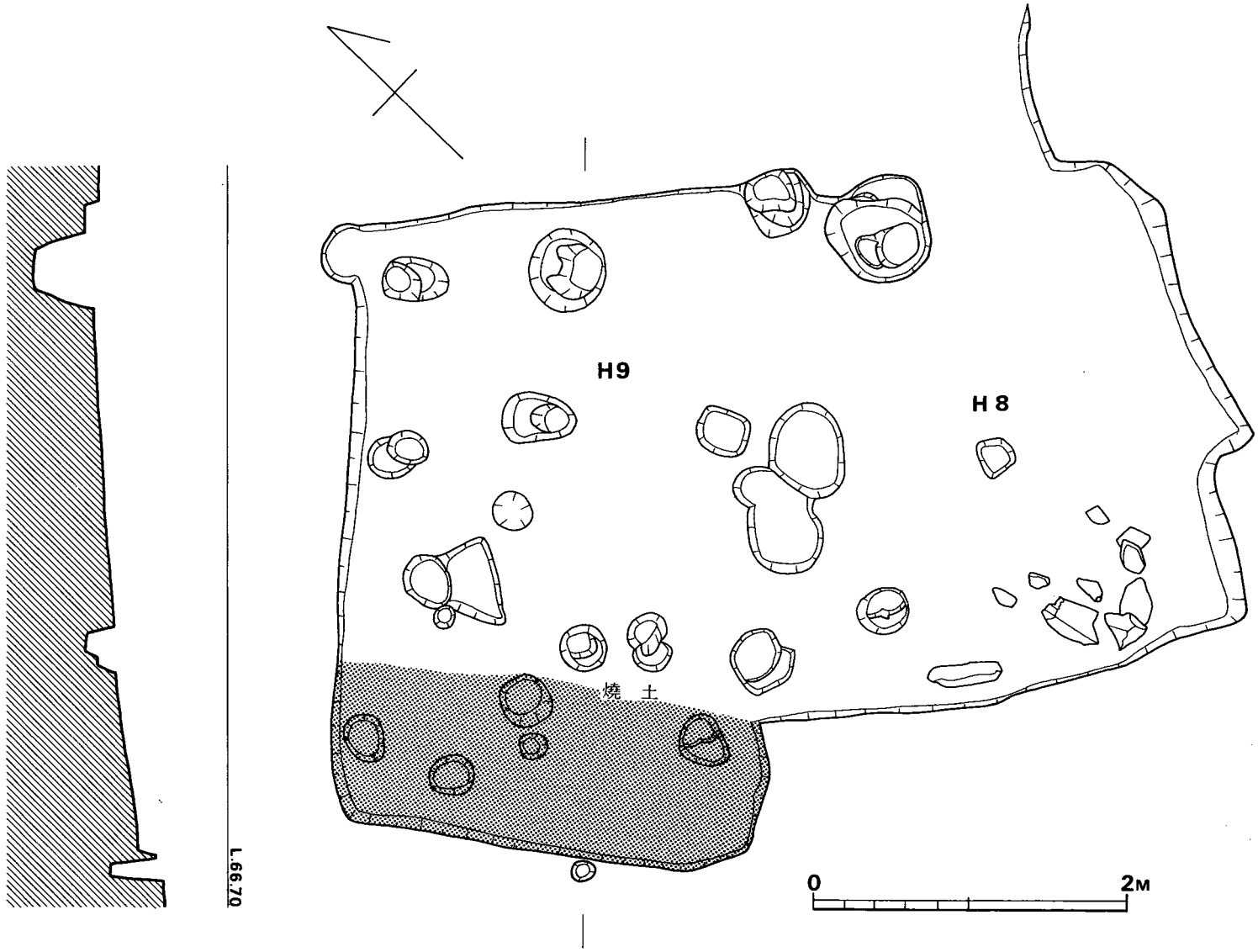


Fig. 13 第8・9号住居跡実測図(縮尺 1/40)

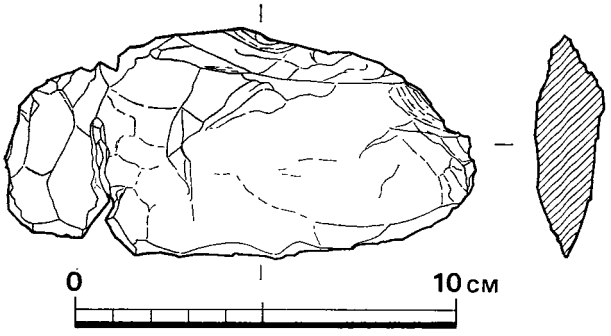


Fig. 14　第9号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）

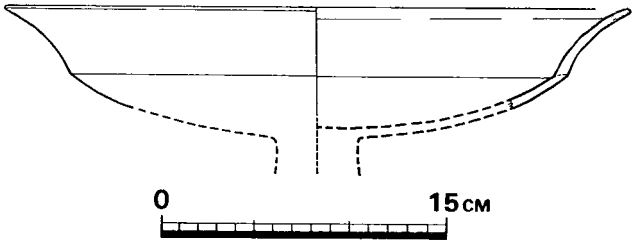


Fig. 15　第9号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

石包丁（Fig.14　PL29）

輝緑凝灰岩を原石とする。敲打の段階の未製品で，12.5cm×6cmの大きさである。立岩製石包丁と同じように笠置山から採取した原石と同じかどうかは石材の同定をしていないので不明である。

高　坏（Fig.15）

焼土中より多量の土器片を検出したが，細片のため図示できたのは一点である。復元口径33cmの高坏で坏部の反転した部分まで残して欠損している。全面に二次的な火を受け，調整は不明である。胎土に細砂粒を含み，焼成は本来良好であったと思われるが現在はモロイ。

出土土器は弥生時代後期終末頃のものであり，本住居跡は弥生時代後期終末頃に比定される。

第11号住居跡　H11（付図Fig.④　PL.12）

方形を呈する平面プランであるが，北東壁側は削平され，水田として開墾された時に段状に削り取られているので残存しない。旧状を残す南西壁で長さ6.4m，壁高30cm～60cmである。恐らく1辺6.5m前後の方形の住居跡だったと推定される。本遺跡では大形の住居跡で18号住居跡に匹敵する。

炉跡かと推定される部分は2個所あり，共に炭がつまっていた。**炭1**は幅0.6m，長さ1.2mの方形のくぼみにつまったもので底部は殆んど焼けていない。**炭2**は径0.8m程の円形のくぼみにつまっており，やはり底面は殆んど焼けておらず，底面には炭がつまる以前に掘られた径40cm程のピットがある。共に炉としての積極的な確証はない。が，他に炉跡とされる所はない。南隅に地山を削り出したベッド状遺構がある。長さ1.8m，幅1m，高さ25cm前後である。北隅，東隅にベッド状遺構があったか否かは削平・攪乱のため不明である。南西壁に接して土壙がある。上端で長さ1.2m，幅0.75mを測り屋内貯蔵穴かと思われる。土壙に接続して周溝と溝があり，これらは土壙から離れるにしたがって底面レベルを下げ，土壙内に水がはい

らないようになっている。周構はベッド状遺構付近には掘られてなく，住居内を一巡はしない。幅は20cm，深さは10cm前後である。床面には多数のピットが見られるが，**A—A′**および**B—B′**の切断面にかかる四個のピットと，炭1の北にあるピットが主柱穴だと思われる。恐らく5本の主柱と他の支柱で屋根を支えたと思われる。尚，本住居は礫まじりの地山に掘り込まれ，検出した床面は礫が目立った。

出　土　遺　物

鉇，砥石，石包丁，石斧，弥生式土器片が出土した。なお，土器片は実測にたえるものながく図示できなかった。

鉇 (Fig.16　PL.28)

住居跡西隅の周溝埋土上に検出した。三個に折れて不足部分があるので全長は定かでない。が，恐らく10cm以上はあると思われる。幅は1cm，厚さは3mm前後である。全体に銹化が進んでいて，刃部は詳細にはわからない。柄の尻部は隅丸方形におさめている。断面は弧形を呈し，弥生時代の鉇であることを示している。

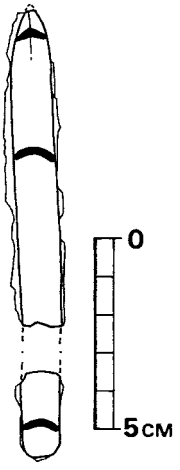


Fig.　16
第11号住居跡出土鉄器実測図
(縮尺1/2)

砥　石 (Fig.17—1～3　PL.30)

3本検出した。いずれも埋土中の床面に近い部分からの出土である。1・3は仕上げ砥で石質は硬質砂粒である。2は荒砥で石質は軟質砂岩である。1は長さ21.3cm，中央付近での幅2.8cm，厚さは1.7cmである。四面ともよく使いこまれており，最も使われた面は4mmの砥ぎ減りが見られる。2は長さ145cm，幅8cm，厚さ2.1cm程である。次損した二面を除いて，表・裏・長短四側面の計六面を使用している。最も使用された面は約6mmの砥ぎ減しが認められる。3は長さ14.5cm，幅5cm，厚さ3cmを測る。四面とも使用されているが，裏面と側面は使用幅が狭い。

石　斧 (Fig.17—4　PL.30)

打製石斧で刃部から11cmの部分で欠損している。石質は変成岩の一種のようである。埋土中から出土しており，混入の可能性がある。

石庖丁 (Fig.17—5)

こなごなになった小破片のうちの1片を図示した。輝緑凝灰岩製である。本来の大きさは10cm前後だったと思われる。本品も埋土中から出土した。

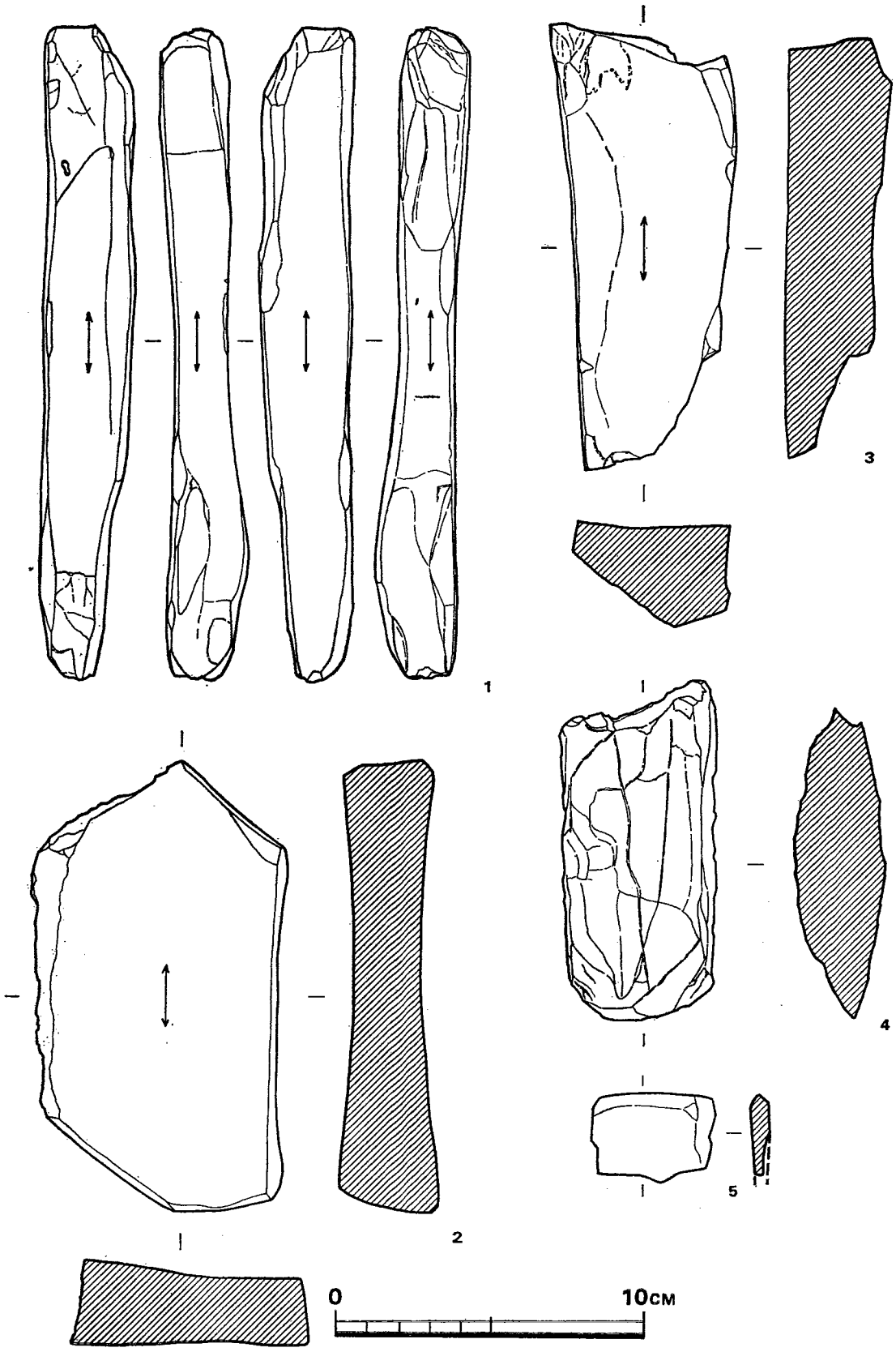


Fig. 17　第11号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）

出土遺物のうち時期を明確に示すものはなかったが，恐らく弥生時代後期後半に属する住居跡と思われる。砥石も床面から若干浮いて出土したが住居跡に伴うものと考えられる。本住居出跡土の鉈は貴重品であった。

第14号住居跡　H14（付図Fig.⑤　ＰＬ.12・13）

西壁およびベッド状遺構を除いて周壁は見るかげもなく削平されている。もっとも第13号住居跡とかなりの面積が重複し，その時にすでにかなりの部分が破壊されてはいる。西壁の残存部分の長さは4.8 *m*で，後述する主柱穴の配置から推定すれば，一辺が5 *m*前後の方形の住居であったと思われる。床面は，本住居が礫まじりの層に掘り込まれているので，礫が目立つ。南隅に地山を削り出してつくったベット状遺構があり，長さ2 *m*，幅1 *m*，高さ20*cm*を測る。西壁とベッド状遺構長辺に沿って床面に幅約20*cm*の周溝が掘られている。底面レベルはベッド

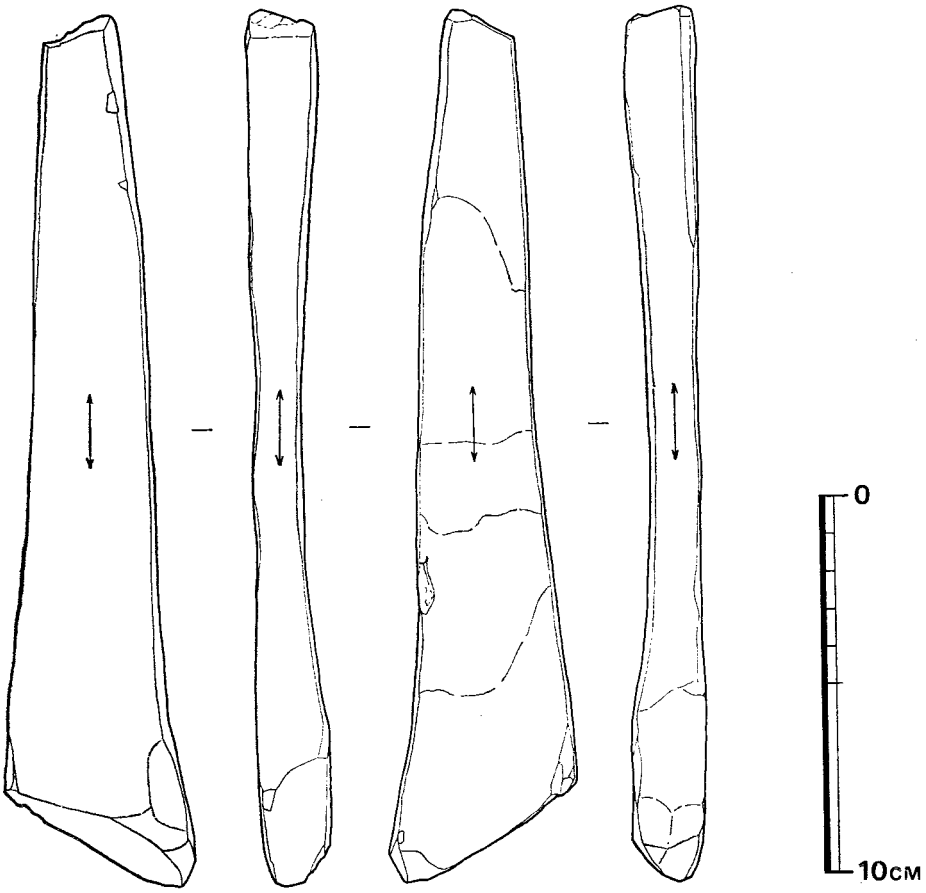


Fig.　18　　第14号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）

状遺構から西壁に沿って北へ向かってゆるやかに下がっている。床面に多数のピットを検出した。主柱穴は4個で，そのうち3個は**B-B′**，**C-C′**の切断面にかかったものである。4個の主柱穴は整然と並び，各柱穴間の距離は2.2*m*～2.4*m*でほぼ長方形の隅部にあたる位置に位置する。炉跡はすでに13号住居跡によって削平され検出できなかったが，4本の主柱穴の対角線交点付近にあったと思われる。

出　土　遺　物

弥生式土器と砥石1本が出土した。土器は小片で量も少なく器形も判然としないものが多く図示できなかった。

砥　石 (Fig.18　PL.30)

砥石は西壁周溝内からふたつに折れて出土した。硬質砂岩製の仕上げ砥である。長さ23.2*cm*，幅4.7～1.9*cm*，厚さ1～2*cm*を測る。表，裏面および両方の長側面の四面ともよく使われており，使用のはげしい面は5*mm*程へこんでいる。鉄器を砥いだものと推定される。

出土遺物の中で住居の時期を明確にするものは検出できなかった。しかし，平面プランは方形を呈しベッ形ド状遺構を持っており，他の住居跡との比較から，弥生時代の後期後半に位置づけて大過ないと思う。

(児玉)

第14号　住居跡砥石出土状態

第15号住居跡　H15（Fig.19　ＰＬ.14）

平面プランは長方形を呈し，北側は削平されているため正確な内法は不明である。南側の一辺は5.6*m*であり，南端に1.05*m*×1.0*m*のベッド状遺構をともなう。壁高0.2*m*で炉跡はほぼ中央で摺鉢状に床面を窪めており，炭化した灰を確認した。またベッド状遺構のすぐ横に赤変した浅いピットがあり，これも炉跡と考えることは可能である。本来ならば，炉跡の位置は中央で，冬場の寒い時期に両方の炉を使用したものと考えたらどうであろうか。

主柱穴は住居としては4本柱が妥当であるが，しかしながら西側の2本は削平されて不明であり，東側の2本は炉跡を中心に南北に位置していると推測される。

床面には東側から中心に向かって周溝をもっており，生活意識の向上が考えられる。

出土遺物は，床面に密着した状態では検出できず，覆土中より甑の少破片が出土している。

住居が存在した時期は，正確に把握することができず，ただ一般的にはベッド状遺構をもつことから，弥生時代後期末ぐらいに位置したのではないだろうか。

第17号住居跡　H17（Fig.20　ＰＬ.15）

平面プランは方形を呈し，北側は削平されているため，正確な寸法を把握することはできない。しかしながら南側の一辺のみが5.9*m*と計測される，壁高は約0.5*m*である。東南に長さ4.05*m*，幅1*m*のベッド状遺構をもち，壁に沿って排水のための周溝をもっており，中央に炉を有している。この住居跡の基盤になる層は多量の礫を含んでいるため，床面の凸凹がはげしく，粘土を張って水平にならしたものと考えられる

主柱穴は断面図で示すとおり，東西方向2本だけ捕えることができた。4本柱が主柱になる。

主柱穴の横に貯蔵穴を有している。一般的にベッド状遺構を持っているものには，貯蔵穴及び壁の周辺には周溝をもち、排水溝の役割をもつが、床面には主柱穴の他に，ピットがあり，その一部は支柱になる可能性がある。

今まで，ベッド状の遺構をもっている例として，中央に炉跡を持ち，二本柱で，住居跡外周辺部に柱穴を有する例が多い。八女市室岡遺跡群・福岡市西区湯納遺跡等から考えられる。しかしながら当遺跡の住居跡は4本柱が中心である。このことから建物の建て方の相違が考えられるが，地方差として，とらえるべきかは今後の問題であろう。

検出された遺物は，床面に密着した状態ではなく覆土の黒褐色土層中からであった。

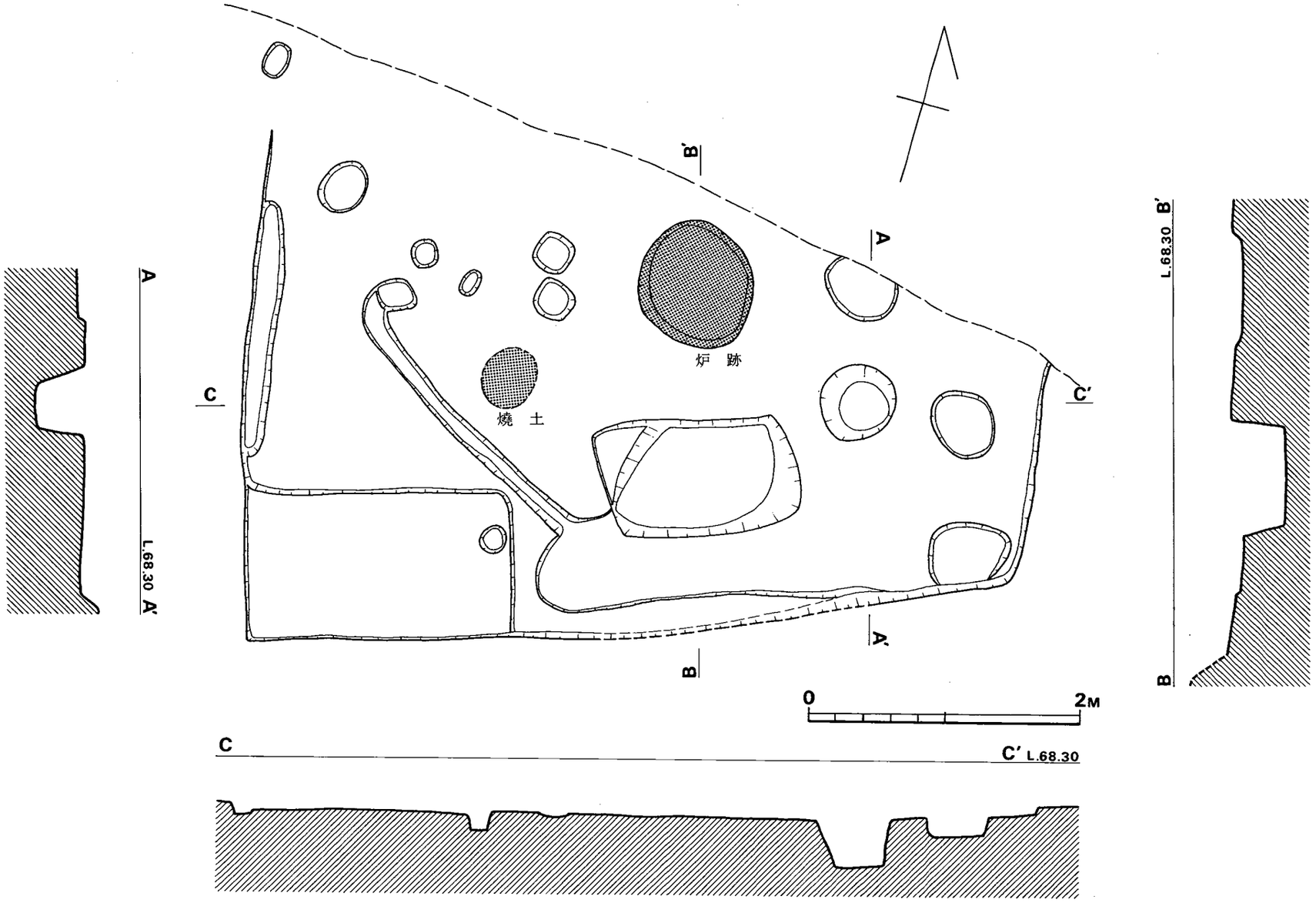


Fig. 19 第15号住居跡実測図(縮尺 1/40)

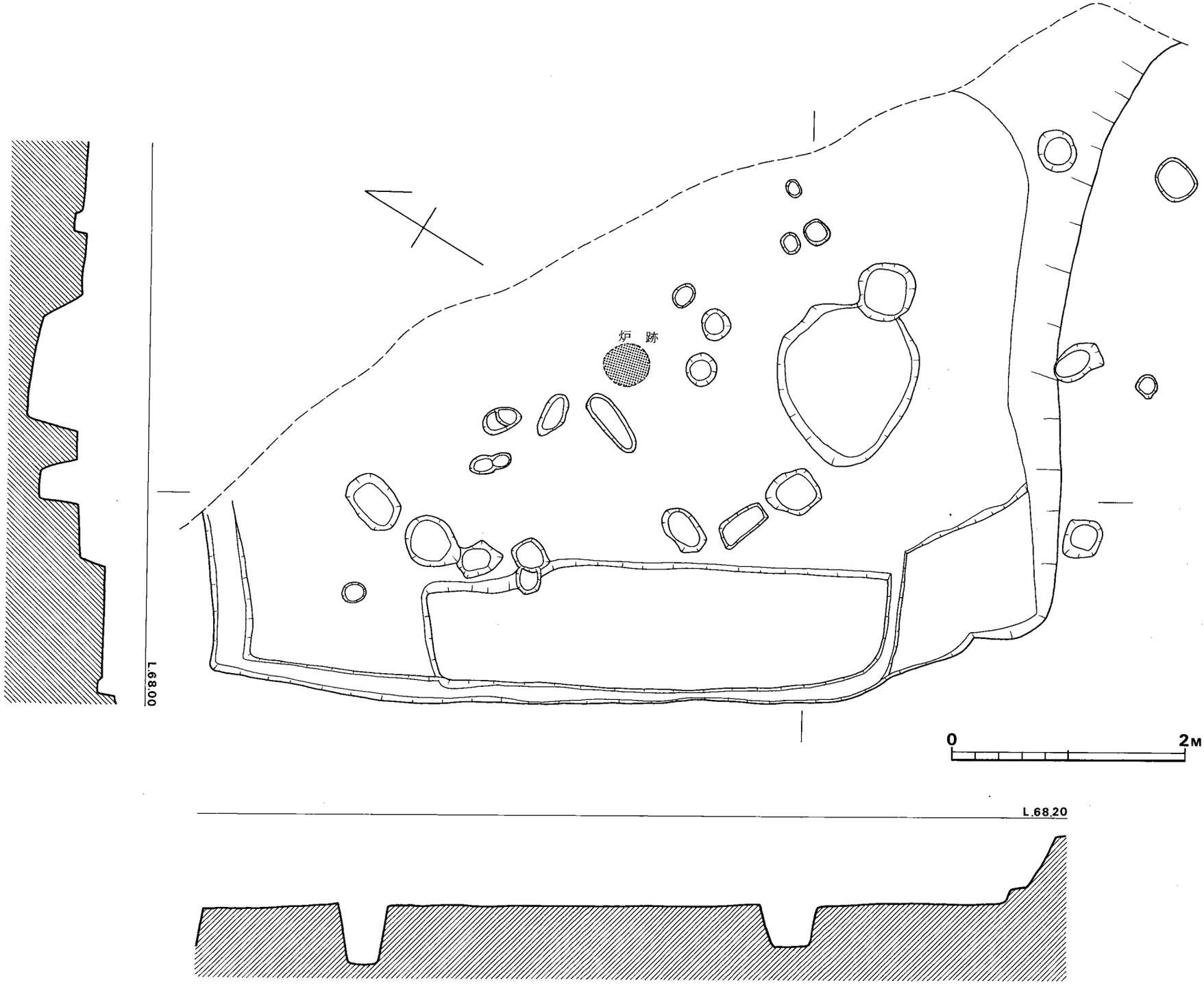


Fig. 20 第17号住居跡実測図（縮尺 1/40）

出土遺物（Fig.21　ＰＬ.22）

遺物は覆土の黒褐色土層の下部，ほぼ住居跡の床面より若干高い位置で，高坏・甕・底部の破片が出土している。その中でも高坏の破片が出土している。その中でも高坏の破片が多いことが気がつく。

高坏は１～６で，口径24㎝前後で，器高約17㎝前後と推定される。杯部には口縁の立上りと体部の接合部分に稜線をもち口縁へ若干立上がりながら大きく外反する。弥生後期後半の特長

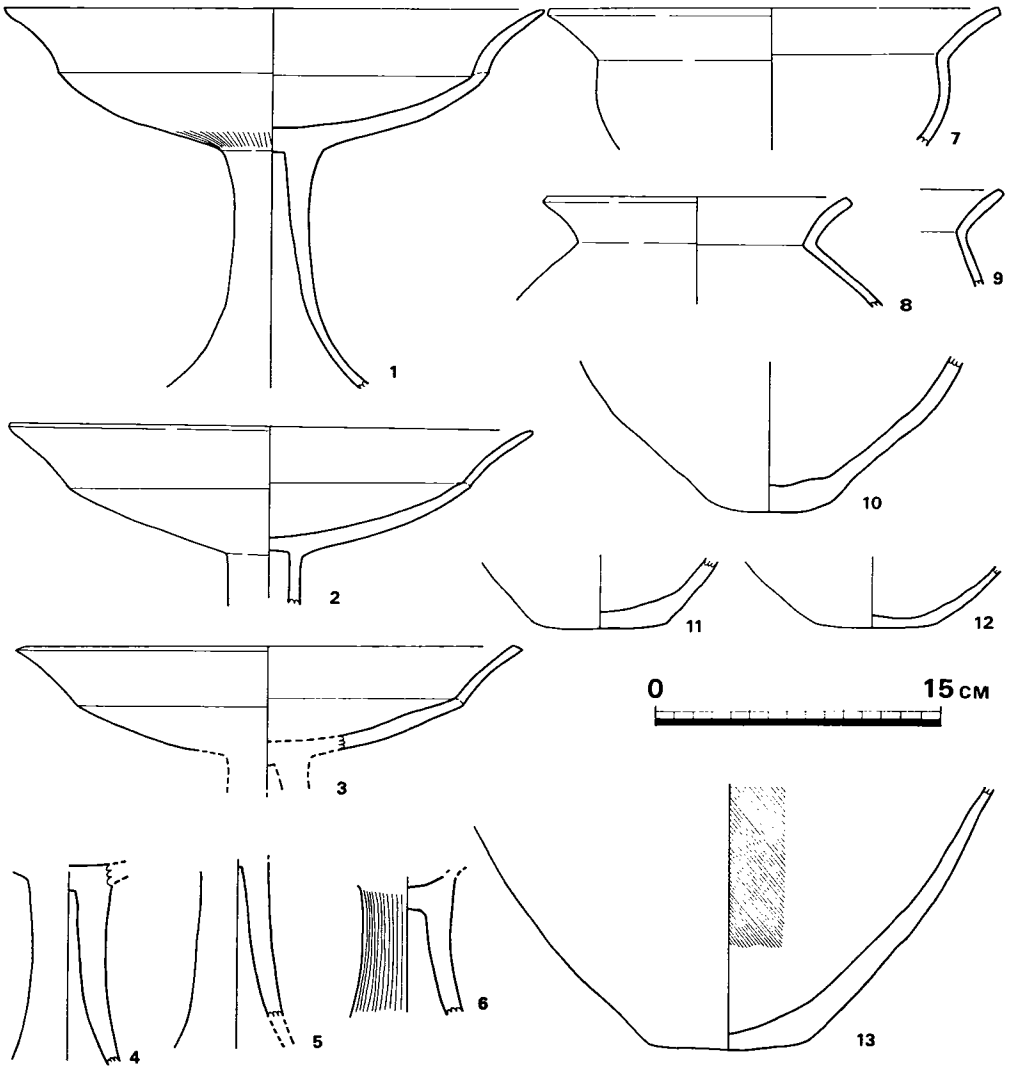


Fig. 21　第17号 住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

を有している。

胎土にはかなりの細砂粒を含み焼成は良好で，二次的に火をうけて，もろくなっている。

器面調整は脚部と体部の接合部分から上面にハケが使用された。口縁部にかけてヨコナデである。器面は非常に荒れており，かろうじて判断できた。4～6は脚部の破片である。器面の荒がひどく調整不明である

甕は7～9で，小形の甕形土器の口縁部の破片で，口縁部は「く」字状を呈し，外反している。胎土に砂粒を含み，器面は剝離し荒れて，焼成は軟弱で，色調は黄褐色から赤褐色で，一部には二次的に熱を受けている。底部は10～13で，甕形土器の破片である。平底に近い丸底を呈し，一部に黒変するところがあり，器面の調整は胎土に砂粒を多く含み，焼成は軟質であるため，器面調整痕は不明である。13は大形破片である。

時期は遺物によって，弥生時代後期後半ごろに位置する。住居跡群はこの時期ごろ存在し，廃絶するころが今後の問題となってくるであろう。すなわち，住居廃絶によって，遺物および遺構の取りまとめられ新しい住居の建設が行なわれると思われる。　　（副島）

第18号住居跡　H18（付図Fig.⑥，ＰＬ.15）

ほぼ正方形の平面プランを示すが，東壁側は後世の削平が著しくやや変形している。住居跡の規模は北辺6.6*m*，東辺6.5*m*，南辺7*m*，西辺5.8*m*であり床面積は約42*m*²である。壁高は削平された東壁を除けば約20*cm*であったが本来はもっと高かったと思われる。住居内には炉および焼土・ベッド状遺構・土壙・ピット・周溝および排水溝と思われる遺構が検出された。炉は住居のほぼ中央にあり，約1*m*の不整円形で深さは約10*cm*である。他に焼土が4個所あり，2つは炉の東西にあるが，これらは床面の焼け方が炉跡に比べてやや劣り，くぼみは殆んどない。他の2個所の焼土は小規模である。ベッド状遺構は4個所にあり，それぞれ短辺1*m*，長辺2*m*程で，床面との比高差は10～20*cm*である。地山を削り出して設定しており，東南隅および西南隅のベッド状遺構には壁にそって周溝が巡る。床面およびベッド状遺構面に検出した17個のピットのうち主柱穴は恐らく**Ｐ1**～**Ｐ6**の6個と考えられる。主柱穴底面と住居床面との比高は**Ｐ1**・**Ｐ6**が40*cm*，**Ｐ2**・**Ｐ5**が30*cm*，**Ｐ3**・**Ｐ4**が50*cm*程である。**Ｐ7**～**Ｐ10**は支柱穴と考えられる。他に番号を付していないピットの中にも支柱穴と考えられるものもあるが浅いものが多く断定はできない。南壁寄りに深さ35*cm*～40*cm*，1辺1*m*の隅丸方形の土壙があり，3本の周溝と屋外に伸びる1条の溝（排水溝か）が接続している。本住居跡南側部分だけに周溝があり、その底面レベルは土壙に向かって下降しており、周溝を流れる水は土壙内に流れ込むようになっている。土壙に接続した屋外へ伸びる溝は，土壙から遠ざかるにしたがって底面レベルを下げ，排水溝として機能したと思われる。よって雨天の日は，水は周溝を伝って土

壙に流れ込み，土壙内に充満した水は排水溝を伝って屋外に流れ出たと考えられる。しかし，土壙内から豆科植物かと思われる炭化物片が出土しており，屋内貯蔵穴として使用された可能性もある。

出　土　遺　物

砥石と弥生式土器を検出した。砥石は床面近くから出土した。土器は小片が多くリンゴ箱半分程出土した。鉄片が出土したが，細片のため図示しなかった。

砥　石 (Fig.22，ＰＬ.30)

仕上げ砥で長さ17.5㎝，幅10㎝，厚さ２～3.7㎝を測る。表面，裏面および片方の長側面を

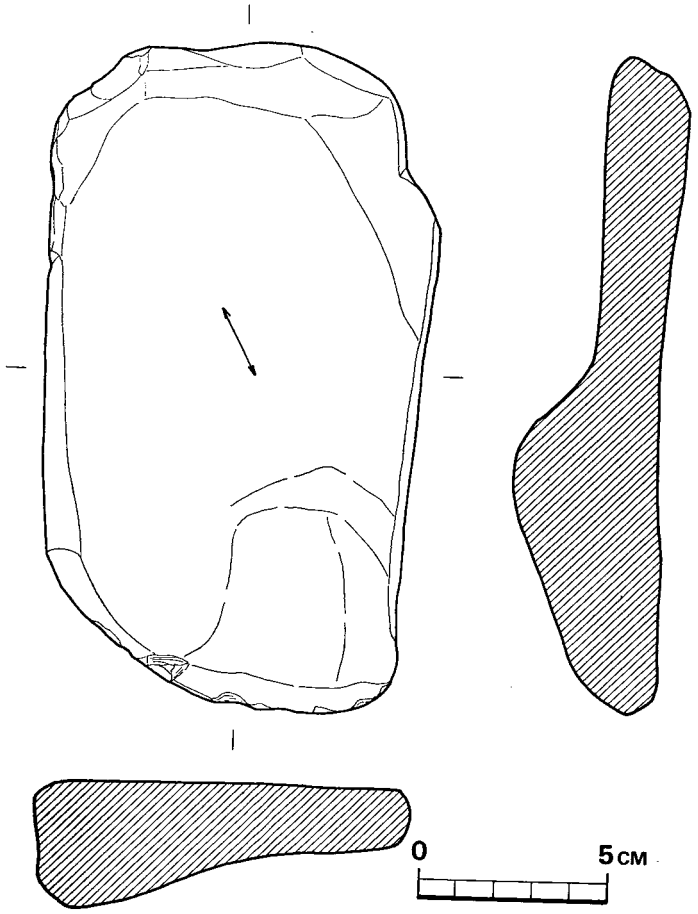


Fig. 22　第18号住居跡出土石器実測図（縮尺1/4）

使用している。裏面には幅3～5㎜の溝状の条痕が不定方向にはいっている。材質は硬質砂岩である。

土　器 (Fig.23, PL.22)

1は住居埋土中より出土した甕で口唇部を欠損している。復元口径13.5㎝，同器高12.8㎝を測る。底部は平底で胴部最大径は胴中位より上にあり口径とほぼ同じである。頸部以下に斜方向の刷毛目がうすく残る。大粒の砂粒を含み焼成は普通で暗赤褐色を呈す。ボテッとした感じの土器である。

2は住居床面に検出した甕で復元口径は20㎝である。胴部は薄くつくり，頸部から口縁部にかけてやや肥厚する。頸部以下の外面には刷毛目が見られ，他はナデて調整している。細砂粒を含み焼成良好で黄茶褐色を呈する。

3は床面出土の高坏である。小破片で口径および傾むきは不正確である。口唇部に特徴があり，断面を矩形につくり内側をつまみ出している。二次的な火を受け調整は不明である。

4は床面出土の壺小片である。砂粒が多く焼成不良でモロイ。

5は住居埋土中より出土した高坏で，脚部に径3㎜の孔を四個穿っている。焼成良好で黄茶褐色を呈する。

6は床面出土の甕底部であるる。底部は平底で外面に縦方向の刷毛目が見られる。砂粒を多く含み，焼成不良でモロイ。

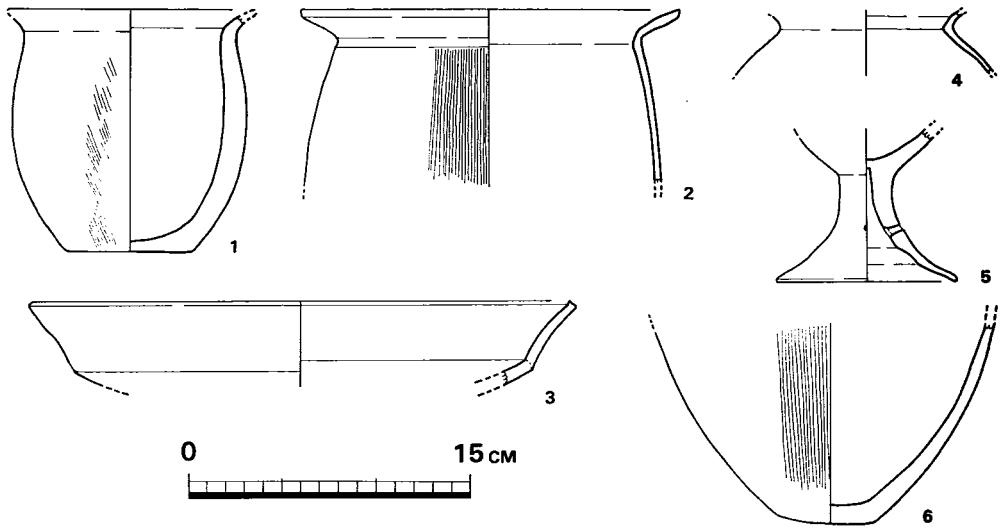


Fig. 23　第18号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

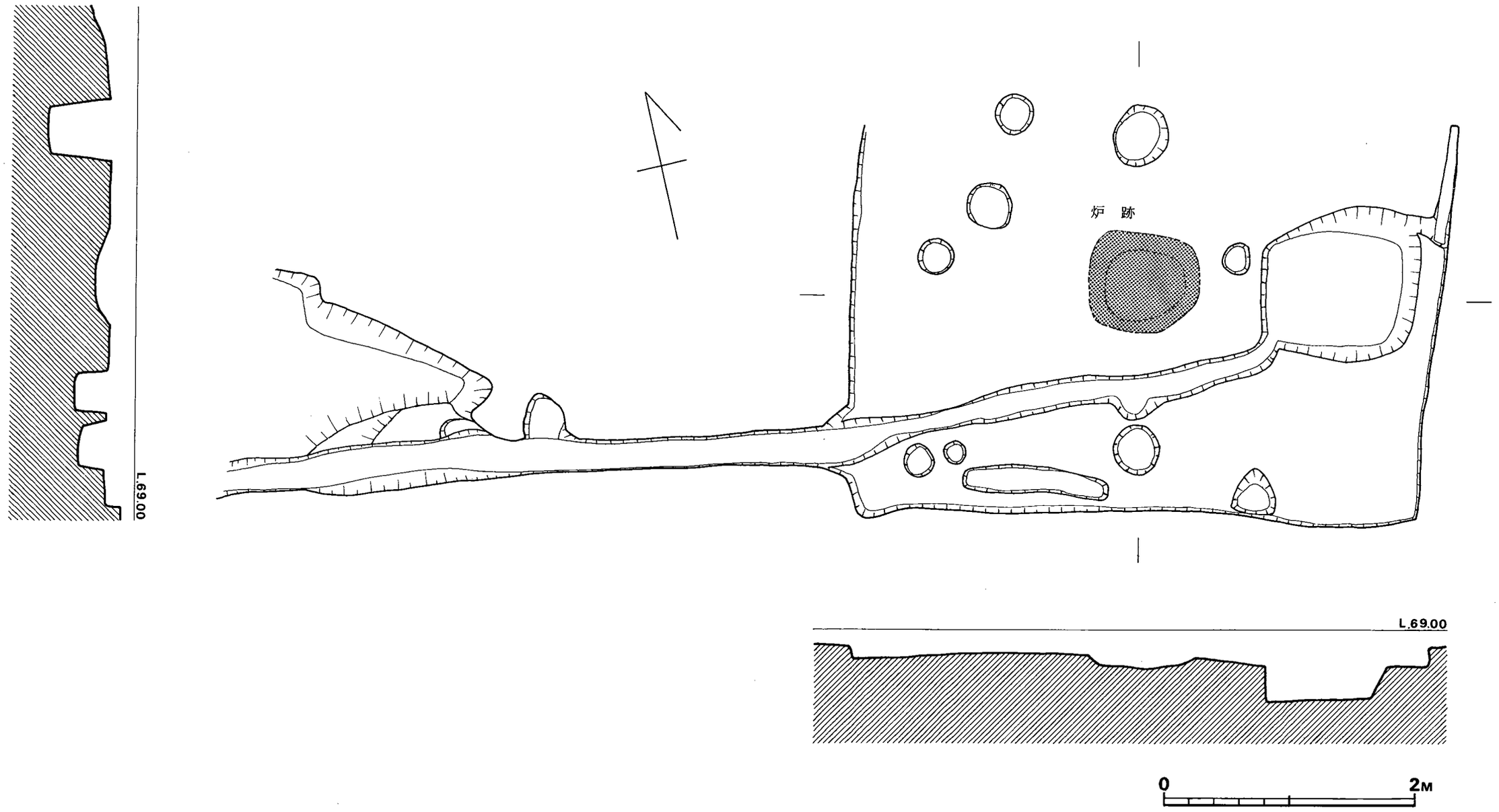


Fig. 24 第20号住居跡実測図（縮尺 1/40）

以上の出土遺物より，本住居跡は弥生時代後期終末頃に位置づけられると思う。

第20号住居跡　H20 (Fig.24)

削平が懇切丁寧に行き届いており，壁は全く残していない。が，住居跡平面プランは方形を呈すと考えられ，主柱穴と思われるピットとのかね合いから，1辺4*m*～5*m*程の規模の住居だったと思われる。東側に方形の土壙があり，屋外に伸びる溝が接続している。土壙は1辺1*m*程度の略正方形プランで深さ37*cm*を測り，屋内貯蔵穴かと思われる。土壙が埋まった後に1個のピットが掘り込まれている。土壙から屋外に伸びる溝はその底面レベルを屋外へ向かって下降させている。明確な周溝はない。住居中央と推定される所に炉跡があり，焼土・灰がつまっていた。柱穴については**B—B′**の切断面にかかる2つのピットが深くしっかりとしており主柱穴の一部に相当すると推定されるが，他は浅いものであった。

出　土　遺　物

石器・鉄器各1点ずつを検出したにすぎない。床に密着して出土したわけではなく，本住居跡に伴うか否かは不明である。土器については削平された時に土砂と共に他へ移動したようであり，土壙・ピット内からも検出できなかった。

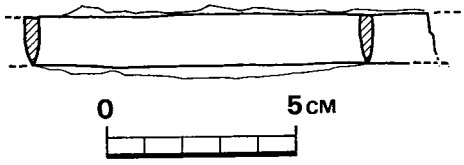


Fig.　25　第20号住居跡出土鉄器実測図(縮尺1/2)

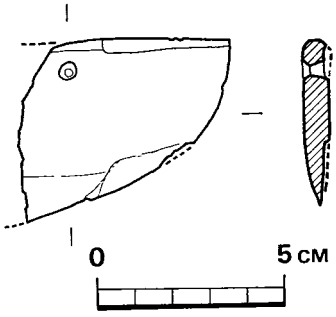


Fig.　26　第20号住居跡出土石器実測図(縮尺1/2)

刀　子 (Fig.25　PL.28)

現存長10*cm*弱のものである。茎や刃部先端が検出されておらず，本来の形態は不明である。

石庖丁 (Fig.26　PL.29)

½程の破片である。孔は表裏2方向から穿孔している。

本住居跡の年代を明示する遺物は検出できなかったが，本集落の大勢から考えて弥生時代後期後半の所産と推定する。

第21号生居跡　H21（Fig.27　ＰＬ.16）

20号住居跡に南接して存在し，20号住居跡と同じく削平がはげしく壁は残っておらず，北西隅は床面まで削平が行き届いている。

東側に東西0.8*m*，南北1*m*の土壙がある。土壙東側には，かって，本住居跡の東壁が土壙長軸と並行して存在したと考えられる。土壙には屋外に伸びる溝が接続している。この溝は第18号・20号住居跡と同じように，屋外に向かってその底面レベルを下げており，排水溝として機能したと急われる。

柱穴の対角線交点付近に炉跡があり，径約60*cm*を測る。炉跡のくぼみの深さは9*cm*である。主柱穴は4本で，長辺3.8*m*，短辺2.8*m*の長方形の各コーナーに位置する形で掘り込まれている。この柱穴の配置からみれば，本住居は1辺5*m*前後の方形プランであったと推定される。

床面まで削平が及んでいるため，住居内の遺物はすでに他へ移動している。よって，本住居跡の時期を示す土器等の出土はなかった。20号住居跡とは接しており共存状態は考えられないが，20号住居跡との時期差はあまりないと考える。　（児玉）

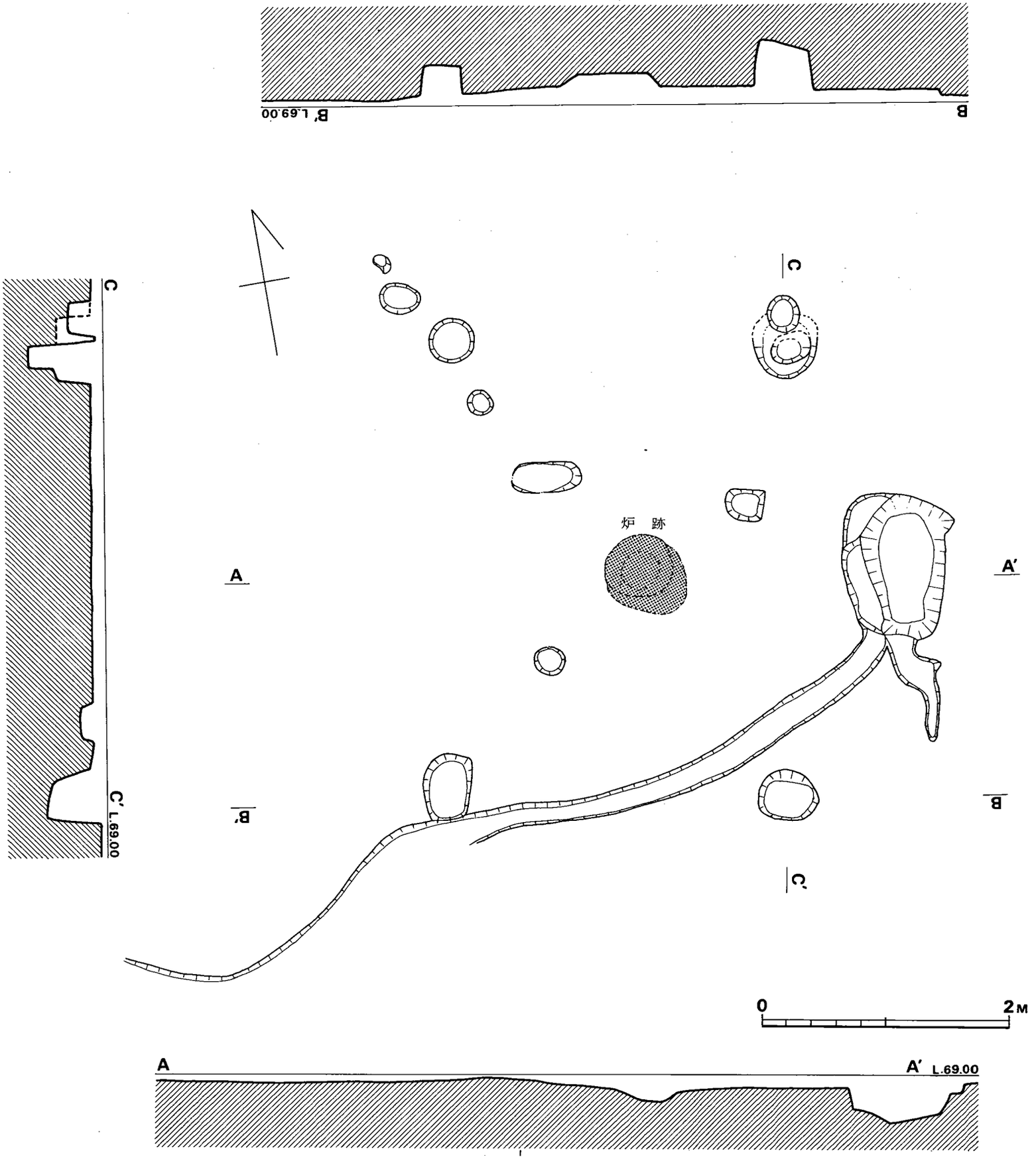


Fig. 27 第21号住居跡実測図（縮尺 1/40）

第1号貯蔵穴　C1

(Fig.28　PL.18)

第10号住居跡の南隅に検出した。掘り方の線は10号住居跡の周溝底に確認したが，住居跡床面では明確には分らなかった。住居跡外においても同様で，ほぼ周溝底まで周囲のレベルを下げて，やっと貯蔵穴の平面プランを検出できた。

遺構検出面での平面プランは不整多角形を呈した。床面は隅丸長方形を呈し，本来は長方形の平面プランを呈する貯蔵穴であったと思われる。壁の上半部は崩壊して旧状を残していないが，掘り込み面での規模は，長辺2*m*前後，短辺1.2*m*前後であったと思われる。床面は長辺1.3*m*，短辺0.7*m*程である。深さは，現在1.8*m*である。旧状を保っているのは床面から1*m*までの部分である。

壁面に残る工具痕まで検出することはできなかった。埋土は明確な層序を持ってはなかったが，上層は黒褐色土，下層は茶褐色土であった。その境は炭化木材が検出された面であり，茶褐色土が埋まった後に木材や土器が埋まっている。Fig.28で示されるように土器は炭化材の上に乗っている。出土遺物はこの炭化材より上層で検出した。この炭化材は，厚さ3～5*cm*の加工された板状の木材である。

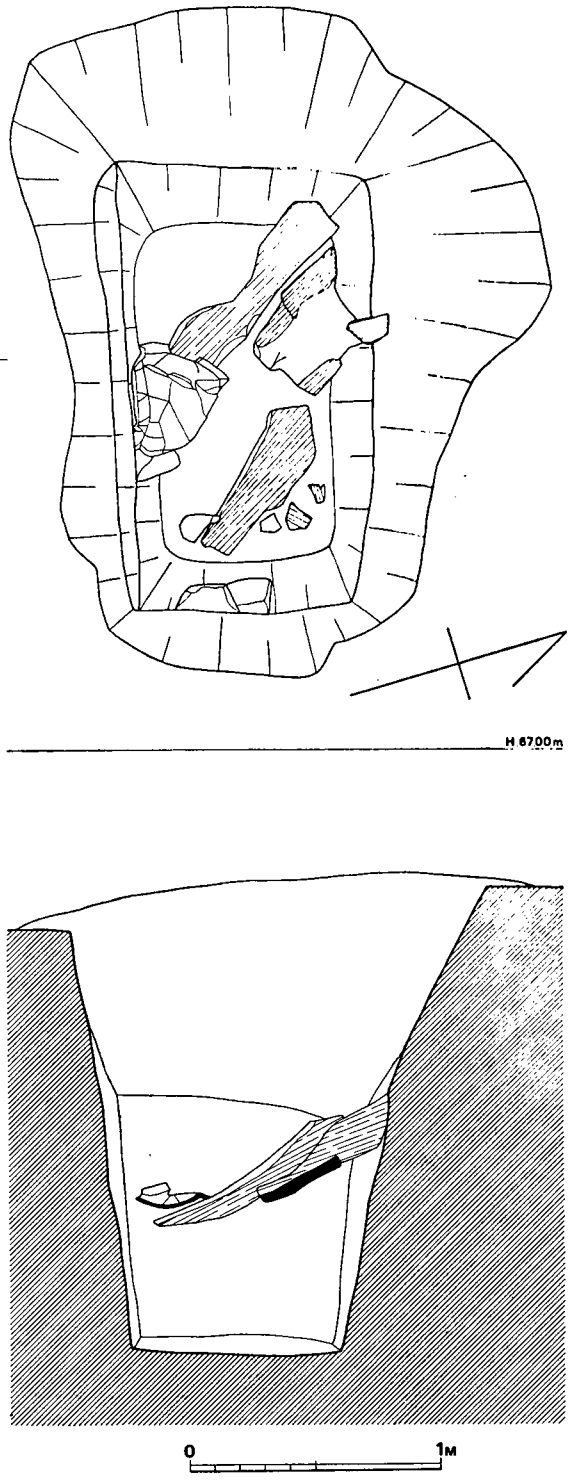


Fig.　28　第1号貯蔵穴実測図（縮尺1/30）

貯蔵穴床面からは全く遺物を検出できなかった。すなわち，本貯蔵穴の廃絶期には貯蔵穴内に全く土器は置かれてなく，約50cm程茶褐色土が埋まった後に，木材や石器および土器が廃棄されたものと思われる。

出　土　遺　物

第10号住居跡の周溝の発掘中からすでに土器が出土していた。出土遺物は土器および石器であるが，これらは炭化材と混在しており，少なくとも最下層に検出した炭化材のレベルよりも低いレベルで検出したものはない。

石器は3点検出し，ともに砥石である。

土器は甕が最も多く，壺，支脚，高坏等であり，丹塗土器を多く含んでいる。

砥　石（Fig.29　PL.30）

3個とも破損しており完形品ではない。

1は長さ9.5cm，幅5.4cm，厚さ3cm前後を測る。裏面と2つの短側面は欠損している。表面と2つの長側面に使用痕がある。原状を損っているので6面とも使用したか否かは不明である。石質は軟質砂岩で荒砥である。

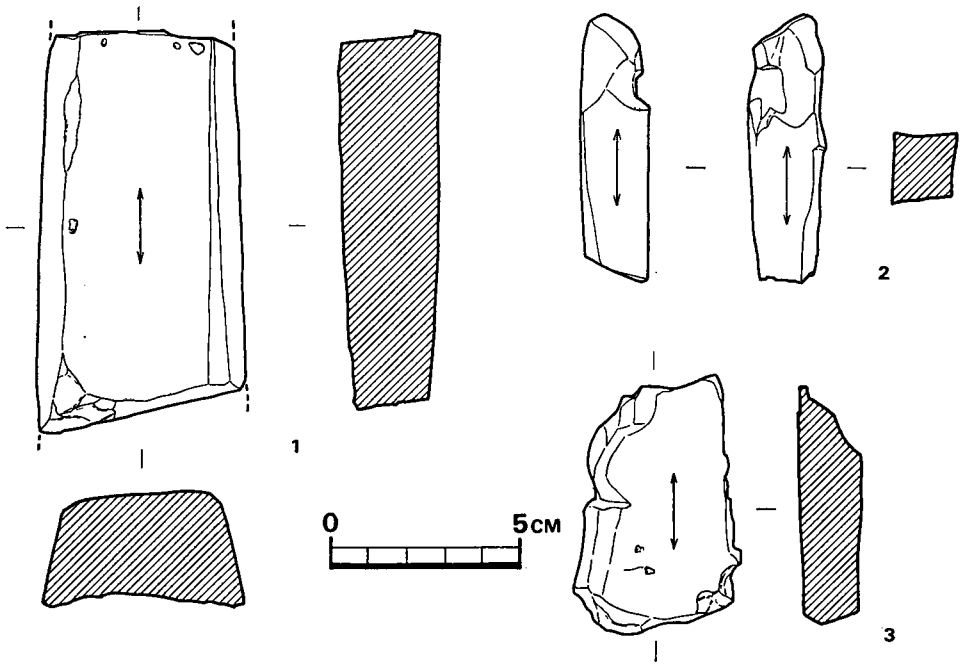


Fig. 29　第1号貯蔵穴出土石器実測図（縮尺1/2）

2は長さ7㎝，断面の1辺2㎝弱のほぼ直方体の砥石である。仕上げ砥で2つの長側面は使いこまれている。小形品であり，手に持って使用した可能性がある。石質は硬質砂岩のようである。

3は長さ6.8㎝，幅4㎝，厚さ1.5㎝を測る仕上げ砥である。使用痕の明確なのは表面の1面だけである。小形品であり，本品も手に持って使用した可能性もある。石質は硬質砂岩である。

甕（Fig.30—2，Fig.31—7，Fig.32，Fig.33—1～6　PL.23・24）

口縁部の破片が50個体以上出土した。そのうち完形品1個体，実測可能なのは21個体分である。Fig.30—2を除いて小片のため復元口径は正確ではないが，口径30㎝以上の大形と，25㎝前後のもの，20㎝以下のものにわかれる。復元口径30㎝前後以上のものには頸部直下に断面三角の突帯が巡っている。また，丹塗りされているもの3が個体ある。丹塗り土器は，特に胎土を精選してはおらず，他の土器と同様である。

Fig.30—2は口径27㎝，器高33㎝を測る完形品である。胴部最大径は中位より上にあり，口径よりやや大きく29㎝を測る。底部は平底で厚く，胴部は丸味を帯びて頸部が締まっている。頸部断面は「く」字形を呈して反転し，口唇部内側はつまみ上げられたため肥厚している。胴部外面は右下がりのハケ目が全面に施されているが，内面は器面が荒れているため調整痕は残っていない。口唇部から頸部はヨコナデにより調整されている。胎土には砂粒を大量に含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色で部分的に黒変しており，内面はよごれた淡茶灰色を呈している。

Fig.32—6は外面全面と内部の頸部下まで丹塗りされている。復元口径30㎝で，頸部直下に断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。口唇部内面は肥厚している。丹塗りに際しては刷毛状器具を用いたようであり，内面に横方向に塗った痕跡が残っている。胎土に多量に砂粒を含み，焼成は良好である。

Fig.33—1は外面全面に丹塗りされている。復元口径29㎝を測る。頸部の締まり具合は弱く，そのため胴部はあまり張らないようである。頸部から口縁部はヨコナデされている。砂粒を多量に含み，焼成は良好である。

Fig.33—2は内外面共に全面にわたって丹塗りされている。復元口径26㎝を測る。丹塗りは横方向に刷毛状器具を用いてなされており，横方向にヘラ状器具で磨かれているようである。砂粒を少量含み，焼成は良好である。

Fig.32—9は他の甕と形態がやや異なっている。頸部がきゆっと締まり，口縁は他の甕と比べて水平に近く寝ており，やや内彎気味である。頸部から肩部は直線的で丸味がなく胴部は大きく張るようである。胎土に多量の砂粒を含み，二次的に火を受けているためモロく，全体にこげ茶色を呈している。調整痕は残らず不明である。

他の甕は口縁部の⅓～¼程の破片である。口唇部内面は肥厚している。器面が剝落していな

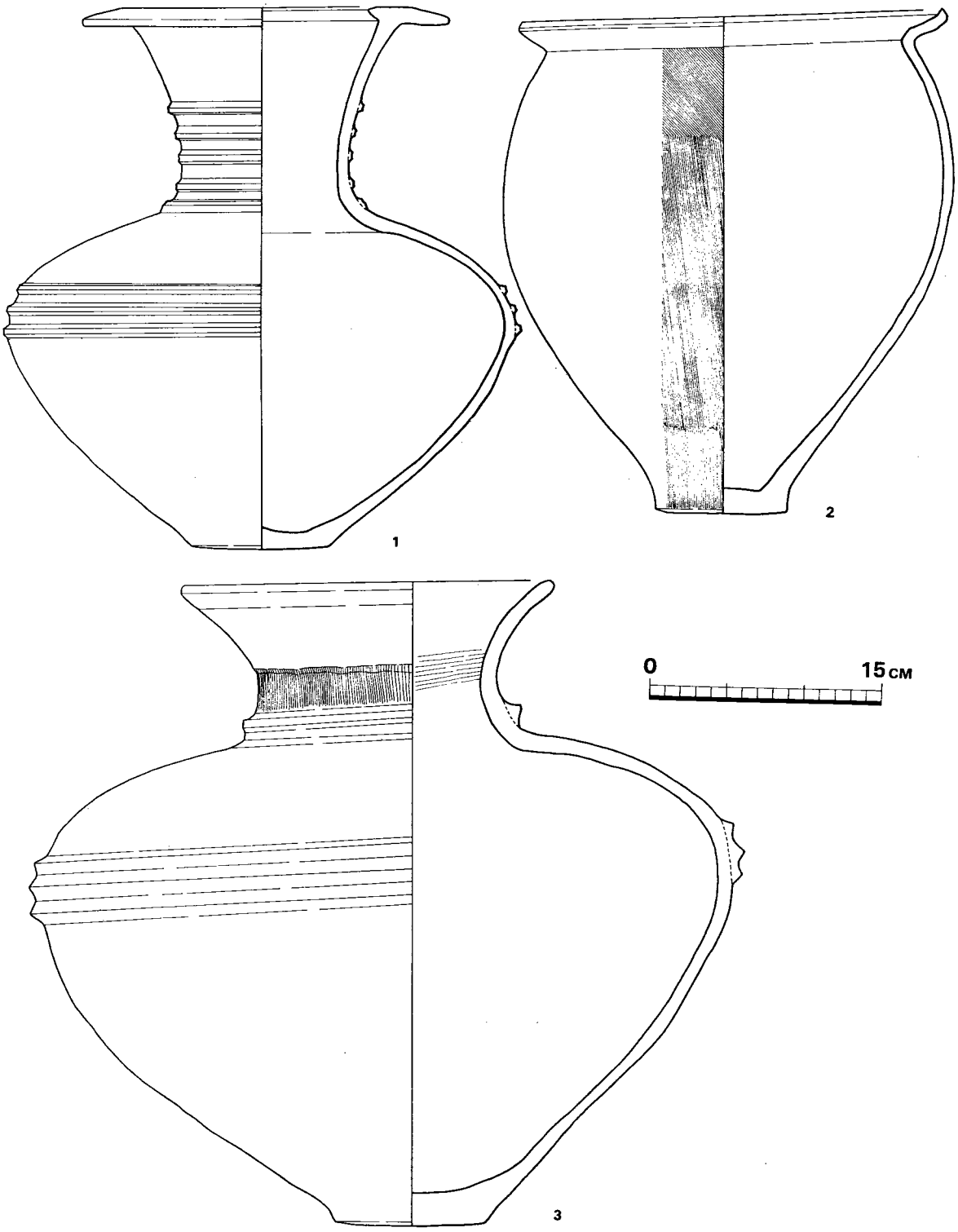


Fig. 30　第１号貯蔵穴出土土器実測図①（縮尺1/4）

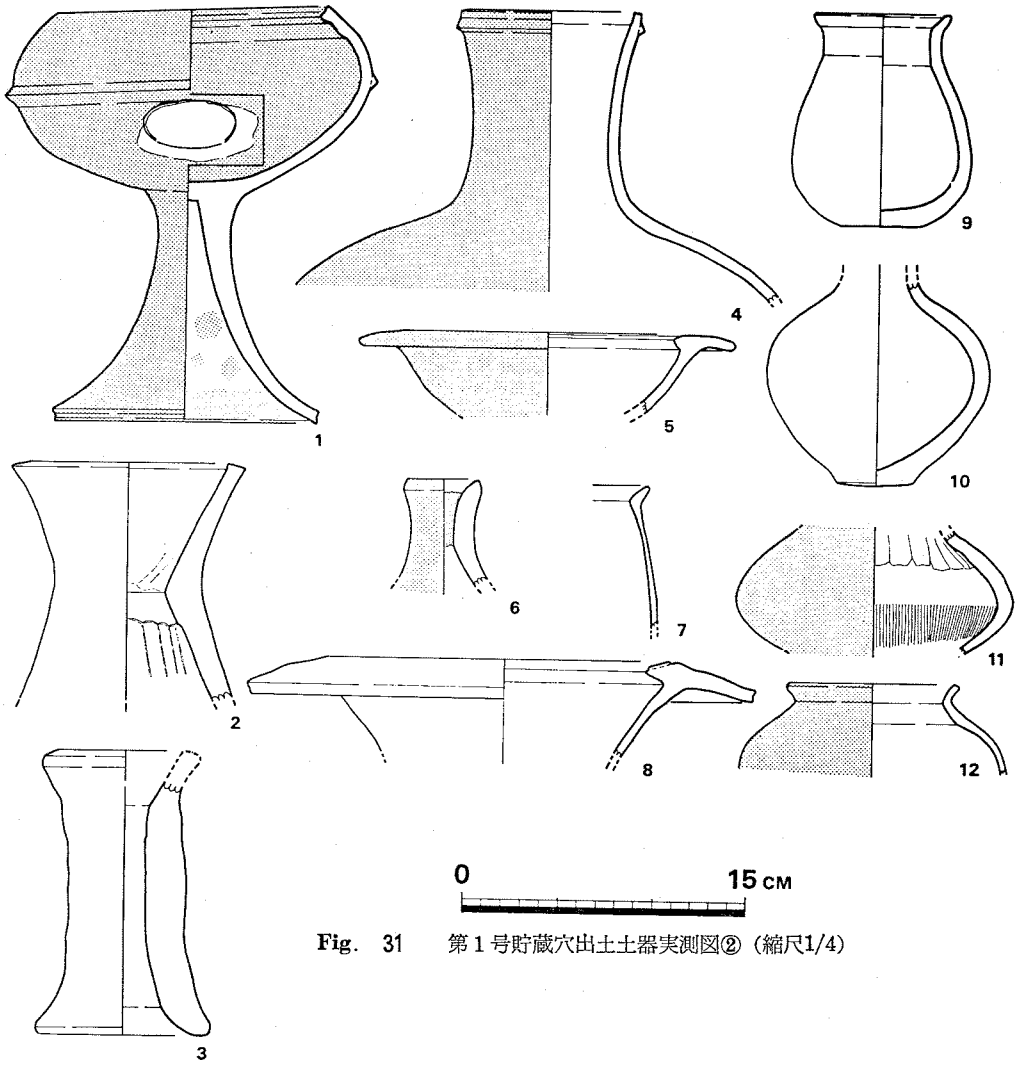


Fig. 31 第1号貯蔵穴出土土器実測図②（縮尺1/4）

いものの多くにはハケ目が残っている。砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈するものが多く，淡茶色を呈するものも少量ある。総じて器面が荒れており，調整痕を残すものはわずかである。

Fig.31—7は，前記甕とは器形を異にする。小片で口径も出し得ない。口縁部は頸部から薄くなりゆるやかに外反する。胴部外面は縦方向のハケ目を施している。砂粒を多く含み，焼成悪く軟質である。淡茶色を呈する。

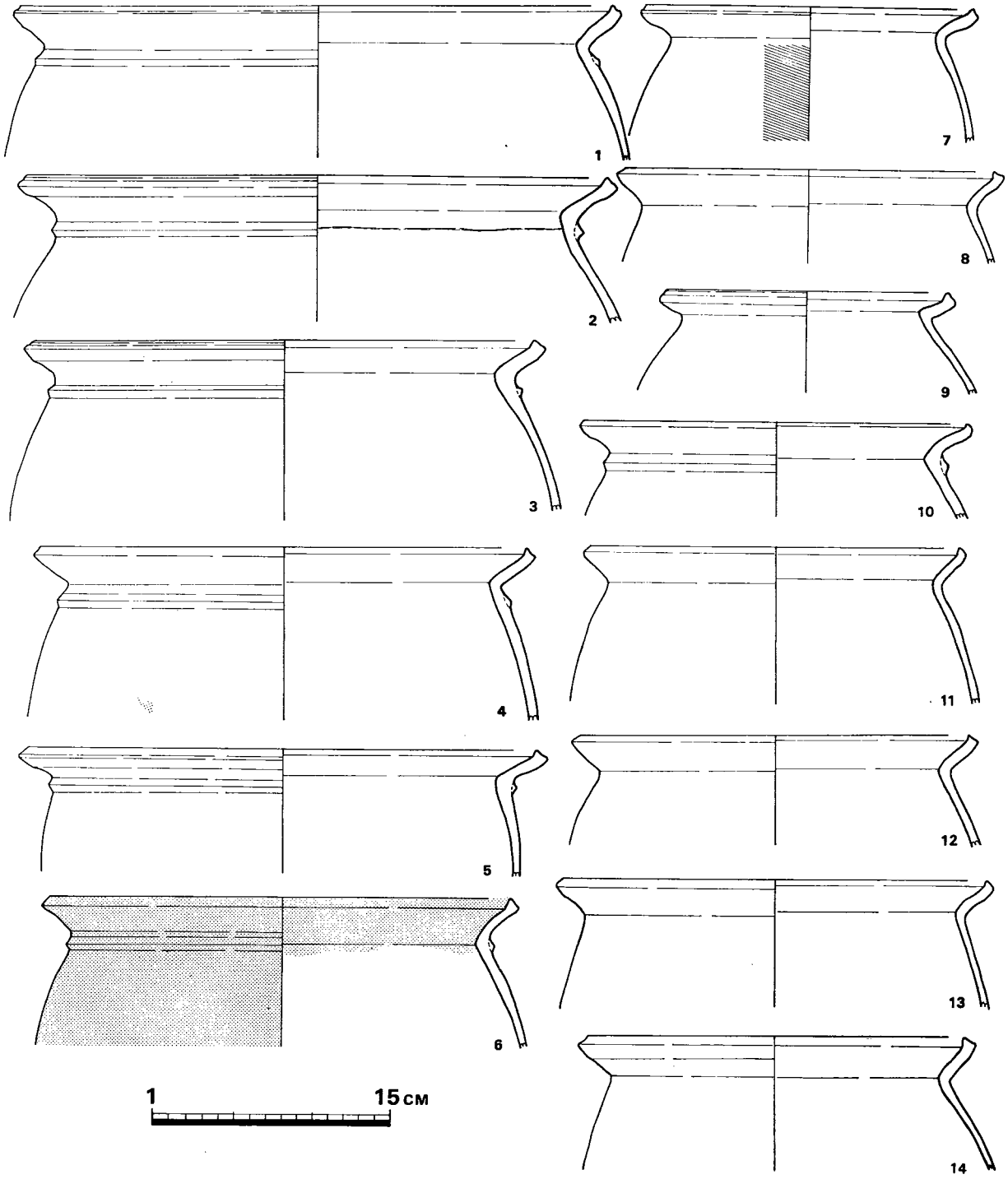


Fig. 32　第1号貯蔵穴出土土器実測図③（縮尺1/4）

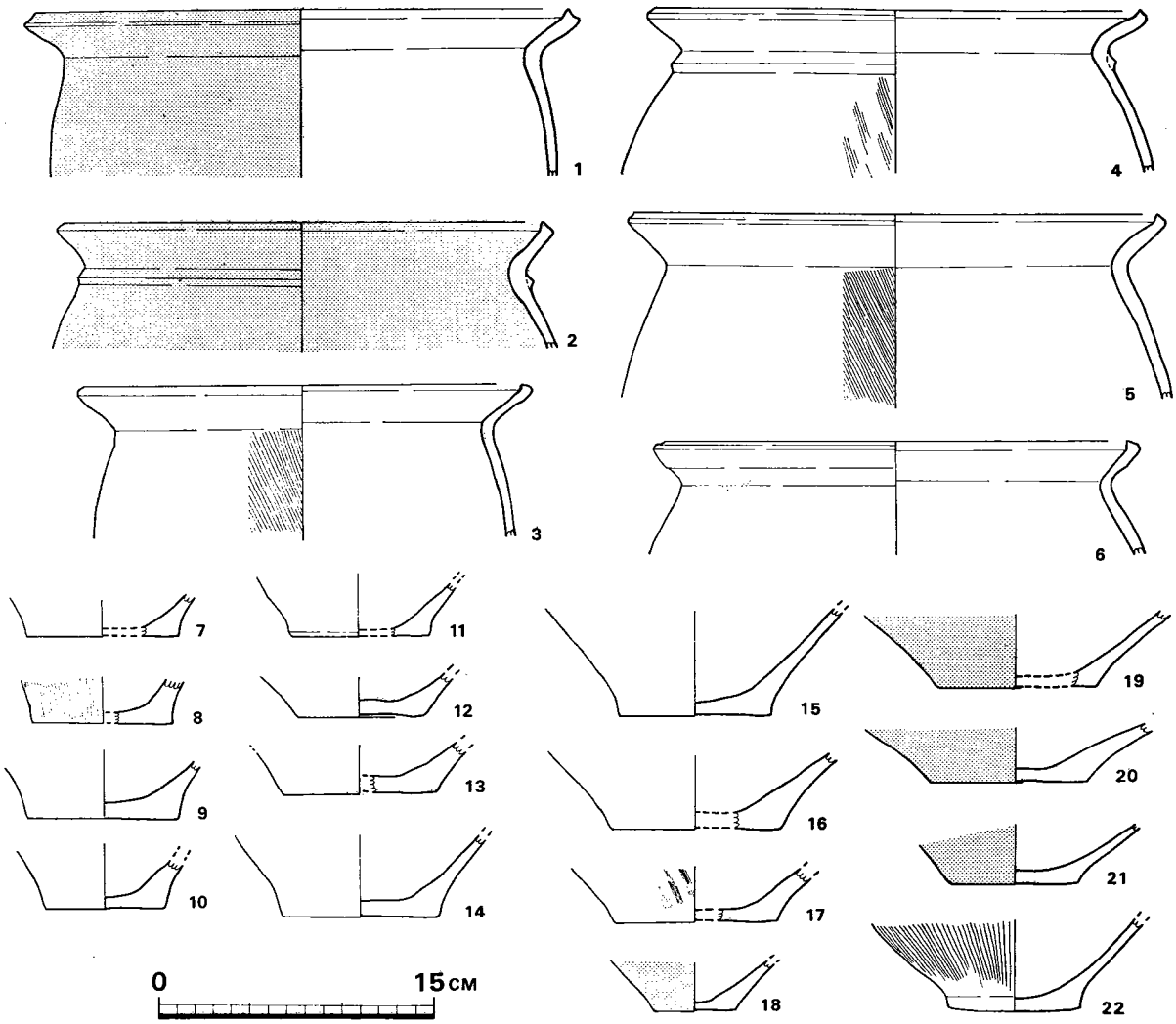


Fig. 33　第1号貯蔵穴出土土器実測図④（縮尺1/4）

壺（Fig.30—1・3，Fig.31—4・8～12，Fig.34）

壺は甕と異なって器形はバラエティに富んでいる。同一器形は2種4個体である。また丹塗りの認められるのは5個体出土した。

Fig.30—1は完形の壺で口径は内径で13.5㎝，外径で23.5㎝，器高35㎝を測る。胴部最大径は胴中位よりやや上にあって33.5㎝を測り，器高にほぼ匹敵する。口縁部は逆「L」字形を呈し，口縁内部に断面三角形の突帯がめぐる。頸部は長く口縁部に向かって外開きになる。頸部下半部には断面台形の突帯が5本めぐる。この貼り付け突帯の表面は窪んでいる。胴部は楕円形を呈し，上半部に3本の突帯がめぐる。一番下段の突帯は丁度胴部最大径の部分にめぐって

いる。底部は平底で安定性がある。器面は磨滅しているが，ヨコナデおよびナデによって調整されている。胎土には多量の砂粒を含み，器面がざらついている。焼成はあまりよくなく，やや軟質である。色調は淡茶褐色を基調とするが，2次的な火を受けているため，底部付近は黒変し，口縁部から頸部にかけては部分的にピンク色を呈している。全体に均整のとれた土器である。

Fig.31—8はFig.30—1と同じ形態を示す壺であるが頸部下半部以下は欠損している。口縁部の¼程を残す破片であるが，復元口径は内径で15㎝，外径で26.5㎝を測る。口縁外端部は窪み，同内側は断面三角形を呈して，径1.3㎝の円形付文がある。頸部はFig.30—1と比べて器肉が薄く，傾むき具合からみて頸部下半はかなり細くなりそうである。胎土に小粒子を多く含み焼成は並通程度で淡黄褐色を呈する。

Fig.30—3は完形品で大形の壺である。口径23.5㎝，器高42㎝を測る。胴部は扁楕円形を呈し，最大径は中位より上にあり径46㎝を測る。口縁部は大きく外反し，頸部と胴部の接合部分に断面三角形の突帯がめぐる。胴部上半部にも同様の突帯が3本めぐるが，つくりは極めて荒い。胴部の突帯は個々に貼り付けられたのではなく，幅広の粘土を貼りつけて強くナデることによって3本の突帯を作り出している。底部は平底で厚い。調整はハケ目が施されており，頸部は縦方向に強く押してつけられ，胴部外面は不定方向の荒いハケ目，口縁部内面は横方向に荒くハケ目が残っている。胎土には多量の砂粒を含み，器面に白色砂粒が目立ちザラつく。焼成は良くなくモロい。色調はよごれた淡茶灰色を呈し，胴下半部および胴部突帯の一部にススが付着して黒変している。この土器は全体につくりが粗雑で器形のゆがみもひどい粗悪品である。

Fig.31—4は外面全体に丹塗りされている。胴部の大半が失われており，本来の器形は定かでない。口径は8.7㎝を測る。頸部は中位で細まって外反し，口縁部は内彎気味に直立する。口唇部断面は方形を呈し，上面は水平につくられている。口唇部直下に断面三角形の突帯をめぐらしている。器面の剝落が著しく調整痕は残っていない。胎土に多量の砂粒を含み，焼成はあまりよくなく軟質でモロい。丹塗りされているが地肌は黄褐色を呈する。

Fig.31—9は全体の½を残し，復元口径7㎝，同器高11.2㎝を測る。下ぶくれの土器で底部は平底を呈し安定感がある。頸部はほぼ直立し，口縁部は大きく外反し内面に強いヨコナデによる窪みが見られる。胴部外面は水をつけてナデたためか，極めて滑らかで光沢がある。他の部分はヨコナデおよびナデ調整を行っている。底部外面は若干剝離しており，本来の器面を残さない。胎土には多量の砂粒を含み，器面がザラつく。焼成はあまりよくなく，ややモロい。色調は胴部上半から口縁部にかけては黒色，他の部分は赤味を帯びた茶色を呈し，底部は火を受けて赤変している。

Fig.31—10は全体の⅓程を残す破片で口縁部を失っている。胴部最大径はほぼ胴中位にあ

り，径14cmに復元される。底部は平底で，全体に器肉が厚く安定感がある。器面は全体に剝落しており，調整痕は残っていない。砂粒を多量に含み，焼成はよくなく全体にモロい。

Fig.34は，Fig.32—10に似た器形をしたミニチュア品である。外面には全面丹塗りされている。口縁部を欠損しており，現器高4.2cm，胴部最大径4cmを測る。頸部に径2mmの孔が1つある。器形はややゆがんでいる。胎土に砂粒を多く含み，焼成良好である。

Fig.31—11は外面全面に丹塗りされている。小片のため，図示した器形は正確ではない。内面にはハケ目と指圧痕が残っている。胎土に多量の砂粒をまじえ，焼成は良好である。

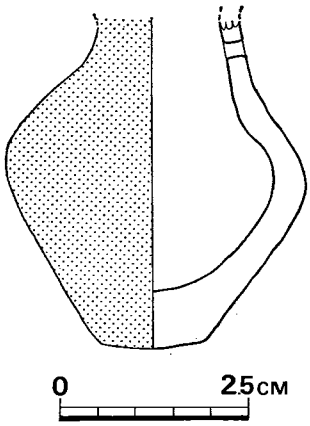


Fig. 34　第1号貯蔵穴出土土器実測図⑤（縮尺1/1）

Fig.31—12は口縁部から胴部までの破片である。復元口径9.4cm，現器高4.8cmを測る。口縁部は外反し，胴部が張ってずんぐりした壺である。胴部外面は右下がりのハケ目を施した上に丹を塗っている。胎に含まれる砂粒は少量であり，焼成はあまりよくなくモロい。丹塗り前の器面は淡茶色を呈する。

台付無頸壺（Fig.31—1）

口径14cm，器高22cmを測るほぼ完形品である。壺部は高さ10cmで，胴部最大径付近に断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。口唇端部は窪んでいる。突帯下に，焼成後に長軸5cm，短軸3.5cmの楕円形の孔を開けている。孔は，丹塗後に内側から叩いて開けている。脚部は高さ12cmで，ラッパ状を呈する。内面には絞り目が見られ，ヨコナデされている。外面全体に丹塗りされており，内面にも部分的に丹が付着している。胎土に含まれる砂粒は少量で，焼成は良好である。

器　台（Fig.31—2・3・6）

2は復元口径10.5cm，現器高12.5cmを測る。内面に圧痕が残っている。外面は縦方向にナデられている。砂粒を多量に含み，焼成良好で硬質である。色調は黄褐色であるが，口縁部は二次的な火熱を受け赤変している。

3は2に比べて器肉が全体に厚手で，口縁部を薄くつくっている。器高15cmを測る。外面には整形時の指圧痕がのこり，凹凸が著しい。胎土に多量の砂粒を含み，器面がザラつく。焼成良好でよごれた黄褐色を呈する。

6は外面に丹塗りされ，縦方向にヘラ磨きを行っている。砂粒を多く含み，焼成は良好である。

高　坏 (Fig.31—5)

坏部の破片で口径は，内径で13.2㎝，外径で20㎝を測る。口縁部は逆「L」字形を呈する。本来，外面全面に丹塗りされていたが，現在はその痕跡をとどめるだけである。胎土にかなりの砂粒を含み，焼成は良好である。丹は殆んど剝落しており，生地の面は淡茶色を呈する。

甕・壺底部 (Fig.33—7～22)

50個体前後出土したが，実測可能なのは16個体である。そのうち甕底部は9個体（7～15），壺底部は7個体（16～22）である。すべて平底である。

甕底部は8は縦方向のハケ目が見られるが，他はヨコナデされている。丹塗りされたものはない。

壺底部は22はハケ目で，18・19・21は丹塗り，他はヨコナデされている。

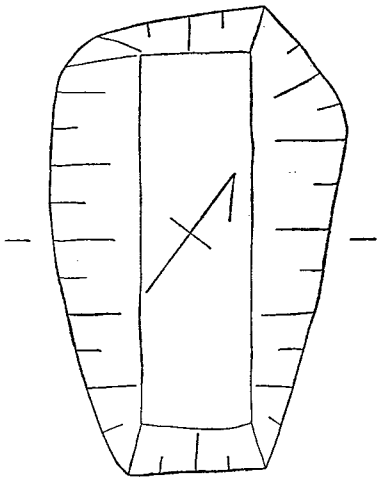
全体に胎土に多くの砂粒を含み，焼成は良好である。

以上の出土遺物より，本貯蔵穴は弥生時代中期末にはすでに廃棄されていたものと考えられる。使用時期は，床面から土器が出土していないので不明である。丹塗り土器の出土は，祭祀遺構の存在を想定させるが，発掘範囲内には祭祀遺構は検出できなかった。

第2号貯蔵穴　C2 (Fig.35　PL.18)

第1号貯蔵穴の南西約10mの位置にある。約1mの段落ちの下に掘り込まれてあり，上端は第5号掘立柱建物から若干削平されている。また，本貯蔵穴は，本来は斜面に立地したと思われ，段落ち形成時にすでに1m程度上端を削平された可能性もある。

平面プランは長方形を呈し，長軸を北西一南東におく。上端は破壊されている可能性があるが，現在，長辺1.8m，短辺0.8m前後を測り不整長方形を示している。床面は長辺1.5m，短辺が0.45mの整った長方形である。深さは，現在1.3～1.2mである。貯蔵穴内埋土は，1号貯蔵穴のそれとほぼ同様であり，炭化材がはいっており，炭化材より上層に土器・石器を検出した。



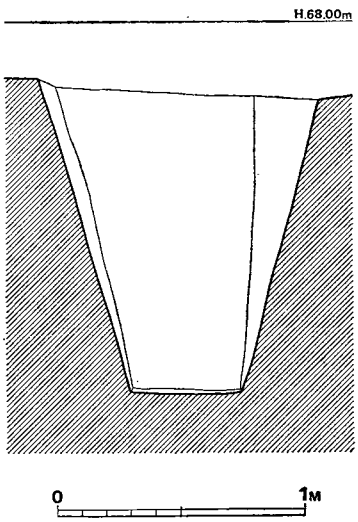


Fig.　35　第2号貯蔵穴実測図（縮尺1/30）

出　土　遺　物

弥生式土器，砥石を検出した。1号貯蔵穴に比べて，遺物の出土量は極端に少ない。床面では全く遺物を検出できなかった。

砥　石 (Fig.36　PL.30)

長さ11㎝，1辺4.5㎝の断面略正方形を呈するほぼ直方体の砥石である。完形品ではなく，両方の小口面から欠損している。長側面は4面とも使用され，砥ぎ減りが著しい。軟質砂岩製の荒砥である。

土　器 (Fig.37)

丹塗り土器片，甕・壺の小片および器台を検出した。図示できるのはFig.38の器台1点である。

器台は口径6.2㎝，器高15㎝を測る。上部⅓を欠いているので，数値は復元推定値である。外面は指圧痕があり，凹凸が見られる。厚手でずんぐりとしている。胎土に砂粒を多量に含み，焼成はよくなくモロい。赤褐色を呈する。

出土遺物の時期は第1号貯蔵穴と同時期であり，2号貯蔵穴の廃棄の時期も弥生時代中期末以前と考えられる。

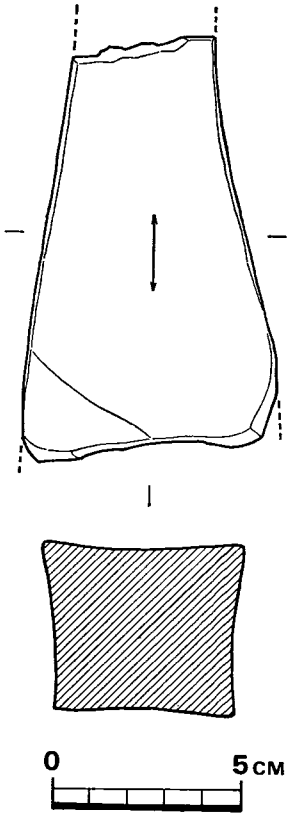


Fig. 36　第2号貯蔵穴出土石器実測図（縮尺1/2）

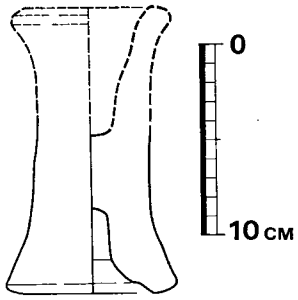


Fig. 37　第2号貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

第3号溝状遺構　SD3（付図Fig.③ PL.19）

第10号住居跡の5*m*東側に南西―北東に主軸をおく溝状遺構がある。平面形は整然とした形態はとらず，南から北へ向かって幅を広げる不整形で，上端はかなり削平されているため，深さは5*cm*～20*cm*程である。中には砂利がつまっており，砂利にまじって土器片および石器を検出した。なお，底面レベルは南から北へ下がってゆく。

出　土　遺　物

石斧の破片1と弥生時代後期終末頃の土器片を検出した。実測可能なのは高坏が多く他に坩・ジョッキ形土器である。

石　斧（Fig.38　PL.29）

刃部から7.2*cm*を残し欠損している。石質は蛇紋岩である。磨製石斧であるが，刃部と側面を除いて器面が剝離している。

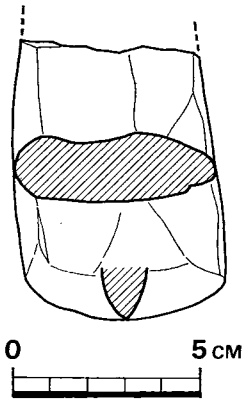


Fig.38　第3号溝状遺構出土石器実測図（縮尺 1/2）

ジョッキ形土器（Fig.39　PL.25）

底部½程の破片である。復元底面径7.2*cm*を測る。体部には貝殻により施文され，その文様の間に2条のヘラ描き沈線を巡している。底部外面にはヘラと貝殻による鋸歯文が見られる。まずヘラによる2条の沈線により文様帯を分割する。次にまたヘラで鋸歯文の外槨を描き，その中に貝殻により4～5個の施文を行っている。鋸歯文帯の外に貝殻だけによる施文帯がある。恐らく，沈線による文様帯の分割の割合いから考えて，鋸歯文帯が4帯あり，その外側に各1帯ずつの貝殻だけによる施文帯があったと思われる。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良く硬質である。色調は明赤茶色を呈する。

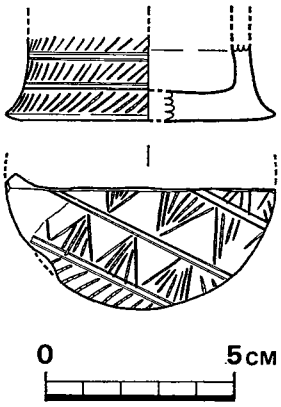


Fig.39　第3号溝状遺構出土土器実測図①（縮尺 1/2）

高　坏（Fig.40―1～6）

6個体とも高坏の坏底部から脚部にかけての破片で，全形を知ることはできない。脚部外面はいずれもヘラケズリされており，内面はヘラケズリとシボリの二者がある。胎土には砂粒を多く含み，焼成はおおむね良好である。色調は黄褐色及び明茶褐色を呈する。

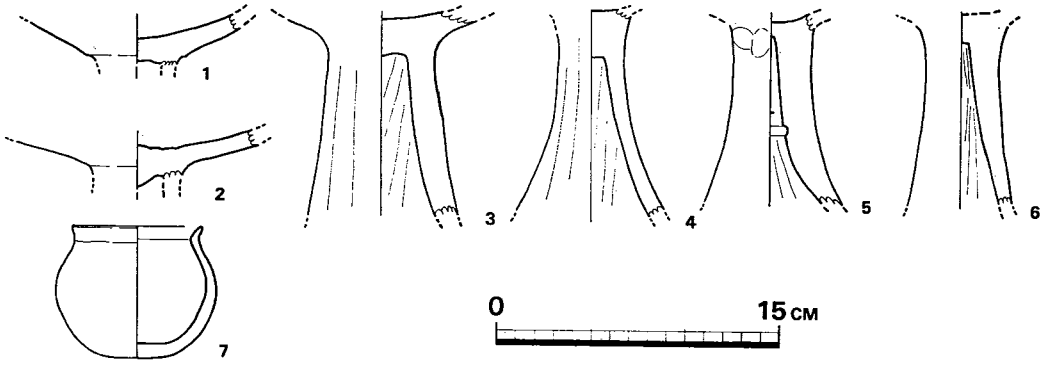


Fig. 40　第3号溝状遺構出土土器実測図②（縮尺 1/4）

坩 (Fig.40−7　PL.25)

全体の⅚を残すほぼ完形品である。口径7㎝，器高7㎝，胴部最大径 8.6㎝を測る。底部は平底に近い丸底で胴部はゆるやかにカーブして口縁部は短かくて外反する。胴部最大径は胴部中位にある。焼成は良好だが胎土に砂粒を多量に含みモロい。調整は外面は剝離がひどく不明であるが，内面は底部および口縁部はナデ，他はヘラケズリである。

出土遺物より，本溝状遺構は弥生時代終末から古墳時代初期にかけてのものと思われる。

その他の出土遺物

昭和49年度調査

表土中およびトレンチ内から土器が出土している。

高　坏 (Fig.8−8)

脚部裾は，やや脹らみを持ちながら広がり，端部は平坦である。裾の上部に2孔穿っている。淡黄色を呈し，焼成は悪い。

甕 (Fig.8−9)

完形品で，外反する口縁の端部はやや丸みを持った平坦面を作っている。くびれ部下でやや厚くなり，以下ほぼ均一の器高となって底部に到る。底部は丸味を持った平底である。外面及び内面口縁近くには刷毛目を施し，その上から口縁内外面及び胴最下部のみヨコナデしている・胴部内面はヘラで，かなりスムーズにナデている。なお，底部胎土中に黒曜石片が混入している。

壺（Fig.8—10・11・13）

10・11は「く」字形口縁の壺であり，13は同一型式の壺の胴部片であろう。屈曲著しく外反する頸部上に，内彎する口縁を乗せて，その継ぎ目に刻み目を施している。口唇部は平坦であるが，11の場合その部分にさらに粘土紐を内側に張って，口唇部を直立させている。13は胴部最大径を測る位置よりやや下に台形の凸帯をめぐらしている。刷毛目を施している。（酒井）

昭和50年度

石器および土器が出土した。石器は砥石・石庖丁で各1点である。土器は，ピットおよび堆積土中よりかなり多量に出土した。土器は殆んどが小片で磨滅しており，実測可能なものは少ない。

砥　石（Fig.41　PL.30）

軟質砂岩製の荒砥である。長さ13㎝，幅9㎝，厚さ3～4㎝を測る。両短側面は欠損している。4面とも使用されている。よく使いこまれており，砥ぎ減りが著しい。

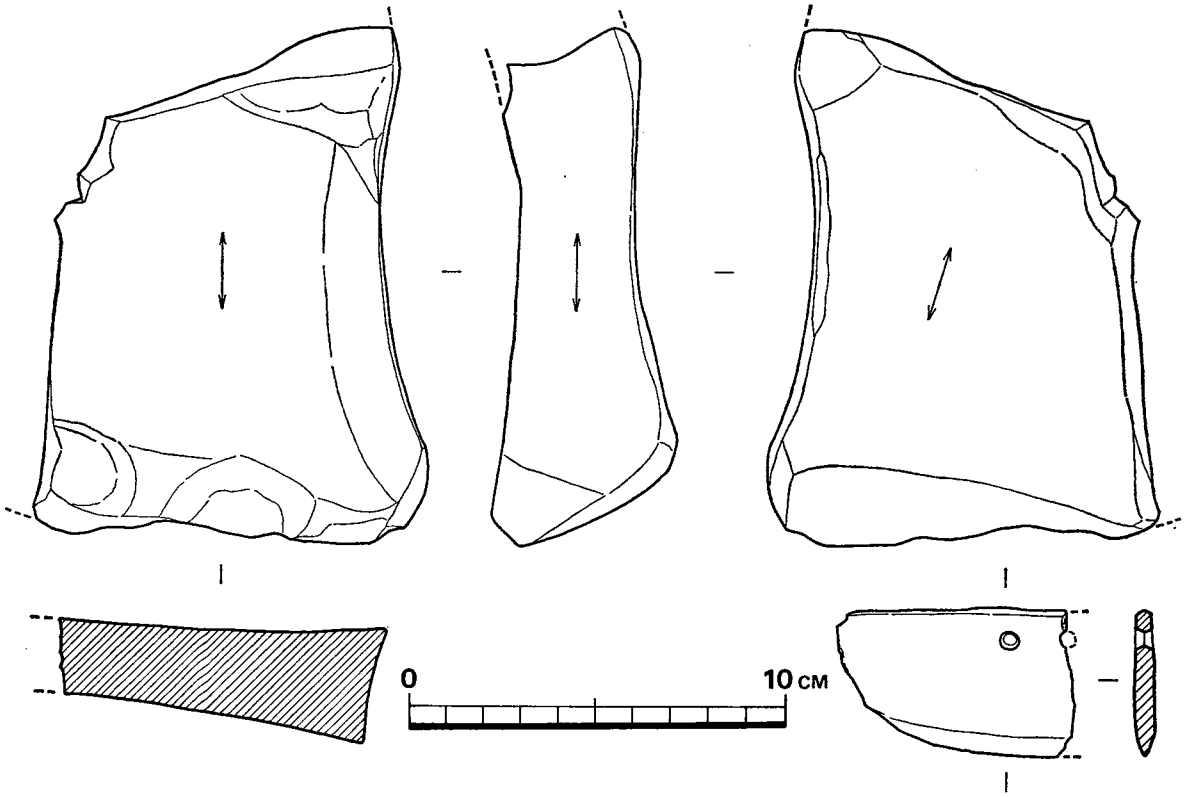


Fig. 41　その他の出土石器実測図（縮尺 1/2）

石　庖　丁 (Fig.41　PL.29)

約½を残して欠損している。長さは不明だが幅は4㎝である。両面から穿孔され，孔の径5㎜強である。縁色を呈し，石質は片岩系であろう。

甕 (Fig.42—1・2)

1は復元口径26㎝を測り，頸部直下までを残す小片である。頸部は断面「く」字形を呈し，頸部から口唇部にかけて次第に肥厚し，口唇部断面は矩形を呈する。頸部以下は調整痕は残らないが，他の部分はヨコナデされている。胎土に砂粒を多く含み，焼成はあまり良くない。

2は復元口頸19㎝を測り，頸部直下までを残す破片である。頸部から口唇部にかけてはヨコナデされているが，他の部分は磨滅しているため調整痕は残っていない。砂粒を多く含み，焼成良好で茶褐色を呈する。

壺 (Fig.42—3・4)

3は口縁部の⅛程を残す小片である。復元口径22㎝，現器高7㎝を測る。口縁部と頸部の継ぎ目に刻み目を施している。口唇部上面は平坦であるが，口唇部断面は，特に内側がふくらむ。砂粒を多量に含み焼成良好で淡茶色を呈する。

4は3とほぼ同様の器形を呈するが，復元口径15㎝で小形である。刻み目はない。双方ともヨコナデによる調整を行っている。

高　坏 (Fig.42—5)

5は高坏脚部片である。内面に絞り目が観察される。外面は器面の剝落が著しく調整は不明である。胎土に小砂粒を多量に含み，焼成良好である。淡茶色を呈する。　(児玉)

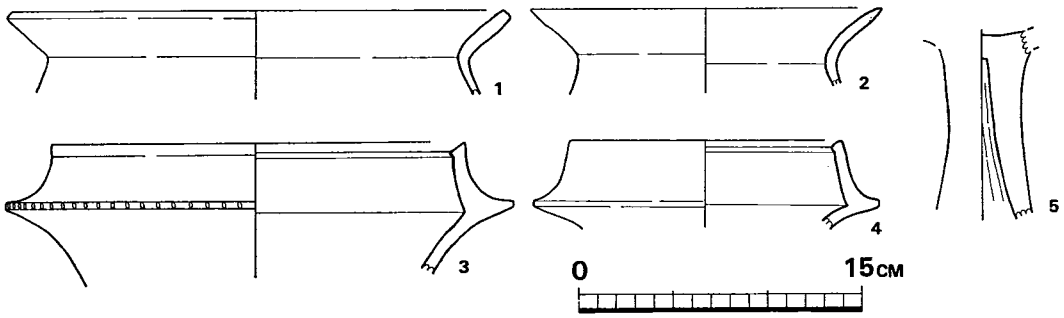


Fig. 42　その他の出土土器実測図 (縮尺 1/4)

4　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居跡10軒（1号・2号・4号・8号・10号・12号・13号・16号・19号・22号）と，第1号竪穴状遺構（SX1）である。4世紀・5世紀に所属すると思われる遺構はなく，各遺構とも6世紀後半をさかのぼらない。特に，土製鈴・土製鏡を出土した第10号住居跡，住居の外に排水溝と思われる三日月状の溝を有する第22号住居跡は注目に値する。

以下，各遺構について述べることとする。　　（児玉）

第1号住居跡　H1（Fig.43　PL.8）

一辺約 4.7*m*の方形住居跡である。壁は全て削平され，周溝の西辺及び南北両辺の一部を残すのみである。周溝の南端は不整形ピットによって切られている。周溝の幅は50*cm*近く計り，第2号住居跡と同様に幅広く，この地域の当時代住居跡の特色と考えられる。北辺の周溝端は楕円形の広がりを見せる。この付近の床面が削平されているため確かな事は言えないが，カマドが設置された位置ではなかろうか。柱穴は不明である。周溝中西北端からは須恵器坏が出土した。

出　土　遺　物（Fig.47）

1は丹塗りの土師坏で，表面丁寧にヨコナデされ，胎土も砂が少なく精製されている。

2・3の坏身のたちあがりは 1.5*cm*近く測り，内傾しつつ立ち上がる。いずれも薄手である。受け部は浅く，全く窪みをなさない。底部はやや丸味のある平坦面を有するものと思われる。いずれも灰青色を呈し，堅緻である。

11は胎土の粗い土師器で，外面は加熱で赤変し，口縁内面には炭化物が厚く付着している。粘土の継ぎ目はヘラでならしているものの密着していない。

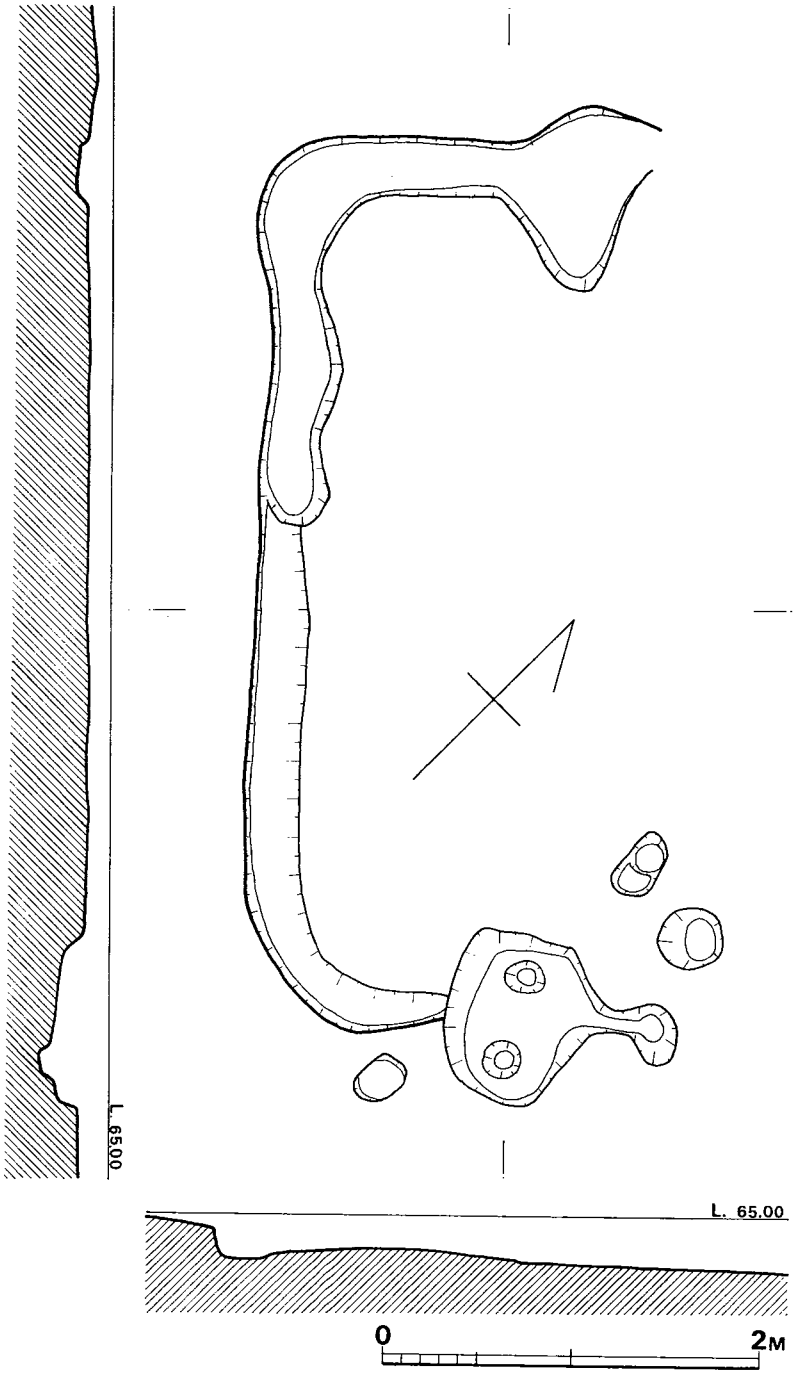
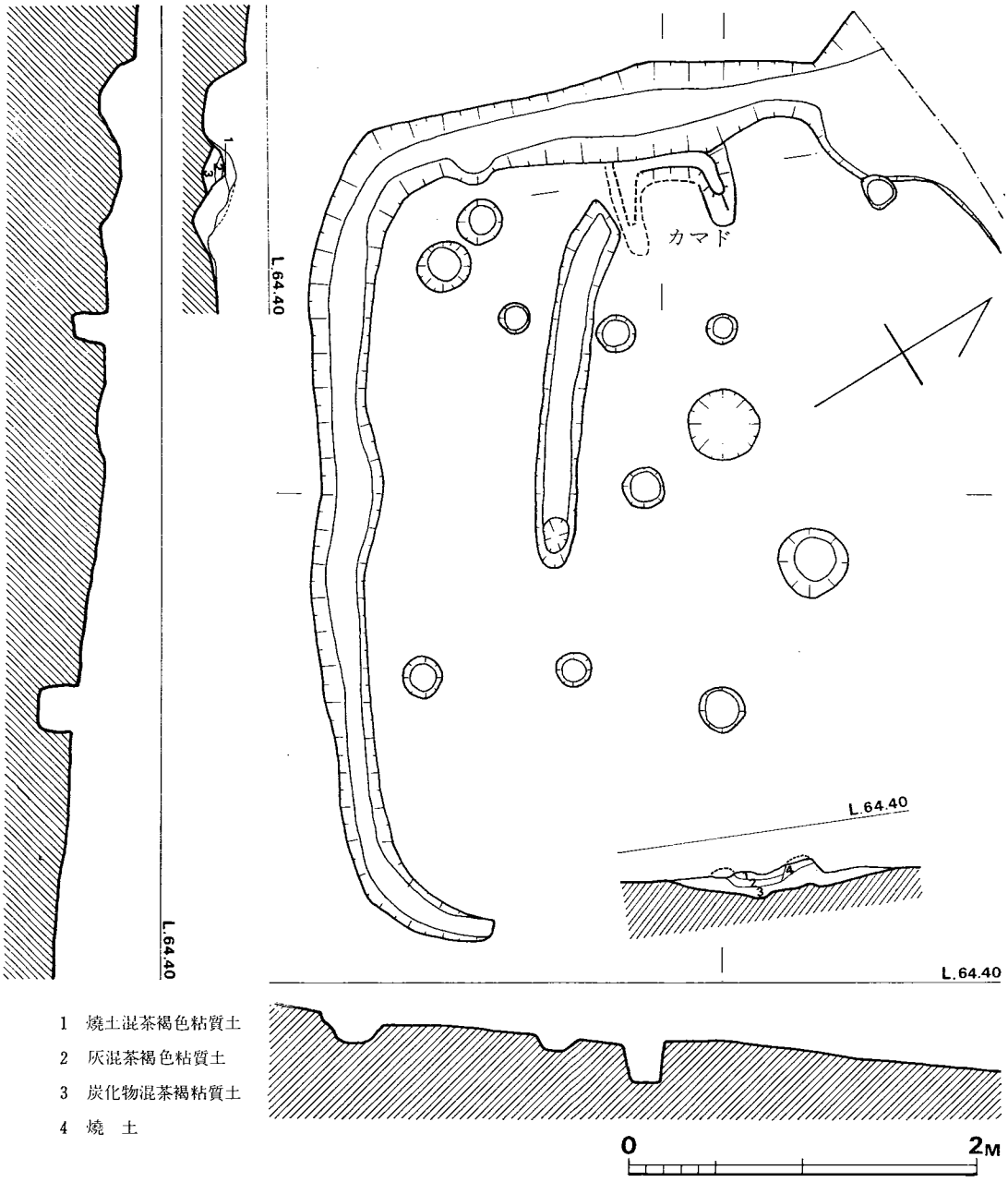


Fig. 43　第1号住居跡実測図（縮尺 1/40）



1　焼土混茶褐色粘質土
2　灰混茶褐色粘質土
3　炭化物混茶褐粘質土
4　焼　土

Fig. 44　第2号住居跡実測図（縮尺 1/40）

第2号住居跡　H2（Fig.44　PL.8）

一辺約5*m*の方形住居跡である。第1号住居跡と同様に削平著しく，壁は北西側を残すのみである。周溝は北西側及び南西側に残している。床面は周溝ぞいに若干見られる。カマドは北西周溝側に基底部のみ残している。地山である赤色粘土を若干掘り込み，特に焚き口部を深く，上に茶褐色粘土を盛っている。柱穴中，主軸上の2本が主柱と考えられる。

出　土　遺　物

砥　石（Fig.45—1）

周溝中から出土した。

石庖丁（Fig.45—2）

落込み土中から出土した。表裏とも損耗が甚しい。研痕は体部，刃部によく残っており，荒研ぎされたままである。裏面には敲打痕あるいは原剝離面を一部とどめている。

須恵器（Fig.47—4～6）

4・5はいづれも周溝中から出土した坏身でである。たちあがりはそれぞれ1.1*cm*，1.3*cm*を測り，1号住居跡出土のものに比べてやや短かい。受け部の落ち込みは浅い。色調は暗灰色を呈し，ヘラケズリは丁寧である。

6は高台付きの坏底部で，落ち込み土中より出土した。高台は太く，底面が横に張る。色調は青灰色を呈し，焼成はやや柔である。

土師器（Fig.47—12）

12の甑片はカマド焚口付近からまとまって出土した。粘土接合部を指でおさえ，外面は刷毛，内面はヘラで縦に調整している。口縁部内外面のみは，ヨコナデを施している。

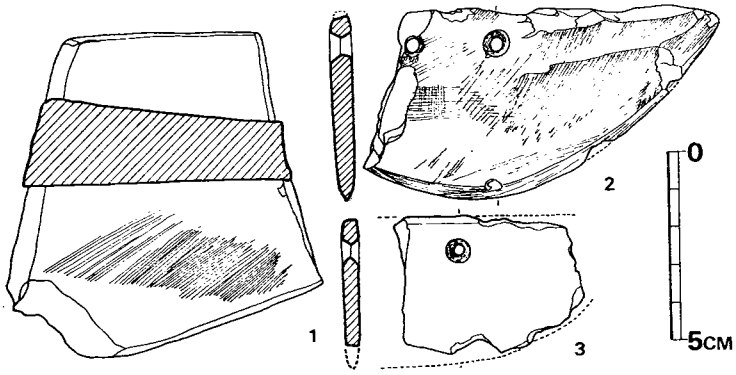


Fig.　45　第2号住居跡出土石器実測図（縮尺 1/2）

第4号住居跡　H4（Fig.46　PL.9）

方形を呈し，南北壁の一部が張り出している。第3号住居跡を切って作られた住居跡で南西隅のみを残して，崖法面によって切られている。中央ピット中には焼土が固くつまっていたが，周壁は焼けていない。

出　土　遺　物（Fig.47—8～10・12・13）

12は中央ピットの焼土中から出土した唯一の土器である。口径約19㎝を測るものと思われる。器壁の非常に薄い甕である。外彎する口縁部は端部下で僅かに肥大する。胴部は刷毛目調整されているようである。胴下半部は黒変し，一部に煤が付着している。

8～10の坏身および13の甕片は落込み土中より出土した。

8は淡灰色を呈し，表面が剝落している。

9は暗灰色を呈し，ナデ調整は雑である。

13は口縁部の小破片である。ヨコナデ調整をし，焼成は良好である。

（酒井）

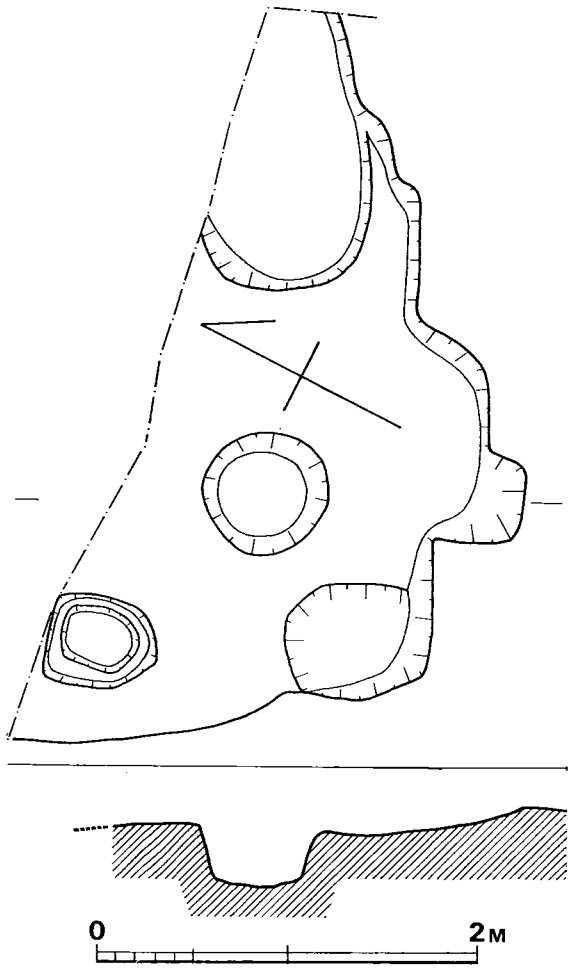


Fig.　46　第4号住居跡実測図（縮尺 1/40）

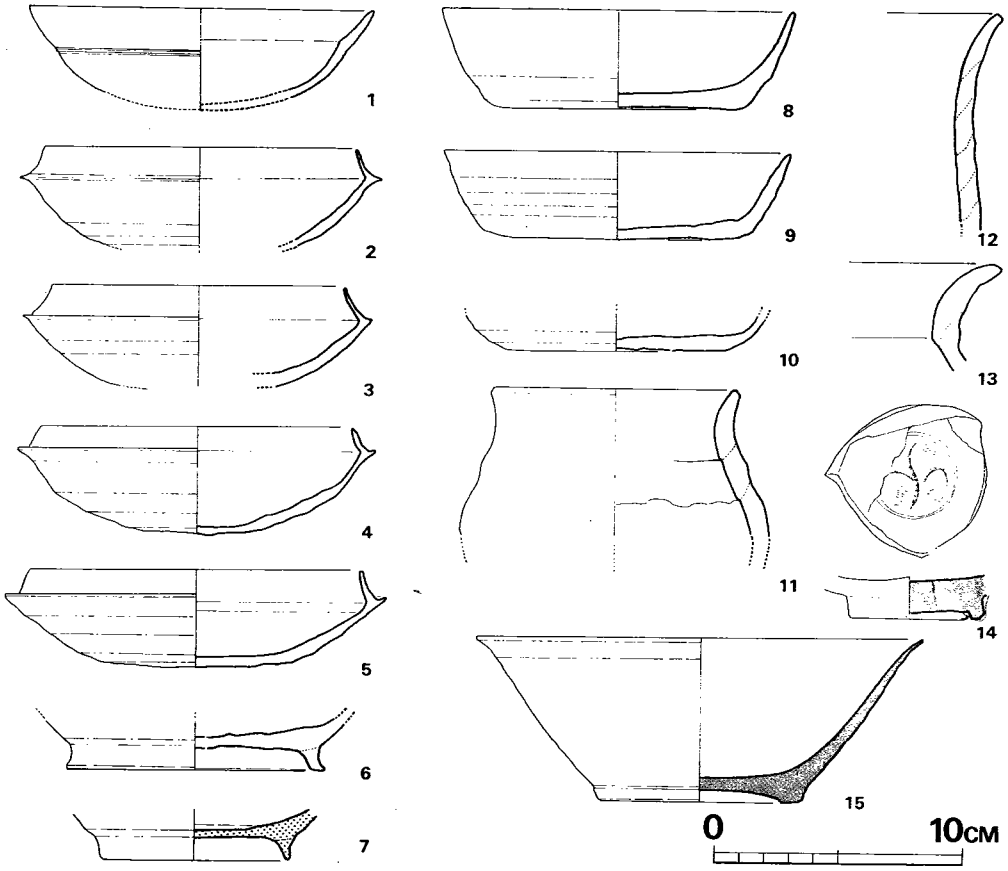


Fig. 47　昭和49年度出土土器実測図（縮尺 1/3）

第8号住居跡　H8（Fig.13　PL.10）

弥生時代後期後半の9号住居跡を切っている。遺構検出面での両住居跡の埋土の差異は当初判明しなかったので，ベッド状遺構を持つ1軒の住居跡として掘り進めた。弥生式土器，土師器，須恵器が住居内から出土し始めてから2軒の住居が切り合っていることを認識した。それ故，8号住居跡の西壁の位置はわからない。しかし，8号住居跡に伴うと考えられる土器が9号住居内に及ぶこと，9号住居跡の焼土の範囲が8号住居跡の南辺を西に延長した線より南側に限られることから考えて，8号住居跡の西壁は9号住居跡にかなりはいり込んだ部分にあったと思われる。東壁は攪乱されており，長方形の張り出しのような形状を呈している。北壁は殆んど残っておらず不明である。南壁と東壁の残存部の壁高は10cmに満たない。

南東隅にカマドかと思われる石組みがある。床面はあまり焼けてはいないが，カマドと考えられる。柱穴については明確ではない。

出　土　遺　物

須恵器，土師器が出土した。出土量が少なく小片が多いので，図示できるのは4点である。2・3はカマド状石組み内出土であるが，1は住居埋土中，4は攪乱土中から出土しており，確実に本住居跡に伴うのは2と3だけである。

土師器（Fig.48—1・2・3　PL.25）

1・2とも全体の½程を残す破片で，復元口径は1が15cm，2は14.5cmである。細砂粒を多量に含み，焼成は悪くモロい。色調は明茶褐色を呈する。器面は荒れて調整痕は残らない。

3は甑である。小片のため傾きは正確ではない。細砂粒を多量に含み，焼成は良好である。外面は明茶褐色を呈し，口縁部は横方向，口縁部以下は縦方向のハケ目がある。内面は黄茶褐色を呈し，口縁部はヨコナデ，口縁部以下は縦方向のヘラケズリをしている。

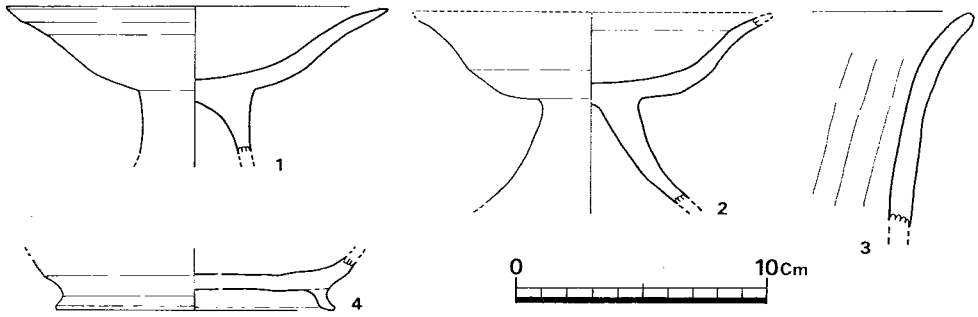


Fig.　48　第8号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

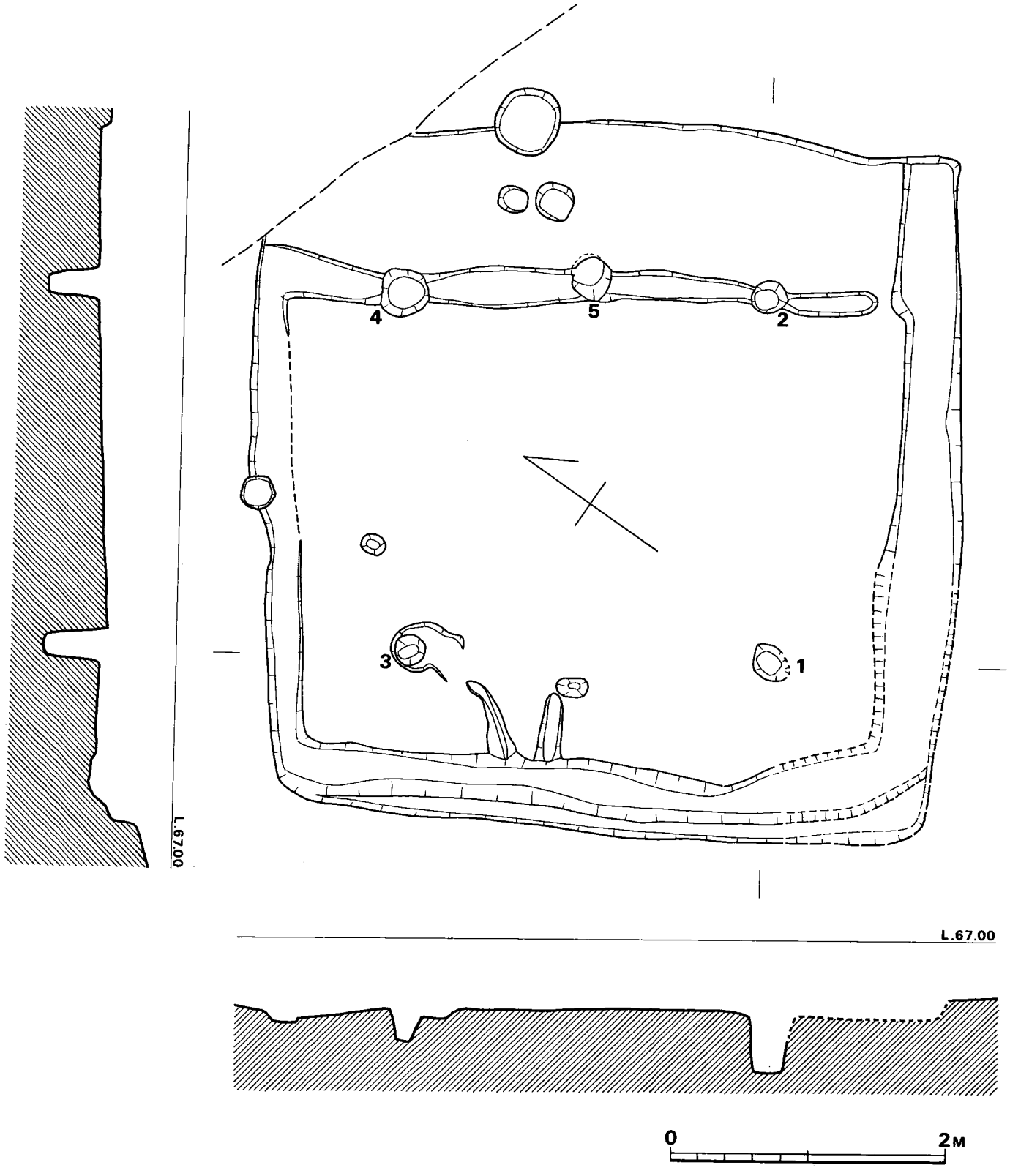


Fig. 49 第10号住居跡実測図（縮尺 1/40）

須恵器（Fig.48—4）

有高台の坏身である。復元径は高台端部で11.5㎝である。細砂粒を含み，焼成良好で灰色を呈する。底部は内外面ともナデ，他はヨコナデによる調整を行っている。（児玉）

第10号住居跡　H10（Fig.49　P L.11）

北西隅が若干敷地外に広がり，正方形に近い平面プランを呈する。

規模は東・南両辺共に約 5.2㎞を測り床面積は27㎡となる。後世に削平を受けており壁高は南が一番高い残存する壁高は東辺で20㎝，西辺12㎝，南辺20㎝，北辺12㎝。住居跡内にはピット9個，溝1条を検出した。ピットは9個の内1—5の組合せができ4本主柱もしくは6本主柱の可能性がある。5個の柱穴は床面より深さ20㎝～40㎝の円形で柱穴間は 1—2，1—3，2—4，3—4間はそれぞれ 2.6㎞を測り2—4の間に位する5は2—4の中心 1.3㎞に位置する。

溝は柱穴2より発しピット5・4を通り西壁に達し北辺を除き各壁下を巡り北東隅にて消滅するが外へ伸びるか竪穴内にとどまるかは確認できなかった。

床面は四本の主柱穴間が最も高く，各辺壁下の溝に向ってわずかに傾斜する。

重複関係として東南隅に当住居跡に先行する床面が隅丸長方形を示す弥生時代中期の貯蔵穴を検出した。

出　土　遺　物

砥石1，石庖丁1，土製模造品3，土器片を検出した。

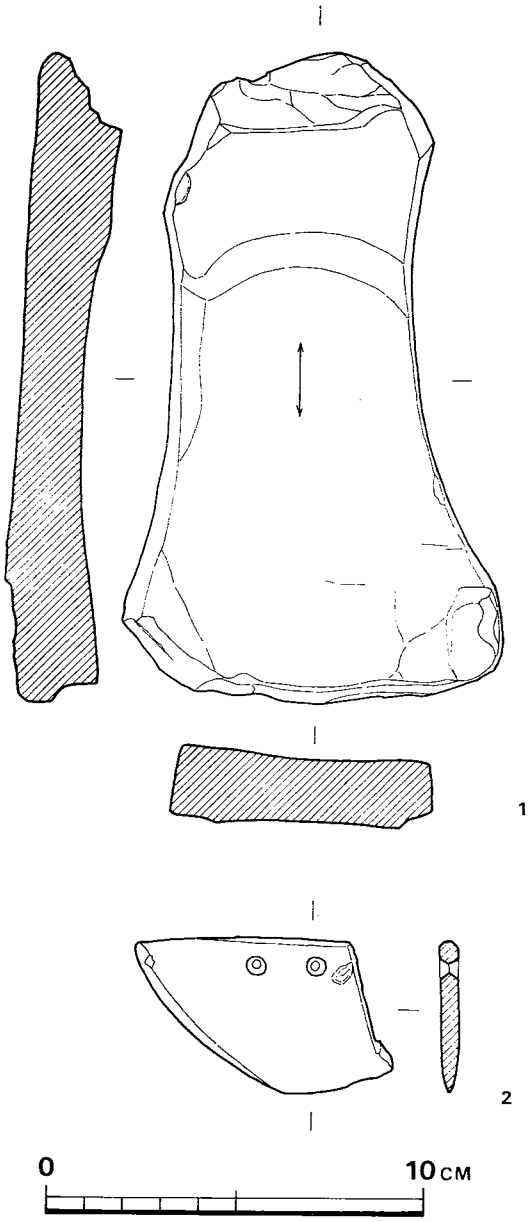


Fig. 50　第10号住居跡出土石器実測図（縮尺 1/2）

砥　石 (Fig.50—1　PL.30)

床面直上で出土し，仕上げ砥石で長さ17.2㎝，幅6.4㎝～10㎝，厚さ2.2㎝～1.6㎝，表裏面と長側両面の計四面が使用され両小口は自然面を残す。使用面のすり減り方は著しく断面で示すように中央部で約6㎜の凹面をつくる。石材は砂岩質の堆積岩である。

石庖丁 (Fig.50—2　PL.29)

埋土中より出土したもので石材は輝緑凝灰岩。片側刃部が欠損しているが三角形に近い小型の石庖丁でひも通し孔は2個共，両面より穿孔している。刃部は両面より研ぎだされている。背部は断面図の示すようにわずかに稜を持っている。

土　鈴 (Fig.51—1　PL.26)

完形品で胎土・焼成は良く色調は淡黄褐色をしている。舌を内蔵する部分は長方形状に作られ舌は内蔵されていない。（製作当初より存在しなかったと思われる。）

土製模造鏡 (Fig.51—2・3　PL.26)

焼土中より，ほぼ完形品で2面出土した。両者共に胎土は良く焼成は普通で色調は淡黄褐色をしめしている。

2　大きさは3.2㎝×3.1㎝の円形状で中央部に鈕をつまみ上げているが穿孔はない。鏡面は凸面気味に作られている。

3　大きさは3.8㎝×3.5㎝のやや楕円形に近く1に比較しやや大きい。鈕は1と同じくつまみ上げて作られ若干欠損しているため穿孔の可能性も考えられる。鏡面は1と同じく凸面である。

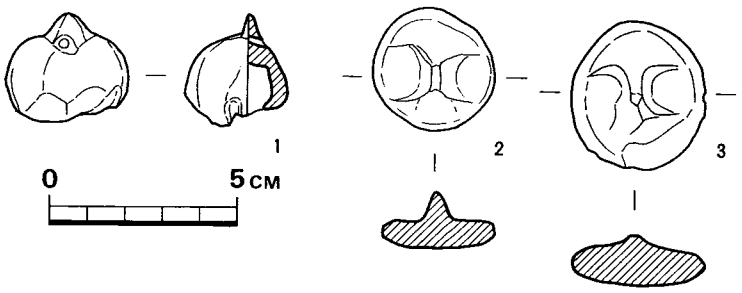


Fig.　51　第10号住居跡出土土製品実測図（縮尺 1/2）

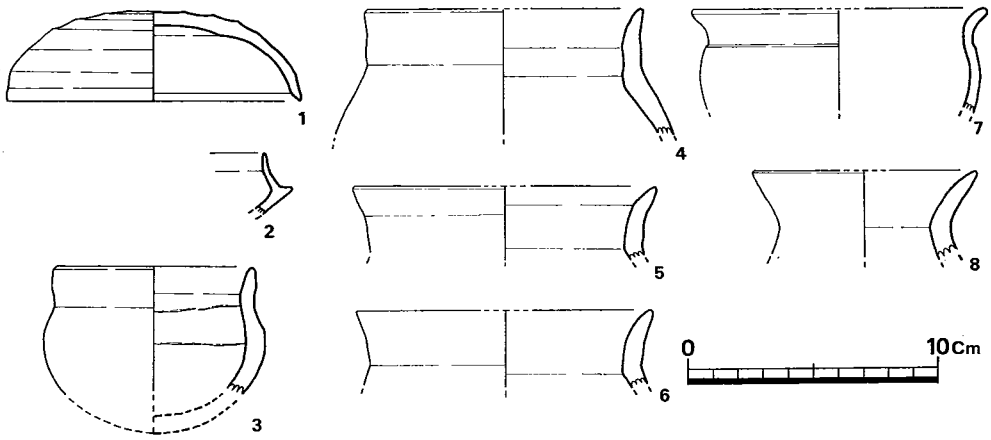


Fig. 52　第10号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

須恵器（Fig.52—1・2　ＰＬ.28）

坏蓋は埋土中床面よりやや浮いた状態で出土した。胎土焼成は良好で色調は暗灰色で口径12㎝，器高 4.0㎝である。

坏身は床面より出土したが小片のため口径器高不明。立ち上りは1.4㎝で内傾する。

土師器（Fig.52—3～8）

3は床面上より出土した坩である。復元口径10㎝，同器高 6.6㎝を測る。器肉は厚手である。口縁部はやや内湾気味で端部を丸くおさめる。胴部は球形を呈し，胴部最大径は中位より上にある。胴部内面には粘土紐の接合痕とともに指でおさえた圧痕が明瞭に残っている。胎土に大粒の砂粒を多く含み，焼成良好で硬質である。よごれた茶褐色を呈し，つくりは荒いが，外面全体に光沢がある。

4～6はほぼ同形の土器と思われるが，4を除いて小破片であり，復元口径や傾きは正確ではない。6は焼成軟弱だが他は硬質に焼き上がっが砂粒を多く含む。5は床面出土である。

7は小片のため，口径・傾きは正確ではない。胴部内面はヘラケズリされ，他はヨコナデされている。焼成良好で赤褐色を呈する。

8も小片である。焼成良好で淡赤褐色を呈する。

本住居の時期は，床面出土の坏身片より，およそ6世紀後半と推定する。　（佐土原）

第12号住居跡　H12（付図Fig.④　ＰＬ.12）

極めてはげしく削平されており，枢要な部分は残っていないため，詳細は不明である。

出　土　遺　物

土師器，須恵器の小片をかなり検出した。

1は須恵器の坏身で全体の1/6程の小片である。小片のため，口径，器高については正確ではない。胎土，焼成とも良好で，硬質であり黄灰色を呈する。外底面はヘラケズリされており，他はヨコナデによる調整である。つくりは丁寧である。図示できなかったが，他に坏身片3，坏蓋片1が出土しているが，いずれは同類である。

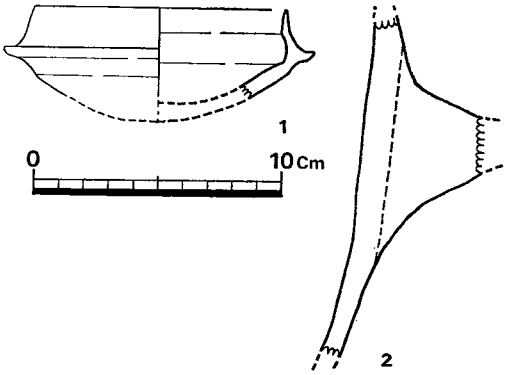


Fig.53　第12号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

2は甑の破片である。細砂粒を多量に含み，焼成良好で明褐色を呈する。ナデ調整を行っている。

出土した遺物より，本住居跡の時期は6世紀後半代に比定できる。

第13号住居跡　H13（付図Fig.⑤　ＰＬ.12・13）

激しく削平されているので，壁はすべて失っている。14号住居跡のベッド状遺構の東側に周溝の一部を残している。主柱穴の並びははっきりとしないが，Ａ－Ａ′の切断面にかかる2つのピットは主柱穴の可能性がある。12号住居跡と接近しており，同時存在は考えられない。出土遺物より，13号住居跡が新しい。

出　土　遺　物 (Fig.54)

土師器片と多量の須恵器小片が出土した。実測に耐え得るのは1点である。住居には伴わない。

須恵器の皿形土器で，全体1/4程の破片である。復元口径13㎝，同器高 1.8㎝を測る。砂粒を含み，焼成は良好で暗灰色を呈す。外底面はヘラケズリされ，内底面はナデ，他はヨコナデによる調整を行っている。

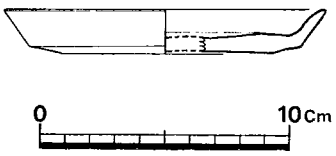


Fig.54　第13号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

第16号住居跡　H16 (Fig.56　P L.14)

方形の平面プランを呈するが全体の½弱を残して破壊されている。南壁は長さ 5.4*m*で完存し，西壁は3*m*，東壁は2*m*を残しており，本来は一辺 5.5*m*前後の正方形に近い平面プランを呈したと推定される。南壁は旧状を保っていると考えられ，壁高は40*cm*前後を測る。カマド・焼土は検出していない。カマドは恐らく北壁に設定されたと思われる。床面に散在するピットのうち主柱穴は南壁に平行して並ぶ3個のピットで住居床面と柱穴底面とのレベル差は，中央のピットが20*cm*，他の2つは30*cm*である。北壁側にも主柱穴が2～3個存在したと推定され，屋根を支えた主柱は5～6本であったと思われる。周壁に沿って幅30*cm*～40*cm*の周溝が巡っている。本来，この周溝は住居内を一巡していたと思われる。西壁にある土壙は住居に伴なうものではなく，後世のイモ穴か何かだと思われる。この土壙の切り込み面は住居跡検出面よりも上層にあり，土壙埋土は，住居埋土の黒褐色土とは異なり，黄褐色粘質土であった。

出　土　遺　物 (Fig.55　P L.28)

検出した遺物は極めて少なく，土師器・須恵器の小破片若干と須恵器の坏身である。図示できるのは坏身1点である。

この土器は全体の½程を残す破片で口唇部を欠損している。口径11.6*cm*器高 3.7*cm*に復元できる。たちあがりは 0.5*cm*で短く内傾する。胎土に砂粒を多量に含み焼成良好で硬質である。赤褐色を呈する。外底面はヘラケズリされ，内底面はナデ，他はヨコナデによる調整を行なっている。

出土遺物が少なく，時期を判断できる遺物は須恵器1点であるが，本品は第Ⅲ型式の新しい部分に位置づけられ，住居跡の年代は6世紀後半の新しい時期に比定されよう。

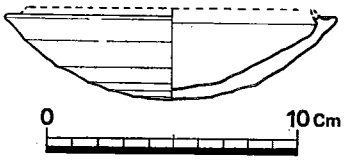


Fig. 55　第16号住居跡実測図（縮尺 1/3）

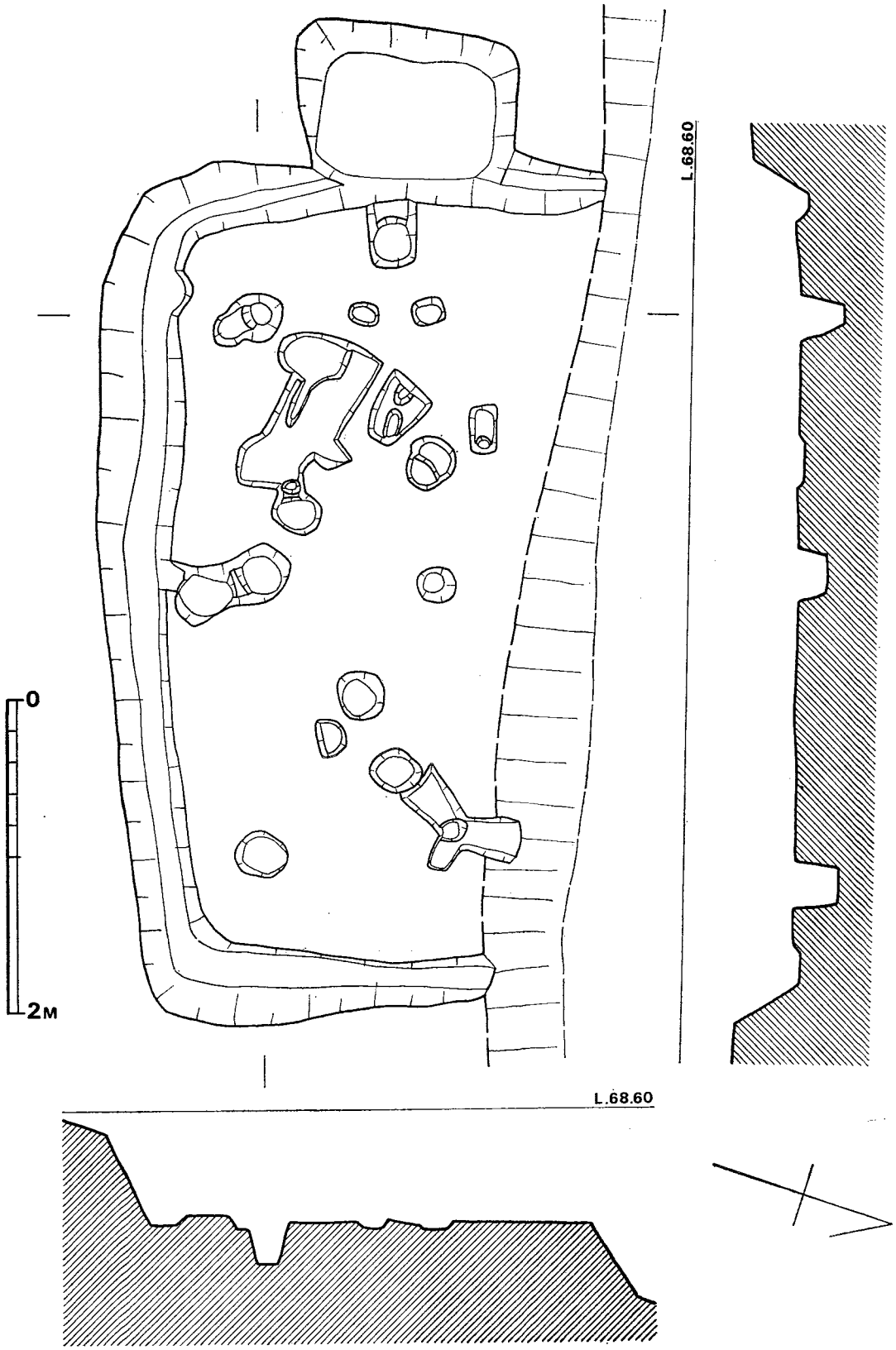


Fig. 56　第16号住居跡実測図（縮尺　1/40）

第19号住居跡　H19（Fig.58　ＰＬ.16）

長辺3.9*m*，短辺3.2*m*の隅丸長方形の平面プランを呈する。削平がかなりはげしく壁高は10*cm*前後を測るにすぎない。特に北壁の壁高は２～３*cm*にすぎない。

北壁中央部にカマドを検出したが，殆ど破壊されており詳細は不明である。ただ，方形柱状の石を支脚として使用していたようである。床面は赤く焼け硬くなっていた。

床面には小ピットが多数あるが主柱穴は四個である。主柱穴の径は他の住居跡にくらべて細く，上端の幅で20*cm*前後を測るにすぎない。木根により，カマド付近の床面は荒らされている。

周溝は断続的にしか検出していないが，本来は住居を一巡していたと推定される。周溝幅は上端で20*cm*程である。

出　土　遺　物（Fig.57）

須恵器・土師器が出土したが，削平されているためか，出土量は少ない。２・３・４はカマド直上から焼けて出土し，１・５は床面から出土した。

須恵器（１）

全体の⅙程を残す坏身の破片である。復元口径15.8*cm*，同器高 3.8*cm*である。胎土には砂粒を多量に含み，焼成は良好で硬質である。器面は暗灰色を呈す。内底面はナデ，体部中央から底部にかけての外面はヘラケズリ，他はヨコナデによる調整を行っている。

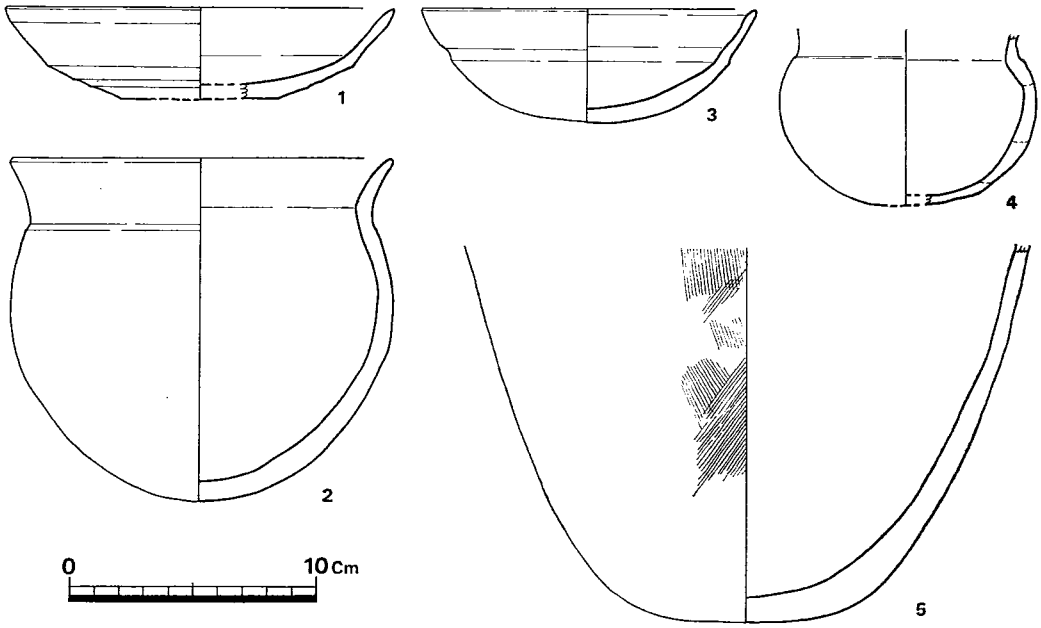


Fig.　57　第19号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

土師器（2～5　ＰＬ.25）

2は壷で口径15.8㎝，器高13.9㎝を測る。丸底で，胴部最大径は胴部中位より上にあり，口径とほぼ等しい。口縁は外反し，端部を丸くおさめる。カマド直上で検出したため，二次的に加熱されており全体にモロく，器面の剝離がひどいため調整痕は残らない。外面は赤白色，内面は暗茶灰色である。3は全体の½を残す埦である。復元口径15.6㎝，同器高 4.6㎝を測る。体部中位に幅約5㎜の凹線がめぐる。口縁は内彎気味で端部は丸くおさめる。内底面はナデ，外面の凹線以下はヘラで磨き，他はヨコナデによる調整である。カマド上で発見されたためモロくなっている。茶褐色を呈す。4は坩で口縁部を欠損してれる。小片のため，傾き，径，高さは正確ではない。砂粒を多量に含み，断面には粘土の接合痕が明瞭に残る。カマド上で検出されたため二次的な火を受けモロく，調整は不明である。暗褐色を呈す。5は床面で検出した甕である。体部の中位以上は削平された時に他へ移動している。多量の砂粒を含み焼成は良好である。外面はハケ目が薄く残りススが付着している。底部は火を受け赤変している。

以上5個体の土器は出土状況からみて本住居跡に伴うものである。須恵器は新しく，小原遺跡の住居の中で最も新しい。住居跡の規模も小形化しており，本住居跡は小原集落の中で最も新しい時期に位置づけられ，7世紀以降の所産と考えられる。　　（児玉）

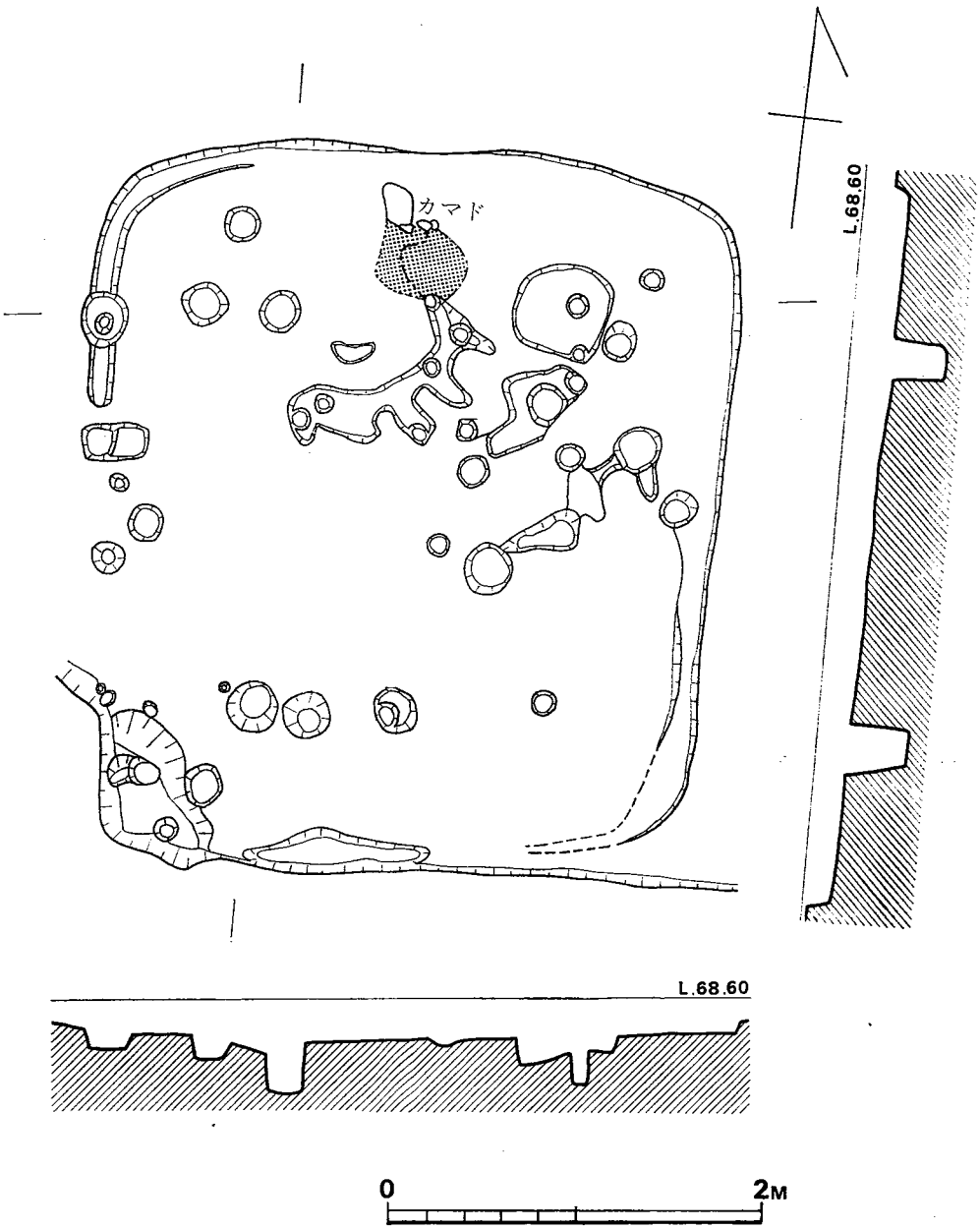


Fig. 58　第19号住居跡実測図（縮尺 1/40）

第22号住居跡　H22（付図Fig.⑦　ＰＬ.17）

平面プランは，ほぼ正方形を呈し，一辺4.5*m*×4.2*m*，西側壁の中央にカマドを有したもので，床面積18.9*m*²で，壁は約 0.4*m*を計る。壁の周辺部に周溝をもち，北西端は削平されている。住居跡の南外側に扇状に住居を巡るように，長さ10*m*，幅0.5*m*，深さ0.5*m*の排水溝が切られており，古代人の生活環境を整えるための智恵が考えられる。

主柱穴は４本柱と考えられるが，支柱穴として他の柱穴が生きてくると思われる。

出土遺物は床面直上より須恵器坏の身の部分が検出されている。

出　土　遺　物（Fig.59　ＰＬ.28）

須恵器の坏の身の部分で口径11.8*cm*，最大径14*cm*，器高4.2*cm*，体部は低く，立ちあがりは1.2*cm*でやや内傾する。器面内外面ともナデ仕上げで底部はヘラケズリである。色調は暗青灰色，胎土は精練された粘土で，焼成も良好である。時期は小田氏の編年でⅢ―Ｂに比定される。

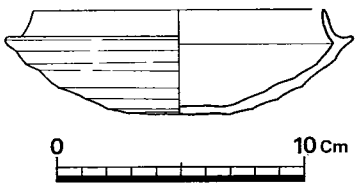


Fig.59　第22号住居跡出土土器実測図
（縮尺 1/3）

住居跡の時期的位置付けは出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

（副島）

第１号竪穴状遺構　ＳＸ１

第10号住居跡の２*m*東側にある。当初，住居跡として遺構内を調査したが，その確証が得られなかったので，竪穴状遺構として取り扱うこととした。

南壁および西壁を残して他は削平されている。壁高は残存部分で15*cm*前後である。カマドや主柱穴と考えられるものもなかった。

出　土　遺　物

須恵器５個体，土師器５個体，弥生式土器１個体が出土した。須恵器坏身・坏蓋５個体は床面からやや浮いて重なり合って出土した。土師器椀（６～８）も同様な出土状態であった。他は埋土中からの出土である。

須恵器（Fig.60―1～5　ＰＬ.27）

坏蓋（１～４）　４個体出土した。１・２はほぼ完形で，ともに口径13*cm*，器高は１が4.3*cm*２が 4.5*cm*で殆んど同じ大きさである。双方とも同じヘラ記号があり，１は天井部内外面に，２は天井部内面に施されている。外面に幅 0.2*cm*の沈線がめぐる。口唇部は古式須恵器の特徴を有し，内側に段をつくり口唇部は外に張る。天井部外面はヘラケズリされ，内天井はナデ，

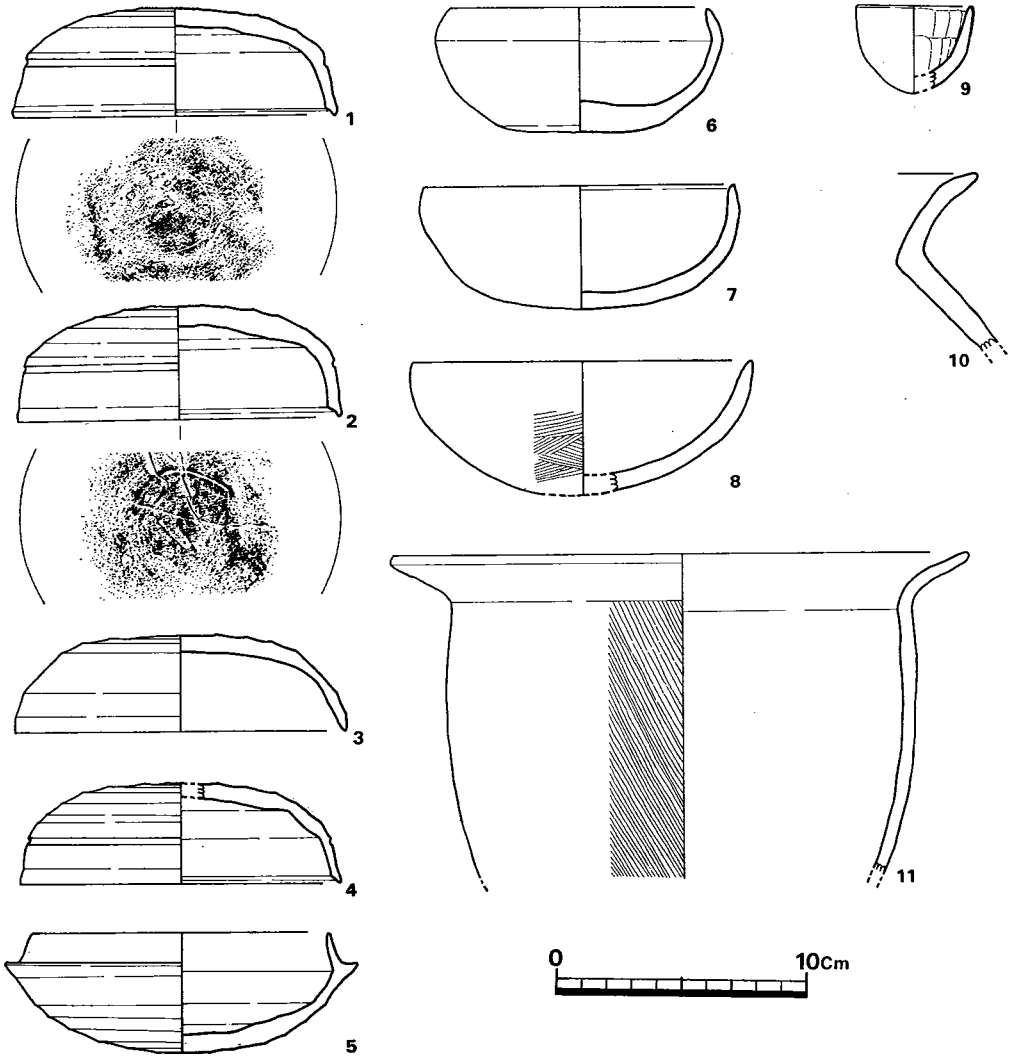


Fig.　60　第１号竪穴状遺構出土土器実測図（縮尺 1/3）

他はヨコナデによる調整を行っている。全体に厚手で重厚な感じを受ける。胎土に砂粒を多量に含み焼成良好にして堅固である。共に暗青灰色を基調とし，２は内面が淡青灰色を呈す。

３は，口径13.6㎝，器高 3.9㎝を測る。天井部外面に自然釉が認められる。外面に沈線はなく，口唇部も丸くおさめている。１・２に比べて薄手である。天井外面はヘラケズリ，同内面はナデ，他はヨコナデによる調整を行っている。ヘラ記号はない。胎土に砂粒を多量に含み，焼成良好で硬質である。色調は全体に淡青灰色を呈する。

４は¼程の破片である。復元口径13㎝，同器高４㎝を測る。ヘラ記号がなく薄手である以外は，１・２と同様のつくりである。

坏身（5）　口径12cm，器高 4.8cmを測る完形品である。たちあがりは高いが内傾して口唇部を丸くおさめる。底部のヘラケズリは丁寧で範囲は広い。内底面はナデ，他はヨコナデによる調整を行っている。砂粒を多量に混入し，焼成良好で堅固である。色調は明灰色を呈する。

土師器（Fig.60—6～10）

埦（6～8）　3個体とも口縁部の形態が異なり，6は内傾し，7は直立し，8は外反する。

6は口縁径10cm，器高5cmを測る。底部は厚く1cm～1.3cmを測る。器面の荒れがはげしく調整は定かではない。焼成良好で，全体に淡茶色を呈する。

7は口径12cm，器高 5.1cmを測り，6よりやや大形である。器肉の厚さに殆んど差はない。調整痕ははっきりとは残っていない。全体に茶褐色を呈するが，体部外面には有機物が付着して黒ぽい。

8は全体の⅔程を残す破片で，復元口径13.8cm，同器高 5.3cmを測る。体部から底部にかけてはヘラケズリの後に叩き目が見られる。胎土に多量の砂粒を含み茶褐色を呈する。器面は二次的な火を受けモロく，内面は剝離して調整は不明である。

手ずくね土器（9）　全体の⅓を残す破片である。復元口径4.5cm，同器高3.5cmを測る。底部は丸味を帯びたとがり底だと思われる。内面に指圧痕が明瞭に残るが外面は荒れていて不明である。砂粒を多量に含み，焼成は良くなくモロい。全体に淡茶色を呈する。

甕（10）　口縁部から胴部上半の小片である。内面の頸部以下はヘラケズリ，他はヨコナデである。頸部は「く」字形を示し，口唇部は外反し，つまみ出したためか薄くなる。小砂粒を多量に含み，焼成良好で淡茶褐色を呈する。

弥生式土器（Fig.60—11）

甕（11）　復元口径 2.3cm，現在高13cmを測る。頸部は断面を「く」字状に折り曲げ，口縁端部を丸くおさめる。頸部以下の外面は斜方向のハケ目が施されている。頸部から口縁部にかけての内外面はヨコナデされているが頸部以下の内面は剝離が著しく調整は不明である。砂粒を多く含み，焼成は良好である。内面は暗灰褐色，外面は明褐色を呈する。

以上の出土土器のうち，須恵器坏身・坏蓋5個体と土師器埦3個体は各々にまとまって出土し，出土状態も同様に床面からやや浮いた形で検出した。よって，この8個体は同時期にこの竪穴内に埋没したと考えられる。その時期は，須恵器で見ると3が一番新しい要素を持っており，6世紀後半と思われる。

その他の出土遺物

明確に土師器と認定できるものは，小片で磨滅しているため殆どなかった。須恵器がかなり出土したが，実測できるのは2点である。

1はピット内出土の甕である。復元口径20㎝，現器高 4.5㎝で，肩部までを残している。外面の肩部にはカキ目を残し，他はヨコナデによる調整を行っている。胎土は精選されて砂粒は殆んど含まず，焼成良好で硬緻である。色調は口唇部だけ灰色で，他の部分は黒色を呈する。

2は第14・16号両住居跡の中間から出土したほぼ完全の坏身である。器形はかなりゆがんでおり，平均した口径は10㎝，器高 4.7㎝を測る。たちあがりは内傾するが上半部はやや立ち気味で， 1.3㎝を測る。たちあがりと，受け部の接合点には幅1㎜強の凹みがめぐる。体部はわりに深くつくられている。外底面はヘラケズリされているがその範囲は狭い。内底面はナデ，他の部分はヨコナデによる調整を施している。胎土に砂粒を含み，焼成良好である。外面は青灰色，内面はくすんだ灰色を示す。6世紀後半の坏身である。

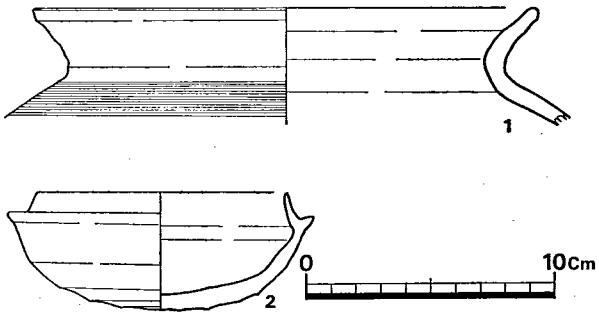


Fig. 61　その他の出土遺物（縮尺 1/3）

5　歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構は掘立柱建物であり，他は検出できなかった。昭和49年度の調査範囲内には1棟も検出できなかった。建物は昭和50年度調査区の東側に存在し，1号溝状遺構北側に5棟が集中し2号貯蔵穴北に1棟，13号住居跡北に1棟が各々他とは離れて存在する。もっとも，建物同士の併存関係については断定できないが，建物設定の場所は限られていたようである。

出土遺物は土師器・須恵器・磁器類である。それらの示す年代は奈良時代から鎌倉時代までであり，年代の幅は広い。発掘区西端で龍泉窯系青磁1点が出土したが，出土遺物の殆んどは5棟の建物が集中した周辺からの出土である。

第1号掘立柱建物　SB1（Fig.62）

径・深さとも30cm程の柱穴が並ぶが，柱穴はうまくまとまらない。柱痕は残っておらず，図示した柱間寸法は図上で復元したものである。柱間寸法はまちまちで統一性がない。棟は北西一南東方向である。

第2号掘立柱建物　SB2（Fig.62）

SB1のすぐ北に検出した桁行2～3間，梁行1間の建物である。各柱間寸法は図示した通りであるが，柱痕が残っておらず図上での復元である。北西一南東に棟をおき**SB1**とは重複するので同時併存は考えられない。本建物は今回検出した建物の中で最も小さく，残りは比較的良かった。

第3号掘立柱建物　SB3（Fig.63）

SB2の北東側に検出した建物で，調査範囲外の北側に柱列は伸びるようである。検出したのは東西方向の2柱列で，北西一南東に棟をおかれた可能性が強い。桁行4間，梁行1～2間で柱間寸法は図示したとおりである。なお，棟行はまだ1～2間分程北側に伸びる可能性がある。棟の方向は**SB2**と同じであり，同時併存の可能性がある。

第4号掘立柱建物　SB4（Fig.64）

SB2の西側15mの地点に検出した北西一南東に棟をおく建物である。桁行3間，梁行1～2間を検出した。各柱間寸法は図示したとおりである。北東側部分の柱列は削平等により明確ではない。**SB2・3**と棟の方向は同じである。柱穴は他の建物と比べてしっかりしている。

第5号掘立柱建物　SB5（Fig.65）

第2号財蔵穴北側に検出した。他の建物と比べて柱穴掘り方は立派で，大きなものは一辺1m程の正方形プランで径30cmの柱抜き方が残っている。不幸にして柱穴を全て検出することはできなかったが，おそらく北東一南西方向に棟をおく桁行4間，梁行3間の建物だろうと思われる。各柱間寸法は図示した通りである。一番東側の柱列は柱抜き方の心心距離が2.1mで30cmを一尺とすれば7尺である。残存する柱穴から推定すると桁行柱間寸法は恐らく2.1m（7尺）と思われる。

第6号掘立柱建物　SB6（Fig.66）

SB5から西へ約50m離れた地点に検出した。南から第2柱列，第3柱列の西半部分は削平されたためか全く検出できなかった。柱穴は一直線上にほぼのるが1～2穴は若干はずれる。棟は西一東におく。桁行8間，梁行2間で総柱になると推定され，倉庫の可能性がある。柱間寸法に統一性はないが2mは超えないようである。東西に細長い建物である。

第7号掘立柱列　SB7（Fig.67）

SD1のすぐ北側に2本の柱列を検出した。この柱列は並行ではなく，東南に向かって柱列間の幅をせばめる。双方の柱列に並行する柱列は検出できず，性格については不明である。

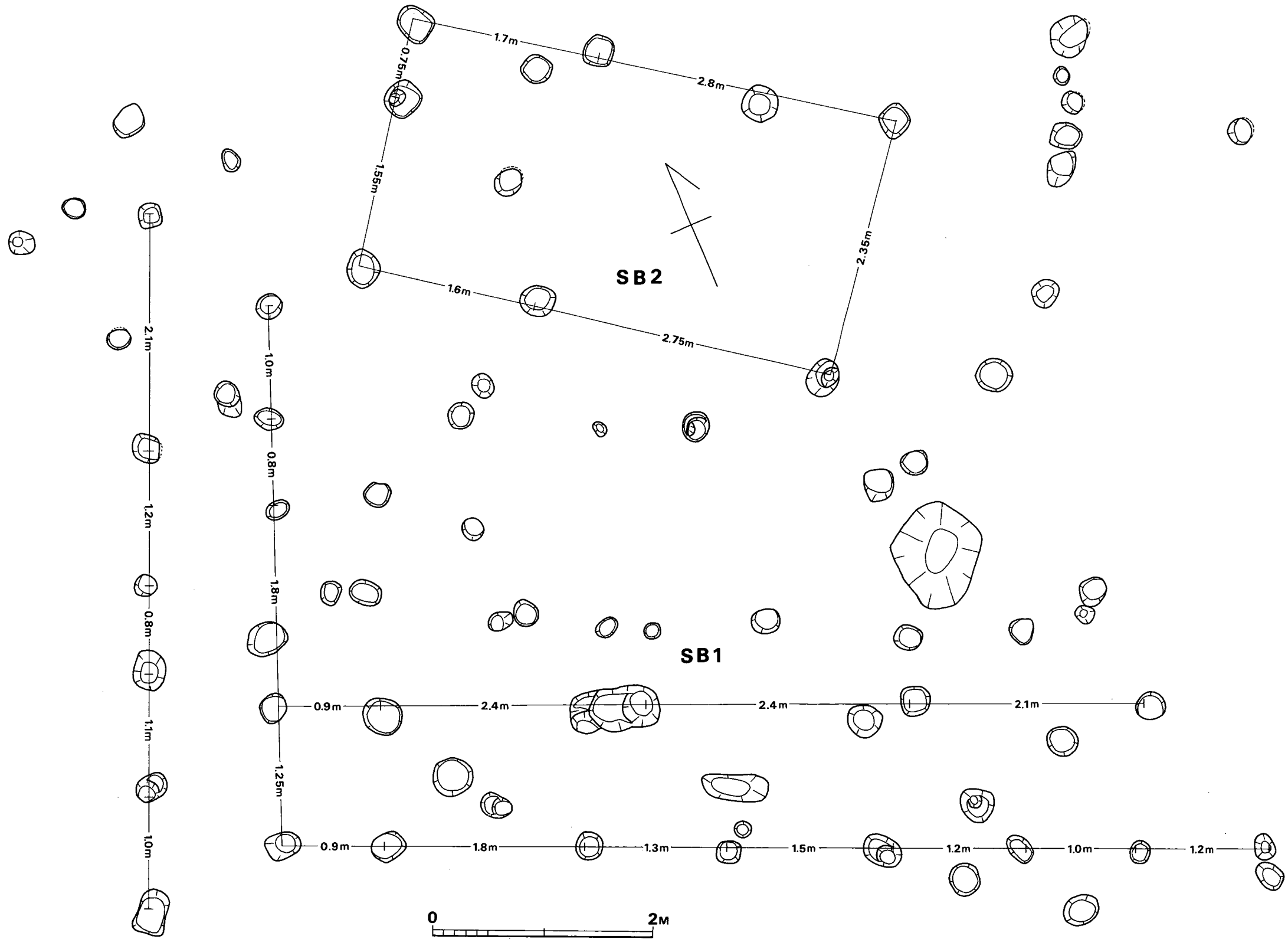


Fig. 62 第1・2号掘立柱建物実測図（縮尺 1/40）

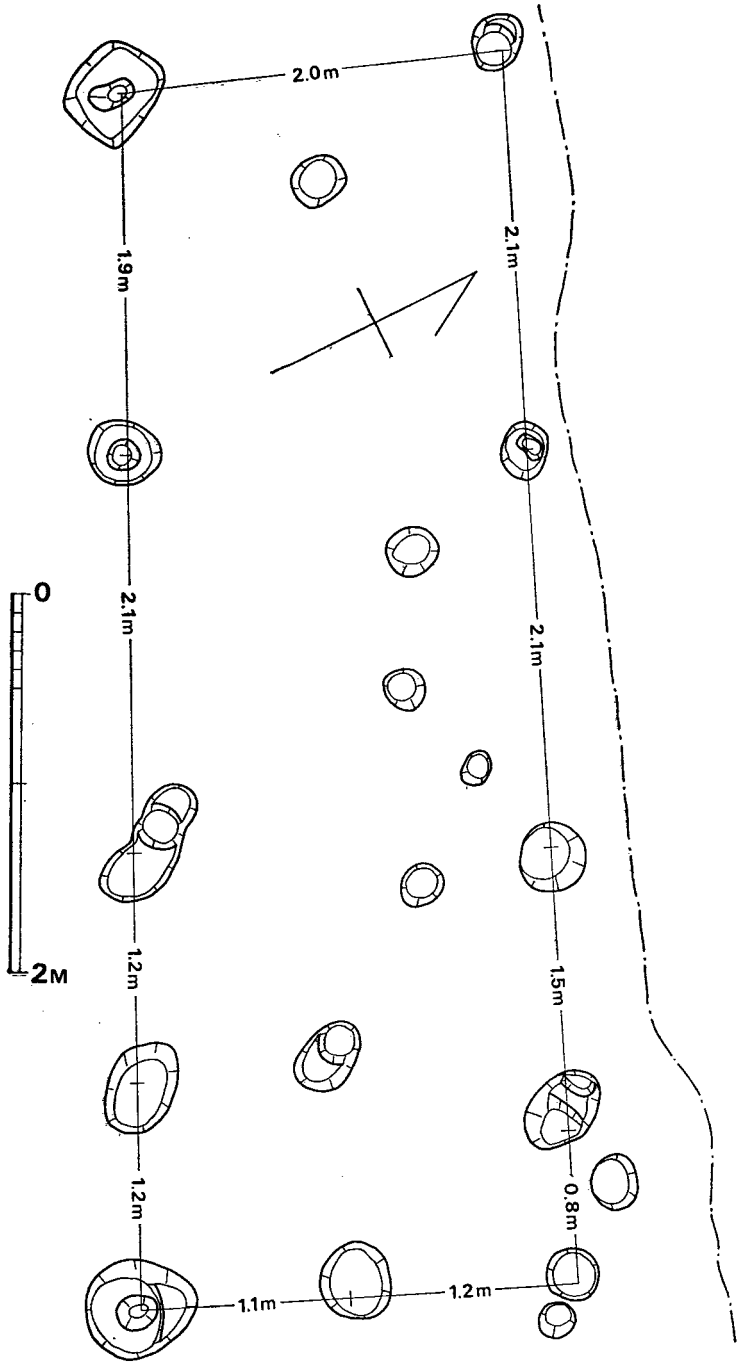


Fig. 63　第3号掘立柱建物実測図（縮尺 1/40）

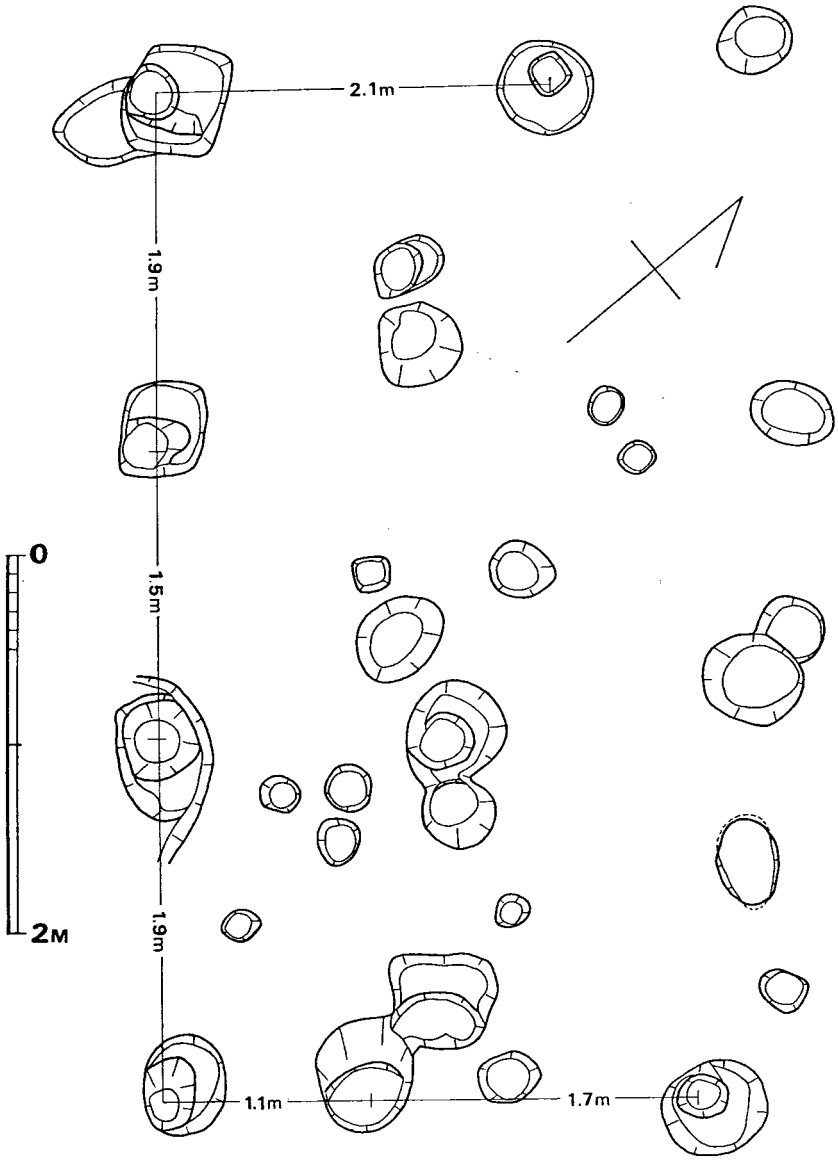


Fig. 64　第4号掘立柱建物実測図（縮尺 1/40）

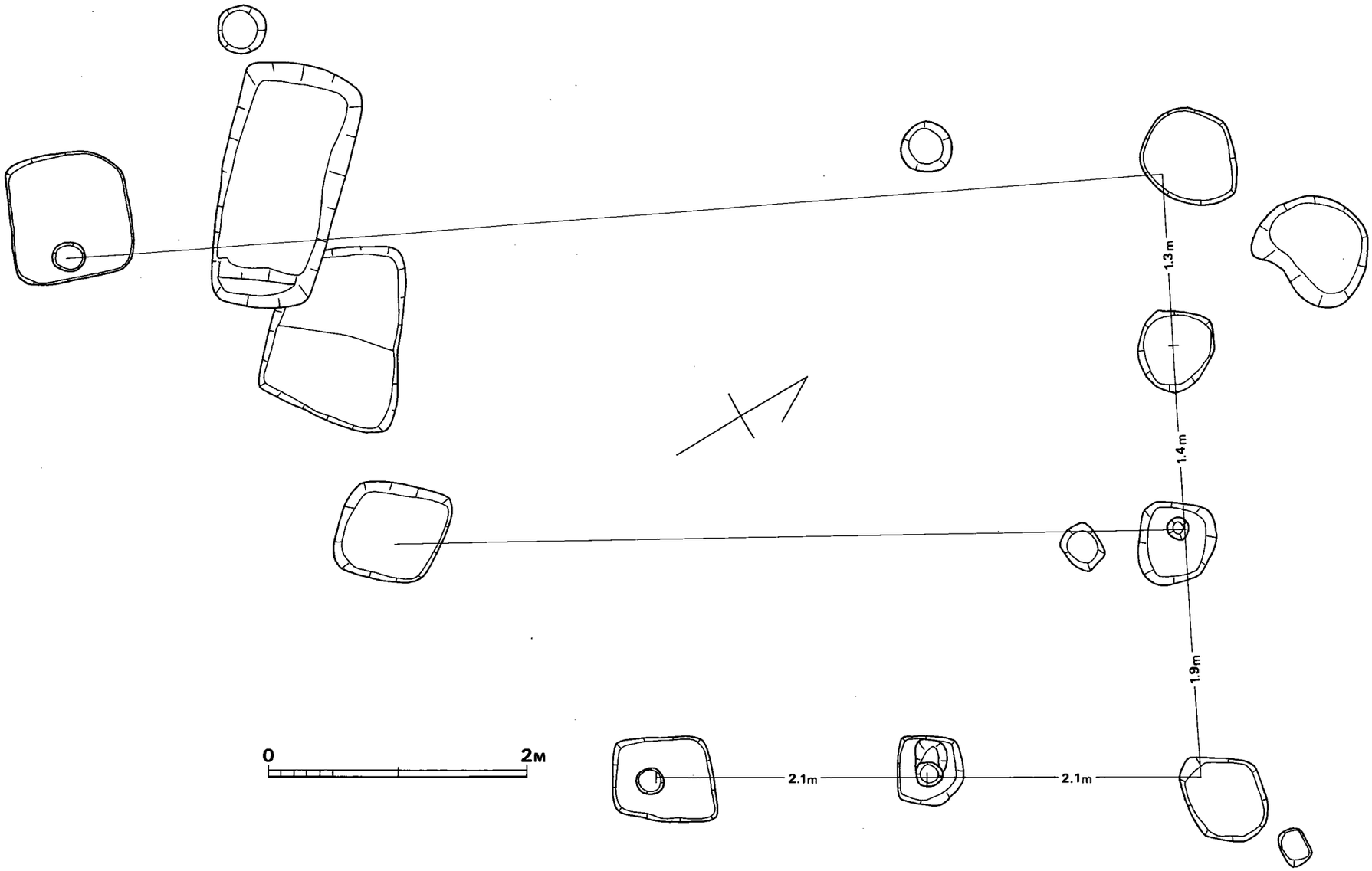


Fig. 65 第5号掘立柱建物実測図(縮尺 1/40)

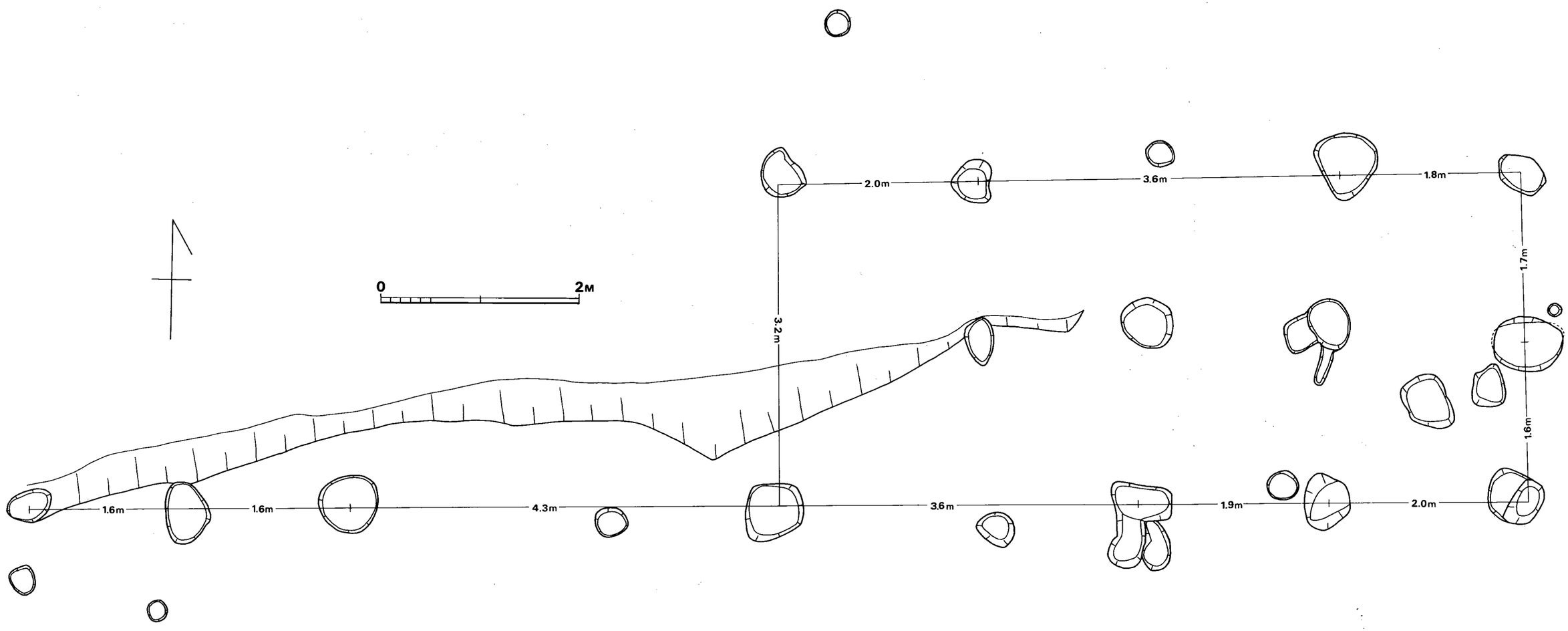


Fig. 66 第6号掘立柱建物実測図(縮尺 1/40)

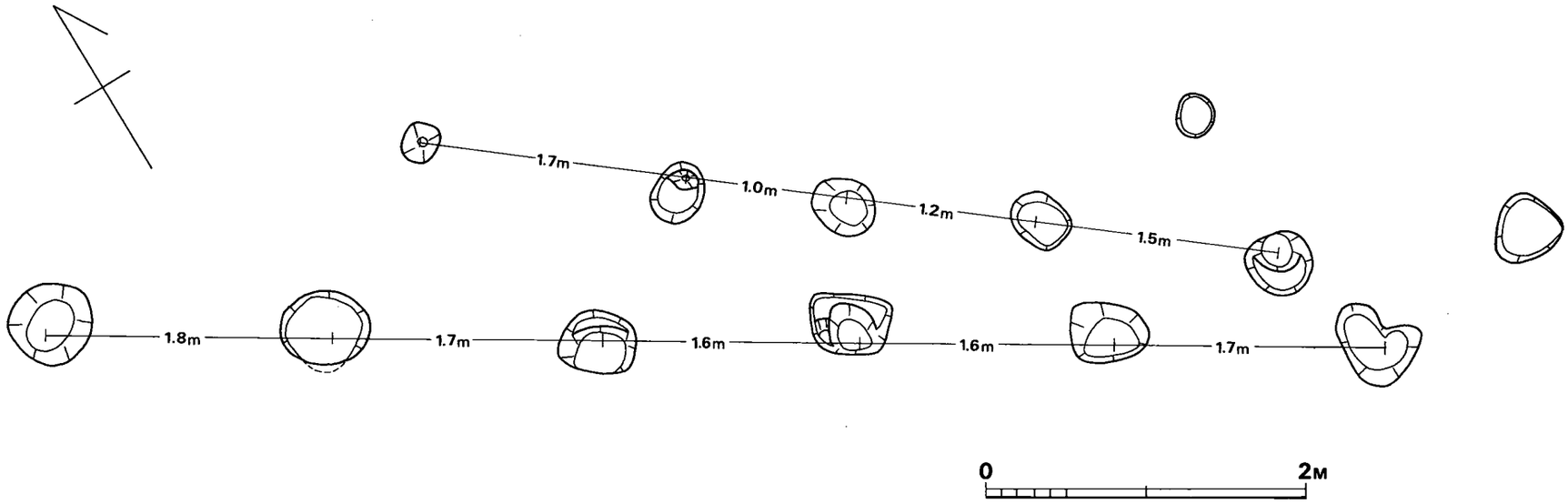


Fig. 67 第7号掘立柱列実測図(縮尺 1/40)

出　土　遺　物

昭和49年度調査

表土中およびトレンチからの出土で，土師器磁器類を検出した。

土師器 (Fig.47—7)

7は土師器の高台付き底部である。高台端部はややとがる。底部の整形法は磨耗のため不明である。トレンチの茶褐色土層中から3個体分出土した。

磁　器 (Fig.47—14・15)

14・15は磁器である。

14は高台を鋭く削り出した青磁底部片である。胎土は灰白色を呈する。釉は明るい緑色を呈する。トレンチ茶褐色土層中より出土した。

15はいわゆる蛇目高台の高台を持つ磁器で，完形品である。体部はやや内彎しながらのび，口縁部で外反する。口径18cmである。胎土は暗灰色を呈する。釉は黄色で，焼成の目痕は，内底に白砂が付着している。越州窯の粗悪品であろう。地山直上から出土した。

昭和50年度調査

歴史時代の遺物が全出土遺物の中に占める割合は量的には微少である。出土した土師器は小片のため図示しなかった。高台付の埦が2点出土している。

須恵器 (Fig.68—1・2)

1・2とも高台をもつ小片である。ともに体部下半から底部にかけての破片で，残存部分でみるかぎり外面はヘラケズリがなされ，内面はナデ調整をしている。1の高台は小さいが外開きでふんばっている。2の高台は厚くしっかりと作られているが外への開き具合は1程ではない。高台でみるかぎり，1の方が古いようである。

磁　器 (Fig.68—3・4)

3は越州窯系の磁器である。胎土は黄灰色で淡黄灰緑色の釉がかけられている。ピットからの出土だが建物に関係するピットではない。

4は発掘区西端で検出した龍泉窯系の磁器である。胎土は灰色に近い

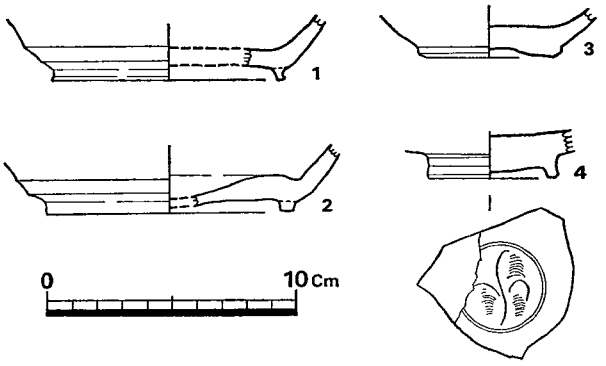


Fig. 68　出土遺物実測図（縮尺 1/4）

白色で，器面に淡緑青色の釉をかけている。内底面に草花文がある。

以上の出土遺物は建物遺構とは無関係の状態で出土している。**SB 1** 周辺では有高台土師器埦の小片が出土しており，平安時代の土器と思われる。[1] 出土土器の多くは削平されたおりに土砂と共に動いている可能性が強く，建物の年代をおさえる資料として使えるものはない。**SB 1～SB 4** については平安時代前後という幅広い年代の中にその建築時期を想定せざるを得ない。

SB 5・SB 6 については出土遺物がなく時期は不明である。**SB 7** はその性格すら明らかでなく，時期は全くわからない。

掘立柱建物については**SB 6** が総柱で倉庫と推定されされるが，他の建物はその点不明な部分が多く残った。**SB 2・3・4** は棟の方向が同じであり，このことに注目すれば同時併存の可能性がある。　　（児玉）

註　①　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集 2　1976

Ⅲ　小原古墳群の調査

鞍手郡若宮町所在後期古墳群の調査

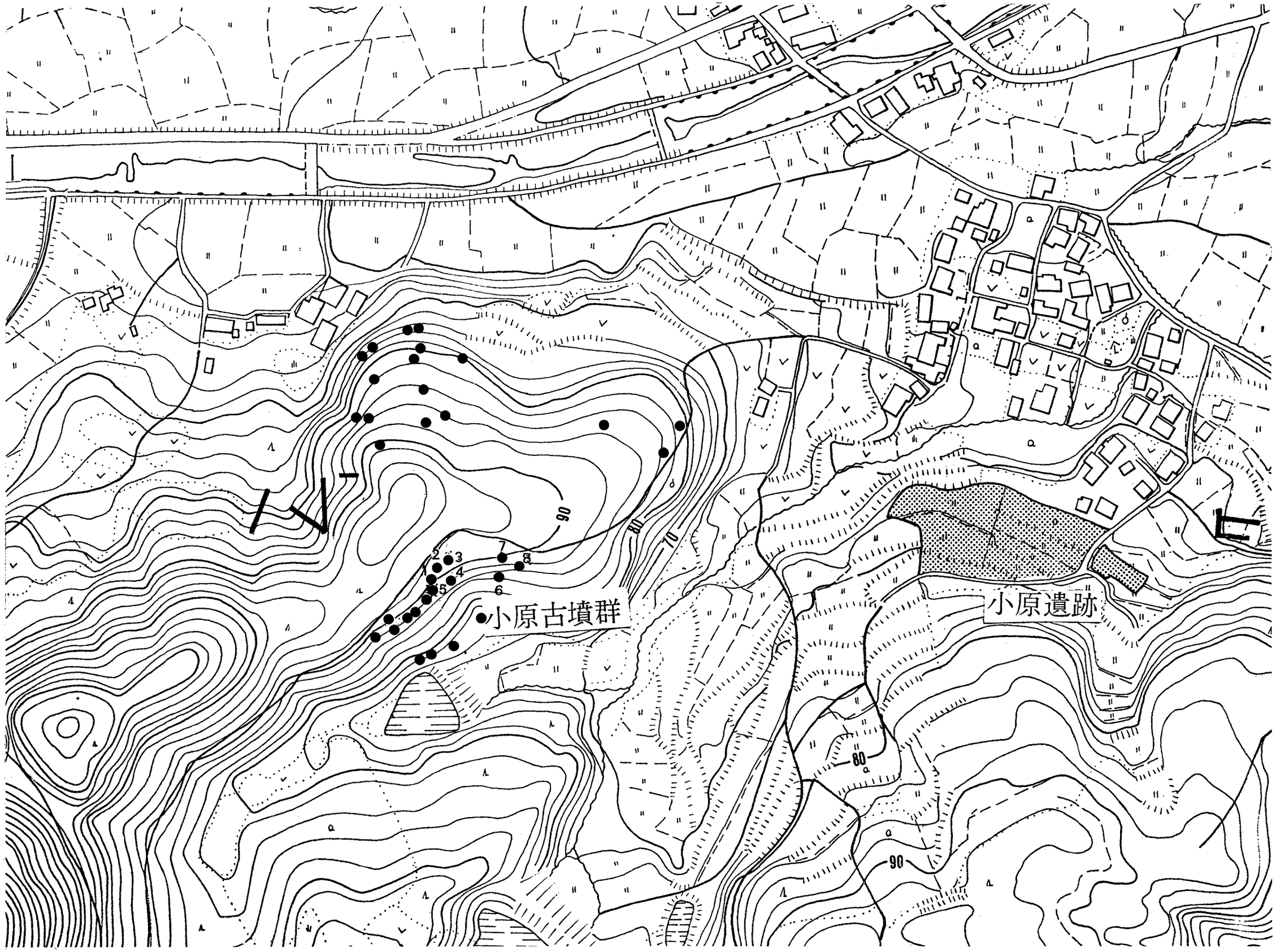


Fig. 69 茶臼山古墳群分布図（縮尺 1/2,500）

Fig. 70 小原古墳群地形実測図（縮尺 1/300）

Ⅲ　小原古墳群の調査

1　調査の経過

用地買収の関係で2年度に分けて調査を実施した。昭和49年度に1～5号墳の5基および土壙群を，昭和50年度に6～8号墳を調査した。前者を第Ⅰ次，後者を第Ⅱ次調査とする。

尚，調査担当者等については，「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅶ―」を参照されたい。　（児玉）

第Ⅰ次調査（昭和49年度）

昭和49年5月14日，小原遺跡の遺構実測中に地元部落の人々から，遺跡の北側丘陵に古墳が多数密集することを知らされた。また縦貫道の路線内にも数基あると知らされた時は驚愕するばかりであった。ただちに連絡された人の案内で山に登ってみたが，密生する樹木の中で確に古墳の墳丘らしき盛り上がりが観察された。隣接する茶臼山城は文献にも明らかであり，その空濠も合せ確認された。驚きつつもこれら遺跡の確認をこれまで見捨ててきた責任が痛感された。とにかく現場より県文化課及び道路公団直方工事事務所，ならびに工事を担当する住友建設にその旨を通報した。

6月24日，筑豊西インター周辺の追加遺跡と共に，各地点の調査予定日数をとにかく推定し，翌25日，大成建設工事事務所内にあった公団現場詰所において，各工事担当者及び公団職員と協議を重ねた。工事が切迫しており，追加調査地点の面積が膨大であることから，工事関係者にとっては，容易ならぬ事態の発生と受け取られたようである。特に茶臼山城跡と共に小原遺跡の所在する個所は，用地的にもその買い上げ折衝が渋滞していた折だけに，工事関係者の苛立ちは手に取るようであった。

6月28日，当該問題について県教育委員会と道路公団福岡建設局担当課員並びに公団直方工事事務所担当者と現場で立ち会うことになった。茶臼山城跡及び小原古墳群については，高速道路設計用航空写真を基にした地形測量を民間に委嘱することにした。また，調査は道路公団側と地主である名糖産業株式会社との間で文化財の発掘調査のみについての承諾を取り交わした後，ただちに実施することにした。

8月5日，名糖産業側より道路公団を通じて発掘調査を承諾したとの連絡を受け，まず茶臼山城跡の調査にとりかかった。また地形測量については東洋航空測量会社に依頼し，同月14日より測量を開始した。調査予定地域外についても，名糖産業及び地元地権者の承諾を得て，古

墳や城関連遺構の分布調査並びに測量を実施した。その結果，古墳群は丘陵裾を取りまくように数十基が分布しており，その間を城空濠が巡っていることが判明した。

9月　日より作業員を増員して，いよいよ古墳群の調査を開始した。まず1号墳の盗掘壙内の埋土除去から始め，2号墳～4号墳と調査を進めた。1号墳西側の表土剝ぎ中に石材が顕らかとなり，新たに5号墳とした。1号墳，5号墳だけは石室腰石のみ残っていたが，2号～4号墳については，石材は全く残っておらず，徹底した盗掘ぶりであった。

1号～3号墳墳々の北側には城空濠があるが，その掘削に際しての排土と思われる土層が墳丘上に観察され，その中より青磁片や銅銭が出土した。また墳丘の裾部には，それを取りまくように土壙が，29基検出された。明らかに古墳より新しい土壙である。

9月29日，直方市及び鞍手郡内各町の住民を対象とした現場説明会を実施した。約50名の参加をえた。

10月15日，発掘作業を全て終了し，5号墳の石室実測及び墳丘実測を残すのみとなった。秋風が立ち，肌寒く感じられるようになった10月22日に全ての作業を終え，機材を徹去した。なお，用地未解決分の古墳3基については，昭和50年度に調査を実施することにした。

第Ⅱ次調査（昭和50年度）

昭和50年7月14日，昨年度に引き続き，小原古墳群の調査を開始する。草木の伐採作業の進むにつれて，地形測量を併行実施し，19日に終了する。この間に各古墳の個別写真及び全景写真を撮影する。6・8号墳は前年度調査実施の5基と同様に盗掘を受けており，その痕が大きく開口していた。

7月19日，6号墳の調査を開始する。盗掘坑中を清掃し，石室プランの検出を計る。石室主軸の判明したところで墳丘土層観察用のトレンチを設定する，墳丘の残りは非常に悪く，石室石材も腰石を残すのみであった。25日に墳丘土層図を作成する。

7月26日，7号墳の調査を開始する。7号墳は開墾に際して墳丘は削平され，裾部には土盛りされており，古墳主体部の位置を現状から推定することは困難であった。そこで6号墳の石室主軸とほぼ同一方向に2本，直行する方向に1本のトレンチを設定する。墳丘及び石室掘り方，後世の攪乱土がトレンチ内の土層観察により明かとなる。南側の墳丘裾部と思われる位置には石室石材を打ち割ったと思われる礫が集中的に遺棄されていた。攪乱土中からは土師器，須恵器が出土したが，中に中世，近世の遺物を混じていた。

7月29日，6号墳の墳丘除去作業を終了し，8号墳の調査を開始する。7号墳と同様，盗掘坑内の土砂を排除する。8月1日には，7・8号墳共に玄室を完掘する。両古墳共に墳丘土層観察用トレンチを掘り下げたが，7号墳前面には後世盛土が厚く堆積しており，その排土を終え墓道を検出し終えたのは8月11日である。この間，7・8号墳の墳丘土層図を作成する。

8月13日，6・7号墳の墳丘写真を撮影し，石室実測作業を開始する。6号墳は床面が二次にわたって敷石されており，実測や写真撮影に手間取る。

8月28日，8号墳の墓道及び周溝を完掘し，発掘作業は全て終了する。29日は全体地形測量及び写真撮影は全て終了し，作業員は小原遺跡へ移動する。

9月6日，全ての実測作業を終え，小原古墳群調査を完了する。

調査完了後，名糖パブリックゴルフ場造成が小原古墳群立地地域に及び，2～3基の古墳が造成予定地内に含まれることが判明したが，名糖産業及び工事施行業者と協議することにより，緑地として保存されることとなった。（酒井）

2　調査の内容

古墳群は鞍手郡若宮町大字山口字小原および字里にかけて所在する古墳時代後期の群集墳で分布調査によれば35基の存在が確認されている。それらは丘陵尾根および斜面に立地している。丘陵尾根には中世に茶臼山城が構築されており，古墳群が2つの小字にまたがるので城の名を冠して茶臼山古墳群と呼称している。今回調査したのは小原側に所在する8基で，正確には茶臼山古墳群の小原支群に属するものではあるが，便宜上「小原古墳群」として報告する。

第Ⅰ次・Ⅱ次調査によって調査した遺構は，横穴式石室を内部主体とする円墳8基，および土壙29基である。

古墳は1号・5号墳を除いて，古く河川工事等のために石材が殆んど全て抜き取られて墓壙床面まで荒されており，石室平面プランの復元が困難なものさえある。それゆえ，副葬品の残存状態は極めて悪く，石材抜き取り時にやむなく原位置を移動させられた土器類が出土遺物の主たるものである。装身具類は5号・8号墳から若干出土したが，鉄製品についてはすでに持ち去られたためか，全く検出できなかった。

小原古墳群は小原遺跡とは小谷をはさんで300 *m*前後の距離しか離れておらず，付近の地形的環境から，小原遺跡の古墳時代の集落と密接な関係にあったことがうかがわれる。

土壙群は主に3号墳の周辺に密に分布し，4群に分たれる。これらは，古墳を切り込んで設定され，また茶臼山城の土塁盛土下に存在することから，その年代の一端をうかがい知ることができる。伴出遺物は全く存在せず，性格については不明な部分も多いが，墓として考えることもあながち否定はできない。（児玉）

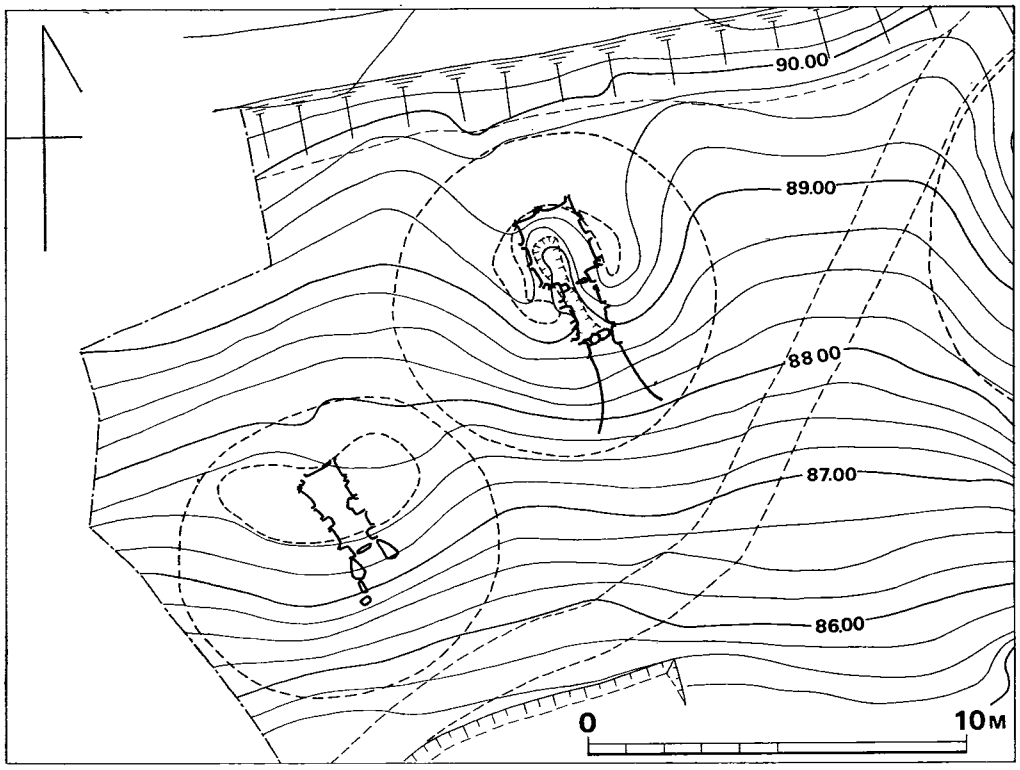


Fig. 71　小原1・5号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

1 小原1号墳

墳　丘 (Fig.71　PL.33)

樹木伐採後の観察では，墳丘は僅かに高まりが認められる程度の小丘で，墳頂部には浅い陥没が認められ，石室の残存状態はあまり良くないと推測された。地形測量によると，径8*m*前後の規模を有する小円墳と思われた。また墳丘のみかけの高さは傾斜面に位置するため，南側墳丘裾で2.3*m*，北側墳丘裾で0.3*m*を測る。

古墳築造に際しては，まず石室周辺の地山を整形し，浅い墓壙を穿っている。次に墓壙を中心にして斜面の高い側に馬蹄形の溝状遺構をめぐらしている。溝状遺構は幅1.3*m*前後を有し，深さは約20*cm*で断面は浅いU字形を呈する。

盛土はこの溝状遺構の内縁を墳丘裾として，地山整形や墓壙・溝状遺構を掘った際の土（赤褐色粘質土・明褐色粘質土・灰褐色粘質土）を封土として，石室架構に併行しながら版築作業が行なわれている。現存する墳丘の高さは床面より1.50*m*を測る。

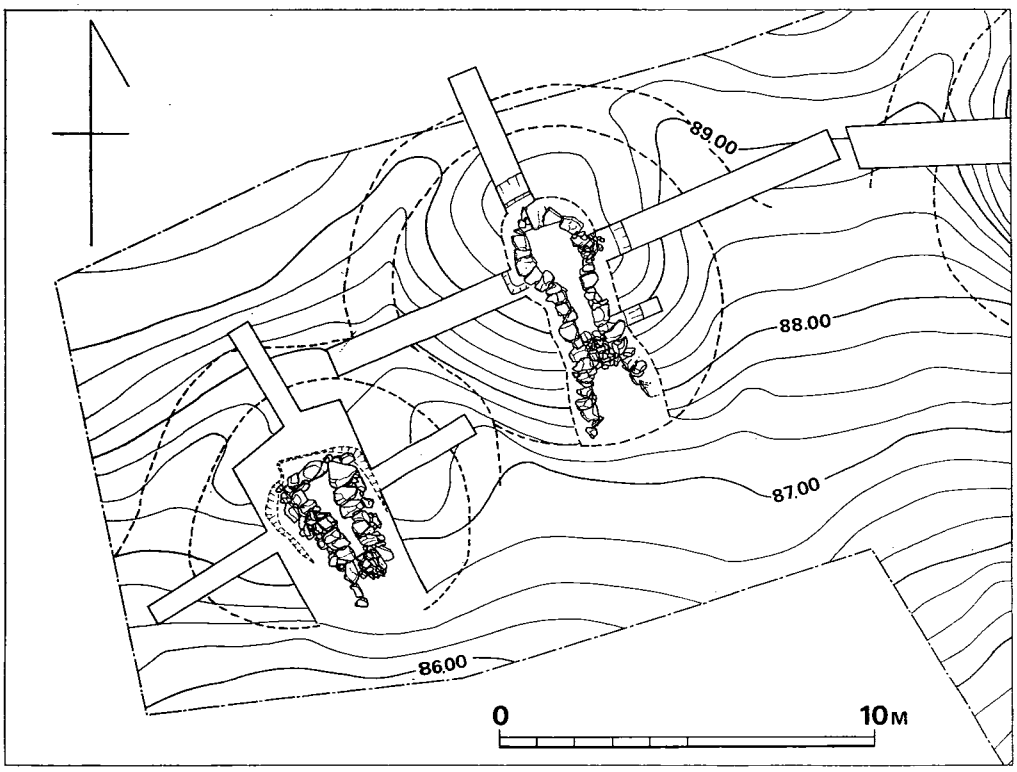


Fig. 72　小原１・５号墳地山面地形実測図（縮尺1/200）

なお，１号墳の西南部墳丘裾及び溝状遺構の一部は５号墳の溝状遺構によって切られている。

本墳の当初の規模は馬蹄形溝状遺構を含めて径10*m*～11*m*を有し，墳丘のみでは径8.5 *m*前後であったと推定される。また墳丘高は，本墳が斜面に位置するため盛土の流出が著しい点を考慮すると，本来は墳丘南裾で約2.5*m*前後を有したものと推定される。

石　　室（付図Fig.⑧　ＰＬ.33）

内部主体は，主軸方向をＮ—23°—Ｗにとり，南東方向に開口する全長約4.0*m*の単室，両袖型横穴式石室で，石室（後室）の平面形は長方形を呈する。

石室は，丘陵尾根に直交して掘られた墓壙底に構築されている。

墓壙はあらかじめ石室の形態にあわせて掘られており，幅約3.5 *m*，長さ約５*m*，深さ（奥壁背後で）約0.9 *m*の長方形を呈するが，羨門付近ではほとんど深さをもたない。また奥壁背後から約2.8*m*の距離で幅を約2.3*m*にせばめている。墓壙底は略平担をなすが，若干南側に傾斜している。

石室の幅は奥壁側で1.45*m*，袖石側で1.55*m*を測る。長さは右側壁で1.70*m*，左側壁で1.73 *m*を測る。

奥壁は3段目まで現存する。腰石は2石で構成され，左側は縦長に，右側は横長に据えている。2段目には人頭大の石を積み上げ，間隙には礫を嚙ませている。2段目の上面は床面から60cmにそろえている。3段目は3個の方柱状の石材を小口積みにして，かなり持ち送っている。

両側壁は右側壁の一部を除き，3段目まで現存する。腰石には両側壁とも各々3個の石材を用いている。右側壁は略直線上に並ぶが，左側壁は若干胴張り気味である。腰石上面を床面から略40cmにそろえ，その上に人頭大の石を積んで2段目としている。3段目はやや大きめの石材を小口積みにして持ち送っている。

また床面は墓壙底に軟岩混りの粘質土を5cm～10cmの厚さに突き詰めて略同レベルにして，石室全体に玉砂利を敷詰めている。

玄門は両壁から各々約40cm突出させて袖石としており，3段目まで現存する。

玄門袖石間は長さ約75cmを測り，2石を横に配して仕切り石としている。

羨道部は略長方形の平面プランを呈し，長さは左側壁で2.08m，右側壁で2.0mを測る。羨道幅は羨道中央で約85cmを測る。

両側壁とも3段目まで現存する。両側壁の腰石は，玄門袖石より2・3石目を横長に用いており，4石目を縦長に用い，内側に突出して羨門としている。2段目は上面を小形の転石を用いて床面から約70cmの高さにそろえるように積み上げている。3段目は腰石よりやや小形の石を小口積みにして前面に持ち送っている。また左側壁の2個の腰石を若干外側にずらしており，羨道があたかも前室を意識したような感がある。

羨門袖石間は約65cmを測り，3個の転石を配して仕切り石としている。

羨道の床面は石室と同様に墓壙底に軟岩混りの粘質土を突詰め，その上に玉砂利を敷詰めているが，敷石のレベルは石室仕切り石部で約5cm程下がり，墓道方向に緩かに傾斜する。

羨道前面には地山を浅く掘りくぼめた末広がりの墓道が長さ約2m程続いている。墓道側壁には20cm～40cm大の転石を小口積みにしているが，積み方は荒く，間隙を生じている。

閉塞は羨道前面で行なわれており，仕切り石の前面に15cm～29cm大の礫と粘質土を積み上げている。

出土遺物（Fig.74　PL.44・45）

石室内はすでに盗掘を受けており，ほとんど遺物は認められなかった。遺物は主として墓道埋土中からと墳丘上及び墳丘下よりの出土である。

墓土埋土中からは須恵器坏蓋1・壷2・高坏2が出土した。また墓道右側墳丘下の地山整形面には須恵器甕1が埋置されており，破砕されたような状況で出土した。

尚，墓道左側墳丘上では須恵器坏蓋4・身7・高坏2・平瓶3・横瓶1・甕1・土師器皿1が墳丘裾から5号墳溝状遺構底にかけて流れ込んだような状況で出土しており，本墳に伴うも

のとして取り扱った。

須恵器

坏蓋

Ⅰa類（Fig.74—9～11）

口径11.1cm～11.4cm，器高3.7cm～3.8cmを測る，9は天井部が狭く，体部にかけて直線的にのび口縁部は丸く仕上げられている。器内外面はナデ調整である。10の天井部は手持ちの篦削り，11は回転篦削りを施している。胎土はいずれも砂粒を含み，焼成は11のみ堅緻で，他はやや軟質である。

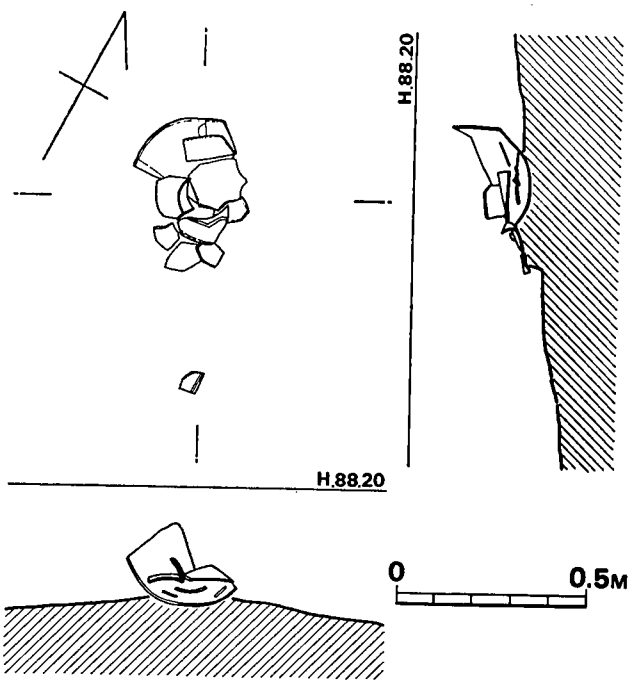


Fig. 73　小原1号墳遺物出土状態実測図（縮尺1/20）

Ⅰb類（Fig.74—12・13）

Ⅰa類よりやや小形で，口径10.7cm，器高3.6cm～4.1cmを測る。12の天井部は手持ちの篦削りである。13は天井部より口縁部にかけて直線的に移行し，端部外面は垂直に納めている。胎土は砂粒を含むが良質である。焼成は不良である。色調は12が暗灰色，13が灰茶色を呈する。

Ⅰc類（Fig.74—8）　口径10.2cm，器高2.5cmを測る。Ⅰb類よりやや小型で器高が低い。天井部のヘラケズリの範囲は狭い。口唇部は丸く納めている。色調は黄灰色を呈する。胎土は精良で，生やけである。

坏身

Ⅰa類（Fig.74—1～4）　蓋受部を有するもので，器高に対して口径が小さい。口径9.5cm～10.2cm，最大径11.3cm～11.6cm，器高4.2cm～4.9cm，立上がり0.5cm～0.6cmを測る。篦削りは2を除き体部の半ば近くまで施されている。色調は黒色あるいは灰黒色を呈する。胎土は精良であるが，焼成は不良である。

Ⅰb類（Fig.74—5～7）　蓋受部を有するもので，Ⅰa類よりやや小形である。色調は赤味がかった灰黒色を呈する。胎土は精良である。焼成は良好であるが，5はやや軟質である。口径8.7cm～9.3cm，最大径10.7cm～11.2cm，器高3.4cm～3.7cm，立上がり0.6cm～0.7cmを測る。

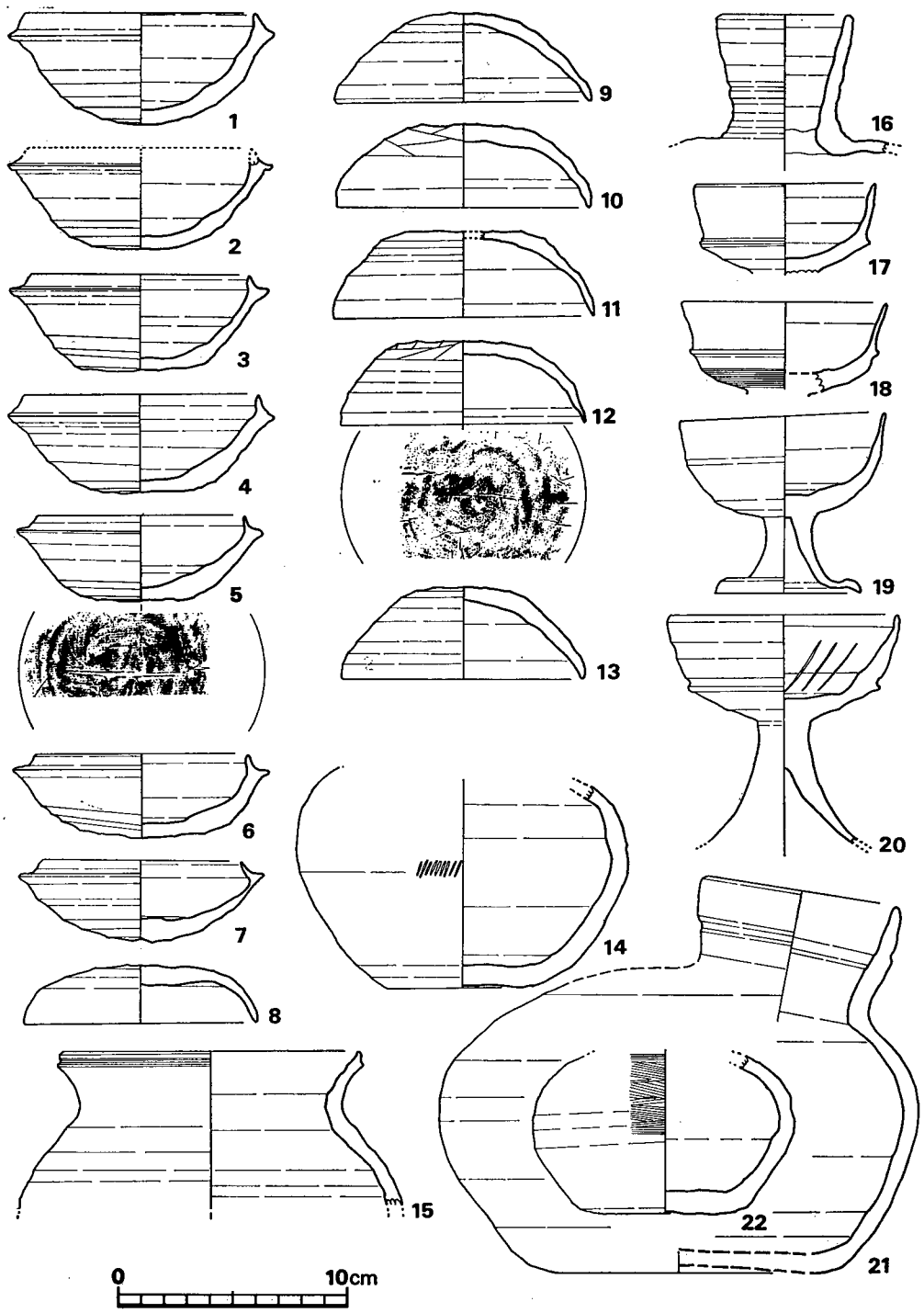


Fig. 74　小原1号墳出土土器実測図①（縮尺1/3）

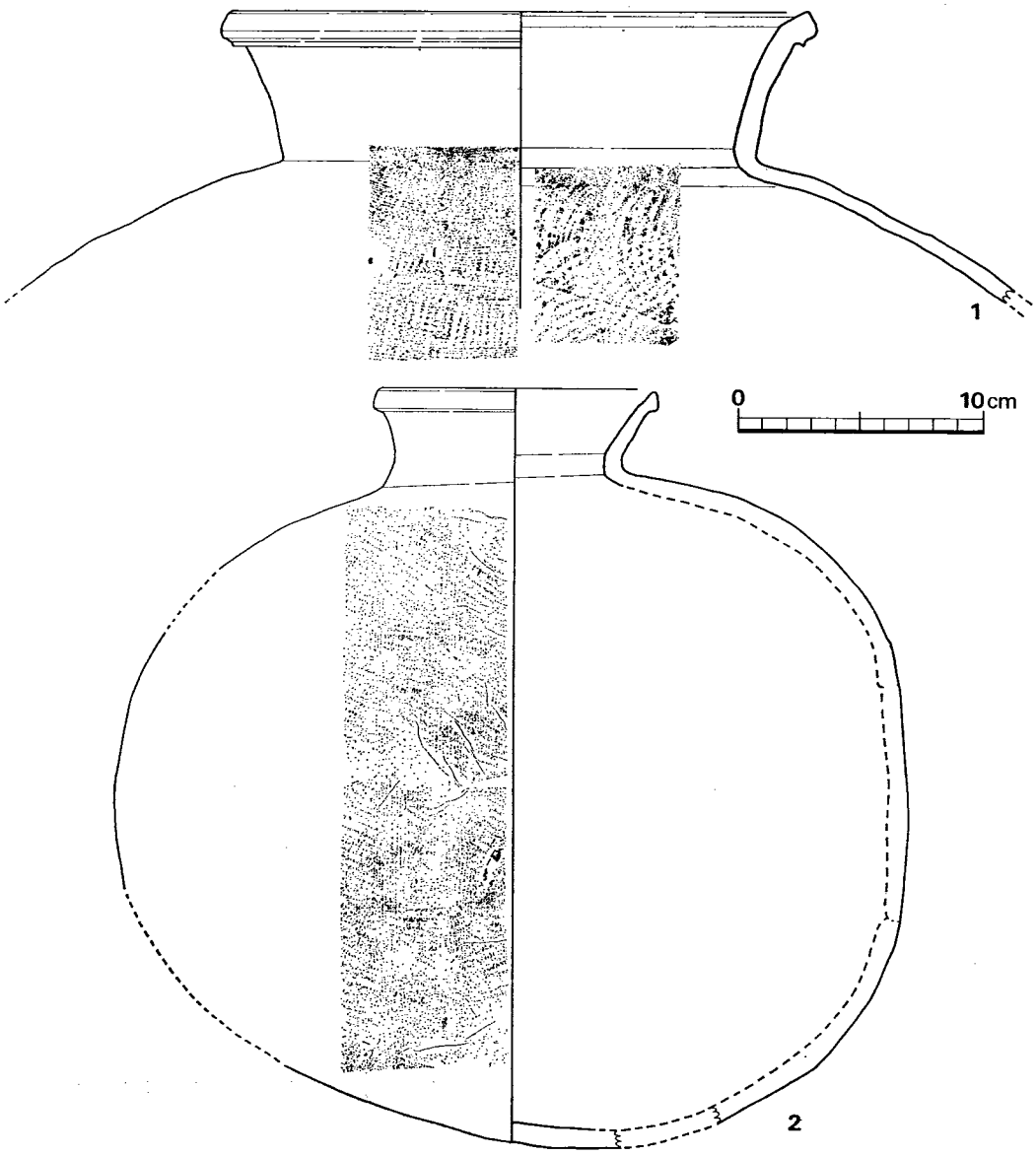


Fig. 75　小原１号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

無蓋高坏

Ⅰ類（Fig.—74・18・20）　体部と底部との境あるいは体部の下位に１条の突帯をめぐらしているものである。17・18の底部には櫛によるかき目が入る。20の坏部内面には三本の平行沈線の箆記号を有する。色調は黒色あるいは濃灰色を呈する。胎土に砂粒を多く含むが，焼成は良好で堅緻である。口径は7.9cm～9.9cmを測る。

Ⅱ類（Fig.74—19）　底部から体部にかけて器壁を薄くしながら滑らかに立上がり，口縁端部は丸く仕上げている。脚部は短く，外反し，脚裾部は幾分はね返るが，退化形態である。内外面ともにナデ調整を施す。色調は灰黒色を呈する。胎土は荒い砂粒を含み，不良である。焼成は良好で堅緻である。口径9.0㎝，器高7.7㎝，脚裾径6.4㎝を測る。

平瓶（Fig.74—14・21・22）　14・22は口頸部を欠損する。14は最大径11.4㎝を測り，肩部から胴部にかけて刷毛目を施す。色調は黒灰色を呈し，胎土，焼成ともに良好である。22は最大径14.2㎝を測る。色調は黒茶色を呈し，胎土，焼成ともに良好である。21は底部を欠損する。口縁端部は丸く仕上げており，下方に1条の沈線が入る。胴部いっぱいに刷毛目状痕を残す。色調は暗茶褐色を呈し，焼成はやや軟質である。口径8.4㎝，最大径20.9㎝，器高17.4㎝底径14.1㎝を測る。

横瓶（Fig.75—2）　やや寸づまり気味の卵形の胴部に短く外反する口縁部が続く。口縁端部を外に肥厚させており，胴部最大幅は32.2㎝，器高30.8㎝，口径11.0㎝を測る。胴部全面に叩きが入り，その上にカキ目を施している。色調は濃暗褐色を呈する。胎土，焼成は良好である

壷（Fig.—15・16）　15は広口壷で肩部以下を欠損する。内外面ともに丁寧な横ナデ調整である。口唇部外面は内側に窪んでいる。口縁部から胴部への移行は滑らかである。口縁部径13.2㎝を測る。色調は灰黒色を呈する。胎土は砂粒を多く含み，焼成は硬質である。16は口頸部のみで，内外面ともに横ナデ調整である。口径5.9㎝を測る。色調は黒色を呈し，胎土，焼成とともに良好である。

甕（Fig.—1）　肩部以下を欠損する。口縁部は短く外反し，口縁端面下に一条の鈍い凹線がめぐっている。口頸部内外面は丁寧な横ナデ調整を施している。肩部は内面に青海波文が残り，外面にはカキ目が入る。色調は黒灰色を呈し，焼成は堅緻である。口径23.3㎝を測る。

小　結

本墳は丘陵南側斜面の標高88m付近に構築された径約8.5mの規模を有する小円墳である。石室は長方形を呈する墓壙内に構築されており，南東方向に開口する単室・両袖型の横穴式石室を内部主体とする。石室は玄室・羨道からなり，末広がりの短い石積みの墓道が続いている。石室内はすでに盗掘を受けており，遺物は認められなかった。

墓道左側墳丘上では多数の須恵器が検出されており，墓道右側の墳丘下地山整形面から出土した須恵器甕とともに本墳の葬送儀礼に伴う遺物と考えられる。

墳丘の北側には浅い溝が馬蹄形にめぐっており，盛土がこの溝状遺構の内縁を墳丘裾して行なわれていることから，この溝状遺構は古墳を際立たせるとともに，降雨による墳丘の崩壊から守る排水溝の役割を果したものと推測される。

出土した須恵器は第Ⅳ様式の特徴をもつものであり，六世紀終末に比定できよう。

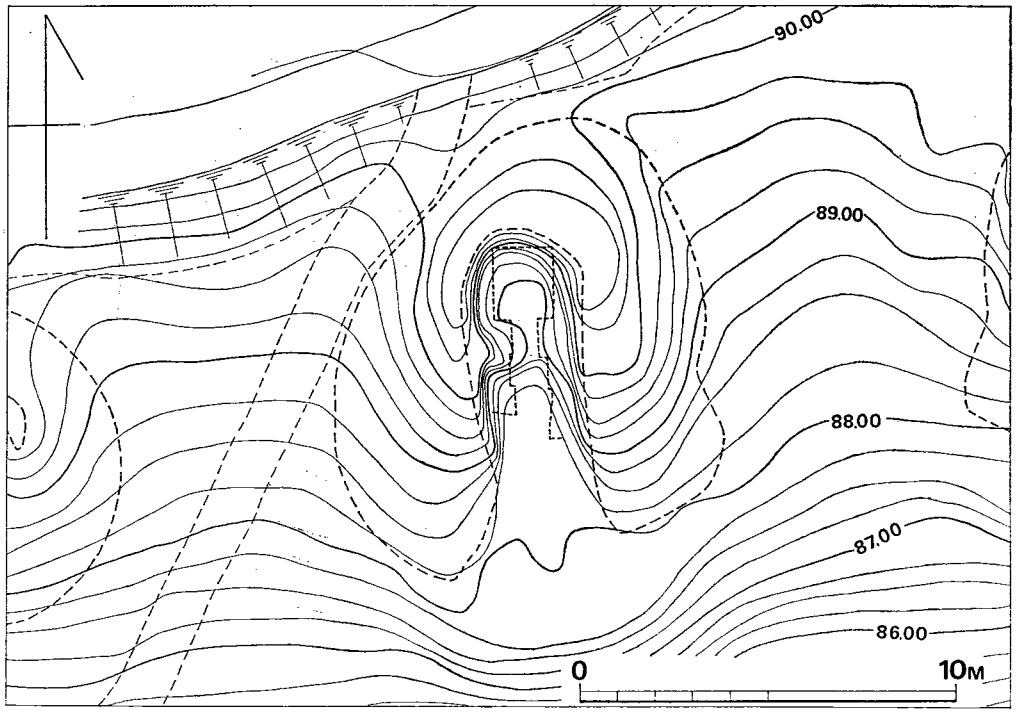


Fig. 76　小原２号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

2　小原２号墳

墳　丘（Fig.76　PL.34）

樹木伐採後の墳丘測量では径10*m*前後の規模を有する円墳と思われた。墳丘頂部から墳丘南裾にかけて，幅３*m*，長さ６*m*，深さ2.6*m*を測る大きな陥没が認められることから石室の残存状態は極めて悪いものと予想された。墳丘のみかけの高さは，本墳が傾斜面に位置するため，墳丘南裾で2.6*m*，同北裾で0.6*m*を測る。

墳丘断面図によれば，まず石室周辺部の地山を斜面に沿って整形し，丘陵尾根に直交する５*m*×10*m*の長方形を呈する墓壙を穿っている。墓壙は奥壁背後で深さ約1.6*m*を測り，墓壙南端ではほとんど壁の立上がりはない。墓壙底面はほぼ平坦をなすが，僅かに墓道方向へ傾斜している。前後して，墓壙の北側に馬蹄形の溝状遺構をめぐらしている。溝状遺構は幅１*m*～1.5*m*，深さ約20*cm*前後を測り，断面は浅いU字形を呈する。

盛土作業は，この馬蹄形溝状遺構の内縁を墳丘裾として行なわれている。封土の盛り方は墳丘断面図によれば，まず墓壙内は石室との間隙を軟岩粉砕土と軟岩混り粘質土を交互に版築し

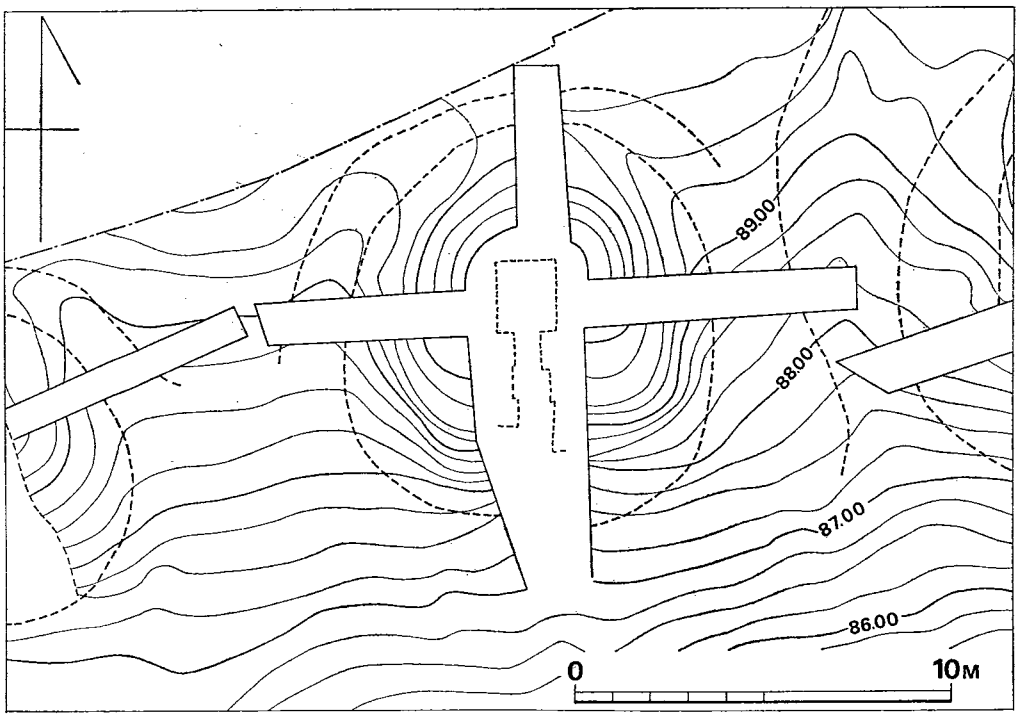


Fig. 7　小原2号墳地山面実測図（縮尺1/200）

て裏込めしている。次に墓壙上面から表出する部分は石室構築に併行して，墓壙底から約2.5 *m*の高さまで赤色粘質土と黒褐色土を交互に版築状に積んでいる。最後に，天井石を架構後，墳丘裾から全体に盛土を行なって作業を終っている。

盛土には地山整形や馬蹄形溝状遺構，墓壙を穿った際の土を利用している。

現存する盛土高は墓壙底面より約3.0 *m*である。本墳の当初の墳丘規模は径約10*m*，馬蹄形溝状遺構を含めると径約13*m*前後，墳丘高は南裾側で約3.5 *m*前後と推定される。

なお墳丘北西裾部において墳丘裾を切った石組土壙1基が検出された。詳しくは土壙墓の項で述べる。

石　室（付図Fig.⑨　PL.34）

石室は古く河川工事等のため，完全に石材が抜き取られており，裏込め石・根石・敷石等の一部を残すのみであった。

内部主体は墓壙底面に残された掘り方（石材抜き取り痕）により，丘陵尾根に直交し，南方向に開口する単室・両袖型横穴式石室であったと推測される。

石室は掘り方の状況から1.70*m*×1.40*m*前後の長方形プランが考えられる。

羨道部は長さ約2.50*m*で，羨門袖石間には仕切り石を構えた痕跡が認められる。羨道の一部

には旧状を保つと思われる玉砂利による敷石床面が検出された。また羨道左側壁腰石の掘り方内には根固めと考えられる石組みが検出された。

墓道は羨門仕切り石から1.5 *m*の距離から地山を浅く掘り窪め，約4 *m*続いている。

出土遺物（Fig.78　PL.46・47）

石室がほぼ完全に破壊されているため，遺物は全てが原位置を遊離した状況で出土した。遺物の大半が墓道の埋土中及び墓壙内攪乱土層内からの出土である。

須　恵　器

坏蓋

Ⅰ類（Fig.78—8・10）　口径12.4*cm*～13.3*cm*，器高4.1*cm*～4.3*cm*を測る。天井部と体部の境は明瞭ではなく，天井部から口縁部へなめらかに移行し，口縁部はほぼ直線的にのび，口縁端部は丸くおさめている。色調は暗灰色を呈する。胎土は砂粒を含み，焼成は良好である。天井部は全面にわたって篦削りをしている。

Ⅱ類（Fig.—7・9・13）　口径11.6*cm*～11.8*cm*，器高3.7*cm*～4.3*cm*を測る。口縁端部はいずれも丸く仕上げられており，13は口縁部が垂直に立つ。篦削りは天井部周辺に限られる。色調は灰黒色を呈する。胎土は砂粒を多く含んでおり，荒い。焼成は良好である。7，13の天井部内面に篦記号を残す。

Ⅲ類（Fig.78—14）　蓋につまみとかえりを有するものである。口径7.3*cm*，器高3.8*cm*を測る。身受けかえりは大きく短く外反し，端部は丸くおさめている。色調は暗茶灰色を呈し，胎土は緻密で，焼成は堅緻である。

坏身

Ⅰ類（Fig.78—1～3）　立上がりは1.3*cm*～1.4*cm*を測り，内湾する。色調は灰黒色，1は暗茶褐色を呈する。焼成は良好であり，胎土には砂粒を含む。口径10.1*cm*～11.8*cm*，最大径12.6*cm*～14.1*cm*，器高3.7*cm*～4.6*cm*を測る。底部は全面にわたって篦削りが行なわれている。1は蓋受け部に沈線が入る。

Ⅱ類（Fig.78—4～6）　立上がりは0.75*cm*～1.1*cm*と短く，内傾する。体部の器壁は厚手である。色調は淡茶色を呈し，焼成は4を除き不十分である。胎土には砂粒を含む。口径8.6*cm*～8.8*cm*，最大径10.7*cm*～11.0*cm*，器高2.9*cm*～3.3*cm*を測る。6は内底面に篦記号を有する。

Ⅲ類（Fig.78—12）　底部は平底をなし，体部から口縁部にかけて，ほぼ直線的にのび，口唇部は丸く仕上げている。器壁は厚手である。色調は灰黒色を呈する。胎土は精製されており，焼成は堅緻である。口径12.2*cm*，器高4.0*cm*を測る。

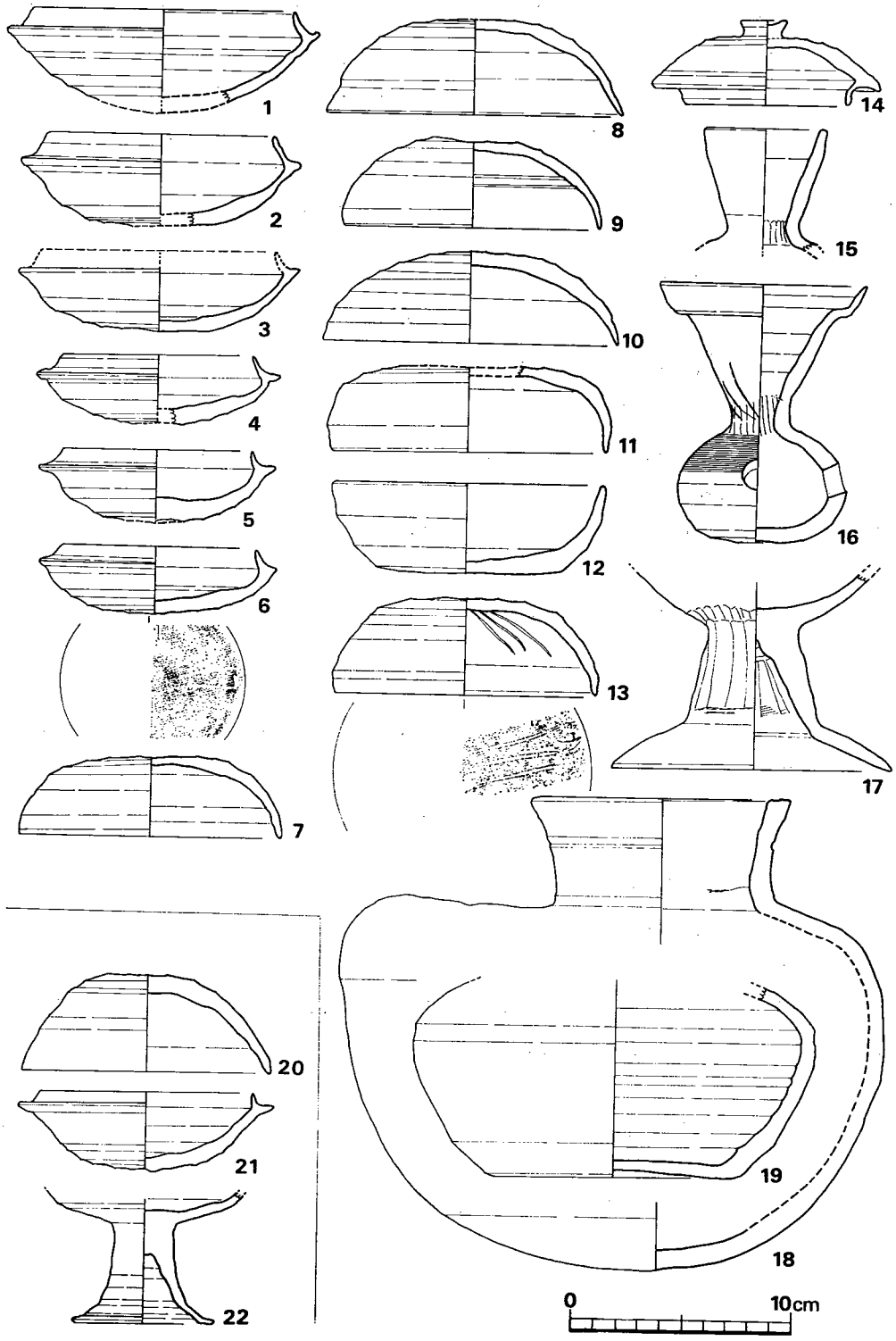


Fig. 78 小原2・3号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

瑞（Fig.78—16）　口径9.3㎝，器高11.5㎝を測る。口頸部は外反し，さらに屈曲して外反する。頸部内外面に絞り痕を残しており，頸部から上の内外面は丁寧な横ナデ調整を施す。球形部には径1.3㎝の孔を有する。球形部は箆削りをし，肩部上半部は櫛描き文を配する。頸部から口縁屈曲部にかけて3本の箆による沈線状の記号を有する。色調は暗灰色を呈し，胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

平瓶（Fig.78—18・19）　18は大形で，口径11.7㎝，最大径24.2㎝，器高21.1㎝を測る。頸部は体部の中央部寄りにつく。口縁部外面には1条の沈線が入り，口唇部は平坦をなす。器表全面にナデ調整を施している。底部は丸底をなす。色調は灰黒色を呈する。胎土は砂粒を含み，粗いが，焼成は良好である。19は青灰色を呈し，焼成は良好である。15は頸部内面に絞り痕がある。色調は灰黒色を呈し，胎土は精製土，焼成は堅緻である。口径5.5㎝。

壺（Fig.78—15）　肩部以下を欠損する。頸部から直線的に外反し，口唇部には平坦面が認められる。頸部内面には，絞り痕を残す。口径5.3㎝。色調は灰黒色を呈する。胎土は精良で，焼成は硬い。

土　師　器

高坏（Fig.78—17）　口縁部を欠損する。脚部は外反し，さらに屈曲して脚裾部を丸く納める。坏部下半及び脚部内外面は縦位の箆削りを施す。脚裾部径12.6㎝。色調は茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は不良である。

小　　結

2号墳は径10m，高さ（墳丘南裾で）約3.5mの墳丘規模を有する円墳である。石室は完全に破壊されているが，墓壙底面に残った腰石掘り方により，南に開口する単室，両袖型の横穴式石室を内部主体とする。石室長に比べて羨道部，墓道ともに長大である。石室を中心として北側に溝を馬蹄形にめぐらし，溝内縁を墳丘裾として盛土を行なっている。この溝状遺構は古墳を際立たせるとともに，降雨から墳丘崩壊を守る排水溝の役割をもつものと思われる。盛土には地山整形や墓壙・溝状遺構を掘った際の土を用いており，当古墳群について共通にいえることである。

遺物は主として墓道・墳丘上からの出土でああり，直接本墳造営時期を判断することは難しいが，墳丘上の遺物は1号墳・4号墳にみられるように葬送儀礼に伴うものと解釈されよう。

出土した須恵器坏は第ⅢB様式，第Ⅳ様式及び第Ⅴ様式の特徴をもっており，六世紀後半から七世紀初頭に比定できるよう。以上のことから数次の追葬が考えられるが，遺物の大半は追葬時のものと推測される。

尚，墳丘北西裾で検出された集石土壙は，墳丘裾を切っており，本墳の造営より時間的には

後出するものと考えられ，3号墳墳丘裾周辺に検出された土壙群と何らかの関連を有するものと考えられる。

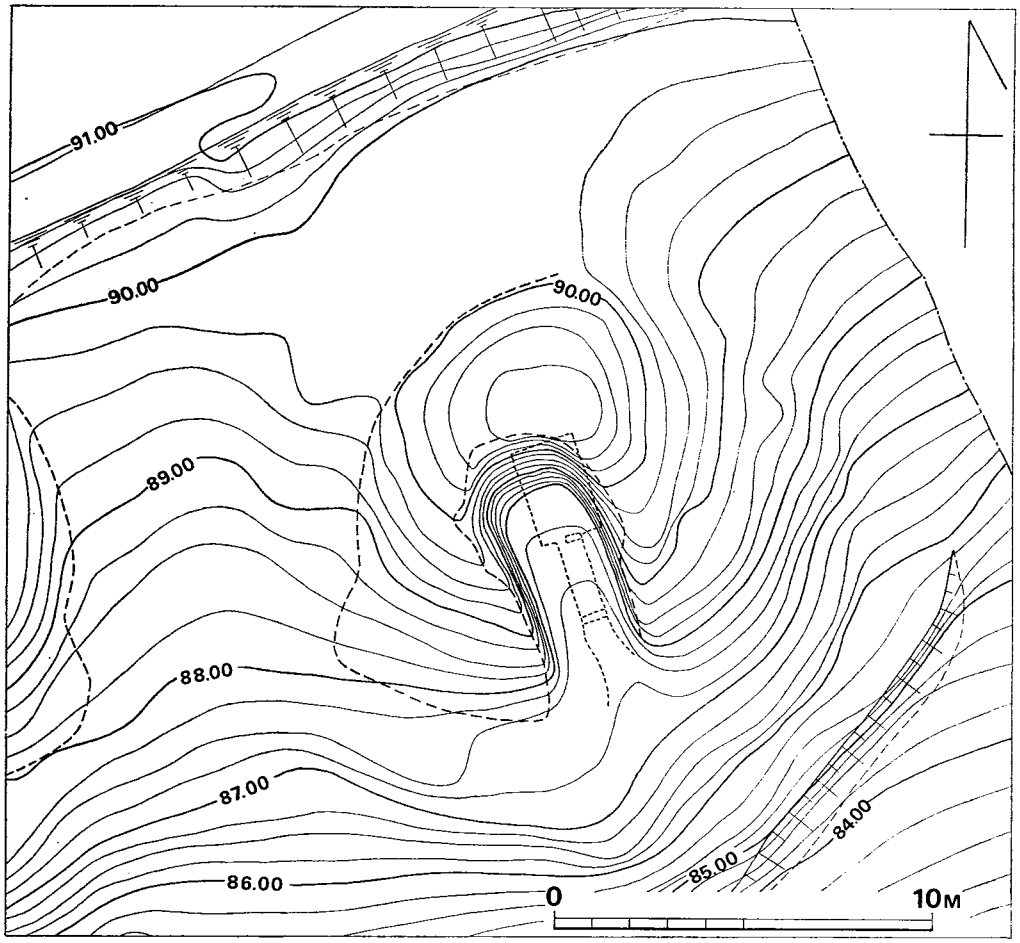


Fig. 79　小墳3号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

3 小原3号墳

墳　丘 (Fig.79・80　PL.35)

丘陵の南側斜面標高約88*m*付近に築造された4基の古墳の中では最も東端に位置している。樹木伐採後の墳丘のみかけの規模は径約13*m*を有しており，当古墳群のなかでは最大の規模をもつ円墳と思われた。墳丘高は斜面に位置しているため，墳頂部と墳丘南裾との比高は約3.5*m*，北裾で約0.8*m*を測る。墳丘は墳頂部から墳丘南裾にかけて大きくえぐられているのが観

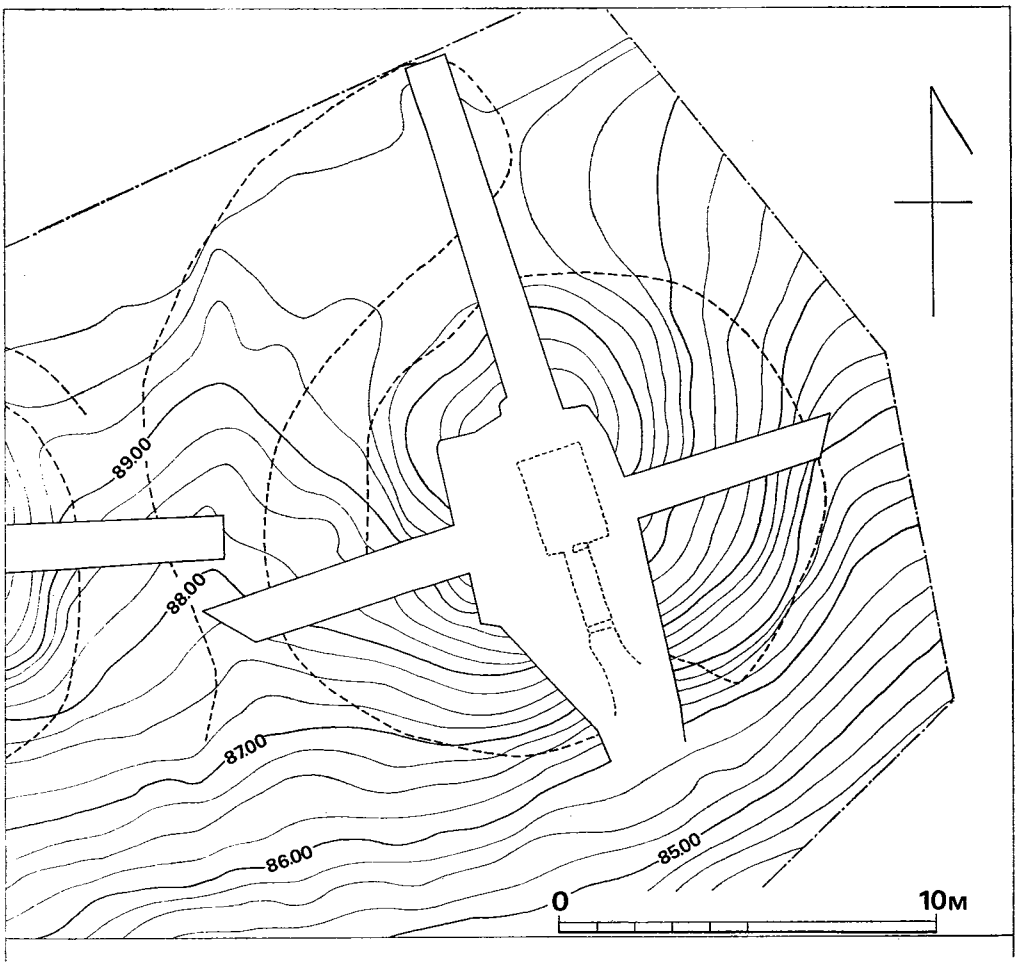


Fig. 80　小原３号小地山面実測図（縮尺1/200）

察され，石室の残存状態は２号墳と同様に極めて悪いものと推測された。

墳丘断面図によれば古墳の築造にあたって，まず付近を斜面に沿って地山整形し，墓壙を穿っている。墓壙はトレンチのみの観察で全体のプランを知り得ないが，幅は約6.5 *m*（下端は3.5*m*），深さは奥壁背後で1.85 *m*，羨門付近でほとんど深さをもっておらず，全体としては長さ約８*m*前後の長方形プランを呈するものと考えられる。なお奥壁背後の墓壙壁には段を設けている。墓壙平面はほぼ平坦をなすが，墓道方向に若干レベルを増している。

次に墓壙を中心にして，斜面の高い側に馬蹄形の溝状遺構をめぐらしている。溝状遺構の幅は一様ではなく，２*m*～５*m*を測るが，墳丘北側で最大幅を有する。深さは約20*cm*で断面は浅いU字形を呈する。

盛土作業はこの馬蹄形溝状遺構の内縁を墳丘裾として行なわれている。封土の盛り方は墳丘断面図によれば，墓壙内は石室壁との間隙を軟岩・黒色土・軟岩混り赤色粘質土によって版築し，安定を計っている。次に墓壙上面から表出する部分は墓壙底面から約2 *m*の高さまで石室架構と併行しながら版築状に盛り上げている。

最後に天井石を架構後，天井石を覆うように墳丘裾から全体に赤色粘質土と黒色土を版築状に丁寧に盛っている。盛土には地山整形や墓壙・溝状遺構を掘った際の土を用いている。

現存する盛土高は，墓壙底面より約3.8 *m*を測るが，盛土の流出を考慮すると本来は4 *m*を越すものであったと推定される。

当初の墳丘規模は墳丘裾内で径14*m*前後，溝状遺構を含めると径約19*m*を有する。

なお3号墳周辺の3ケ所に集中する土壙墓群が検出された。土壙墓の遺構配置をみると3号墳墳丘を意識して作られており，土壙墓のなかには墳丘裾部を切っているものもあり，時間的には3号墳より後出するものである。詳しくは土壙墓の項で述べる。

石　　室（付図Fig.⑩　ＰＬ.35・36）

2号墳と同様に，石室石材はほぼ完全に抜き取られて，奥壁の根石と墓道側壁の石積の一部を残すのみであった。しかし，墓壙底面に残された石室石材の掘り方（抜き取り痕）により，内部主体は南に開口する横穴式石室であると推定される。

石室は単室で，2.10*m*×1.80*m*前後の長方形プランが推測される。石室中央部には奥壁に平行して，仕切り石を立てた痕跡と考えられる長さ110*cm*，幅15*cm*，深さ10*cm*の溝が検出された。また，右側壁に沿って玄門寄りに一段低い1.3*m*×0.6*m*の長方形を呈する平坦面が認められることから，この平坦面にも何らかの施設が存在したことも考えられる。

玄門袖石の掘り方は，内側に大きく突出して両袖をなしている。玄門袖石間には仕切り石の掘り方を残す。

羨道部は2.80*m*×0.6 *m*前後の長方形プランを呈する。羨門袖石間には仕切り石と閉塞石の掘り方が認められる。

墓道は羨門仕切り石から約2 *m*の距離まで石積みが行なわれたらしく，両側にその痕跡を残している。

出土遺物（Fig.78　ＰＬ.47）

石室の石材が完全に抜き取られており，墓壙内から遺物の出土は皆無であった。墓道周辺には石室石材の残欠が散らばっており，それらに混って須恵器破片が出土した。また墓道左側墳丘上及び墳丘裾部から須恵器坏および高坏が出土した。出土遺物は次のとおりである。

須　恵　器

坏蓋（Fig.78—20）　口径11.2㎝，器高4.3㎝を測る。天井部から体部へ滑らかに移行する。色調は灰茶色を呈する。胎土は良質であるが，焼成が不良のため，器面の磨滅が著しい。

坏身（Fig.78—21）　立上がりは0.6㎝で，短く内傾する。蓋受部は平坦をなす。底部は全面に篦削りを施している。色調は灰黒色を呈する。胎土は砂粒を含むため粗いが，焼成は良好である。口径9.7㎝，最大径11.5㎝，器高3.6㎝を測る。

高坏（Fig.78—22）　小形で，坏上部を欠損する。脚裾部は折れて平坦をなし，端部は丸く仕上げている。脚裾部径6.4㎝。色調は，外面灰黒色，内面灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含み，粗い。焼成は堅緻である。

小　　結

3号墳は，当古墳群のなかで最大の墳丘規模をもつ円墳で，当初の墳丘規模は径14m，高さ（墳丘南裾で）約4mを有したものと推測される。石室はほぼ完全に抜き取られているが，墓壙底面に残った腰石掘り方によると，比較的大形の石を用いた単室・両袖型の横穴式石室を内部主体としている。奥壁前面にそって墓壙底には細長い溝状の掘り方が検出されており，板状石によって仕切られていた可能性が強い。

石室を中心にして北側に馬蹄形の溝状遺構をめぐらすことと，この溝状遺構の内縁を墳丘裾として地山整形や墓壙，馬蹄形溝状遺構を掘った際の土を封土として用いて盛ることは本墳においても認められることである。

出土した須恵器は第Ⅳ様式の特徴を示しており，六世紀終末に比定できよう。しかし，当古墳群において3号墳のもつ立地条件，墳丘規模，石室構造及び規模から考えてこれらの遺物は追葬に伴う可能性が強く，本墳の造営時の遺物は石材採取の際もち出されたものと考えるのが妥当であろう。また3号墳周辺から検出された土壙墓は明らかに墳丘裾を切っているものもあることから時間的には3号墳より後出するものである。

4　小原4号墳

墳　　丘（Fig.81・82　PL.37）

1～3・5号墳が南側斜面の標高87m前後に並列して構築されているのに対して，4号墳は2号墳の南，標高83m付近に1基離れて構築されている。

南側斜面は標高約85mを境として，下方に向う程，勾配の度合いを増している。この為，4

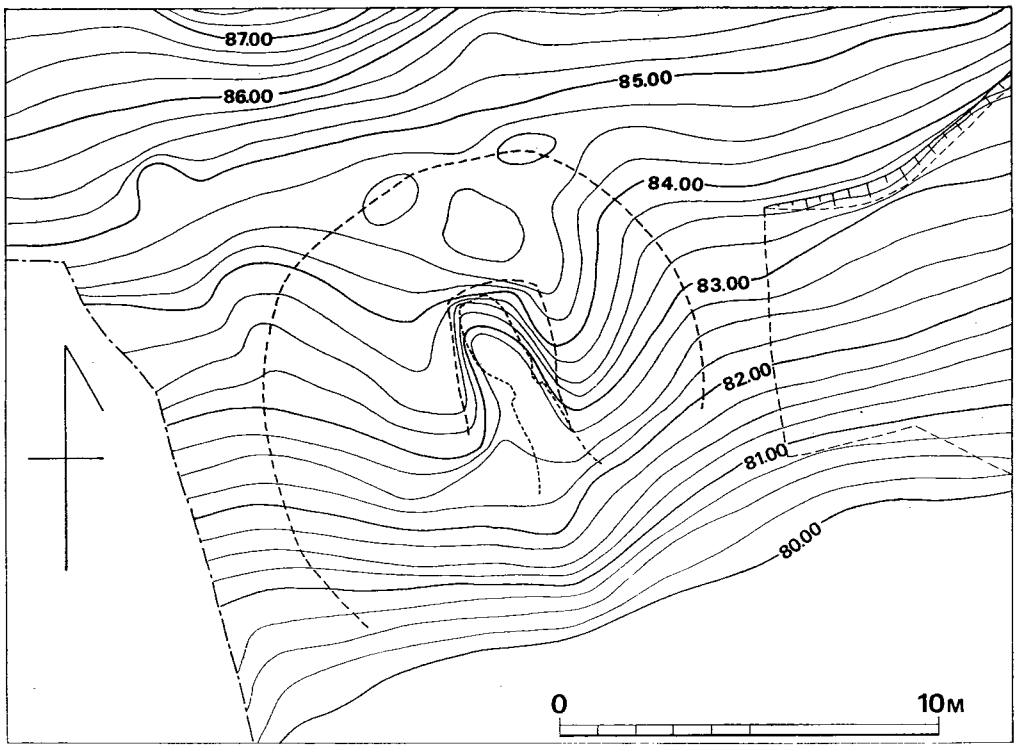


Fig. 81　小原4号墳墳丘実測図（縮尺1/200）

号墳は墳丘盛土の流出が著しく，墳丘南半部裾は確認できなかったが，径11m前後の規模を有する円墳と推測された。墳頂部には大きな陥没が認められることから石室の存在状況には期待できなかった。墳丘のみかけの高さは北裾で0.3m，東一西裾で約1.5mであった。

墳丘を築造するにあたっては，まず石室周辺を斜面に沿って地山を整形して，幅3.30m，長さ約4.50mの長方形プランを呈する墓壙を穿っている。墓壙は奥壁背後で深さ約1.30mを測るが，南端ではほとんど深さをもたない。墓壙はほぼ平坦をなしている。次に墓壙の前面に墓壙等を掘った際の軟岩混りの粘質土を墓壙底面より約30cm下位のレベルまで版築状に突詰めて盛ることによって石室構築面を広げている。

この墓壙を中心にして北側に幅1m～2m，深さ約40cm前後の馬蹄形の溝状遺構が削り出されている。

盛土はこの溝状遺構の内縁を墳丘裾として行なわれている。盛土には地山整形や墓壙・溝状遺構等を掘った際の黒色土，軟岩，軟岩混りの粘質土を用いて墳丘を形成している。

なお墓道側左右墳丘上には各々1箇所須恵器を埋納した円形土壙が検出された。

また，墳丘北裾付近から3基の土壙が検出されたが，いずれも溝状遺構及び墳丘を切ってお

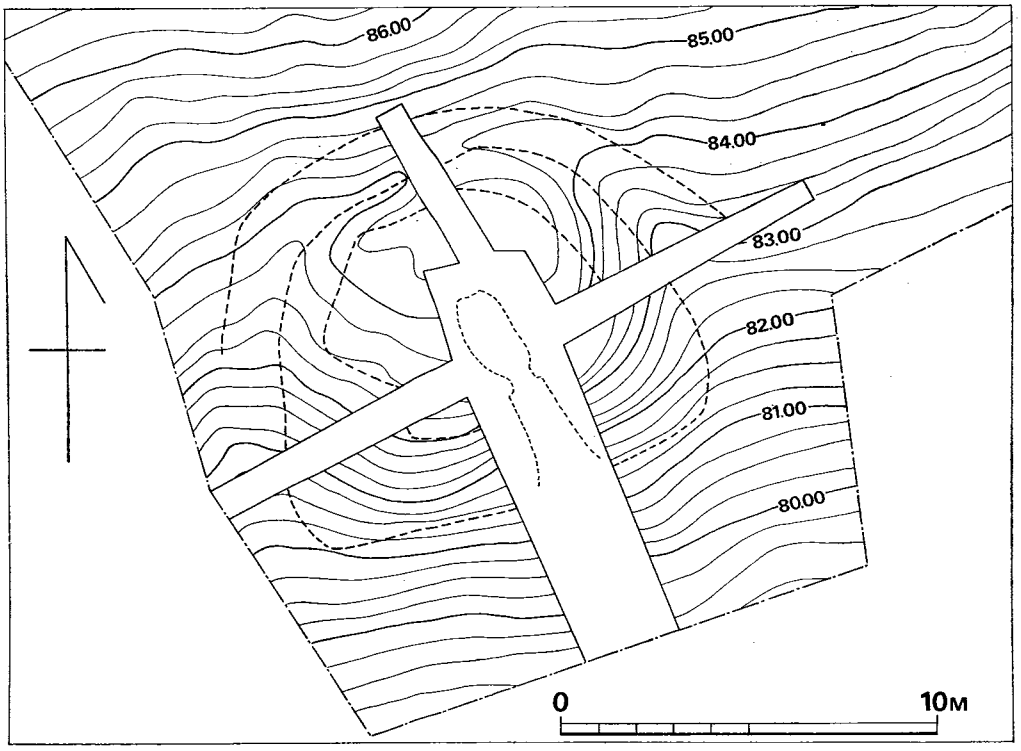


Fig. 82　小原４号墳地山面実測図（縮尺1/200）

り，３号墳周辺の土壙群と一連のものであろう。

石　室（付図**Fig.**⑪　ＰＬ.37）

石室は，急勾配をなす丘陵南側斜面に尾根に直交するように掘られた長方形プランを呈する墓壙内に構築されている。石室石材は河川工事等の用材としてほぼ完全に抜き取られており，裏込め石等を残すのみであった。しかし，床面敷石の一部と玄門の仕切り石が旧状を保っており，合わせて墓壙底面に残された腰石掘り方（抜き取り痕）により，内部主体は南方向に開口する単室の横穴式石室と推定される。石室は2.10*m*×1.20*m*前後の規模を有する長方形プランが考えられる。

墓壙底面中央部に旧状を保つ床面敷石の一部が検出されたことにより，石室床面は20*cm*～40*cm*大の扁平石を敷詰めて間隙に玉砂利を嵌入していたと推測される。墓壙底面に玄門袖石の掘り方は検出できなかったが，墓壙奥壁背後から約３*m*の距離の墓壙中軸線上に30*cm*×40*cm*大の厚みのある板状石を構えており，玄門仕切り石と推測される。

この仕切り石の前面はすぐに墓道となっているが，不注意により墓壙前面の斜面に積まれた盛土を取除いたため，墓道等の状態を調査することができなかった。

出土遺物（Fig.83・84　PL.38・48）

石室はほぼ完全に破壊されており，遺物は検出されなかったが，墓道埋土中から須恵器坏蓋（Fig.83—5），土師器坏蓋，高坏（Fig.83—11・12）が検出されている。墓道を間にした左右墳丘上には浅い土壙が各々1箇所掘られており，左側墳丘の土壙内には須恵器坏蓋，身（Fig.83—1～4，6～8）が埋納されていた。また，右側墳丘の土壙内には焼成後，底部穿孔した須恵器1（Fig.83—13）が破砕されたような状態で埋納されていた。

なお，墳丘北側の溝状遺構内から須恵器壺・甕（Fig.83—9—10）が検出されたが，出土状況から4号墳より上方に造営されている2号墳又は3号墳からの流れ込みの可能性が強い。

須　恵　器

坏蓋

Ⅰa類（Fig.83—4～6）蓋にかえりを有するもので，5・6の天井部は手持ちの箆削りを施している。口径9.0cm～10.1cm，最大径11.3cm～12.1，cm器高1.8cm～2.6cm，かえり0.4cm～0.6cmを測る。色調は外面黒灰色，内面暗灰色を呈し，外面に灰をかぶる。胎土は精選されたもの（4・6）と砂粒が目立つもの（5）が認められる。焼成はいずれも良好で，堅緻である。

Ⅰb類（83—7・8）　蓋にかえりを有するもので，Ⅰa類よりやや小形である。天井部は回転箆削りを施している。口径8.1cm～8.5cm，最大径10.4cm～10.6cm，器高2.3cm～2.5cm，かえり0.6cm～0.7cmを測る。色調は外面紫灰色，内面暗青灰色を呈する。胎土に砂粒が目立つが，焼成は極めて堅緻（8），やや軟質（7）である。

坏身（Fig.83—1・2）　口径9.4cm～9.6cm，最大径11.3cm～11.4cm，器高2.9cm～3.5cm，立上がり0.5cmを測る。2は底部から蓋受け部へ滑らかに移行する。色調は暗灰色を呈し，胎土に多量の砂粒を含む。焼成は極めて硬質である。調整は荒い。

長頸壺（Fig.83—9）　口縁部と底部を欠損する。肩部に箆描き列点文が入る。胴部最大径14.8cmを測る。色調は灰黒色を呈する。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は良好で，堅緻である。

甕（Fig.83—10・13）　13は復元高44.5cm，口径24.3cmを測る。胴部最大径は上位にあり，39.3cmを測る。薄手につくられており，底部に焼成後の穿孔が認められる。口縁部は外彎気味に立上がり，口唇部は内面につまみ出し，口唇部外面下に1条の突帯をめぐらしている。口縁部外面には3条の沈線がめぐり，櫛目が入る。胴部は外面に叩きが入り，内面に青海波文を施す。

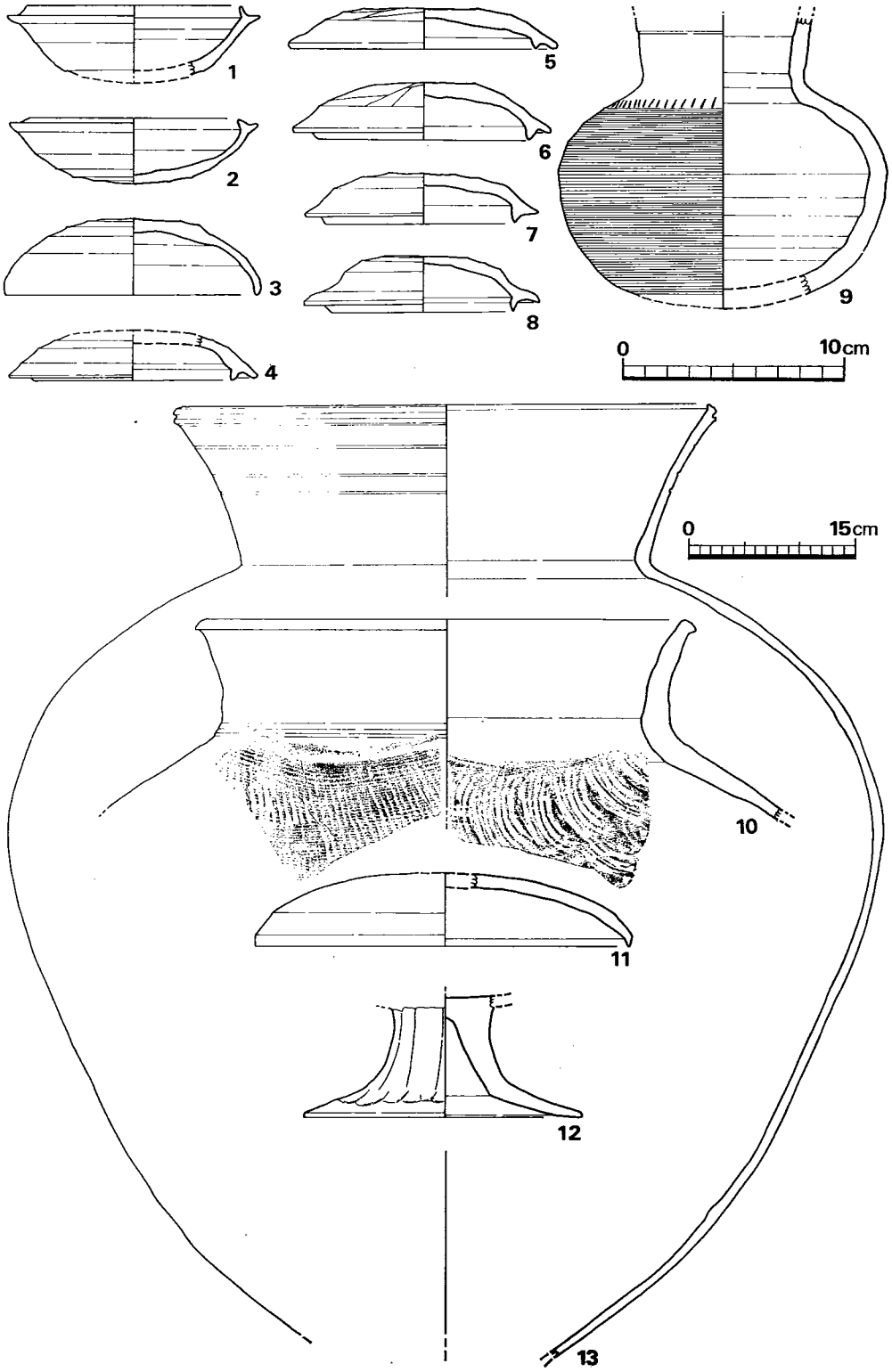


Fig. 83　小原４号墳出土土器実測図（縮尺1/3，13のみ1/6）

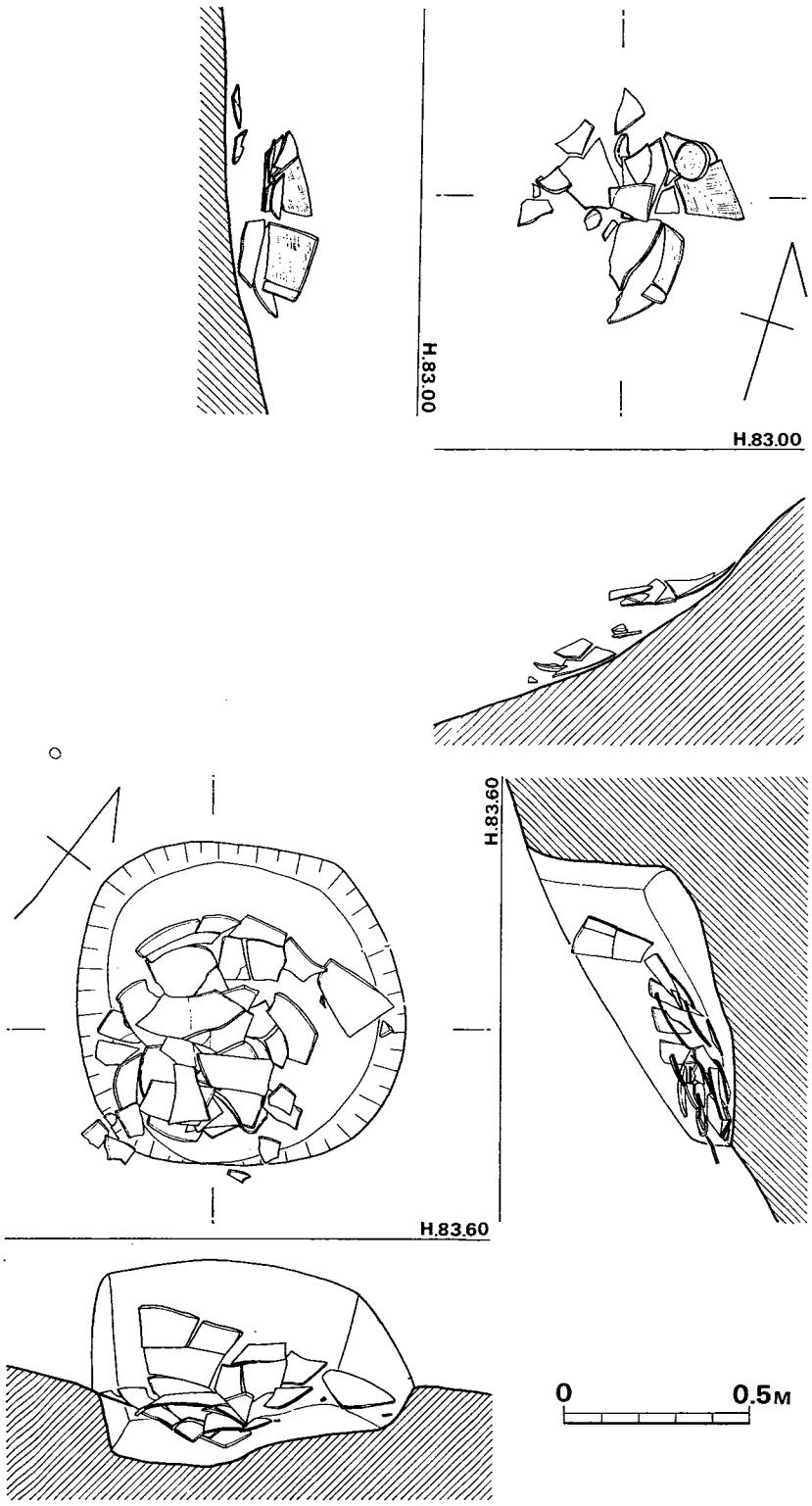


Fig. 84 小原4号墳遺物出土状態実測図（縮尺1/20）

土　師　器

坏蓋（Fig.83—11）　口径16.7㎝を測る。天井部はつまみが剝落している。天井部から口縁部への移行はなめらかで，口縁端部は軽く内側に折りまげている。焼成はやや軟質で，色調は赤茶褐色を呈する。

高坏（Fig.83—12）　坏部を欠損する。脚部は縦位の篦削りを施し，脚下位にて大きく屈曲する。胎土に多量の砂粒を含むが，焼成は非常に良好である。色調は赤茶褐色を呈する。脚裾径12.5㎝を測る。

小　　結

4号墳は1号～3号墳，5号墳が丘陵尾根に近い標高約88m付近に並んで造営されているのに対して，2号墳の下方の標高82m付近の急勾配をなす斜面に構築されている。このような地形的制約により墓壙底面は狭く，このため墓壙を穿った土を墓壙前面に盛ることによって石室構築面を広くして，石室を架構している。内部主体は単室の横穴式石室で，羨道はなく，短い石積みの基道が続くものと思われる。4号墳においても，墳丘北側に馬蹄形の溝状遺構をめぐらしており，特に急斜面に位置する4号墳にとって馬蹄形溝状遺構の果した排水路の役割は大きかったと推測される。

墓道方向左右墳丘上に埋置された須恵器は本墳の葬送儀礼に関連したものであろう。

石室内は盗掘により全く遺物が認められず，本墳の造営時期を直接判断することはできないが，墳丘に埋納された須恵器坏は第Ⅳ様式，第Ⅴ様式の特徴を示しており，六世紀終末から七世紀前半に比定できよう。

5　小原5号墳

墳丘　（Fig.71・72　PL.39）

1号墳周辺の樹木伐採後，同墳の西側に接して円墳様のわずかな高まりが認められたので，墳丘か自然地形かを判断するため，トレンチを入れた結果，表土層下から石室の一部を検出した。伐採後の地形測量では径8m前後の小円墳と思われた。墳丘の見かけの高さは，傾斜面に位置するため，墳丘南側で，墳丘頂部と墳丘裾部との比高約0.7m，北側で約0.2mを測る。墳丘断面図によれば，古墳の築造にあたって，まず石室周辺部を傾斜面に沿って地形整形し，墓壙を掘って，その墓壙の北側を囲むように馬蹄形の溝状遺構を掘っている。溝状遺構は幅0.9m～1.5m，深さ約0.2mを測り，断面は浅いU字状をなす。盛土作業はこの溝状遺構の内縁を墳丘裾とし，地山整形及び墓壙・溝状遺構を掘った際の軟岩・粘質土・黒色土を盛土としている。盛土は4層前後を数え，盛土の高さは床面から残存盛土上面まで1.20mを測る。

本墳の当初の規模は墳丘断面図によれば馬蹄形溝状遺構を含めると径8m～9mを有するが，墳丘のみでは径7m前後であったと推定される。また墳丘高は本来は2m前後を有したも

のと考えられる。

尚，馬蹄形溝状遺構の東半部は1号墳の馬蹄形溝状遺構及び墳丘の一部を切っている。

石　室（付図Fig.⑫　PL.39）

内部主体は，丘陵尾根に略直交し，主軸をN—34°—Wにとり，南東方向に開口する全長約3.8mの複室，両袖型の横穴式石室である。石室は，長さ約2.5m，幅約3m，深さ約0.7mの長方形を呈する墓壙内に構築されている。石室の残存状況は悪い。

石室は，前・後の二室と短い羨道からなる。

後室は，中軸線上で長さ約1.10m，幅は奥壁部で1.15m，玄門部で0.9m（東側壁の玄門寄りの腰石が倒れ込んでおり，復原幅は1.0m前後）を測る。

奥壁は，床面からの高さ50cmの石を立てて腰石とし，さらに西側壁との間に幅20cm，高さ50cmの方柱状の石を嵌入している。

西側壁は各々2個の用材を腰石としして用い，西側壁では二段目から小さめの石材を横積みにし，間隙を小礫をもてっ補塡している。

玄門は両側とも高さ50cm～60cmの方柱状の石材を内側に突出して袖石としており，両袖石間は48cmを測る。

前室の両側壁腰石は各々1石よりなり，前室幅は中央部で85cmを測る。羨門は玄門と同様に両側とも各々1個の方柱状の石材を内側に突出している。羨門両袖石間は48cmを測り，35cm×13cmの方柱状の小石を配して仕切り石としている。

石室の床面には二重の敷石が認められた。まず，墓壙底に粘質土を5cm程の厚さに張り，その上に10cm～30cmの扁平石を敷詰めているが，墓道方向にゆるやかに傾斜する。この下層敷石は墓道付近まで認められる。羨門間では，下層敷石の上には仕切り石がすえられている。

上層の敷石は2cm～10cm大の玉砂利を用いており，奥壁から30cm付近よりほぼ水平に羨門仕切り石付近まで敷詰めており，下層敷石との間隙には粘質土を張っている。

閉塞は羨道前面で行なわれており，10cm～30cm大の礫（転石）と粘質土を積み上げている。

出土遺物（Fig.90　PL.48・55）

当古墳はすでに盗掘を受けており，石室内には遺物がほとんど残っておらず，奥壁側床面の玉砂利敷石内から金環2個，ガラス小玉1個が検出されたにすぎない。

また羨門仕切り石寄り墓道埋土中から須恵器及び土師器の高坏各1個体ずつ検出された。

なお，出土した遺物は次の通りである。

須　恵　器

高坏（Fig. 90—2）坏部を欠損する。脚中央部に2条の沈線がめぐる。脚裾部は大きく広がり，脚裾径8.6cmを測る。茶灰色を呈しており，胎土に砂粒を多量に含む。焼成は良好で，堅緻である。

土　師　器

高坏（Fig.60—1）　坏上部を欠損する。坏底部は内彎気味に立上がる。脚部は裾部にて大きく変換して，内彎気味に広がる。脚柱部は縦位の篦削り，脚裾部は抬頭による成形調整痕を残す。脚裾径9.9㎝，赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は良好。

装　身　具

耳環（Fig.85—1・2）　いずれも銅地に金箔を施したもので，金箔の剝落が著しい。1は外径29.0㎜×27.0㎜，断面径6.5㎜×6.0㎜を測る。2は外径30.0㎜×27.0㎜，断面径6.9㎜×6.5㎜を測る。1・2はセットと思われる。

丸玉（Fig.85—3）　ガラス製で黒色を呈する。直径は13㎜を測る。

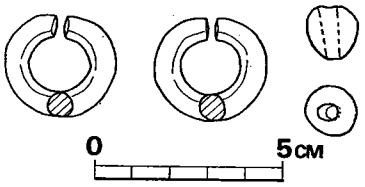


Fig. 85　小原5号墳出土装身具実測図（縮尺1/2）

小　　結

5号墳は，1号墳の西側墳丘裾を切って造営された小形の円墳である。ほぼ同一レベルに並らぶ1号～3号墳の石室構造が単室横穴式石室であるのに対して，本墳は複室横穴式石室である点が異なる。石室は小形ではあるが，石室プランは整然としており，石室内床面には二重の敷石が認められる。また石室を中心として北方には馬蹄形の溝状遺構をめぐらしている。全体として造りは丁寧である。

石室内はすでに盗掘を受けて攪乱されていたが，奥壁前面の玉砂利敷石内から金環1対とガラス小玉1個が検出されたのは幸いであった。

墓道から出土した須恵器及び土師器の高坏はその特徴から七世紀前半に比定できよう。

（松村）

6　小 原 6 号 墳

墳　　丘（Fig.86・87・88　PL.40）

樹木伐開後の墳丘のみかけの規模は径9*m*前後であった。墳丘中央部に，南北方向に2*m*×6*m*の盗掘壙があり，石室の残存状態は良くないと予想された。なお，墳丘のみかけの高さは丘陵斜面に立地するため，南側で一番高く1.5*m*，北側で0.5*m*であった。

墓壙は傾斜面を削り，南側の底い部分に土砂を埋めてほぼ水平面を形成した後に掘り込んで

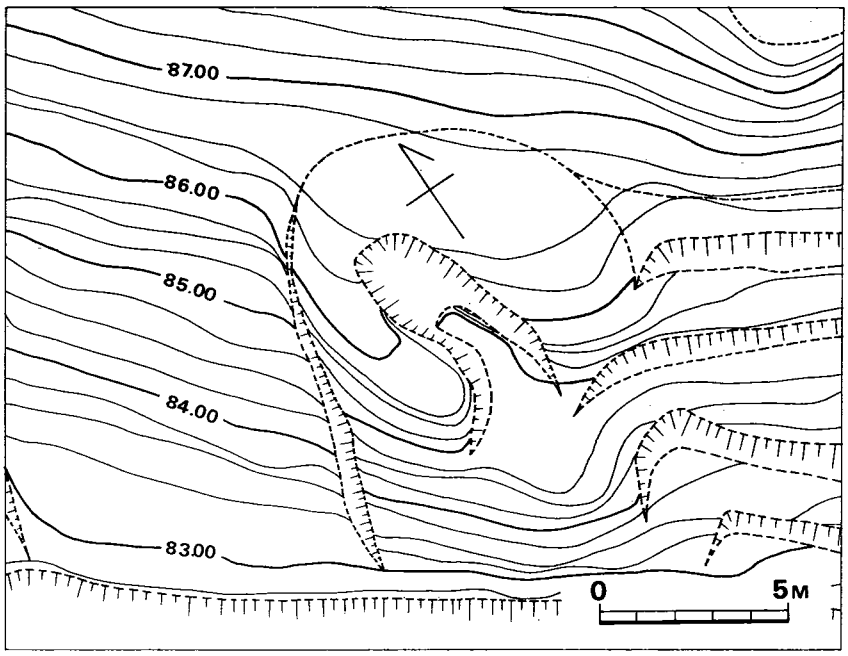


Fig. 86　小原6号墳丘墳丘実測図（縮尺1/200）

いる。旧地表を整形した時の土砂と墓壙を掘った際の土砂を積み上げて墳丘を形成している。現存する墳丘の厚みは最厚で0.8*m*である。

当初の墳丘規模は東西の墳丘断面図によれば，墳丘東側の周溝状遺構を含めて8.5*m*である。北側の墳裾は石室中心から4*m*であり，当初の墳丘だけの平面プランは径8*m*前後であったと推定される。

石　室（Fig.89　PL.40）

内部主体は南に開口する横穴式石室であった。床石を若干残して石はきれいに抜きとられていた。石室中心部はほぼ墳丘中心部にあったようである。

石室は幅約3*m*，長さ約5.5*m*の墓壙をうがち構築されている。石室は単室であったと推定され，仕切石の位置から考えて長方形で幅の狭い石室と思われる。石室入口から約2*m*の羨道が続き墓道に到るようである。

床面は石室内が荒らされているため残存状態は極めて悪い。仕切石周辺に床石が旧状に近い形で一部残っていた。床面は床石が二重に敷かれていた。追葬に際して再度石を敷いたものと考えられる。第1次の床面は第2次の床面に比べて大形の石を使用しており，第2次床面は第1次床面の上に玉石状の小石を敷いていた。遺物は第2次床面上から須恵器が出土した。第1次床面に確実に伴うと考えられる副葬品は検出できず，盗掘の折に持ち出されたと考えられる。

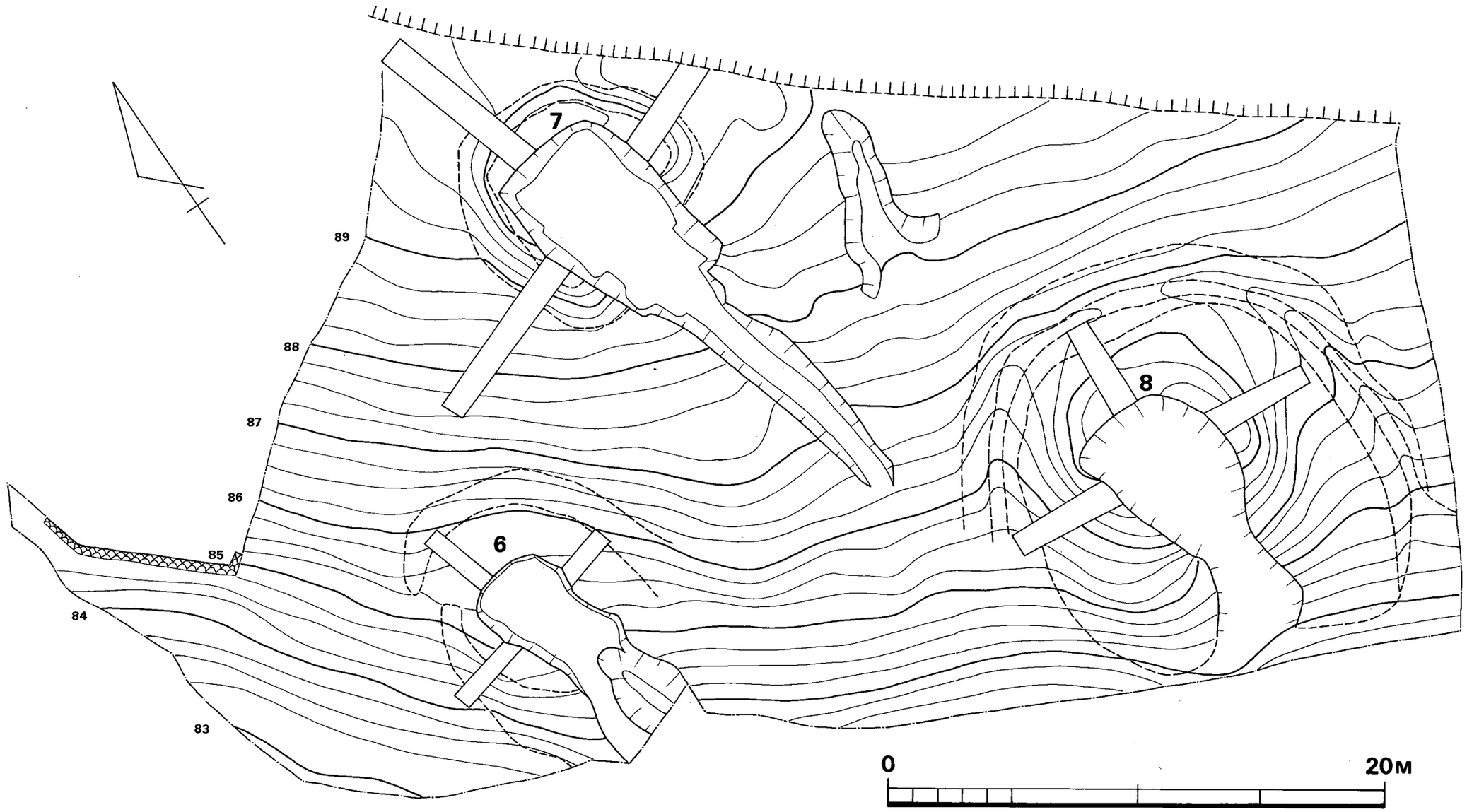
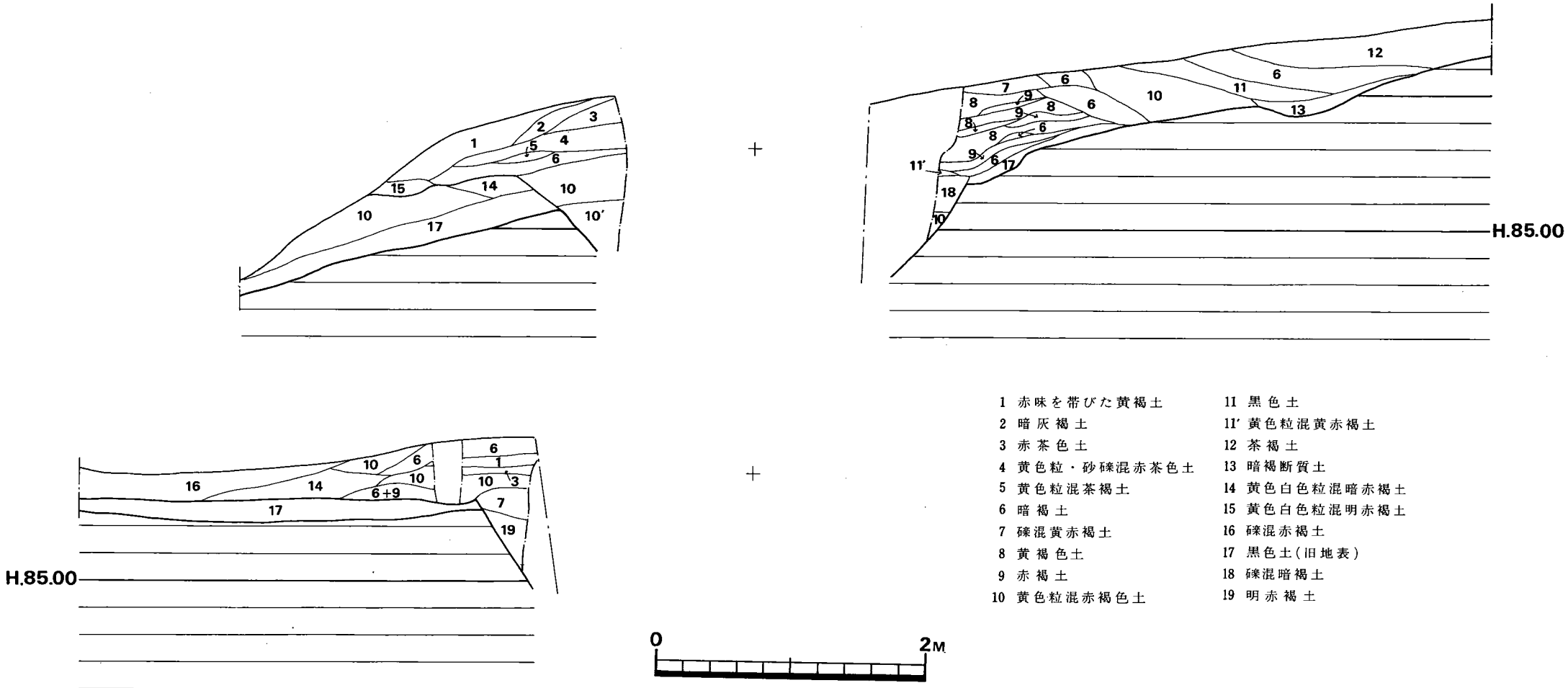


Fig. 87 小原6～8号墳地山面地形実測図（縮尺 1/200）



1 赤味を帯びた黄褐土
2 暗灰褐土
3 赤茶色土
4 黄色粒・砂礫混赤茶色土
5 黄色粒混茶褐土
6 暗褐土
7 礫混黄赤褐土
8 黄褐色土
9 赤褐土
10 黄色粒混赤褐色土
11 黒色土
11′ 黄色粒混黄赤褐土
12 茶褐土
13 暗褐断質土
14 黄色白色粒混暗赤褐土
15 黄色白色粒混明赤褐土
16 礫混赤褐土
17 黒色土(旧地表)
18 礫混暗褐土
19 明赤褐土

Fig. 88 小原6号墳墳丘断面実測図(縮尺 1/40)

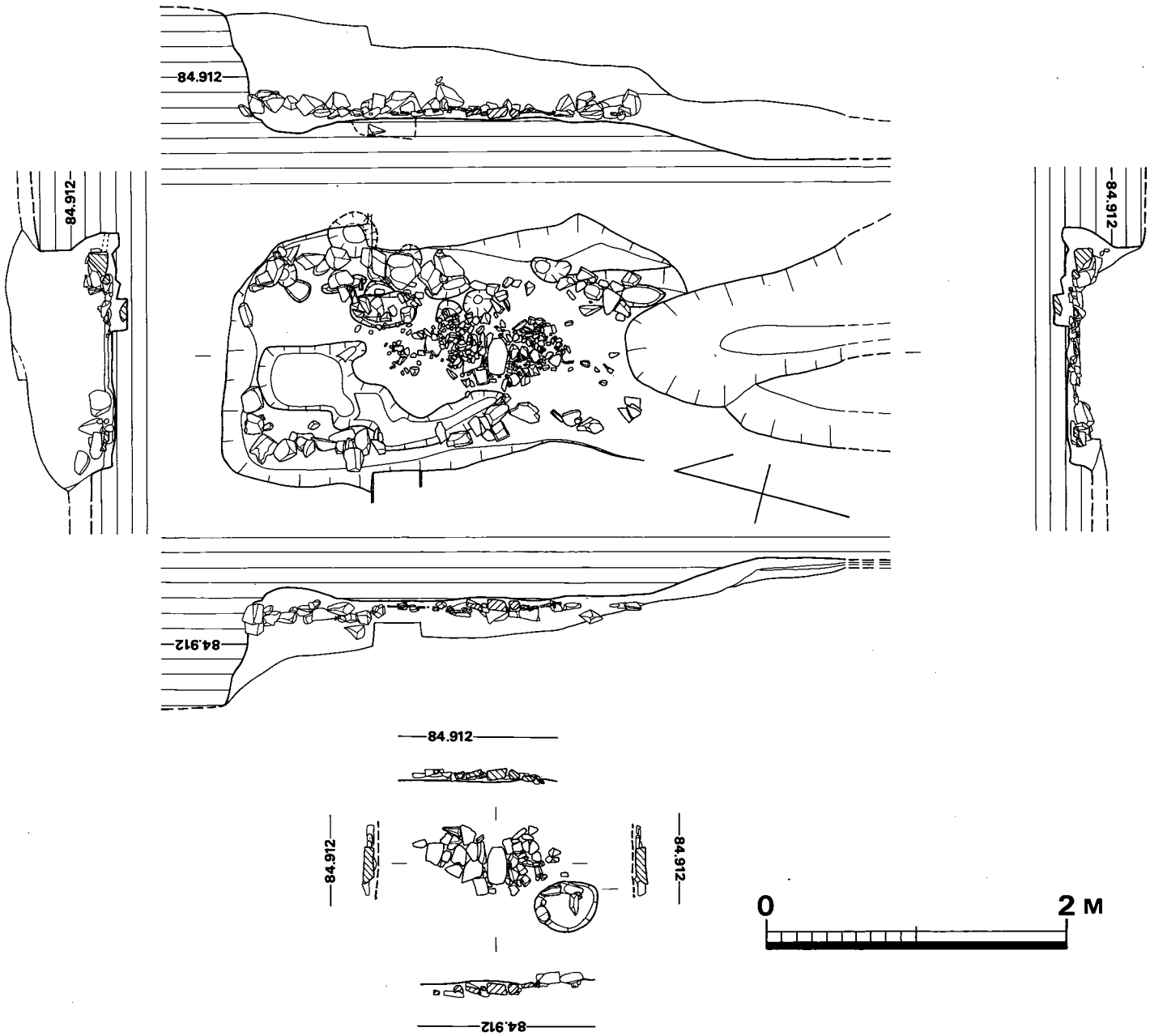


Fig. 89 小原6号墳石室実測図(縮尺 1/40)

出土遺物（Fig.90　ＰＬ.41・49・50）

盗掘を受けており，出土品は全て須恵器であった。本来は装身具や武器等の副葬がなされていたと推定されるが，全く検出することができなかった。すべて，羨道から墓道と推定される部分からの出土である。特にFig.90—6・9は第2次床面からの出土であり，他も床面に近いと思われる部分から出土した。

須　恵　器

坏身（Fig.90—3～8）

坏身は6個体分以上出土した。全て有高台の坏身で口径は13㎝前後，器高5.8㎝～4.7㎝の間にある。高台はふんばっており，しっかりとしたつくりである。6・7は他に比べて高台のつくりはややひ弱である。体部はゆるやかに斜め上方にのび，口縁部は外反する。ただし，3だけは体部のつくりが他と異なり，体部は内彎し，体部中位やや上部で屈折して口縁部にいたり，口縁部も内彎している。4・5は器肉が厚くボテッとした印象をうける。外底面はナデており，5・6を除いて体部下半はヘラケズリしている。他の部分はヨコナデおよびナデ調整である。ただし，5・6はヘラケズリはなされてなく，特に6は体部下半にカキ目がみられる。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好で硬質にして堅固である。6は灰をかぶっている。全体に暗灰色を呈し，中には黒色の光沢を放つものもある。

図示できなかったが，他の破片についても同類である。

坏蓋（Fig.90—9～17）

9個体分出土した。全てつまみを有する。口辺部径は13㎝～16.5㎝の間にある。14・15は小片なので復元口径は正確ではない。器高は9が4.8㎝で一番高く，他は3㎝内外である。つまみは断面が半円形に近いものと凸形の2種類がある。前者の蓋の返りは断面三角形を呈ししっかりとしているが，後者のはやや退化しているようである。器形についても二種あり，天井部から口縁部までほぼ直線的な形態なものと天井部をほぼ平坦につくり，天井部端で口縁部に向かって下方に屈折して口縁部を平坦につくるものとがある。前者はつまみの断面が半円形でかえりがしっかりとした蓋に多く，後者はつまみの断面が凸形でつまみのやや退化したものに多いようである。9・10・14・15は天井部はヘラケズリされ，天井内面はナデ，他の部分はヨコナデによる調整を施している。11～13・16・17は天井部にカキ目がみられ，他の部分の調整は前者と同様である。全体に砂粒を多量に含み器面はザラつくが焼成良好で硬質である。ただし17だけは焼きがあまく軟質である。

高坏（Fig.90—18・19）

3個体分出土したが図示したのは2個体である。

18は口縁部径11.7㎝，底部径8.3㎝，器高8.2㎝を測る。坏部は底部から体部がほぼ直線的に

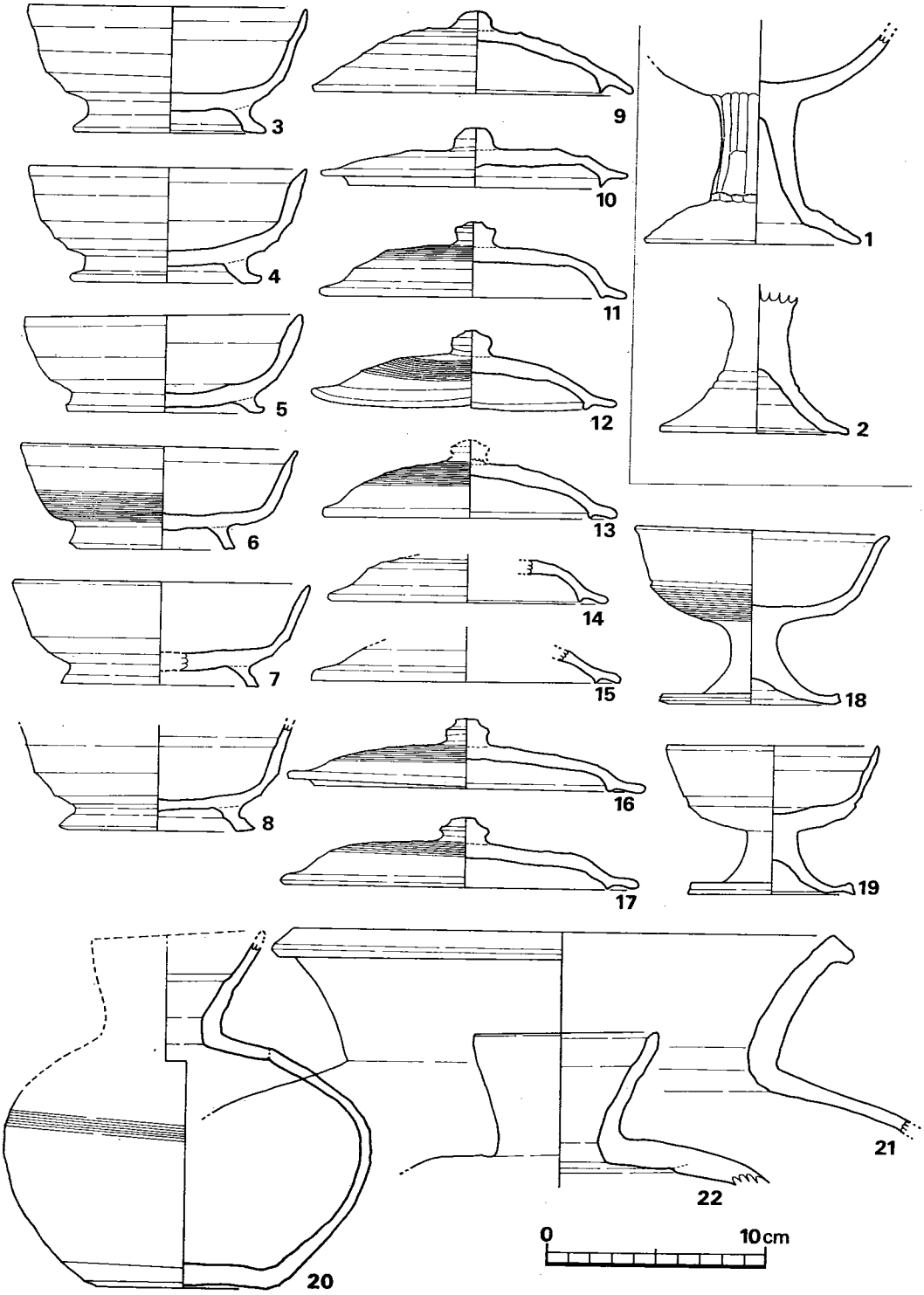


Fig. 90　小原5・6号墳出土土器実測図（縮尺1/3　1・2は5号墳出土）

斜上方に伸び口縁部が外反する。体部中位やや下に幅3㎜の凹線を施し，凹線から下にカキ目による調整をしている。脚部は短かく完全に中空ではない。脚部底縁端に1条のヘラ描き沈線が浅く巡る。調整はヨコナデである。砂粒を含み焼成良好で硬質にして堅固である。よごれた暗灰色を呈し，灰をかぶっている。

19は口縁部径9.7㎝，底部径7.6㎝，器高6.9㎝を測る。坏部は底部に比べて体部の器肉は薄く，強いヨコナデのため体部中位と口縁下に稜線が生じ，口縁部は内彎している。体部中位やや下に幅5㎜の凹線を巡している。脚部は小さく18と似たつくりである。坏部内底面はナデ，他はヨコナデ調整をしている。胎土は本墳出土須恵器の中で砂粒の含有量が目立って少ない。焼成は良くなく軟質で暗灰色を呈する。

図示しなかった高坏は18よりやや小形だが同じつくりである。

平瓶（Fig.90—20・22）

20は胴部最大径16.7㎝，現器高15.6㎝を測る。頸部から胴部中位やや下までの間を，5～6条を1単位としたカキ目がめぐる。底部付近は ヘラケズリ されている。胎土に砂粒を多く含み，器面はざらつく。焼成はあまりよくなくやや軟質で暗灰色を呈す。

22は小片だが，20より大形品である。焼成，胎土，色調とも20と同じである。

双方共に羨道右壁から底面から浮いた状態で出土した。

甕（Fig.90—21）

東南側墳裾から出土した。口縁径26.2㎝を測るが破片のため器高は不明。内外面とも頸部から口縁部はヨコナデをし，肩部内外面はタタキを行っている。胎土に砂粒は少なく，焼成良好で堅固である。黒灰色を基調とするが，頸部以下の外面には自然釉が見られる。

小　　結

本墳は石室の破壊が心ゆくまで行なわれており，第1次床面に確実に伴う副葬品は検出できなかった。出土土器は追葬時のものであり，先述したように6・9は第2次床面に密着して出土している。これら土器群のうち坏身・坏蓋には若干の形態差が認められる。しかし，高台のつくりが他の坏身よりやや新しい傾向にある6とかえりのしっかりした古い傾向にある蓋9が重なり合って出土しており，使用年代は同一と考えられ，それらの間に時期差を認めることはできない。よってこれらの土器は追葬時に一括して副葬されたと考えられる。これらの土器のうち最も形態差を示す坏についてみると，高台がしっかりとしてふんばっており，小田富士雄氏編年の第Ⅵ期の古い部分にあたり，7世紀後半代に位置づけられる。[①]

6号墳の構築年代は不詳であるが，7世紀後半代に1回の追葬があったということが判明した。ただし，群集墳形成の大勢から考えて，6世紀終末～7世紀におくことをあながち否定はできない。

註①　小田富士雄「福岡県八女郡塚ノ谷窯跡群」1969八女市教育委員会

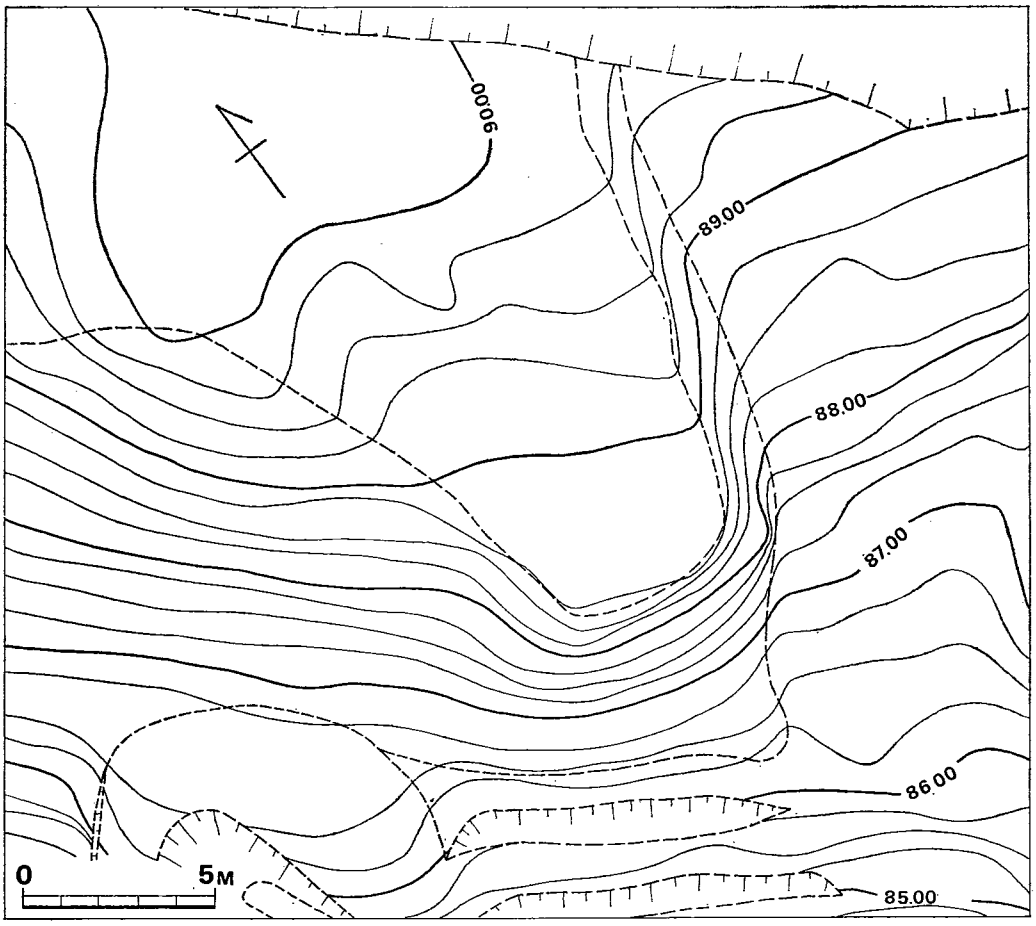


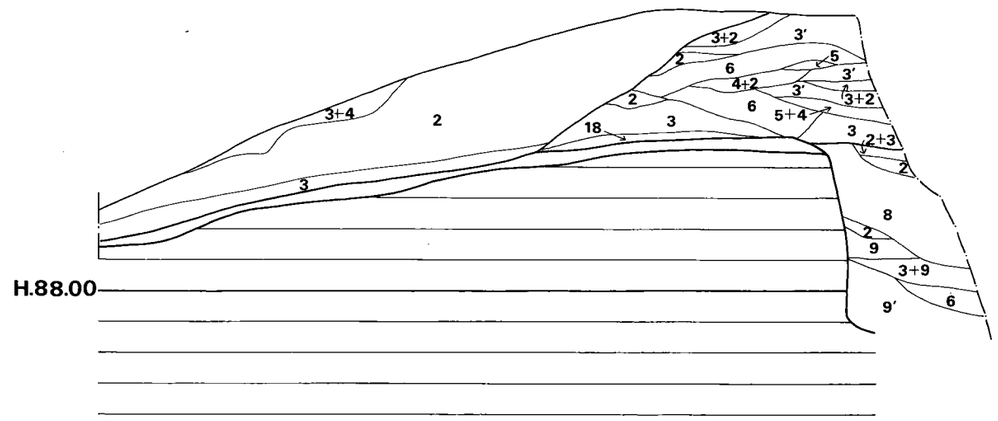
Fig. 91　小原7号墳墳丘実測図（縮尺 1/200）

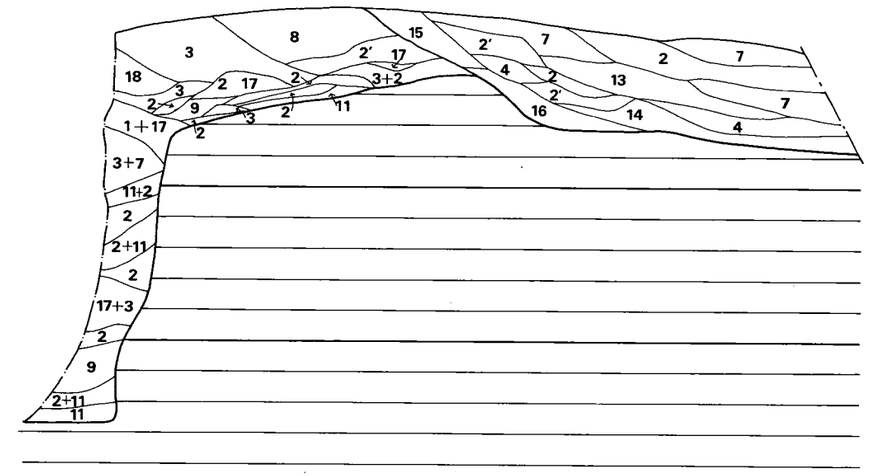
7 小原7号墳

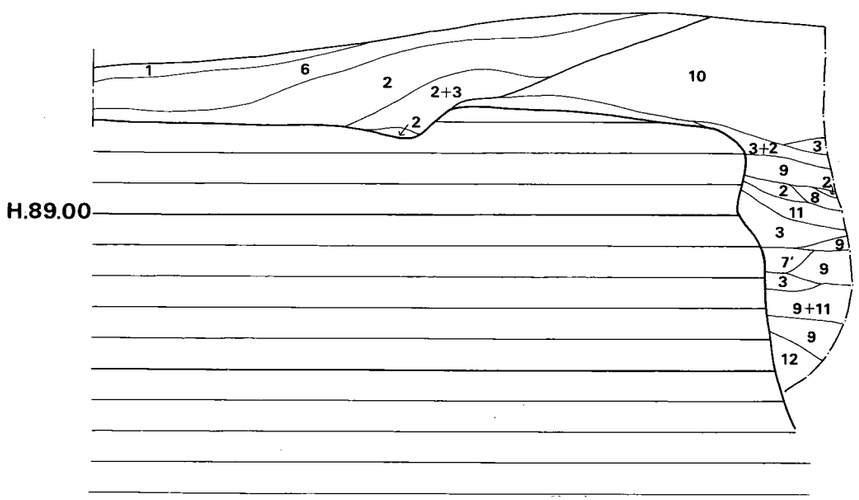
墳　丘 (Fig.91・92・87　PL.41・42)

樹木代開後の状態は，古墳にふさわしい高まりは見せず，8 *m*×15*m*程の平坦面が見られ，その三方に傾斜面があった。その傾斜面の比高差は1 *m*～2 *m*前後であった。墳丘が部分的に削平され，低い部分に土砂を埋めたためできた平坦面である。

墳丘盛土は傾斜面の低い西側に一番良く残っていた。それでも墓壙掘方の肩から 1.8*m*までしか残ってなく，削平された部分と本来の盛土の上に黒色土を埋め立てていた。東側トレンチの土層断面でも明確な墳裾をつかむことはできなかった。北側トレンチでの土層には墳丘盛土は残っていなかった。よって本墳の規模は不詳である。







1 表 土
2 黒 色 土
2' 黄色土混黒色土
3 赤 色 土
3' 黒褐色土を僅かに含む赤色土
4 黄 褐 色 土
5 灰 色 土
6 地山礫混赤色土
7 茶 褐 色 土
7' 茶褐色粘質土
8 バイラン土混赤色土
9 黄色バイラン土
9' 地山礫混黄色バイラン土
10 赤色土と黒色土の互層
11 赤色バイラン土
12 黄黒色バイラン土
13 黒 褐 色 土
14 灰 黄 色 土
15 黄色土混灰褐土
16 黒色土混黄色土
17 バ イ ラ ン 土
18 赤色土混黄色土

Fig. 92 小原7号墳墳丘断面実測図(縮尺 1/40)

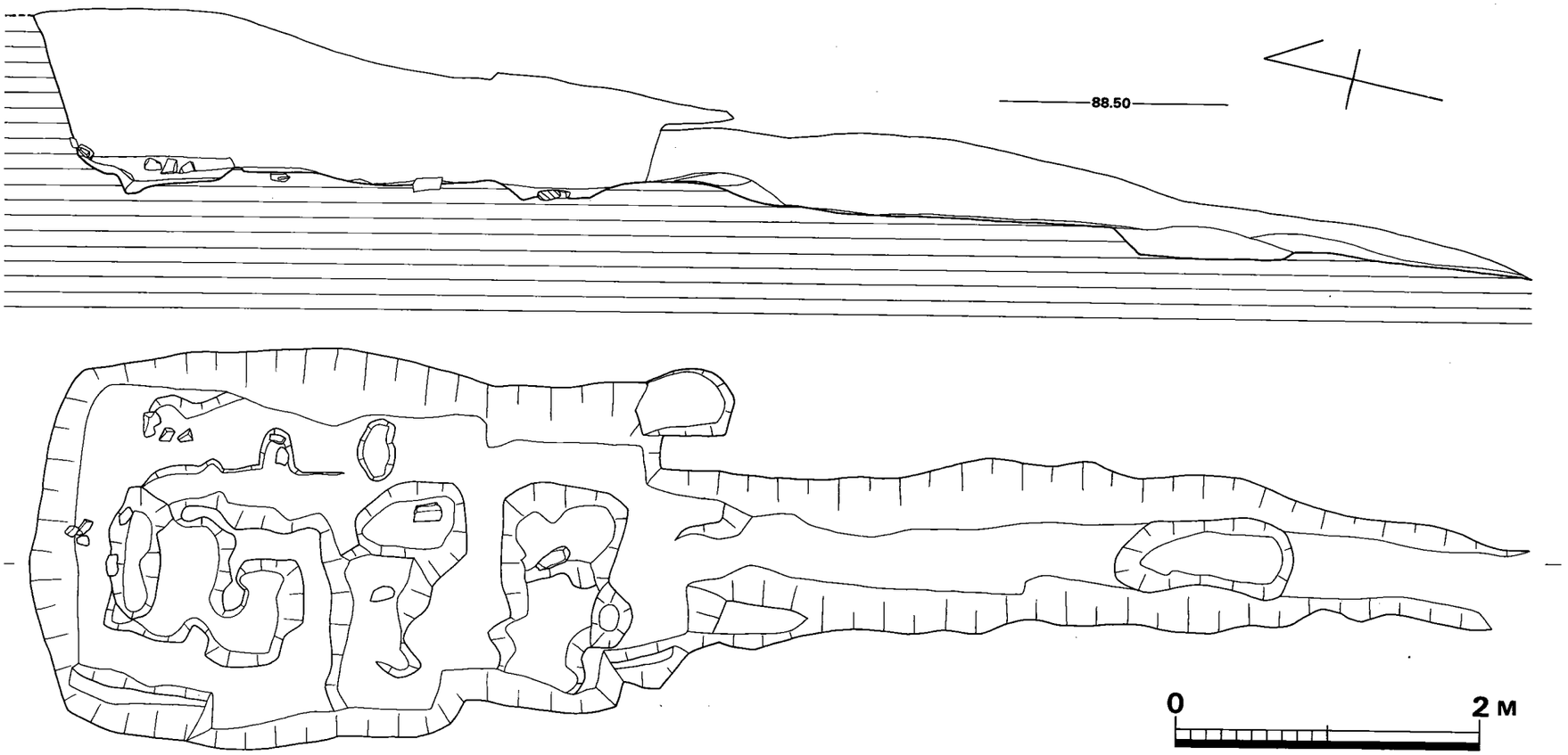


Fig. 93 小原7号墳石室掘方実測図(縮尺 1/40)

石　室 (Fig.93　PL.42)

内部主体として南に開口する横穴式石室が古墳内にかって存在した。しかしながら，石材を全く残さぬ程に見事に破壊されつくしている。

墓壙は旧地表を若干剝いで整形した後に地山に深く穿れている。上端面での幅5*m*前後，長さ8*m*で，これに長さ11*m*の墓道が続く。内部主体は石室掘方の大きさからみて複室構造の横穴式石室であったと推定される。

出　土　遺　物 (Fig.94・95・96　PL.51～53・55)

石室掘方内埋土から石包丁2個，盗掘時の石室内埋土の排土中から土師器高坏・坩・埦および須恵器の台付長頸壺，墓道から坏蓋等が出土した。石包丁は墳丘盛土に含まれていたものが盗掘時に混入したため石室掘方内から発見されたものと思われる。

石包丁 (Fig.94—1・2)

1は両端を欠損しているが長さ10*cm*，幅 4.8*cm*を測る。2は両端および刃部を欠損する。共に7号墳構築の際に周辺の弥生時代の遺構を破壊して盛土したための出土と思われる。

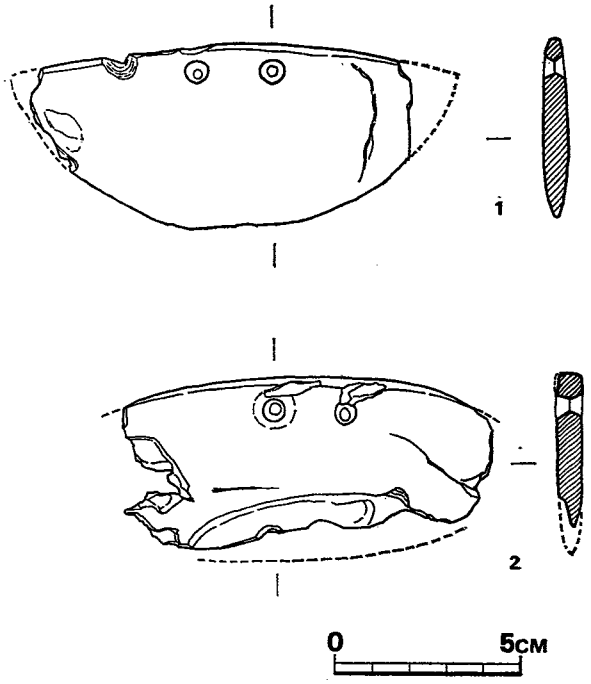


Fig. 94　小原7号墳出土石器実測図（縮尺 1/2）

須恵器

坏蓋 (Fig.95—6)　墓道出土で口径12.8*cm*，器高 4.3*cm*を測る坏蓋である。外面にヘラ描き沈線が3条巡る。天井部外面はヘラケズリ，内面はナデ，他の部分はヨコナデをしている。胎土に砂粒を多く含み焼成良好である。

脚台付長頸壺 (Fig.95—7)

口縁部径10*cm*，胴部最大径14.6*cm*，器高は28.9*cm*を測る。壺底部は丸底でヘラケズリをしている。胴部最大径は胴部中位やや上にあり，頸部下半はほぼ直立し口縁部に向かってやや外反しながら口縁部に到る。口縁部はやや内彎気味に直立し，端部を丸くおさめる。口縁下に，上下各一条の凹線にはさまれてヘラによる刻目が1巡する。刻目の数は74個以上である（1部欠損しているので正確な数は不明）。胴部中位にも同様な刻目がめぐ

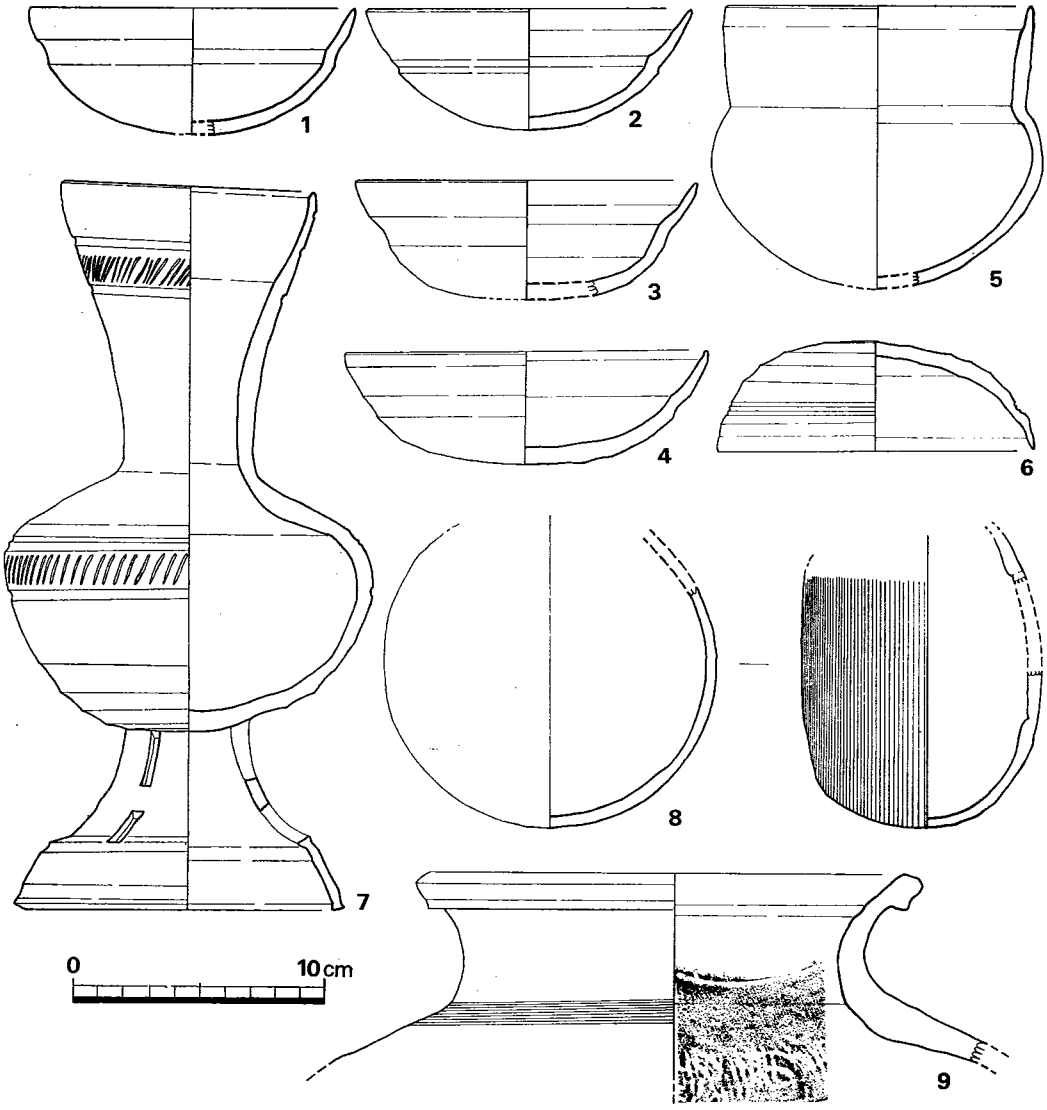


Fig. 95　小原7号墳出土土器実測図①（縮尺 1/3）

り，刻目の上に2条，下に1条の凹線がめぐる。刻目の総数は84個である。調整はヘラケズリの部分を除いて，内底面がナデ，他はヨコナデである。脚部は高さ7㎝を測り，2段の透しが3ケ所にある。胎土に若干の砂粒をまじえ，焼成極良で硬質にして堅緻である。全体に黒褐色を呈する。

提瓶（Fig. 95—8）胴部径13.2㎝を測る。把手はつかないようである。胴部にはカキ目を施している。砂粒を多く含み焼成良好である。

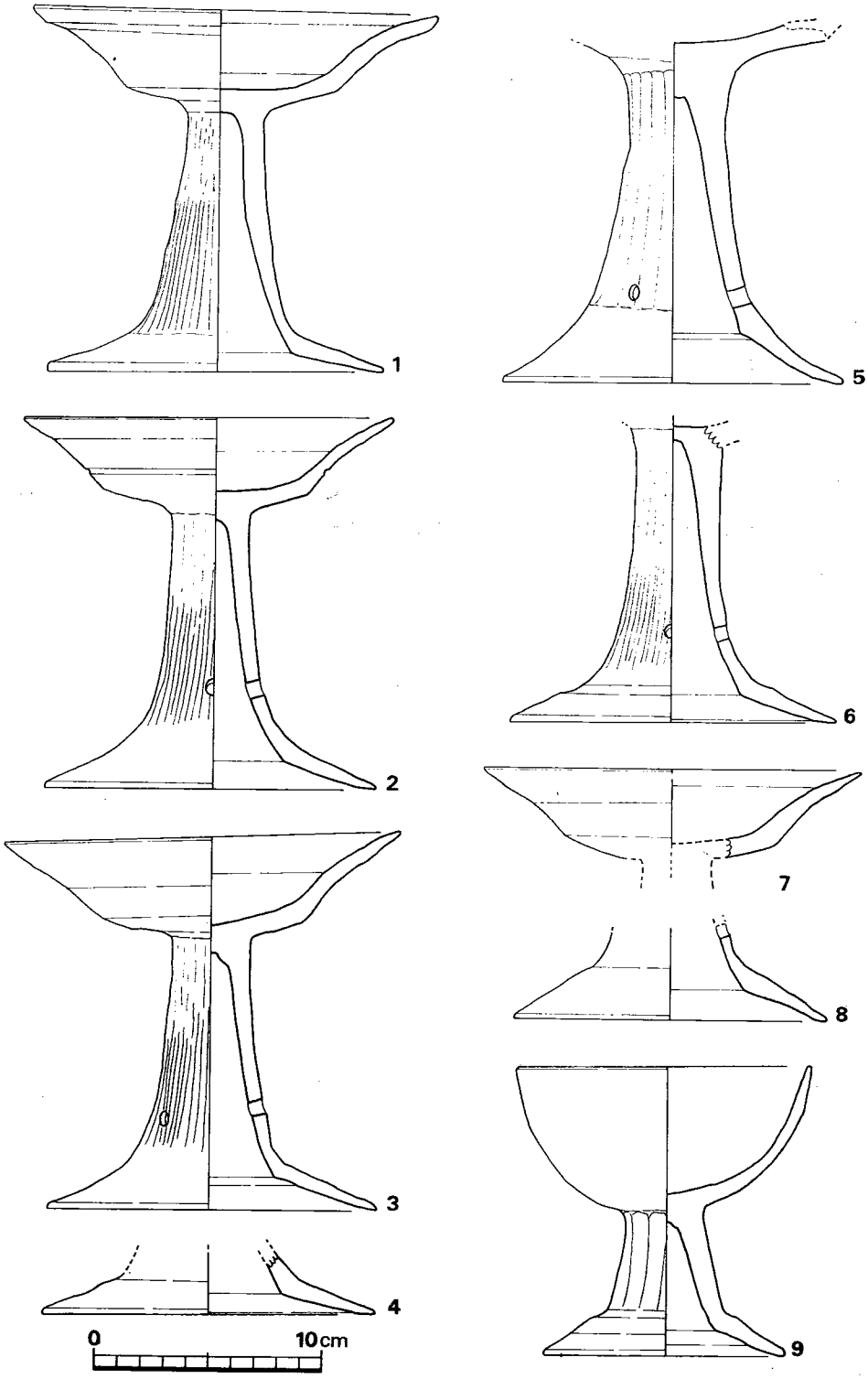


Fig. 96　小原７号墳出土土器実測図②（縮尺 1/3）

甕（Fig. 95—9）　口縁部径19cmを測る甕である。肩部にカキ目を施し，それ以下はタタいている。他はヨコナデである。焼成良好で堅固である。

土師器

埦（Fig.95—1～4）　1～3は口径13cm，器高5cm，4は口径14.5cm，器4.5cmを測る。器表面がモロく，剝離しているため調整痕は明瞭には残っていないが，底部はヘラケズリされ，体部上半はヘラミガキをしているようである。外面は横方向のヘラミガキだが内面は縦方向あるいは斜面方向で一定しない。体部は中位で一度屈接するため，稜線が内側にみられる。全体に焼成はよく暗茶橙色を呈している。

坩（Fig.95—5）　全体の½を残す破片で，復元口径12.5cm，同器高11.3cmを測る。底部は丸底だと思われ，胴部最大径は胴部中位より上にあり13.4cmを測る。頸部から口縁部にかけてはほぼ直立し，口縁部は先端に向かって厚みを減じてやや内彎する。体部はヘラケズリされ，他はヨコナデである。器面は剝離が目立ち，焼成は悪く軟質である。

土師器

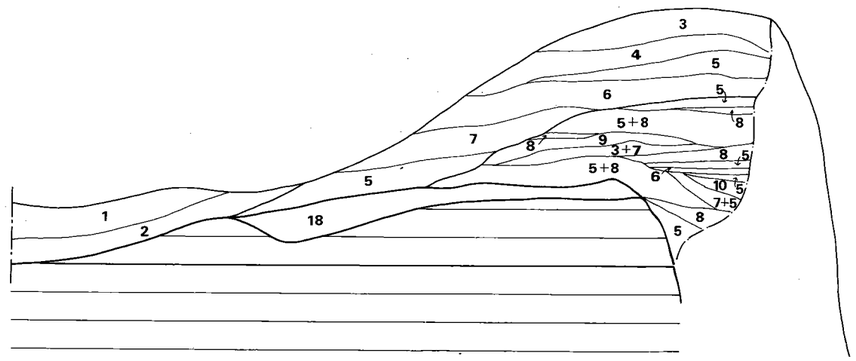
高坏（Fig.96—1～9）　完形品4個体を含めて8個分ないし9個分を検出した。器形は2種類あり，1～8の坏部が浅く脚部の長いものと，9のように坏部が深く埦状を呈し脚部の短いものに分たれる。

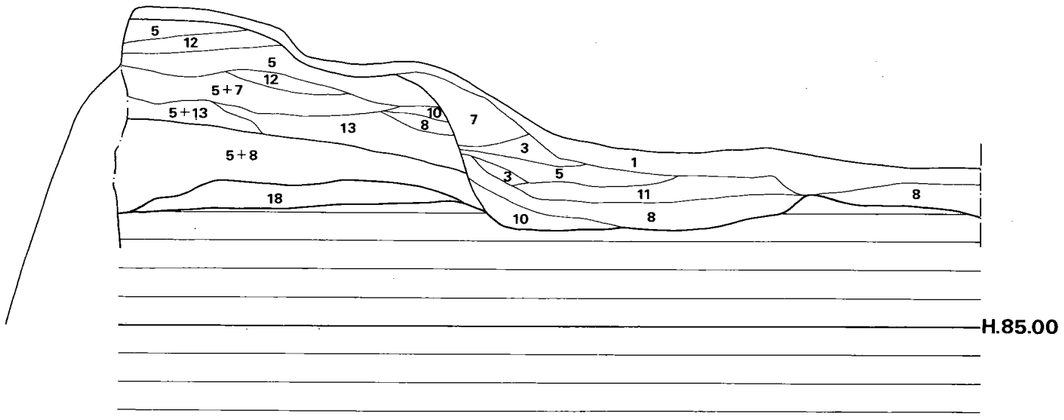
1～8の高坏は坏部および脚部のつくりは基本的には同じである。坏部については底部と体部を境に屈折して体部は外反し，口縁部に到って外反の度合いを強める。1を除いて口唇部は薄くつくられている。2は体部下半に一条の沈線をめぐらしている。5は他に比べて坏部は大きいようであり，器肉も厚い。調整は内底面はナデ，他はヨコナデのようである。脚部は中空で側面形はラッパ状を呈する。円形透しの全くないもの（1），円形透し3個のもの（3・5），円形透し4個のもの（2・6）の3種ある。しかし，脚部の基本的な形態は同じである。調整は縦方向のナデであるが，5だけは縦方向のヘラケズリである。脚部下部の屈折した部分以下は指で押さえ，ヨコナデをしている。坏部口縁径は17cm前後，器高は16.5cm前後である。焼成はよくなく軟質であり，茶橙色を呈す。

9は口縁部径13.2cm，器高12.7cmを測る。坏部は埦状で深い。脚部は短かく太めで全体に安定感がある。脚部は縦方向のヘラケズリがなされ，他はヨコナデおよびナデによる調整を行っている。焼成はよくなく軟質で茶橙色を呈す。

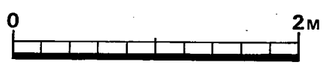
小　結

本墳もまた見事に盗掘され，その後地ならしまでして平坦面をつくっている。そのために石材は全て抜き取られ，墓壙床面も荒らされている。よって，腰石の掘り方から石室構造を正確





1 表　土
2 黒色土
3 茶褐色土
4 淡灰色土
5 赤色土
6 暗灰色土
7 淡茶褐色土
8 黒色土
9 炭混暗灰色土
10 暗茶褐色土
11 黄褐色土
12 淡黄色土
13 暗黄褐色土
14 礫混茶褐色土
15 暗褐色土
16 明茶褐色土
17 黒褐色土
18 黒色土(旧地表)



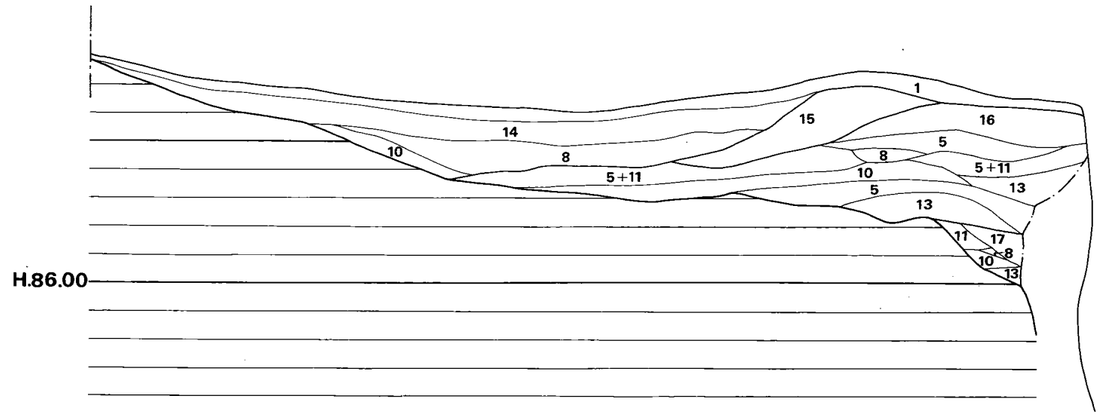


Fig. 98　小原8号墳墳丘断面実測図(縮尺 1/40)

に推定するのは困難であり，石室掘り方が5 m × 8 m と大形であるため，複室構造である可能性があると想定する。もし，単室の横穴式石室ならば，かなり大形の石室であったであろう。

次に本墳の構築時期であるが，墓道で検出した須恵器坏蓋（Fig. 95—6）が構築時のものであるならば，6世紀後半代に本墳は成立したと考えられる。

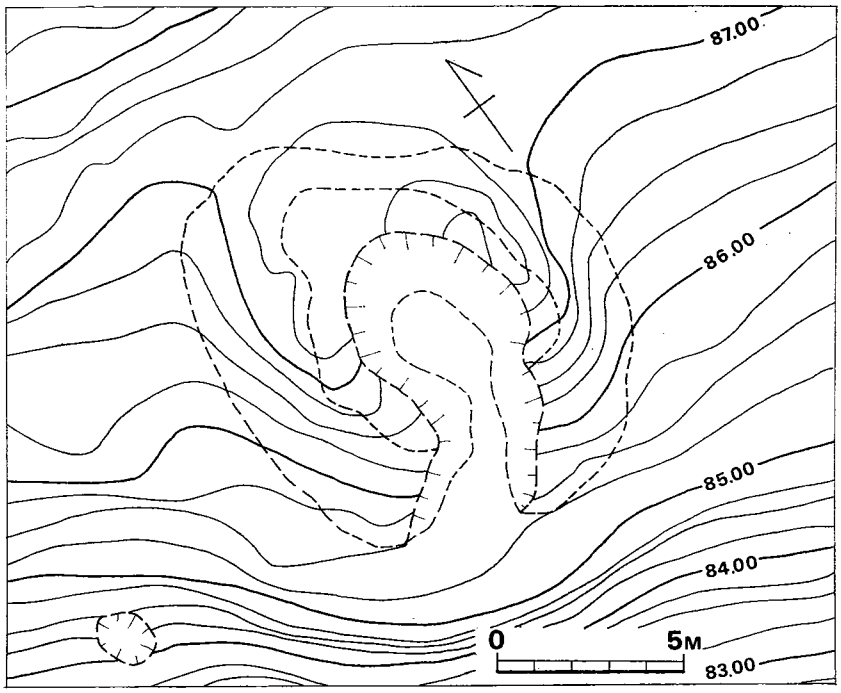


Fig. 97　小原7号墳墳丘実測図（縮尺 1/200）

8　小原8号墳

墳　丘（Fig. 97・98・87　PL.43）

樹木伐開後の見かけの墳丘規模は東西径10.5m，南北径12.5mであり，見かけの高さは最も比高差のある南側で2 m，北側で 0.6m程であった。平面形は不整円形で，墳頂部から南北方向に幅4 m，長さ8 mの盗掘壙があった。

墓壙を穿つ前に周辺地形を若干改変している。すなわち，墳丘北側では旧地表を全く残さないまでに削平し，墳丘東西は旧地表層内まで削平して墓壙掘り込み面を同レベルに近づける努力をしている。石室を構築した後に第1次の盛土がなされており，石室東側土層に明確に認められ第1次墳丘を形成している。更に，当初設計した規模の墳丘をつくるために第1次墳丘の

上に土を盛り，第2次的な墳丘をつくっている。傾斜面に構築されているため，レベルの高い北側に半月形の周溝が巡る。このため，墳裾は明確であり，当初の墳丘規模径15*m*，高さは南側で3*m*以上あったようである。

石　室（Fig. 99　PL.43）

南に開口する横穴式石室がかって存在したのであるが，現在は，石材が全く残らない程に心憎いまでに破壊されている。恐らく平面プランは正方形に近い単室の横穴式石室であったろうと思われる。石室には1.5*m*程の羨道が続き，更に2*m*程の墓道が接続していたようである。

出　土　遺　物（Fig.100・101　PL.54・55）

破壊が床面にまで及んでいるので，副葬品はすべて移動した状態で出土した。

出土遺物は金銅製耳環1，碧玉製管玉1，ガラス製小玉1，須恵器である。須恵器は墓道埋土中および墳裾から出土した。

装身具

耳環（Fig. 100—1）　石室床面攪乱土中から出土した。全体の¼を残す破片である。中空の耳環で，銅の上に金を貼っている。厚さは1㎜強で，復元径は3㎝強である。

管玉（Fig. 100—2）　石室床面の攪乱土中から出土した。碧玉製で長さ2.8㎝，径9.9㎝を測る。穿孔は片方からであり，孔の長径0.4㎝，短径0.2㎝である。研磨が行き届き，端部はすべて角がとれている。

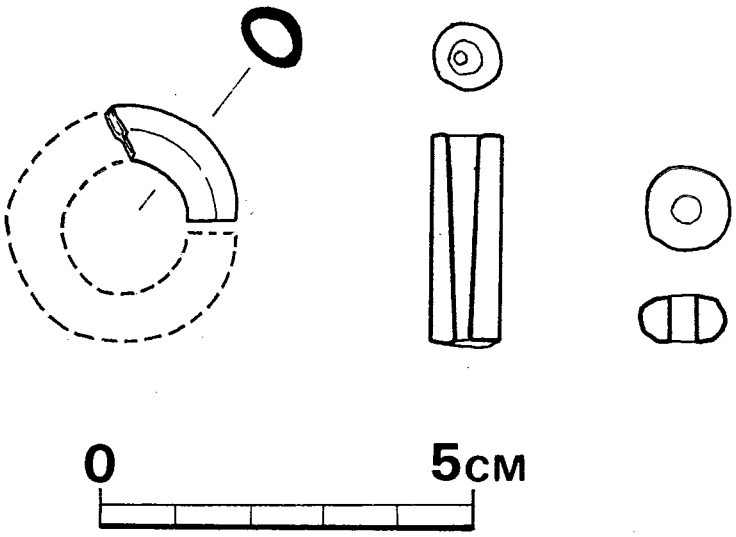


Fig.　100　　小原8号墳出土装身具実測図　（縮尺 1/1）

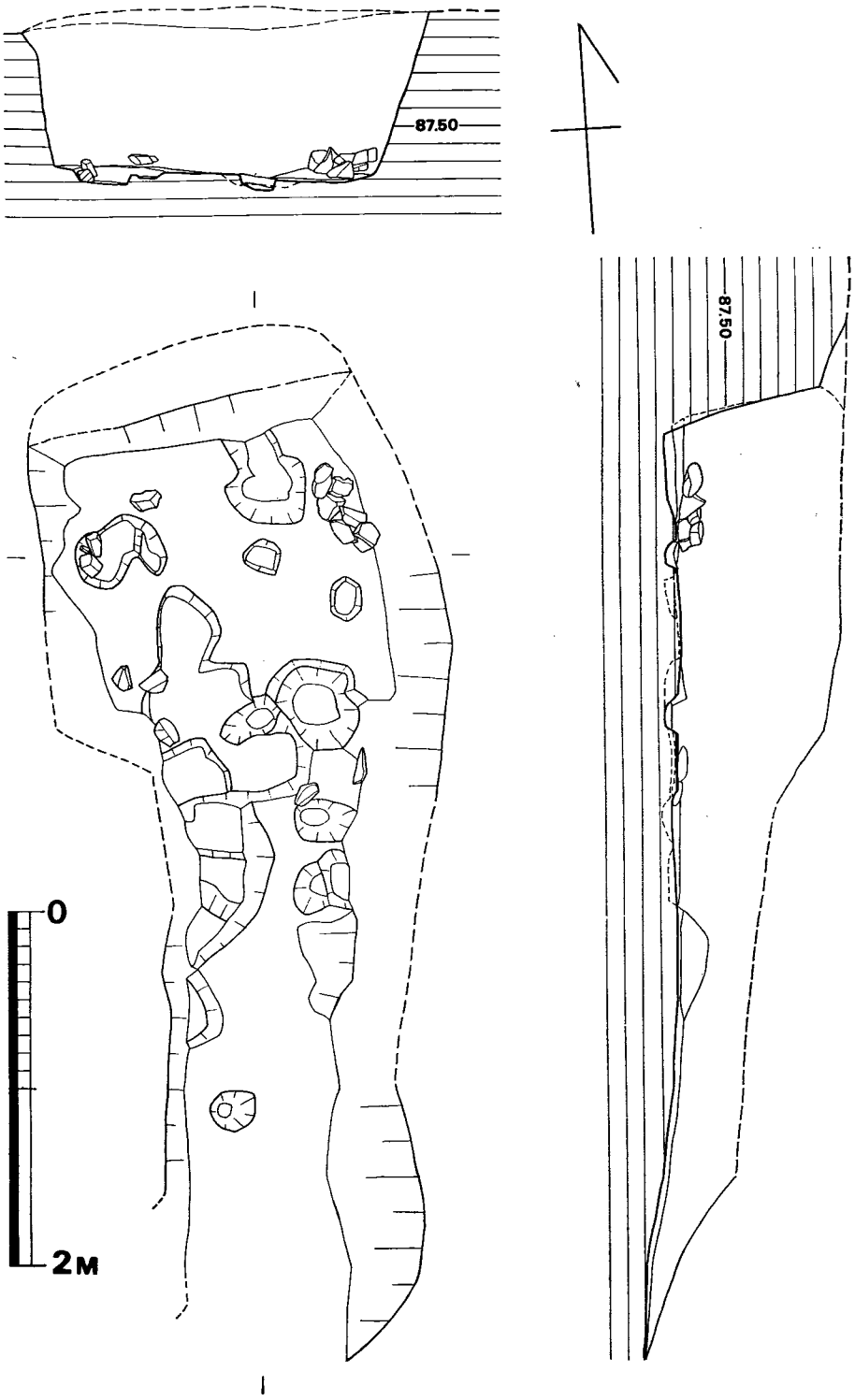


Fig. 99　小原8号墳石室掘方実測図（縮尺 1/40）

小玉（Fig. 100—3）　石室床面攪乱土中から出土した。ガラス製で黄緑色を呈し，表面は風化して一部白濁している。径1.2㎝で厚さ0.7㎝である。

須恵器

甕3，壺1，直口壺1，坏身1，高坏1，平瓶4，および他に甕の小片多数が出土した。

2・3は北側周溝表土下，7・8は墳丘南半部墳裾表土下，他は羨道および墓道埋土中からの出土である。

甕（Fig. 101—1・2・3）　共に口縁部から頸部までの破片で胴部以下は欠損している。口縁部のつくりは三者三様であり，3個とも口縁部下に粘土の貼り付けによる凸帯がある。復元口径は1が24.4㎝，2が20.6㎝，3が21.2㎝である。3個ともヨコナデ調整を行っている。胎土に砂粒の含有量は少なく，焼成は極めて良好で硬質である。

壺（Fig. 101—4）　口縁部の⅓を残す小片である。復元口径は10.8㎝を測る。口縁直下に貼り付け凸帯がめぐる。調整はヨコナデによる。胎土に砂粒を多く含み，焼成は悪く軟質である。色調は灰色から暗灰色を呈す。

直口壺（Fig. 101—5）　肩部まで残す破片で，口径 9.4㎝を測る。口縁部は頸部からやや外反する。肩部以下はカキ目を施しており，他の部分はヨコナデによる調整である。焼成良好で硬質で，暗灰色を呈する。

坏身（Fig. 101—6）　全体の 1/10弱を残す小片である。復元口径10㎝を測り，器高は3㎝程と推定される。蓋受け部は水平につくられ先端部断面はとがっている。立ちあがりはかなり内傾し，口縁先端部は肥厚し，断面は丸くつくられている。外底面はヘラケズリされていたであろうが，残存部はヨコナデ痕が残る。焼成はあまく軟質で，内外面とも暗灰色を呈す。

高坏（7）　坏部，脚部の1部を残す破片である。坏部外底面はヘラケズリされ，他はヨコナデされている。胎土にかなり砂粒を含み，焼成良好で硬質であり，黒灰色～暗灰色を呈す。

平瓶（Fig. 101—8～11）　8～10は小形品で11は大形である。復元胴部最大径は，8・9は16.5㎝，10は18.5㎝，11は26.5㎝を測る。8は全面に，9～11は肩部以下全面にカキ目を施している。9・10は焼成良好で硬質だが，他は焼きがあまく軟質である。内面はヨコナデによる調整を行っている。色調は暗灰色～黒褐色を呈する。

小　結

本墳も心憎いまでに破壊され，石材は殆んど抜き取られていた。墓壙床面も石材を抜き取る折に荒らされており，腰石の掘り方から石室構造を正確に推定するのは困難である。石室掘り方の規模より，本墳は単室の横穴式石室であったろうと想定する。

次に本墳の構築時期であるが，坏身・高坏の形態から，6世紀後半の新しい時期であろうと

思われる。もっとも，これらの土器は床面から浮いて出土しているので，石室構築の時期を正確に示すものではないかも知れないが，石室構築時期は6世紀後半の新しい時期を大きくは動かないと思われる。　(児玉)

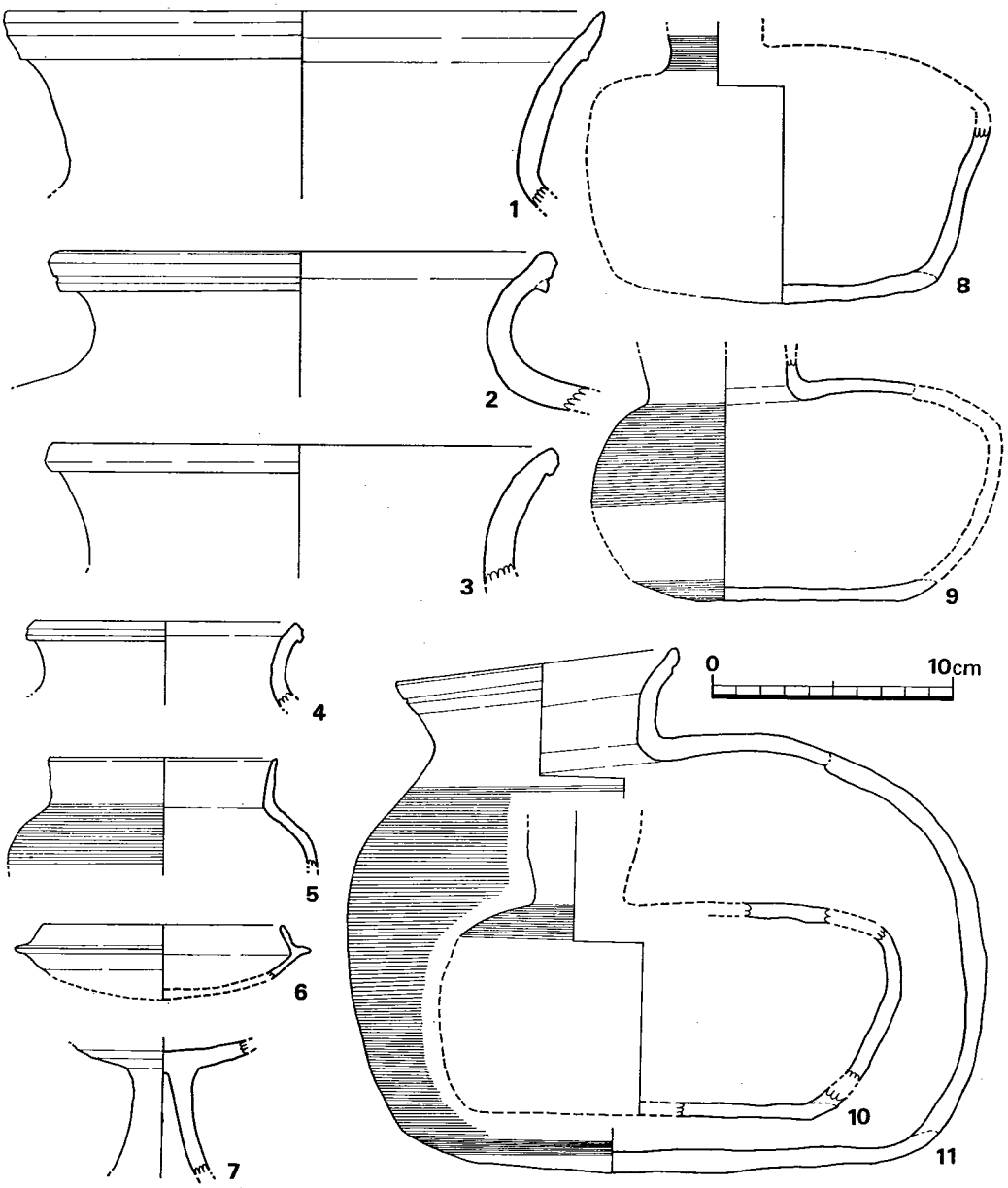


Fig. 101　小原8号墳出土土器実測図　(縮尺 1/3)

9 土壙群の調査

小原古墳群の調査の際，3号墳を中心にしてその周辺に分布する土壙群が検出された。土壙の総数は29基を数え，幾つかの群をなして分布している。また，これらの土壙群周辺から多数の中国産青磁・白磁が出土した。

1号土壙 (Fig.103—1　PL.57)

内法長さ104cm，幅38cm，深さ51cmの隅丸長方形を呈し，主軸方位はN—10°—Eを測る。土壙底には若干主軸方位を異にする浅い長方形の掘り込みを有する。

3号土壙 (Fig.103—3　PL.58)

不整長方形を呈する土壙で，北側の短側壁は二段に掘り込まれて上位に平坦面を有する。床面はほぼ水平である。

5号土壙 (Fig.103—5)

内法長 92cm，幅 47cm，深さ 41cmの隅丸長方形を呈する。東側の短側壁は緩やかに掘り込まれているが，他の側壁は急角度で掘り込んでおり，いわゆる舟形壙を呈する。床面は水平で，東側が幅広である。

8号土壙 (Fig.104—8)

3号墳墳丘裾に接して掘り込まれている。主軸方位はN—61°—Wで，内法長131cm，幅44cm深さ32cmを有する。床面は平坦をなすが，東側短側壁に向って傾斜する。両短側壁のコーナには各々1個の角礫を有する。

12号土壙 (Fig.104—12　PL.61)

斜面に直交して掘り込まれているが，床面は水平である。平面プランは隅丸長方形を呈し，断面は舟形を有する。床面は北側短側壁下が幅広である。

13号土壙 (Fig.105—13　PL.62)

12号土壙と同様に斜面に直交して掘り込まれている。土壙は不整隅丸長方形を有し，内法長154cm，幅39cm，深さ約49cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが，南方向へ緩やかに傾斜する。

15号土壙 (Fig.105—15　PL.63)

不整長方形を呈し，18号土壙を切っている。内法長 148cm，幅57cm，深さ約20cmを測る。床面は北側短側壁下が幅広で，南方向に傾斜する。

17号土壙 (Fig.105—17　PL.62)

長楕円形気味の土壙で，斜面に直交して掘り込まれているにもかかわらず，床面はほぼ水平をなす。四側壁はほぼ垂直に掘り込まれている。内法長 118cm，幅41cm，深さ約72cm，主軸方位はN—35°—Wを測る。

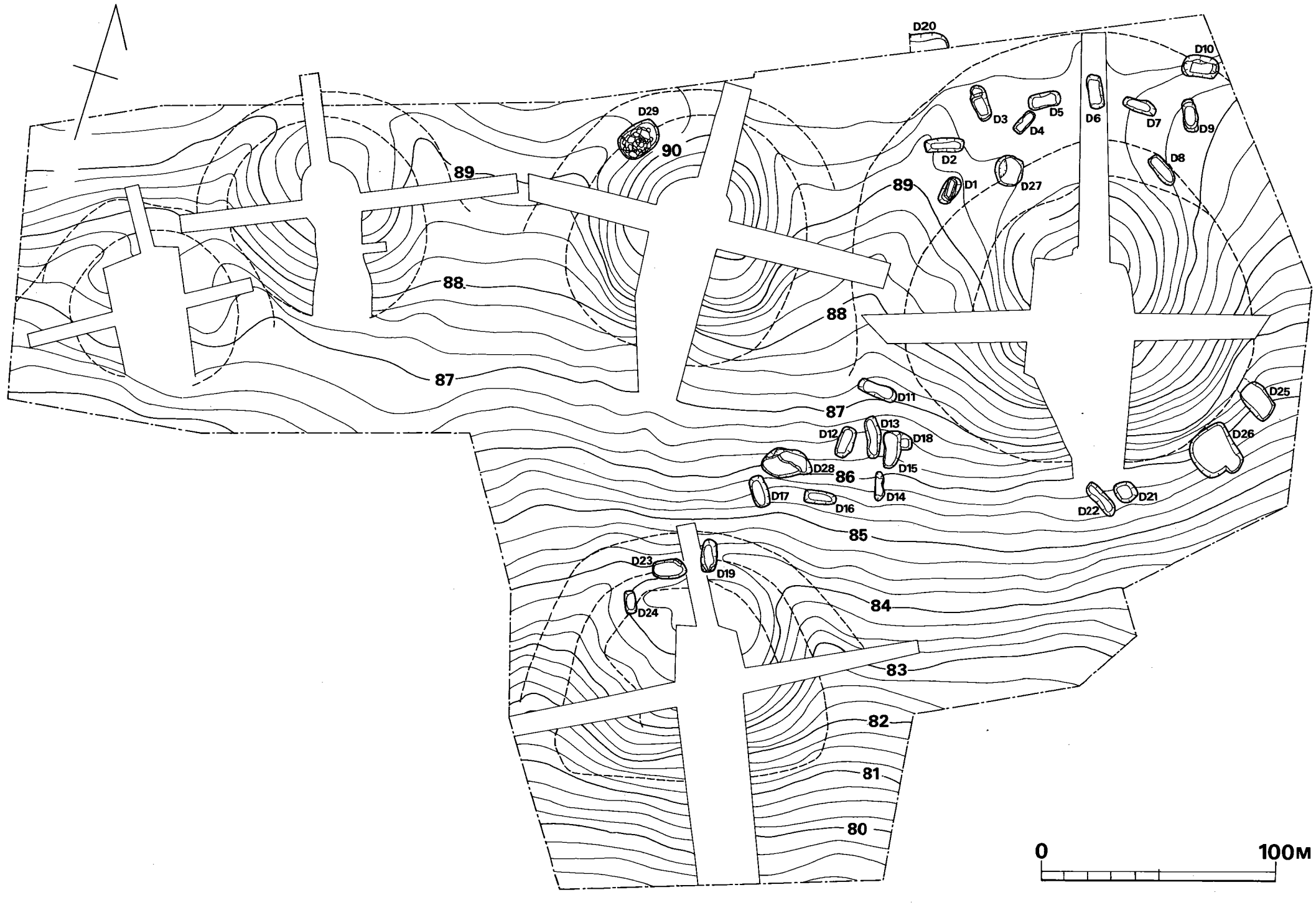


Fig. 102　小原土壙群配置図（縮尺 1/200）

19号土壙（Fig.105—19　ＰＬ.64）

隅丸長方形を呈し，内法長94㎝，幅42㎝，深さ63㎝を測る。床面は水平をなし，南側の短側壁側が幅広で，さらに壁内に15㎝程掘り込んでいる。

20号土壙（Fig.106—20）

茶臼山城趾土塁下に営なまれており，遺構の大半は開墾のため，削り取られて形状は不明である。

22号土壙（Fig.106—22　ＰＬ.65）

隅丸長方形を呈する土壙で，内法長 136㎝，幅29㎝，深さ48㎝を測る。土壙は斜面に直交するように掘り込まれており，主軸方位は N—39°—W を測る。床面は平坦ではあるが，著しく南へ傾斜する。

25号土壙（Fig.107—25　ＰＬ.67）

４号墳墳丘東南裾部に掘り込んでおり，平面形は不整長方形を有する。西側短側壁は墳丘裾下をえぐるように掘り込まれている。床面は略水平で，内法長 148㎝，幅83㎝，深さ約83㎝を測る。

29号土壙（Fig.108—29　ＰＬ.68）

２号墳墳丘北裾に一基離れて位置する。土壙は楕円形気味の平面プランを有し，長さ184㎝，幅 128㎝，深さ約 15㎝を測る。土壙床面は２号墳墳丘から北西方向に向って傾斜する。

土壙床面から約20ｍ上面には20～50㎝大の扁平石を敷き並べ，間隙に小石を詰めており，土壙掘り方の範囲に納めている。

以上，検出された土壙は総数29基を数えるがその分布は，３号墳墳丘裾周辺に３群，４号墳墳丘裾に１群合計４群をなして分布しており，29号土壙のみが，２号墳墳丘裾に単独で営なまれている。これらの土壙は特に主軸方向に何らかの規制があるとは考えられないが，明らかに３号墳墳丘を意識してつくられている。

形状は隅丸長方形をなすものが大半を占め，他に隅丸方形，楕円形，不整長方形等がみられる。また土壙の断面の形態により，舟形をなすもの（２・５・７・11・12・14・22～24号），両短側壁が緩やかに掘り込まれているもの（１・13・16・19号），四壁が垂直に立つもの（８・９・17号）などが認められる。

床面は立地する地形にかかわらず水平をなすものと傾斜するものが認められる。また床面の幅は一方の短側壁下が広いものがある。

また，床面の一短側壁部が幅広の側が認められる。

これらの土壙はいずれも全く遺物を伴出しておらず，その性格は不明であるが，土壙墓と考えるのが妥当であろう。またこれらの土壙は古墳の墳丘あるいは馬蹄形溝状遺構内に掘り込まれているものが多数あり，29号土壙が茶臼山城の土塁盛土下に営なまれていることから，古墳造営後から戦国時代までの期間につくられたものと考えられる。なお，土壙群付近の表土中から多数の青・白磁類が出土しており，これらの遺物が鎌倉時代頃に比定されることから，土壙群も鎌倉時代頃の所産である可能性が強い。（松村）

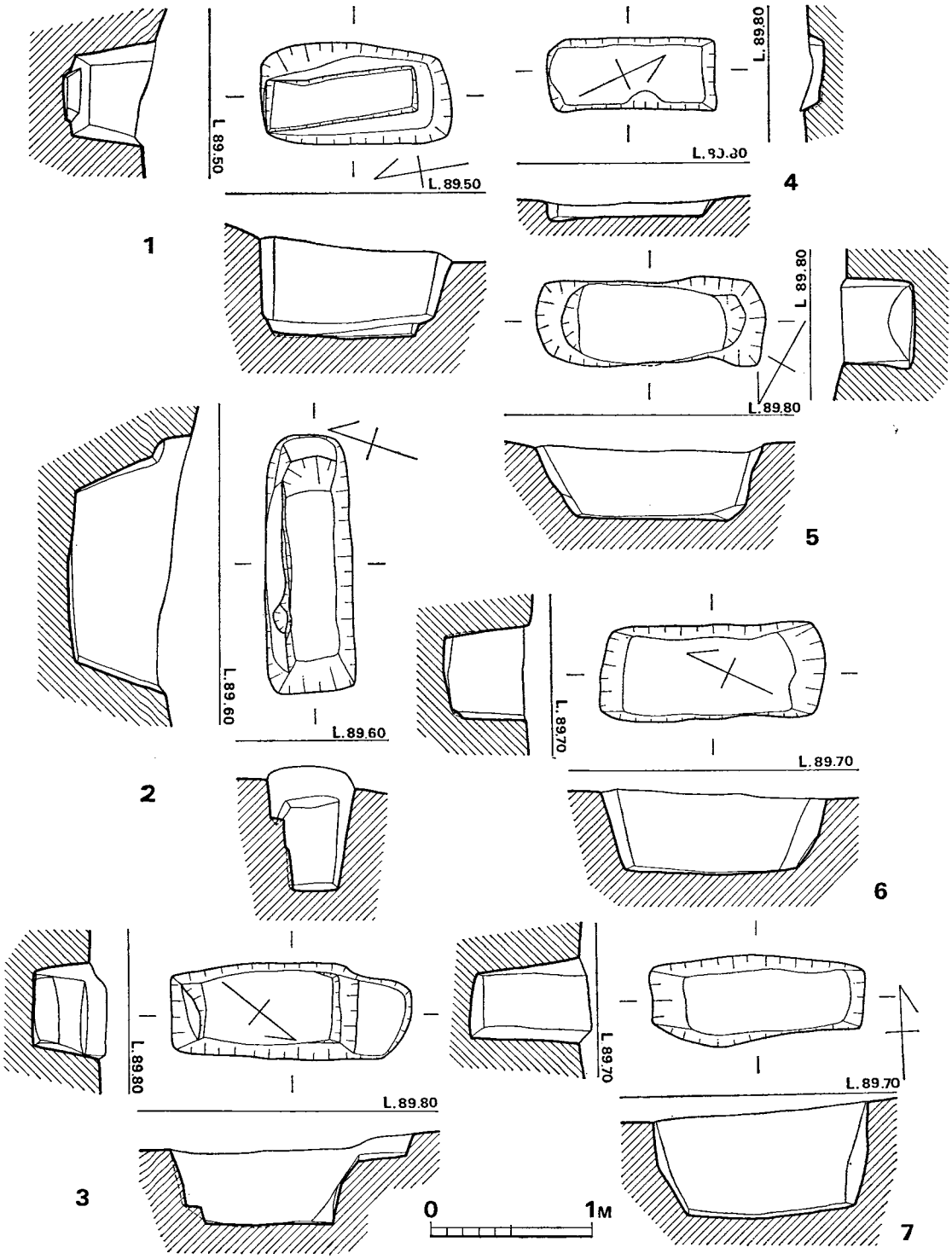


Fig. 103　小原土壙実測図①（縮尺 1/40）

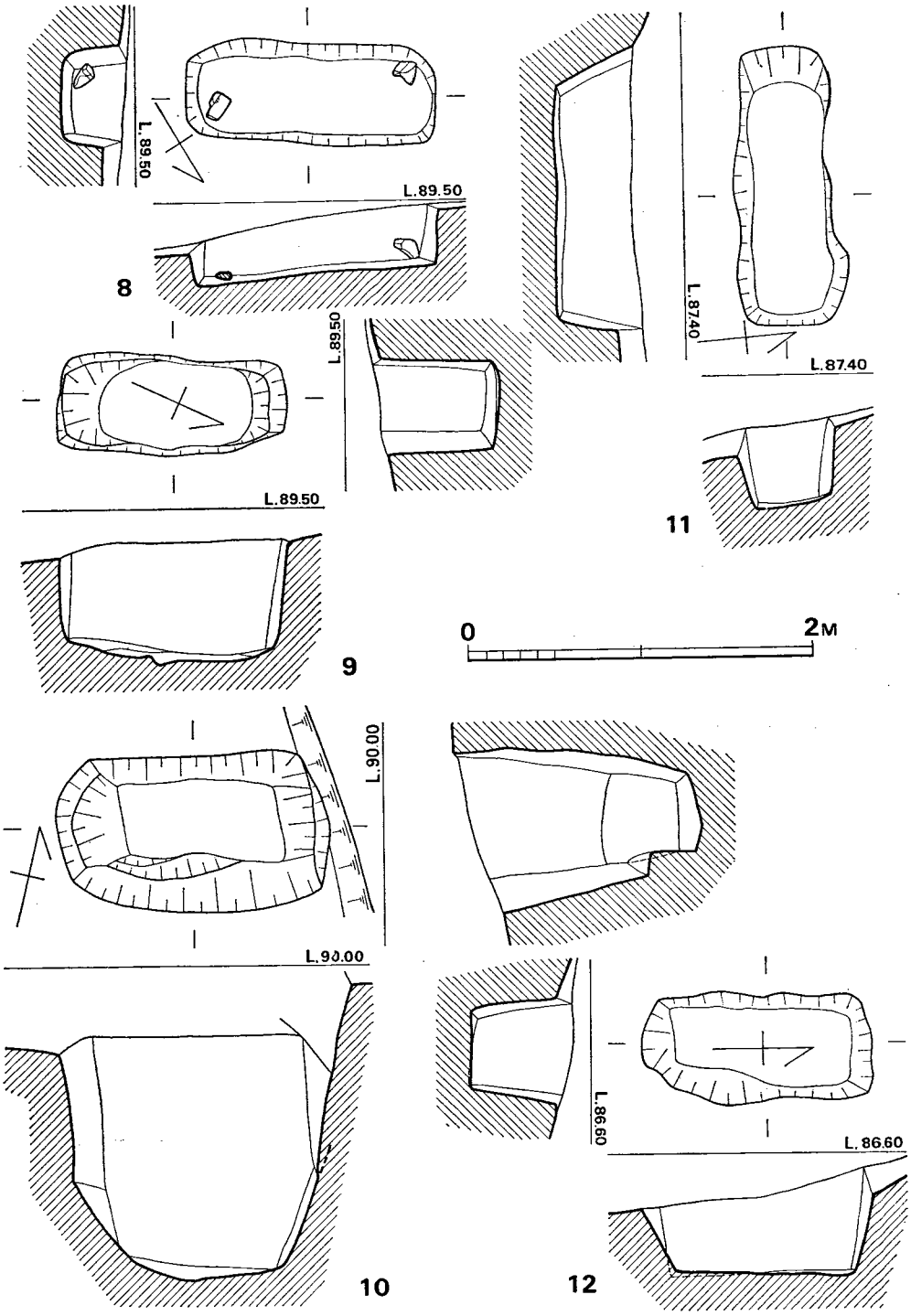


Fig. 104　小原土壙実測図②（縮尺 1/40）

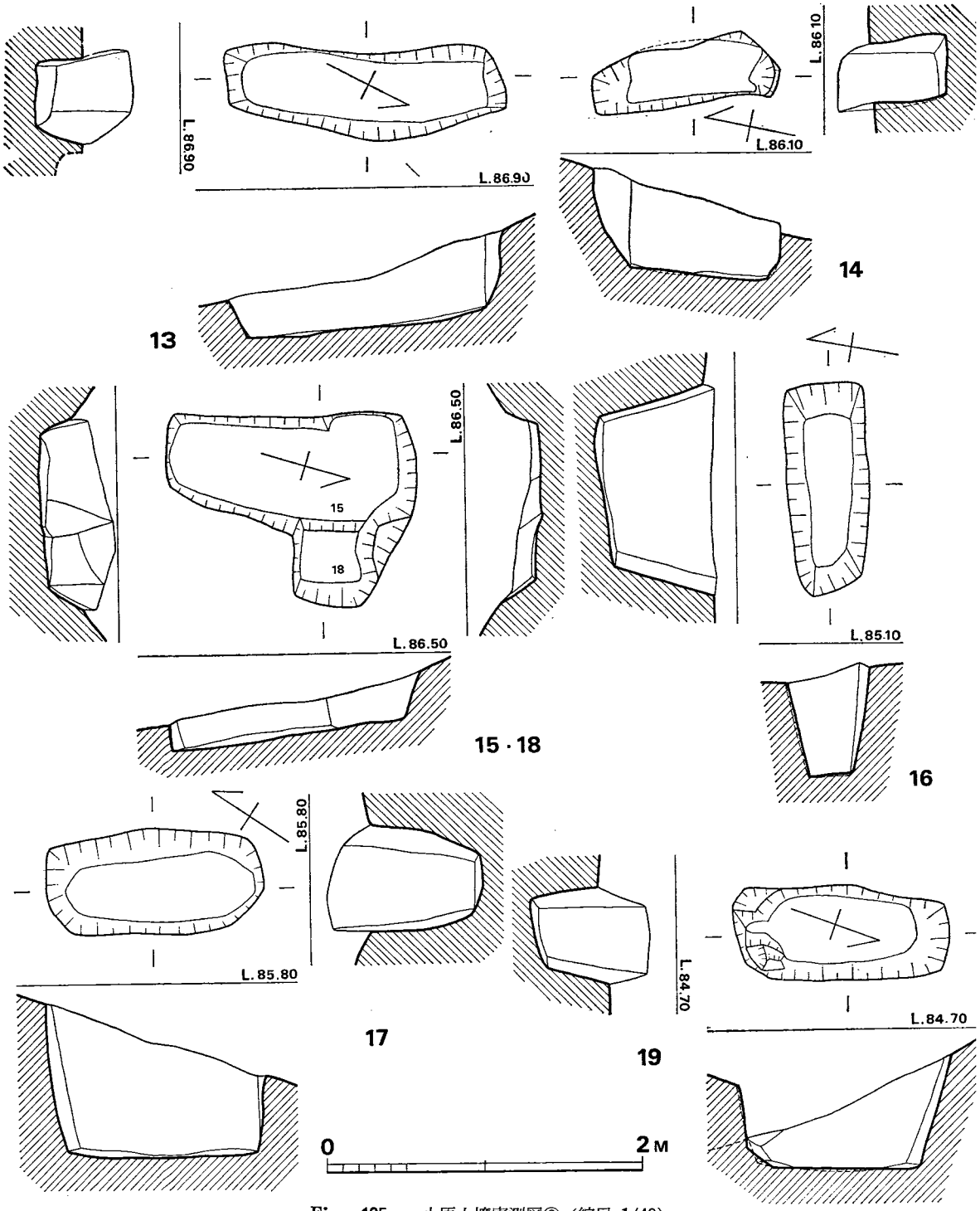


Fig. 105 小原土壙実測図③（縮尺 1/40）

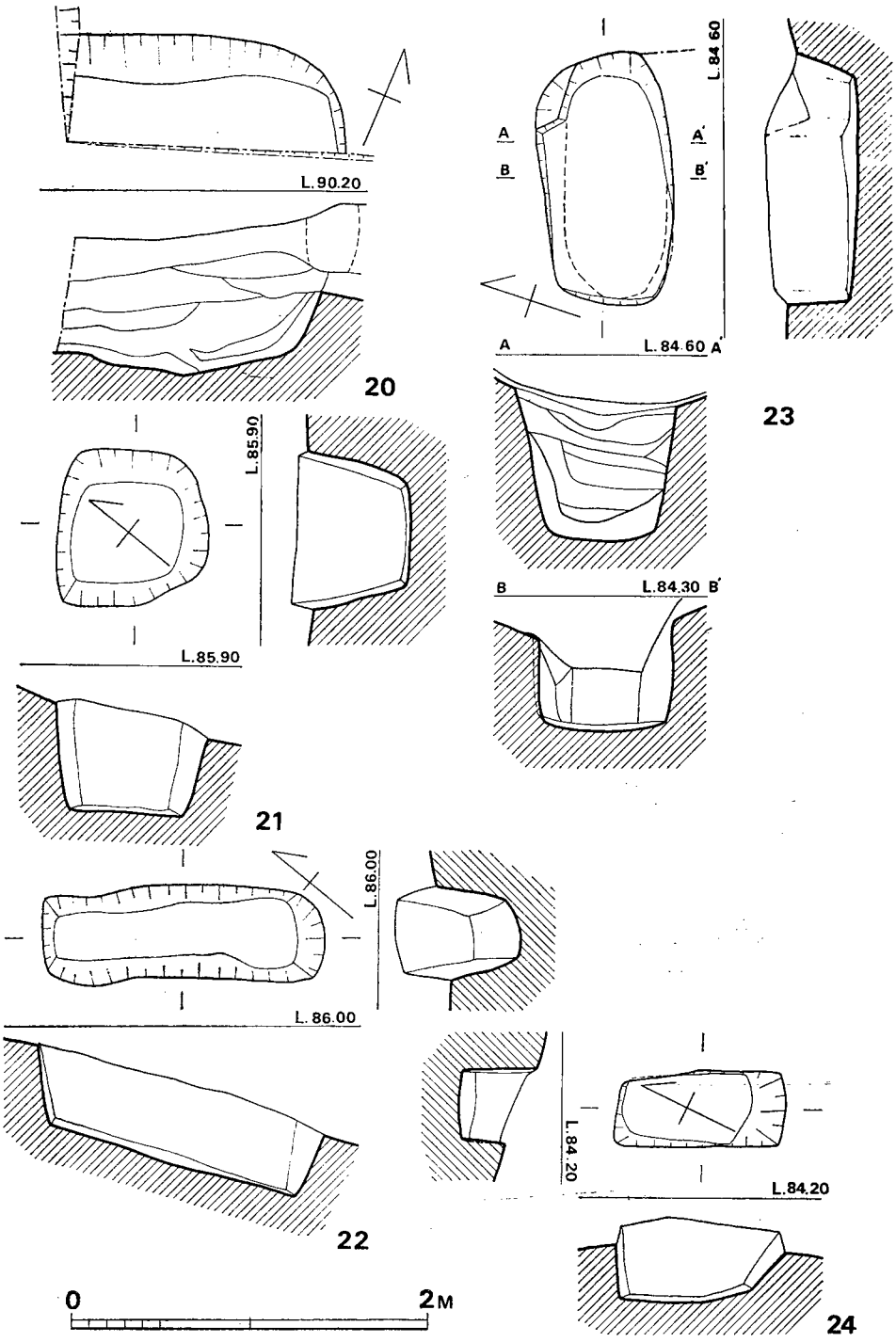


Fig. 106　小原土壙実測図④（縮尺 1/40）

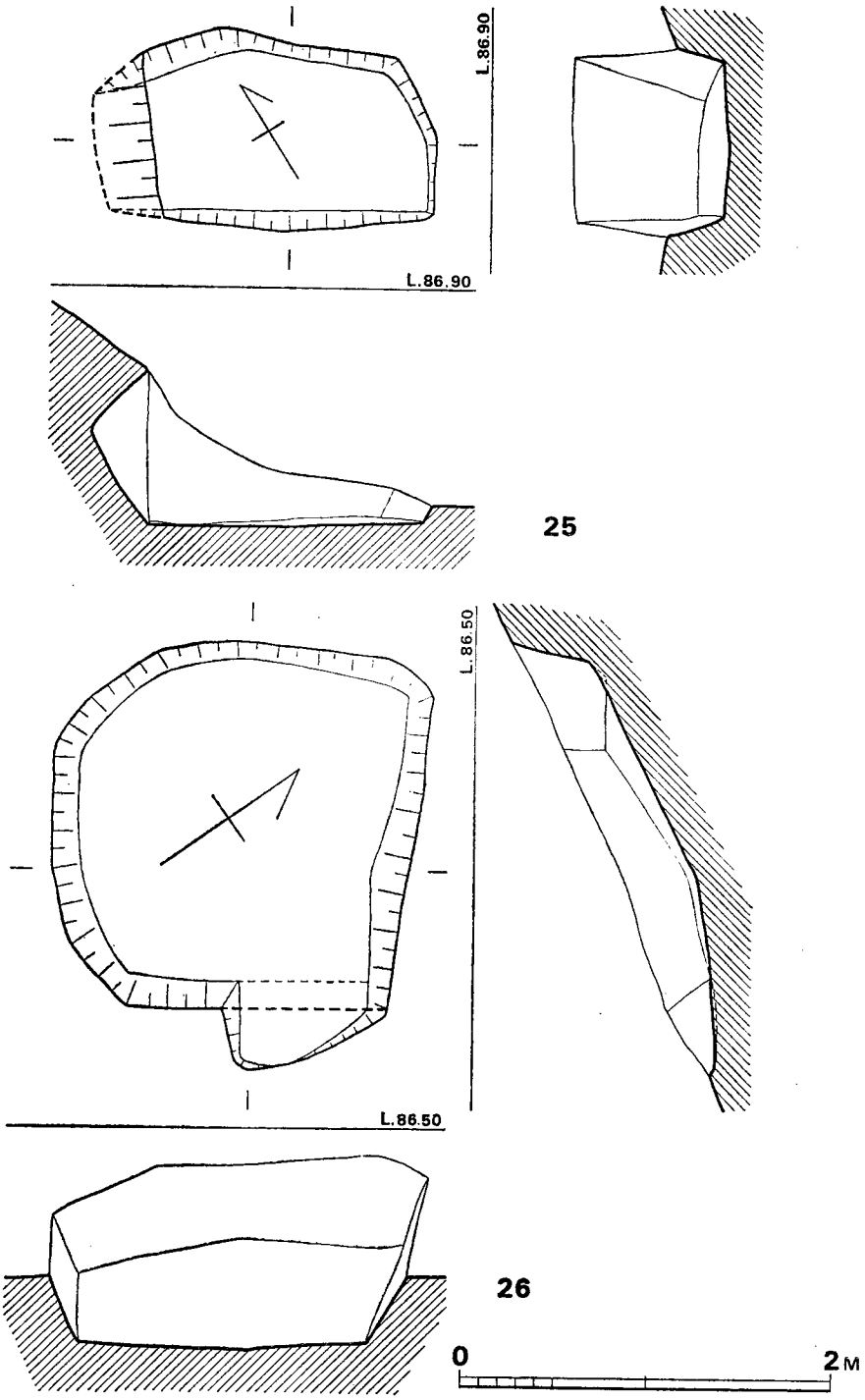


Fig. 107 小原土壙実測図⑤（縮尺 1/40）

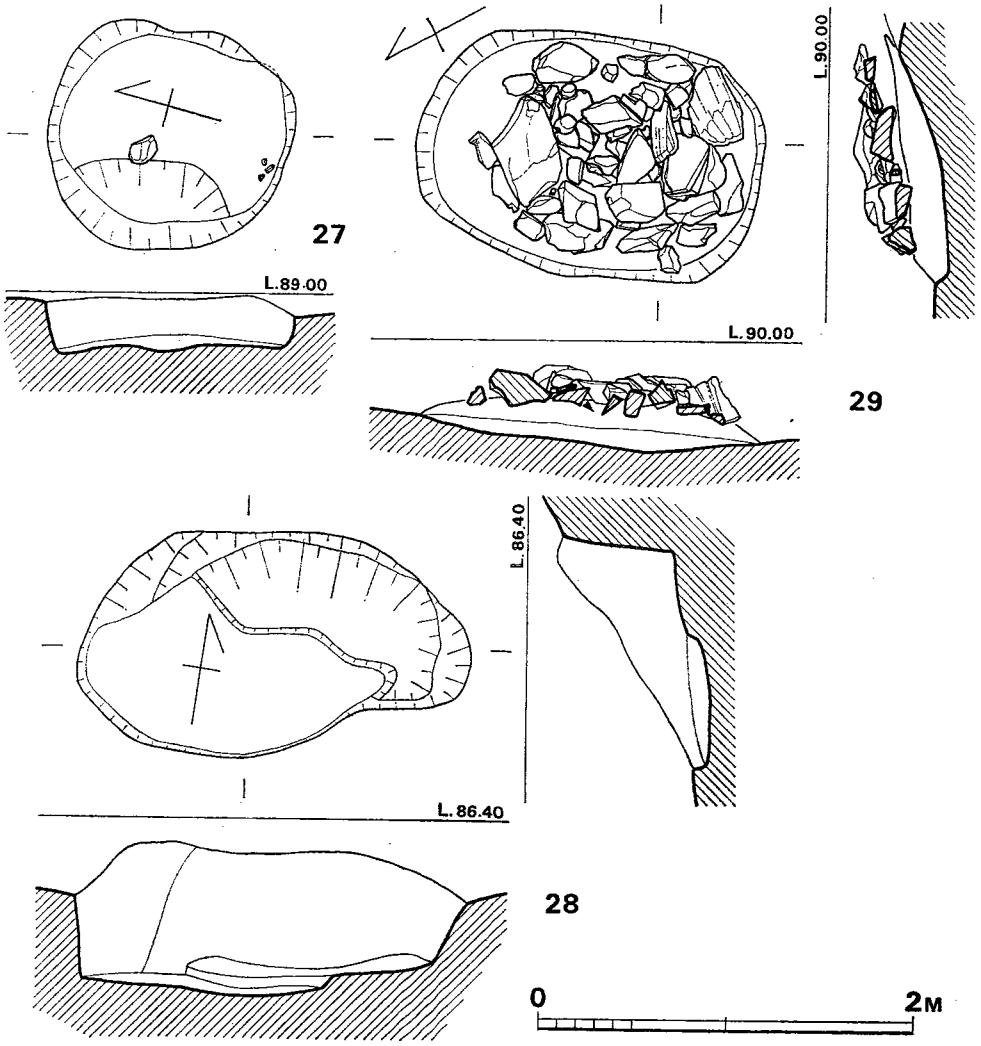


Fig. 108　小原土壙実測⑥（縮尺 1/40）

号	方位	形状	床面状況	大きさ(内法, cm)	備考
1	N—10°—E	隅丸長方形	水平	104× 38× 51	土壙底に95×30× 8の掘り込み,
2	N—71°—E	〃	〃	105× 28× 63	一部二段掘り
3	N—39°—W	〃	〃	78× 46× 45	北側短側壁に平坦部。北側床面が幅広
4	N—25°—W	〃	〃	95× 36× 8	
5	N—61°—E	〃	〃	92× 47× 41	東側床面が幅広
6	N—26°—E	〃	〃	107× 48× 50	
7	N—88°—E	〃	ほぼ水平	103× 39× 65	西側床面が幅広
8	N—61°—W	〃	傾斜	131× 44× 32	両端角に礫を配する
9	N—25°—W	〃	水平	121× 50× 63	
10	N—88°—E	〃	ほぼ水平	90× 43×143	
11	N—85°—W	〃	〃	134× 43× 43	
12	N— 1°—E	〃	水平	103× 44× 60	北側床面が幅広
13	N—29°—W	不整隅丸長方形	傾斜	135× 39× 49	
14	N—21°—W	〃	〃	80× 36× 64	
15	N—12°—W	〃	やや傾斜	148× 57× 20	D18を切る
16	N—81°—E	隅丸長方形	〃	97× 28× 75	東側床面が幅広
17	N—35°—W	〃	水平	118× 41× 72	南側床面が幅広
18	N—85°—E	〃	傾斜?	110× 37× 23	D15に切られる
19	N—20°—W	〃	ほぼ水平	94× 42× 63	南側床面が幅広
20			弧をなす		茶臼山城土塁盛土下に営なまれる
21	N—41°—W	隅丸方形	傾斜	62× 57× 57	
22	N—39°—W	隅丸長方形	〃	137× 29× 48	南側床面が幅広
23	N—27°—W	〃	ほぼ水平	73× 38× 41	
24	N—25°—W	長方形	〃	72× 38× 46	
25	N—58°—W	〃	水平	148× 83× 83	
26	N—55°—W	隅丸方形	傾斜	174×156× 36	
27	N—15°—W	楕円形	傾斜	121× 86× 26	
28	N—82°—W	不整楕円形	傾斜	185×110× 58	底面に不整楕円形の掘り込み
29	N—29°—E	楕円形	傾斜	172×120× 20	土壙上部に集石あり

Tab. 2 土壙一覧表

Ⅳ　結　　語

Ⅳ 結　　語

昭和49年度（第Ⅰ次調査）および50年度（第Ⅱ次調査）に実施した発掘調査で明らかにされた遺構のうち，小原遺跡の住居跡21軒（弥生時代11軒・古墳時代10軒）および，小原古墳群（正確には茶臼山古墳群小原支群）の8基の古墳を中心に若干のまとめを行なって結語にかえる。

まずその前に遺跡の範囲について少し触れておきたい。

小原遺跡は，現小原部落の一部を含めて約40,000㎡に及ぶと推定されている。それは，ほぼ標高70m以下の北向きの緩斜面で，水田面との比高が数m程の部分である。今回調査したのは，九州縦貫自動車道建設によって破壊される，遺跡のほぼ東南部分の約5,800㎡についてである。すなわち，小原遺跡全体の約1/7である。

小原古墳群は，現存総数35基のうち九州縦貫自動車道用地内の8基についての調査であった。Fig69で見るように，古墳群は中世の山城である茶臼山城跡の空濠をとりまくように存在する。それらは大きく3群にわけられる。茶臼山城跡からみて南側斜面の1群（小原古墳群），北側斜面の1群，東側斜面の1群である。これらを総称して茶臼山古墳群とする。

以上のように，小原遺跡および小原古墳群として調査したのは，全体からみれば路線内に含まれるわずかな部分である。特に小原遺跡については，遺構は北側にのびており，今回の調査区域は遺跡の南限に近い部分である。

1. 弥生時代の小原集落

貯蔵穴

貯蔵穴は現在までの調査例によれば，弥生時代中期初葉頃まで盛行し，その後は姿を消していくのが大勢である。平面プランも方形を呈するものが古く，円形を呈するものが新しいのが一般的である。それらは，三井郡小郡町津古内畑遺跡[1]のように多数が群集する。

小原遺跡で検出した貯蔵穴は2個であり，群集性は見られず，平面プランは長方形である。また，埋土中より検出した土器から廃絶期は中期末以前と推定されるが使用された期間は明確ではない。

一般の貯蔵穴とは異なった在り方をする小原遺跡の貯蔵穴は，弥生時代前期～中期初葉の

通有の貯蔵穴とは，その持つ意味が異なっていると思われる。小原遺跡の貯蔵穴の時期には，掘立柱の高床倉庫があっても不思議ではないのだが，今回調査区域内ではそのような遺構は検出していない。また，2個の貯蔵穴は共に埋土中に板材が炭化した状態で埋没しており，あたかも板で蓋をしていたようであった。

貯蔵穴を使用した人々の住居は調査区域内には検出されなかったので，恐らく北側斜面に彼等の住居跡が存在すると思われる。

以上のように小原遺跡跡で検出した貯蔵穴については種々の問題をはらみながら，不明な部分もあり，今後，この種資料の充実をまって解明しなければならない。

住居跡の平面プラン

住居跡の平面プランをうかがう上でほぼ支障のない形状を示すものは，**H7・H9・H11・H15・H18**である。**H9**は長方形プランであるのに対して，他の4軒はほぼ正方形に近いプランを呈する。また上記以外の住居跡も長方形プランと推定できるものはなく，正方形に近い平面プランと考えた方が無理が生じない。これらの住居跡は弥生時代後期後半から終末の時間帯の中に比定され，北部九州の弥生時代の住居跡平面プランの変遷の上からみて，極めてありふれたものである。[2]

住居内部の構造

炉　炉は住居跡中央付近にあるのが一般的である。しかし，**H9**は古墳時代の住居跡**H8**に，また**H14**は**H13**に床面を削平されたためか全の炉の痕跡すら検出できなかった。**H9・H14**を除いた他の住居跡は，住居跡のほぼ中央の床面を浅く掘りくぼめて炉としている。炉の平面プランは径1*m*程の不整円形に近い形をしている。**H18**の炉跡焼土内からは1粒の炭化米が出土している。

炉の底面および周囲の焼け具合は，**H11**については炭がつまっているだけで殆んど焼けていなかったが，他の住居跡の炉については焼土が充満しており，炉内面はよく焼けて赤化して硬くなっていた。炊飯は各住居ごとに行なわれていた可能性が強いと思われる。

ベッド状遺構　ベッド状遺構は北部九州の住居跡においては一般に弥生時代後期から古墳時代の古い時期に見られる。それは，八女市室岡西中ノ沢遺跡跡等で見られように，地山を削り残して造り出したものと，床面上に貼り付けて設置したものと二者がある。[3]

小原遺跡では11軒の住居跡のうち，7軒にベッド状遺構が設定されていた。それらはすべて地山を削り残して造り出したものであった。1軒の住居に設定されたベッド状遺構の数は

最も多いのが4（H18），次が3（H3），2（H5），他は1である。もっとも，住居跡が旧状を残さないまでに削平されているものもあるので，H18を除いてその数は正確ではない。

ベッド状遺構の規模は，その多くが幅1m，長さ2m程度の長方形のもので，床面から20cm前後の比高を持っている。H3・H5・H17は幅は1m程であるが，長さが2mを越え，特にH17は5.2mを測る。長さに長短の差はあっても，幅はほぼ1m内外で統一されているようである。

設置場所については，H18の北東壁にあるものを除いて，住居跡の壁にベッド状遺構の2辺が接するように設定されている。H5は住居跡の一部が調査区域外に伸びるので不明だがH3のようにベッド状遺構の3辺が住居壁に接する形のものは，小原遺跡では異例である。

住居床面積に占めるベッド状遺構の総面積の割合は，H3が最も高いようであり，H8は42m²に対して8m²で約⅙を占める。他の住居跡は遺構が良好な状態ではないため，詳細にはしがたい。

土壙　11軒のうち9軒に土壙を検出した。H3を除いて壁ぎわ近くに切り込まれており，溝が接続している。その溝は住居内で完結するものと，住居外にのびるものとがある。前者はH18を除いて土壙に水が流れ込まない構造になっており，後者は完全に排水溝の役割を果たしている。よってこの土壙は屋内貯蔵穴と認定して差しつかえないと思われる。貯蔵穴に収納されるものは主として食料であったと思われるが，この貯蔵穴の規模（0.5m²前後）では貯蔵される量は限られており，恐らく，必要に応じて分配されたと思われる。その分配さるべき「モノ」の収納場所としての遺構は検出できなかった。恐らく，クラ的なものが存在したと思われる。

周溝　H9は周溝を持たないが，他の10軒については部分的に検出した。周溝は壁にそって住居内を一巡する形で検出したのは1軒もなく，床面の残存状態が良かったH18についても東北壁，南東壁には周溝はなく，断続的に掘られている。よって排水の用は完全にはなさず，いわゆる「周溝」とは異なった溝だと思われる。遺構としては検出できなかったが，恐らく小原集落の人々は，住居をつくる時に排出した土を住居の周囲に帯状に盛って小規模な土堤状のものをつくり，降水時の水の住居内への流入を防いだのかもしれない。

主柱　基本的には4本柱であるが，H9は2本，H11は5本，H18は6本柱である。主柱の数は住居床面積と密接な関係があるようで，床面積が30m²前後と推定される住居は4本柱，40m²を超えると思われるH11は5本柱，42m²のH18は6本柱である。また，柱穴の間隔については，おおむね等しいが，H18では部分的に40cm～60cmの差があり，正確に計測した

後に柱穴を掘ったものではないことを示している。他の住居跡についても同様なことが言える。住居をつくるに際しての設計はかなり大雑把なものであったようである。

各住居跡の同時存在に関して

11軒の住居跡の時期は弥生時代後期後半から終末の幅の中に推定されるが，相互に切り合い関係はなく，出土土器も時期を明確にするものが少ないので，同時存在の可否について正確な判断を下すこと困難ではある。ただ，住居跡の接近度合からみて物理的に同時存在できないものがある。すなわち，**H11**と**H14**，**H20**と**H21**である。前者は壁が1.5 *m*～1 *m*程しか離れておらず，後者は検出した各々の住居跡の主柱穴から推定復元した住居跡の壁は極めて接近するので，両者ともに同時存在は不可能である。また**H 9**・**H17**・**H18**で検出した高坏は同一型式と考えられ，同時存在していたと考えて差しつかえない。他の住居については，その構造が**H17**や**H18**と同じであり，殆ど同じ時期の住居跡だと推定さる。そのように考えることが許されるならば，11軒のうち，最高9軒が同時存在したと考えられる。これらにはいくつかのまとまりが見られ，**H 3**・**H 5**，**H 7**・**H 9**，**H11**か**H14**，**H15**・**H17**・**H18**・**H20**か**H21**の大きく4つのグループに分かれる。遺構の分布が北に伸び，削平による消滅等を考慮に入れると各グループ毎に数軒ずつ増えることを考えなければならない。しかし，**H15**・**H17**・**H18**・**H20**か**H21**のグループは，**H18**を中心にして各住居が配置されており，**H1**.が他を圧して大規模であることを考え合わせるならば，この現象は注目に値する。

住居の規模と床面積の不均等性 (Tab. 3)

最も狭い**H 9**が10.6*m*²，最も広い**H18**が42*m*²で，多くの住居の床面積は30*m*²前後である。弥生時代後期後半～終末の小原遺跡の住居床面積は一般的に30*m*²前後であったろうと推測される。その中で，**H18**は42*m*²であり，**H11**は41*m*²と推定され，この2軒は他を圧して広い。このことは，ただ単に住居床面積の大小の差だけにとどまらず，住居設定にあたっての労働量，築造方法，構造および居住空間にいたるまで大きな差が存在したと思われる。床面積の大小はそのような問題をはらんでいると考えられるだけに，それは単に住居内収容人数の多少だけに起因するのではなく，住居の規模と構造の面において，集落内で不均等が存在したことに起因するものと考えられる。このことは，**H11**から砥石と共に鉄製鉋が出土したことや，**H18**からも図示し得なかっが細片となった鉄片とともに砥石が出土していることからも首肯し得る。

Tab. 3　小原遺跡各住居跡計測表

住居番号	平面形	規模(長辺×短辺)	床面積	壁高	ベッド	炉・カマド	主柱穴数	時期	備考
H1	方形	1辺約4.7m	(22m²)					古	
H2	方形	1辺約5m	(25m²)			カマド	2	古	
H3	方形	1辺約5.1m	(26m²)	10cm(+)	3	炉	4?	弥	H4に切られる
H4	方形							古	H3を切る
H5	方形	1辺約5m	(25m²)	20cm(+)	2	炉	4(+)	弥	
H7	方形	5.2m×4.2(+)m	(27m²)	30cm(+)		炉	4	弥	土壙1・鉄器出土
H8	方形	3(+)m×3(+)m	(15～20m²)	10cm(+)		カマド?		古	H9を切る
H9	方形	3.8m×2.8m	10.6m²	10cm(+)			2	弥	H8に切られる
H10	方形	1辺約5.2m	27m²	20cm(+)			5	古	土鈴・土製模造鏡・砥石出土
H11	方形	1辺約6.4m	(41m²)	30～60cm	1	炉	5	弥	土壙1・砥石・鉄器出土
H12	方形			25cm(+)				古	
H13	方形							古	
H14	方形	1辺約5m	(25m²)	20cm(+)	1		4	弥	砥石出土
H15	方形	5.6m×?	(30m²)	20cm(+)	1	炉	4	弥	土壙1
H16	方形	5.4m×3(+)m	(30m²)	40cm			4	古	
H17	方形	5.9m×	(35m²)	50cm	1	炉	4?	弥	土壙1
H18	方形	7m×5.8m	42m²	20cm(+)	4	炉	6	弥	土壙1・砥石・鉄器出土
H19	方形	3.9m×3.2m	約12m²	10cm(+)		カマド	4	古	
H20	方形	1辺5mか	(25m²)			炉	4	弥	土壙1
H21	方形	1辺5mか	(25m²)			炉	4	弥	土壙1
H22	方形	4.5m×4.2m	18.9m²	40cm		カマド	4	古	孤状の溝が住居外にある。

・床面積については，住居跡の2辺以上が確認できたものをのぞいて，推定値を（　）で示した。

・ベッド状遺構の数については，遺構が調査区域外に伸びるものがあり，認知できた数を示した。

・壁高は最も残りの良い部分での計測値であり，(+)を付したのは，削平により旧状を保っていないことを示す。

鉄器が小原集落の中でどのような所有形態であったか明確ではないが，鉄器は当時の社会では貴重品であり，1点づつではあるが，40㎡台の床面積を持つ2軒の住居に確実に伴って出土していることは何か示唆的である。④

3.　古墳時代の小原集落と小原古墳群

古墳時代の小原集落

住居跡の平面プランと規模

ほぼ全掘した**H10・H19・H22**はほぼ正方形を呈し，発掘区域外に遺構の一部がのびるもの，また削平により遺構の大半を失っているものについても周溝や壁の残り具合から方形を呈しており，正方形に近い平面プランだと推定しれる。主柱は，**H10**は5本柱だが，他は4本柱のようであり，柱穴間距離はおおむね等しいが不均一であり，住居設定にあたっての設計はまだ大雑把であったようである。

住居の床面積はTab. 3のように，**H10**が最大で27㎡，**H19**が最小で約12㎡，**H22**は18.9㎡であり，他は推定値だが**H16**をのぞいて25㎡を超えない。住居の規模は総体的に弥生時代後期後半～終末頃のものより小規模になっている。7世紀に降ると考えられる**H19**は更に小規模である。

集落の時期

古墳時代の住居跡10軒のうち，明確に4～5世紀代に比定できるものはないが，**H 4**出土の甕（Fig47—12）は，小原遺跡の中では古手の土師器であり，部分的な調査であったがカマドは持たないようである。

他の9軒については，**H 1・H 2・H10・H12**で検出した須恵器坏身は須恵器第Ⅲ B型式に相当すると考えられ，**H16・H22**は同Ⅲ B型式の新しい所からⅣ型式にかかる頃と思われる。よって，前者4軒が6世紀後半のやや降った頃，後者2軒は6世紀終末から或いは7世紀初頭に降る頃と推定される。

H13出土の皿は住居跡に伴うものではなく，住居の年代を明確に示す土器に乏しいが，恐らく**H12**に近い頃のものと考えられる。

H 8・H19は6世紀末から7世紀に下る可能性がある。

以上のように小原集落はほぼ6世紀後葉以降7世紀にかけて，人々が住んでいたと考えられる。

カマド

明確にカマドの存在が確認されたのは**H 2・H19・H22**である。**H 8**の石組みは明確にカマドだと断言できないが，その可能性を残している。他の住居跡はカマドを持たないか，削平れて残存しない。

H10はほぼ全掘したが，カマドの存在に肯定的な痕跡は認められなかった。検出した須恵器の口唇部に古式のクセを残す坏蓋が存在するが器形は新しい要素を持ち，須恵器第Ⅲ B型式に相当すると考えられる。

H 2はカマドを持ち，出土須恵器はやはり第Ⅲ B型式に相当すると考えられる。**H22**もカマドを持ち，出土須恵器は第Ⅲ B型式の新しい部分から第Ⅳ型式頃に相当すると考えられる

以上より，小原集落では，須恵器第Ⅲ B型式の時期にカマドが出現したと考えられる。しかし，その時期にすべての住居にカマドが存在したわけではない。

小原古墳群

小原古墳群は，中世の山城である茶臼山城跡[5]のまわりに存在する茶臼山古墳群のうち，城跡南側傾斜面に構築された一群がそれである（Fig.69）。それらは，ほぼ標高90*m*から80*m*の丘陵斜面に構築されている[6]。

調査を実施した小原1号墳～8号墳[7]は約30*m*の距離をおいて，1号～5号墳の5基からなる一群と，6号～8号墳の3基からなる一群にわかれる。各々の一群を一つの単位として，数単位が支群を形成し，支群の集合したものが茶臼山古墳群を形成したものと思われる。

弧状溝

本古墳群は傾斜面に構築されていたために，周溝は完全にめぐらず，三日月形の弧状形を呈する溝が，傾斜面の標高が高い側に設定されている。古墳構築前に掘り込まれたこの種の溝は，傾斜面に構築された古墳には一般的に見られるものである。それは，古墳構築に際して墳丘の平面的規模を決定し，墳丘完成時にその溝が人為的に埋められていない限りにおいては墳域を示す役割を果たしたと思われる。溝を掘削するに際して排出した土砂は墳丘盛土に使用されたであろうが，それはあくまで二義的なものであったろうと思われる。

時期

調査した8基の古墳は，いずれも墳頂部に陥没が認められ，すでに盗掘を受けていたために出土遺物の多くは原位置を移動していた。そのため，各古墳の構築時期を明確に示す良好な状態での土器の検出はなかった。よって，ここでは原位置を移動した土器のうち，最も古い型式のものが各古墳の構築時期を示すであろうという仮定のもとに，各古墳の構築時期を

考えることとする。

上記の仮定のもとに各古墳の構築推定時期を記せば下記のようである。

1号墳	6世紀末～7世紀初頭
2号墳	6世紀後葉
3号墳	6世紀末～7世紀初頭
4号墳	6世紀末～7世紀初頭
5号墳	1号墳より後出，7世紀初頭
6号墳	7世紀後半以前
7号墳	6世紀後葉
8号墳	6世紀末

2号墳，7号墳が早く成立し，やや遅れて他の6基が構築されたようである。6号墳については第Ⅱ次床面の土器が須恵器第ⅥA型式のものであり，本古墳群中では最も新しいものである。第Ⅰ次床面にともなう須恵器が明らかでないので，構築時期は明確にしがたい。

追葬に関しては，5号墳，6号墳の床面が二重構造になっており，明らかに追葬行為の痕跡が石室構造の面に表われている他の古墳についても，二型式以上の土器が見られ，追葬の行なわれた事は明白である。土器の上で最も新しい追葬行為のあったのは6号墳で，7世紀後半代である。

調査した8基の古墳を総体的に見れば6世紀後葉から7世紀後半までの間，墓として使用されたようである。

小原集落と小原古墳群

小原遺跡と小原古墳群は小谷をはさんで数百メートルの距離にある。両者は相互に見える位置にあり，標高差は20*m*前後で地形的に近い関係にある。

調査結果によれば，古墳時代の小原集落のうち最も古い須恵器を出土した住居跡は**H10・H12**である。第1号土壙（**SX 4**）は**H10・H12**よりも古い須恵器を出土しているが，住居跡と明確に言い切れない。

また，前項で記したように小原古墳群の中で早く成立したと思われるのは，2号墳と7号墳である。それらの出土須恵器は**H10・H12**の出土須恵器よりも新しい様相が認められる。

これらのことより，調査した古墳と住居跡に限って言えば，小原集落は小原古墳群に先行して存在し，それが営まれている期間に小原古墳群中の2号墳，7号墳以下が構築されたと考えられる。小原集落と小原古墳群の関係を示す積極的な資料はないが，小原集落に生活した人々が小原古墳群を含めた茶臼山古墳群形成の一翼を担ったのではないだろうかと考えら

れる。（児玉）

註

① 柳田康雄「津古内畑遺跡」第1次～第5次　1970～1974　小郡町教育委員会　福岡県教育委員会

② 福岡考古学研究会編『九州考古学の諸問題』1975　23頁～26頁

③ 酒井仁夫「福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概報」1972　福岡県教育委員会

④ 他にH20およびH7からも各1点づつ出土しているが，共に各住居跡に伴う確証はない。

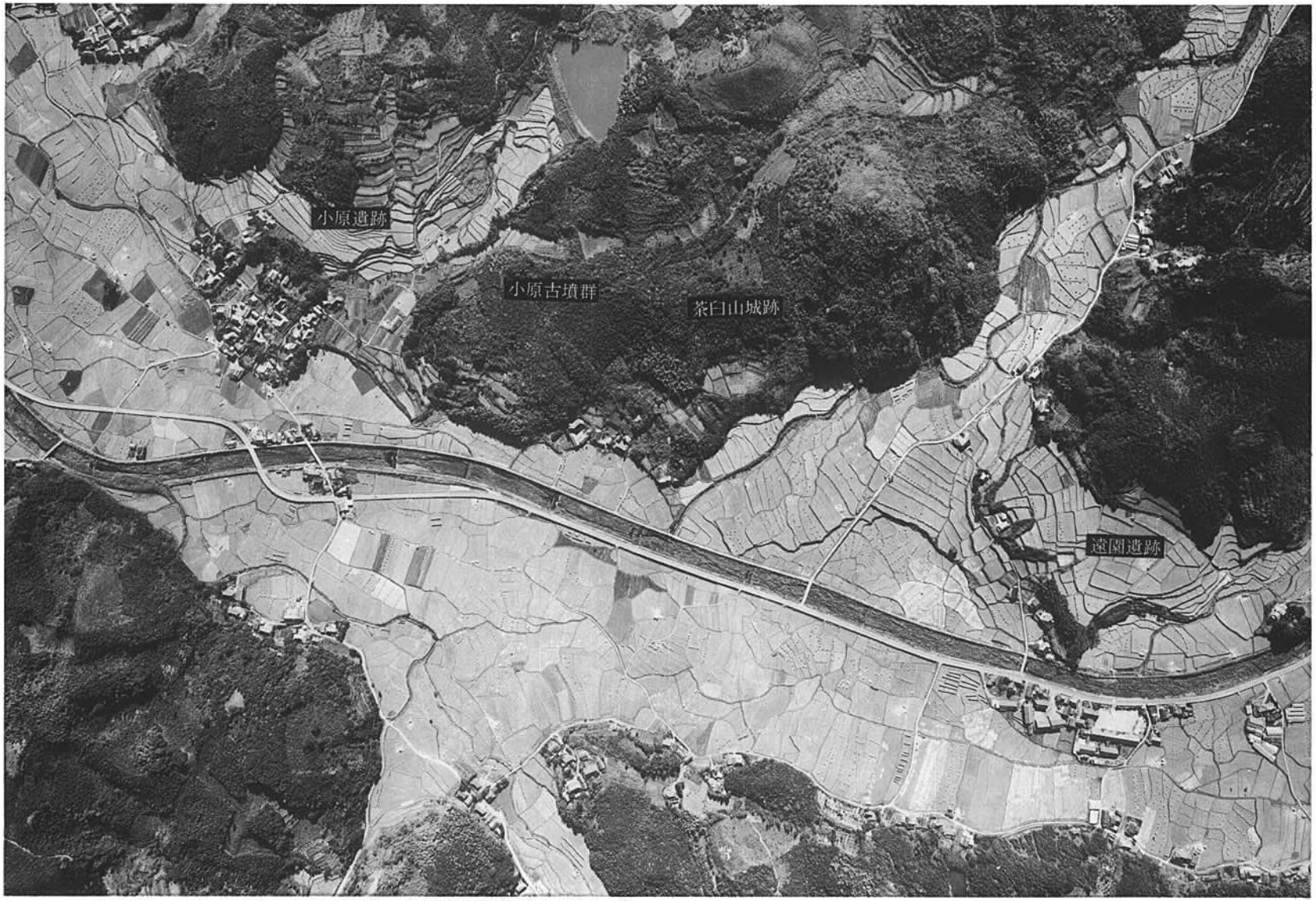
⑤ 福岡県教育委員会「くらてのむかしその3」1976.3所収，報告書は昭和52年度刊行予定。

⑥ ⑤に同じ

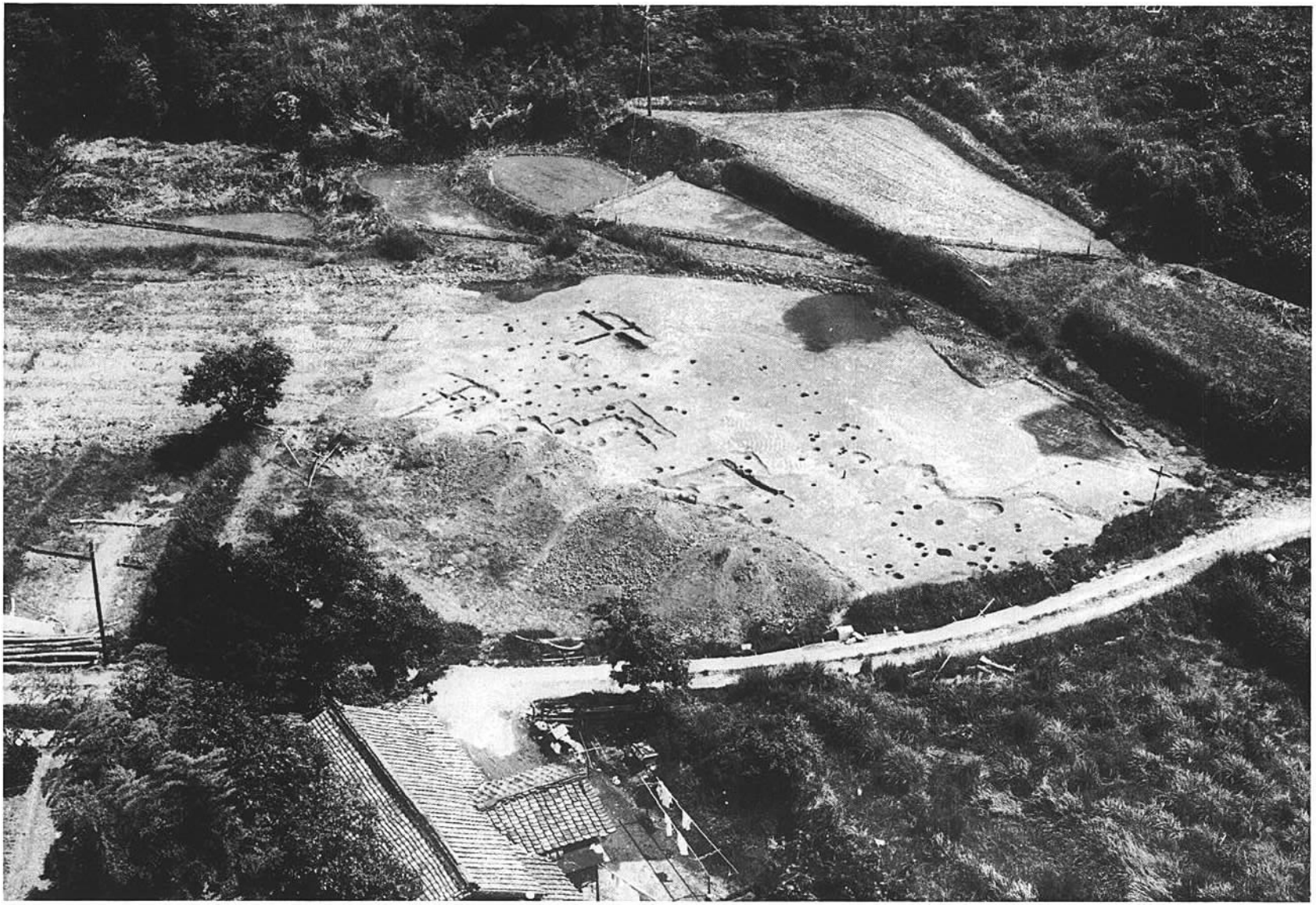
⑦ 「くらてのむかしその3」11頁において9基の古墳を調査した由を記しているが，実際に調査したのは8基である。調査前に，6号墳以東に4基の古墳が存在すると想定しての調査であったことに起因する。

小原遺跡・小原古墳群

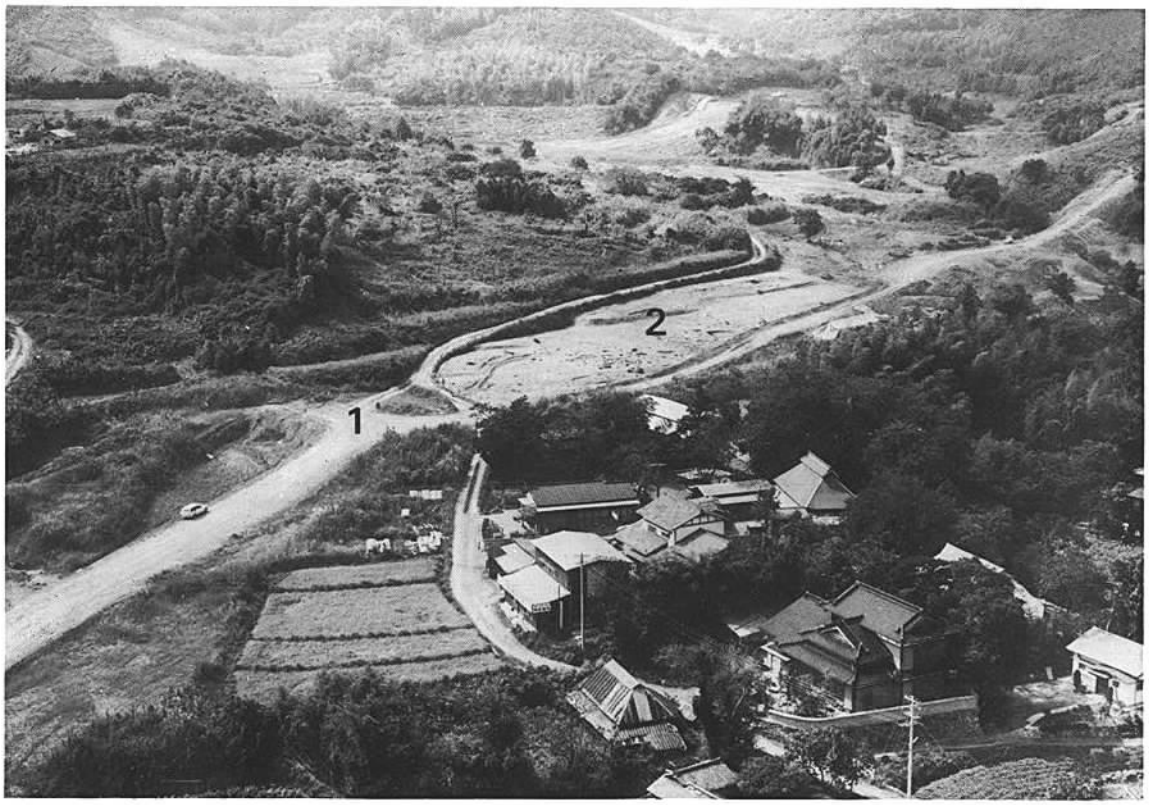
PLATES



遠園遺跡・茶臼山城跡・小原古墳群・小原遺跡航空写真（北から）



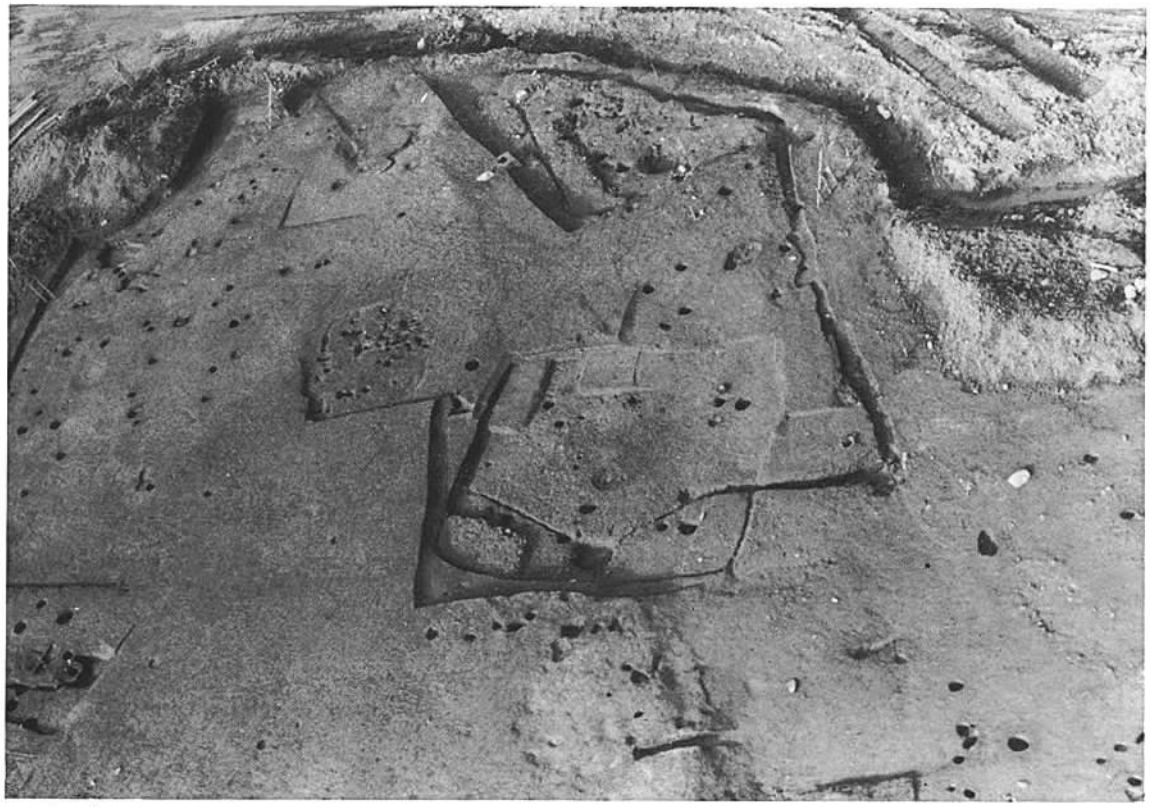
小原遺跡第１次調査航空写真（北から）



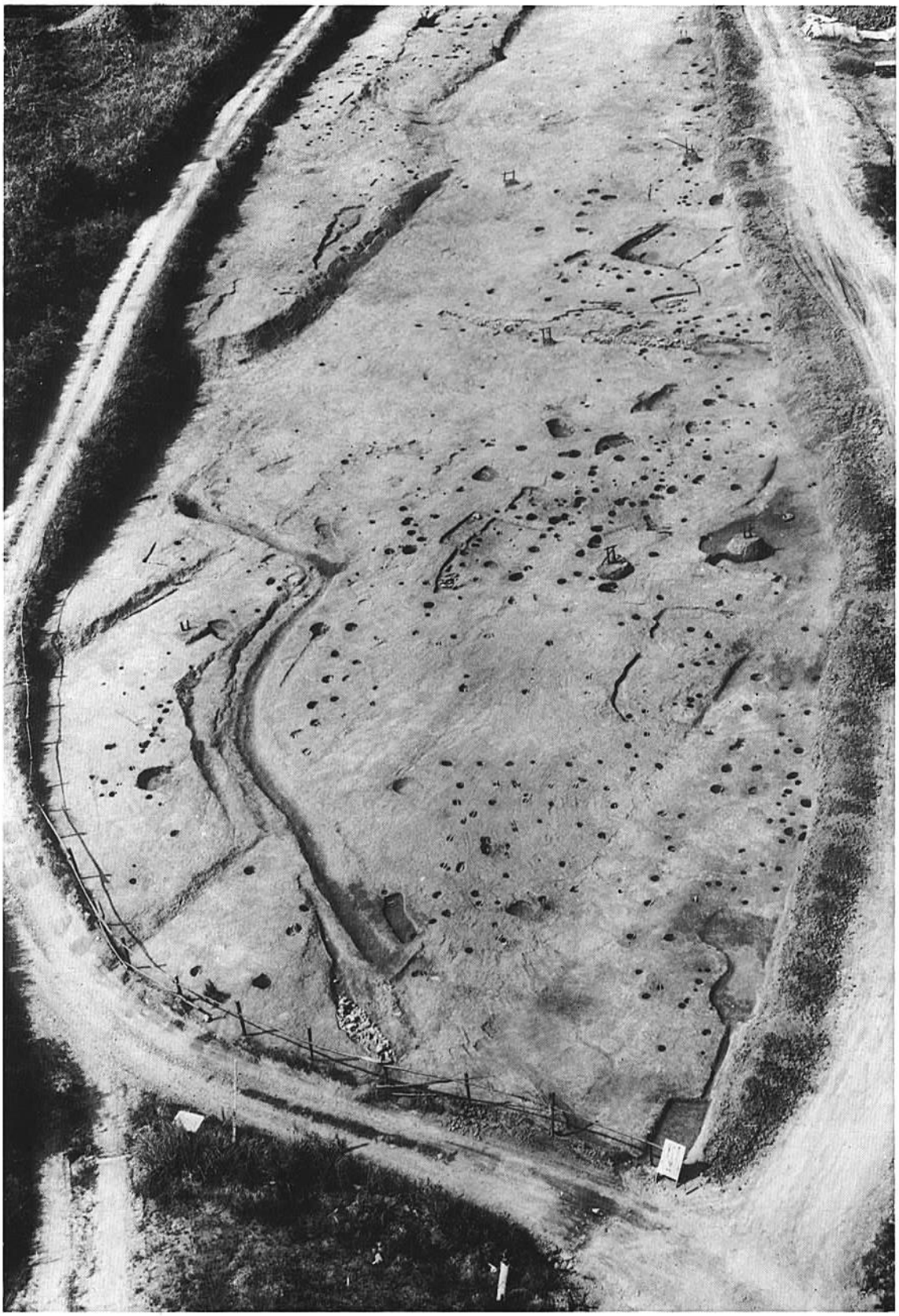
(1) 小原遺跡航空写真（北東から，1は第1次調査区，2は第2次調査区）

(2) 小原遺跡第2次調査東半部航空写真（西から）

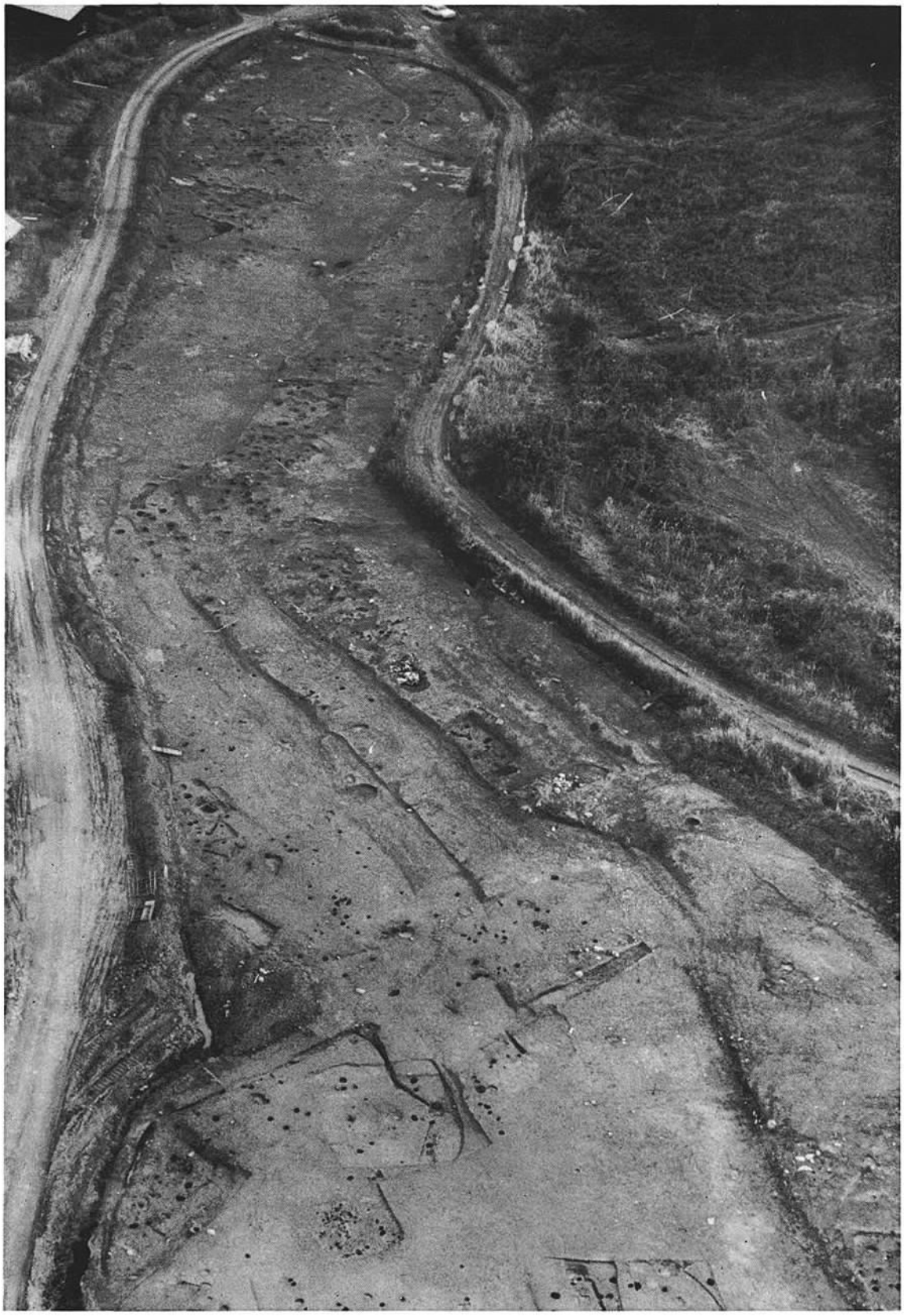
(1) 小原遺跡第２次調査西半部全景（北から）



(2) 小原遺跡第２次調査西端部（南から）



小原遺跡第２次調査東半部航空写真（東から）



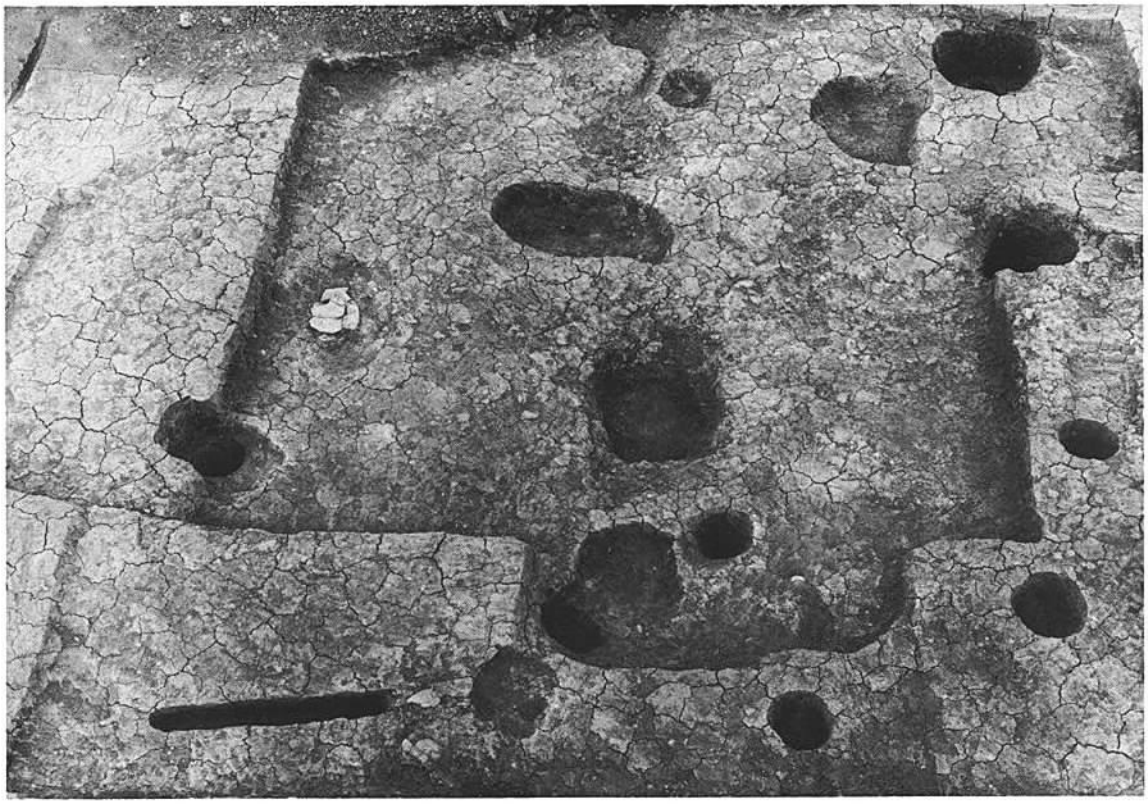
小原遺跡第2次調査航空写真全景（西から）

(1) 小原遺跡第１次調査全景（南から）

(2) 小原遺跡第１次調査東半各住居跡（南から）

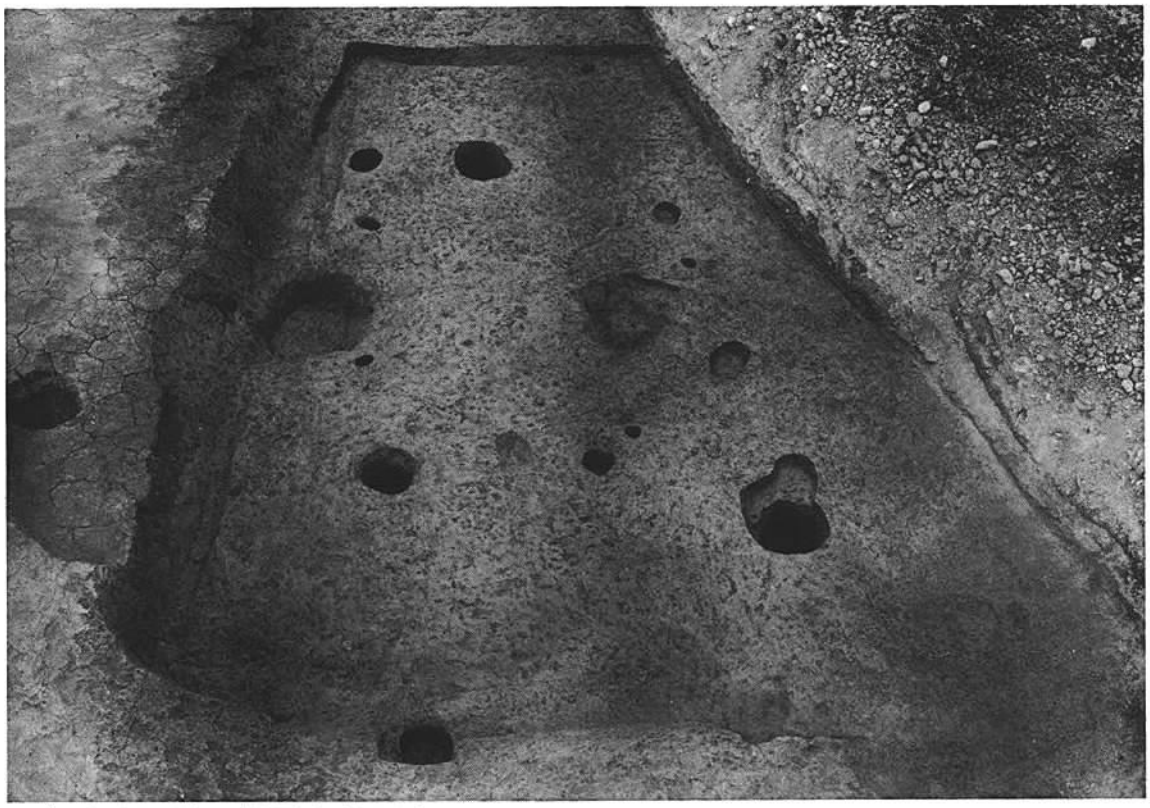
(1) 小原遺跡第１号住居跡（東南から）

(2) 小原遺跡第２号住居跡（南から）

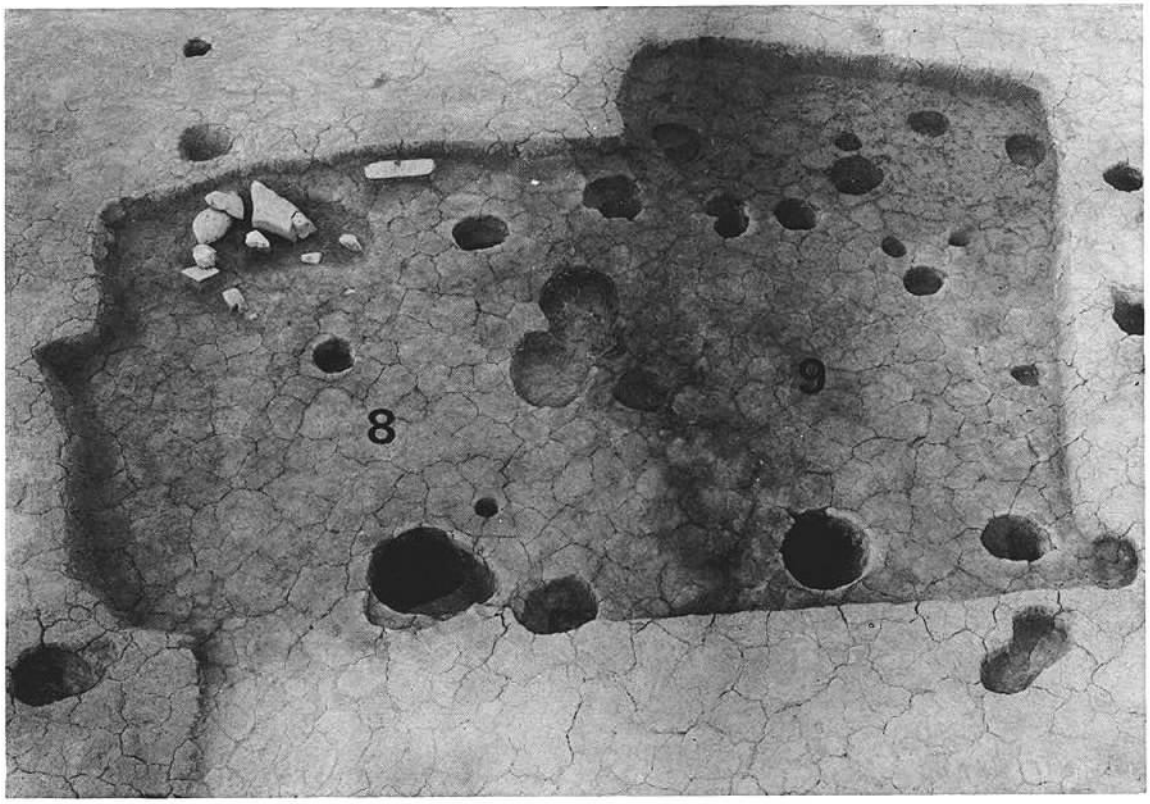


(1) 小原遺跡第3号住居跡（西から）

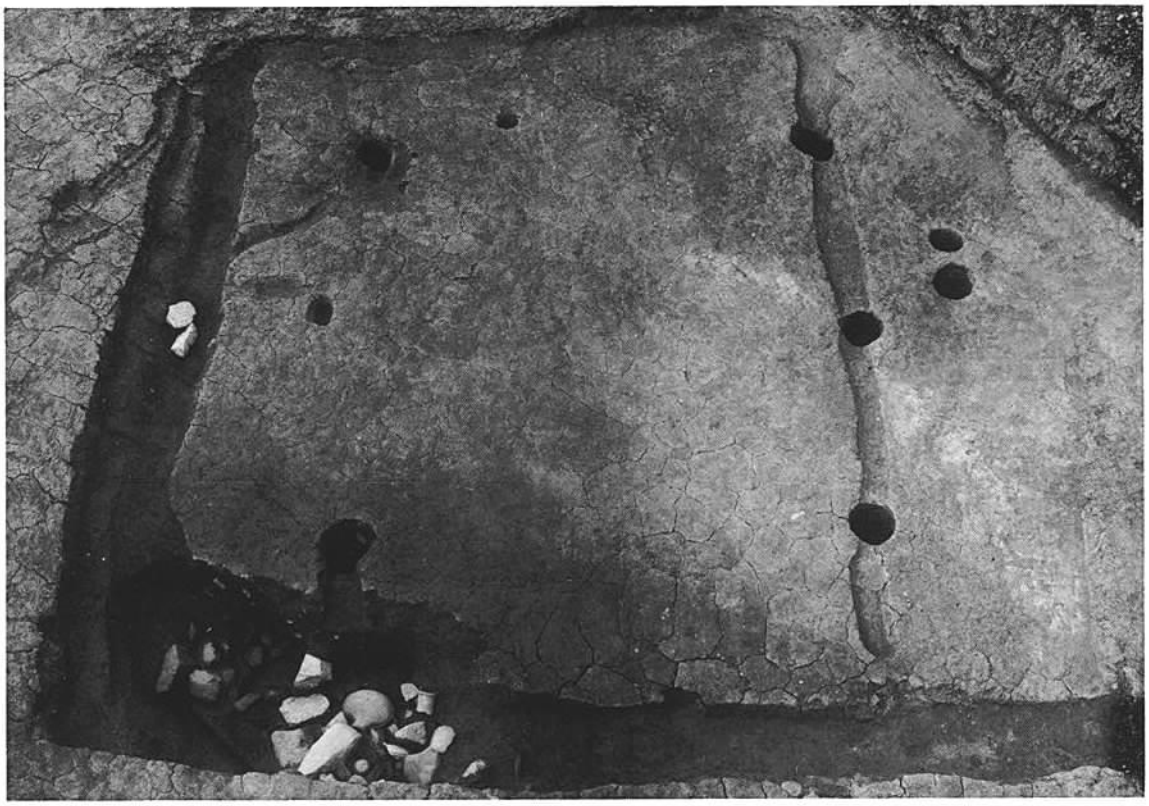
(2) 小原遺跡第4号住居跡（西から）



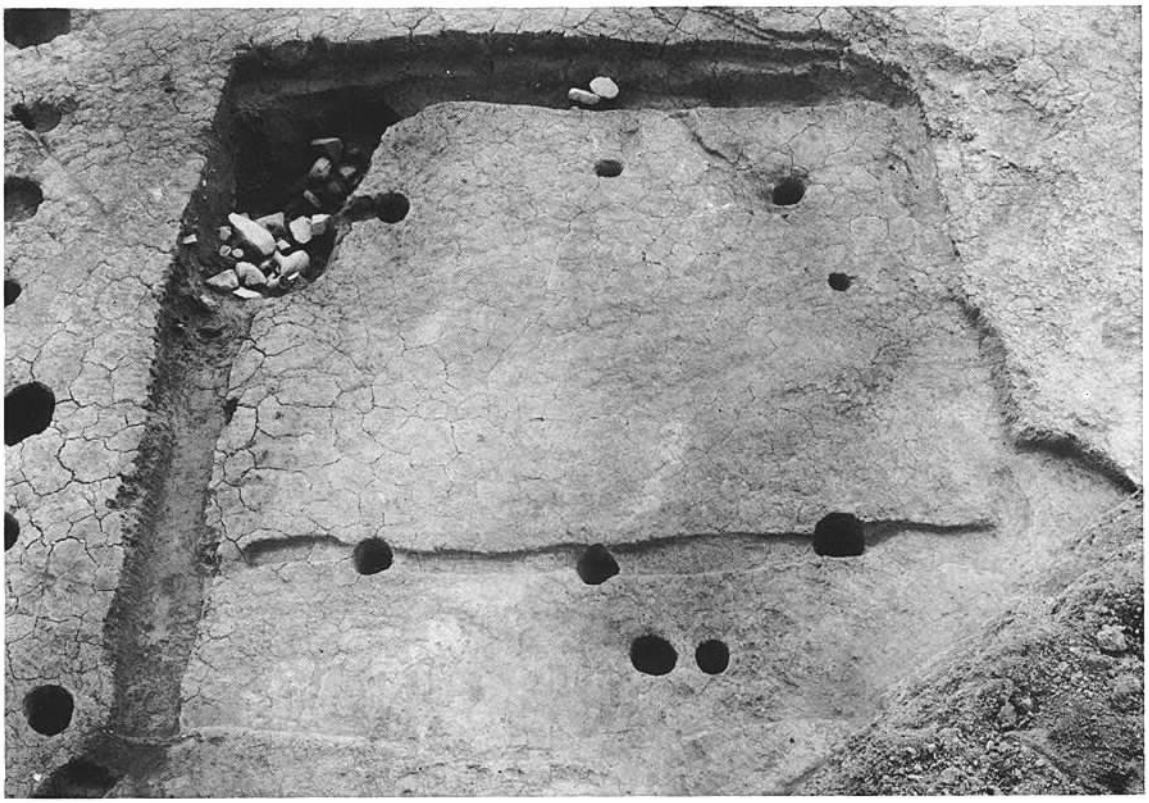
(1) 小原遺跡第7号住居跡（東から）



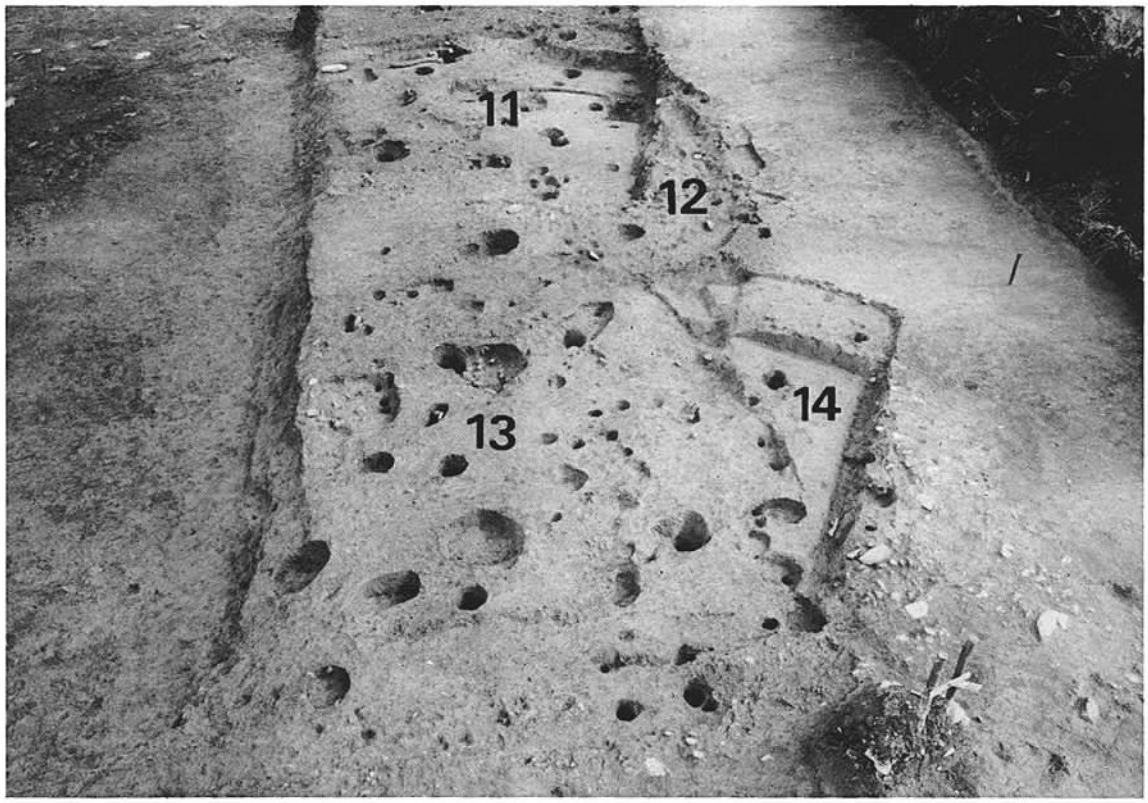
(2) 小原遺跡第8・9号住居跡（北から）



(1) 小原遺跡第10号住居跡と第１号貯蔵穴（東から）



(2) 小原遺跡第10号住居跡と第１号貯蔵穴（北から）

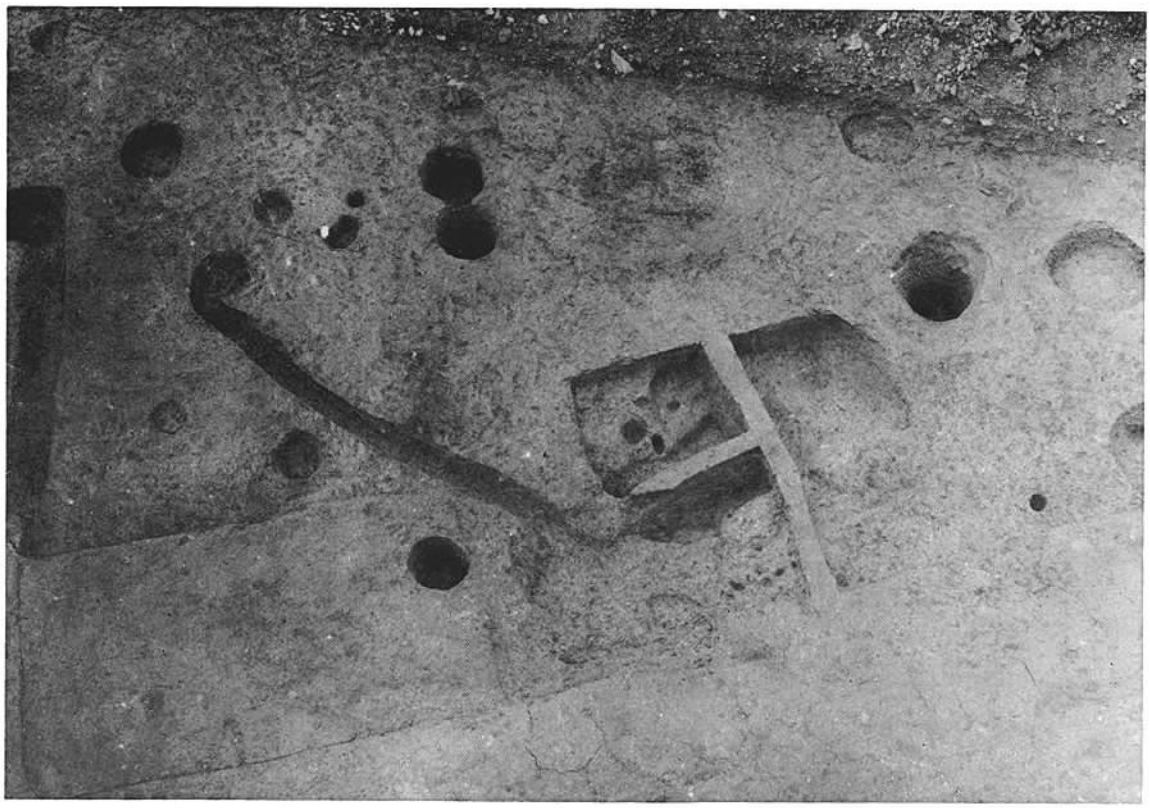


(1) 小原遺跡第11号～第14号住居跡（西から）

(2) 小原遺跡第11・12号住居跡（北から）

(1) 小原遺跡第11号住居跡鉈出土状態

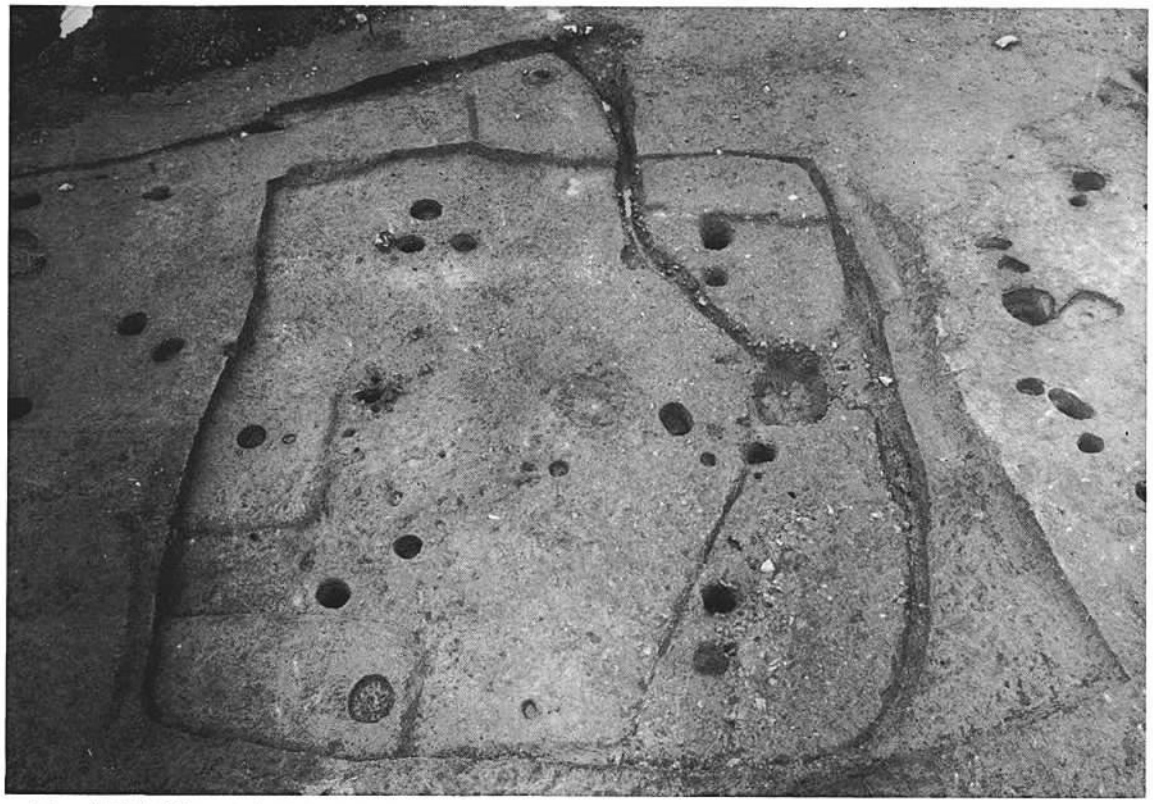
(2) 小原遺跡第13・14号住居跡（西から）



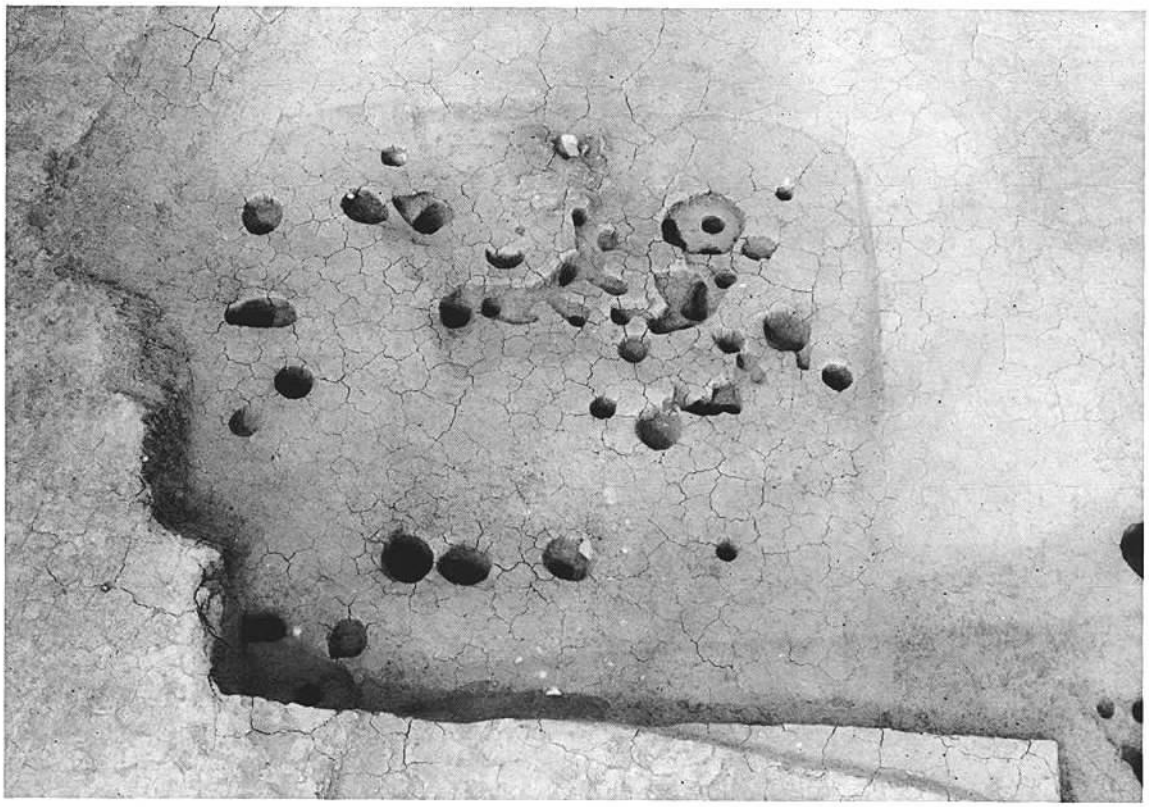
(1) 小原遺跡第15号住居跡（南から）

(2) 小原遺跡第16号住居跡（北から）

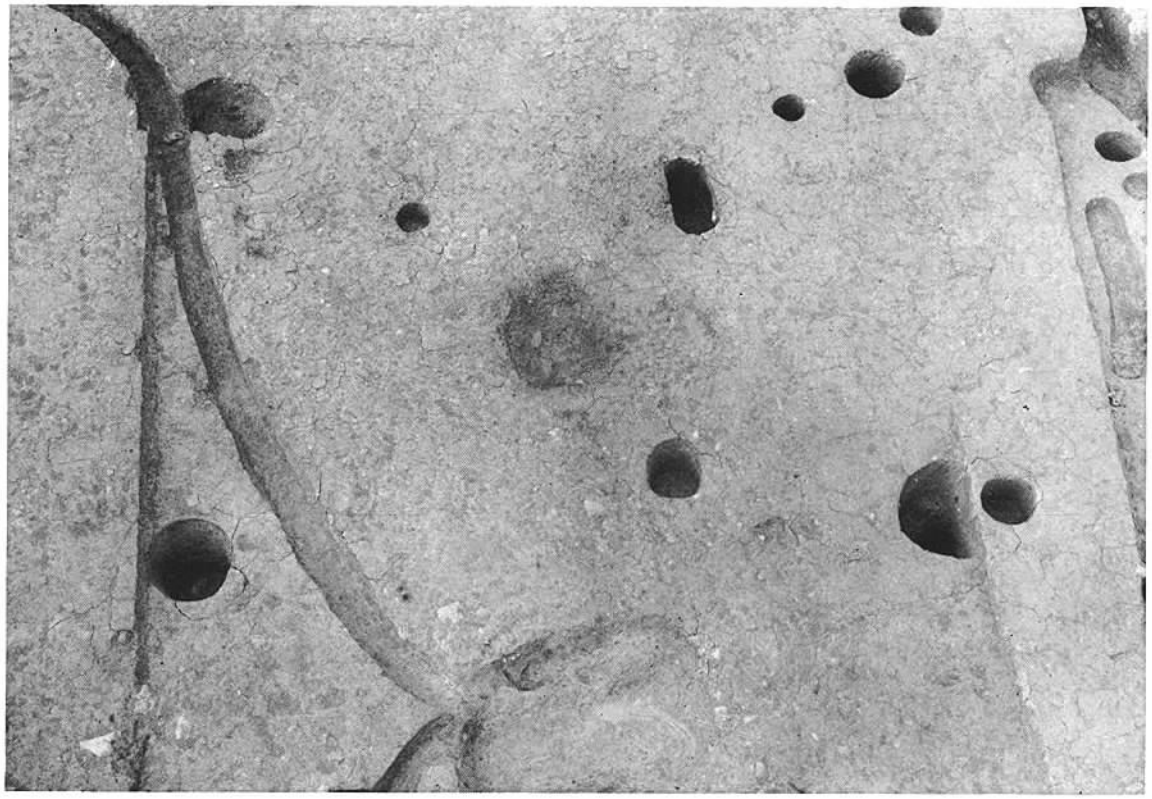
(1) 小原遺跡第17号住居跡（北から）



(2) 小原遺跡第18号住居跡（西から）



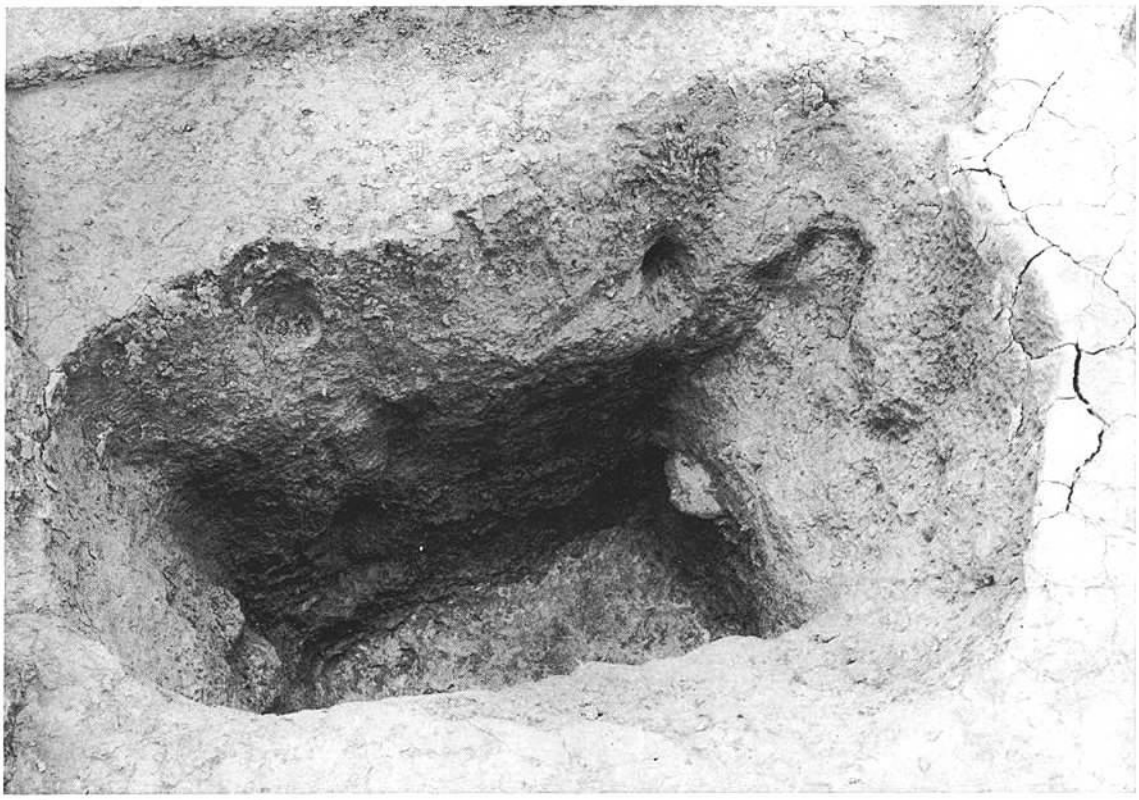
(1) 小原遺跡第19号住居跡（南から）



(2) 小原遺跡第21号住居跡（東から）

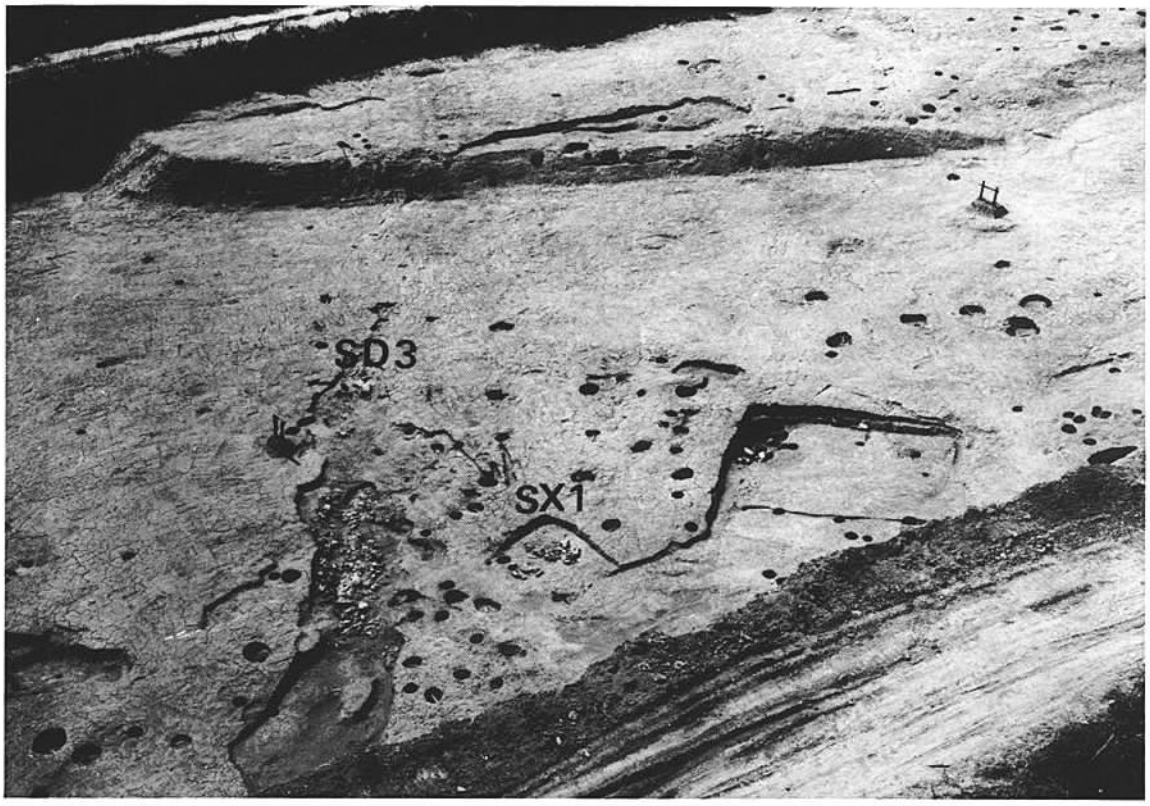
(1) 小原遺跡第22号住居跡（北から）

(2) 小原遺跡第１号貯蔵穴遺物出土状態（東から）



(1) 小原遺跡第1号貯蔵穴（東から）

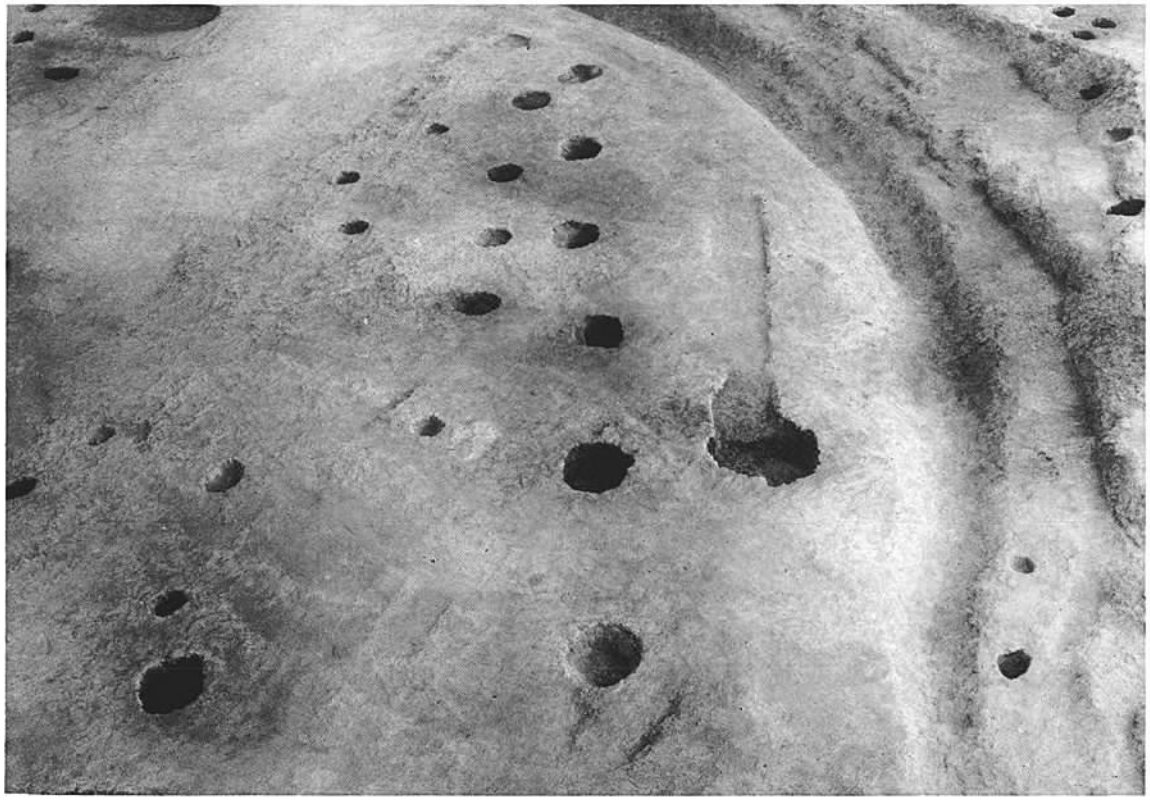
(2) 小原遺跡第2号貯蔵穴（北から）



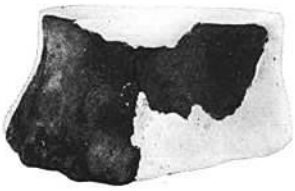
(1) 小原遺跡第３号溝状遺構（ＳＤ３），第１号竪穴遺構（ＳＸ１），第10号住居跡航空写真（北から）

(2) 小原遺跡第３号溝状遺構（北から）

(1) 小原遺跡掘立柱建物群航空写真（東から）



(2) 小原遺跡第 7 号掘立柱列（西から）



小原遺跡第１次調査出土土器

7

17

17

17

18

17

17

18

17

18

小原遺跡第７号・第17号・第18号出土土器（数字は住居番号を示す）

小原遺跡第１号貯蔵穴出土土器

小原遺跡第1号貯蔵穴出土土器

8

22

8

3

19

3

19

3

19

小原遺跡住居跡，第3号溝状遺構出土土器（数字は住居，溝状遺構番号を示す）

小原遺跡第10号住居跡出土土製模造鏡

小原遺跡第10号住居跡出土土鈴

小原遺跡第１号竪穴遺構出土土器

22

16

13

10

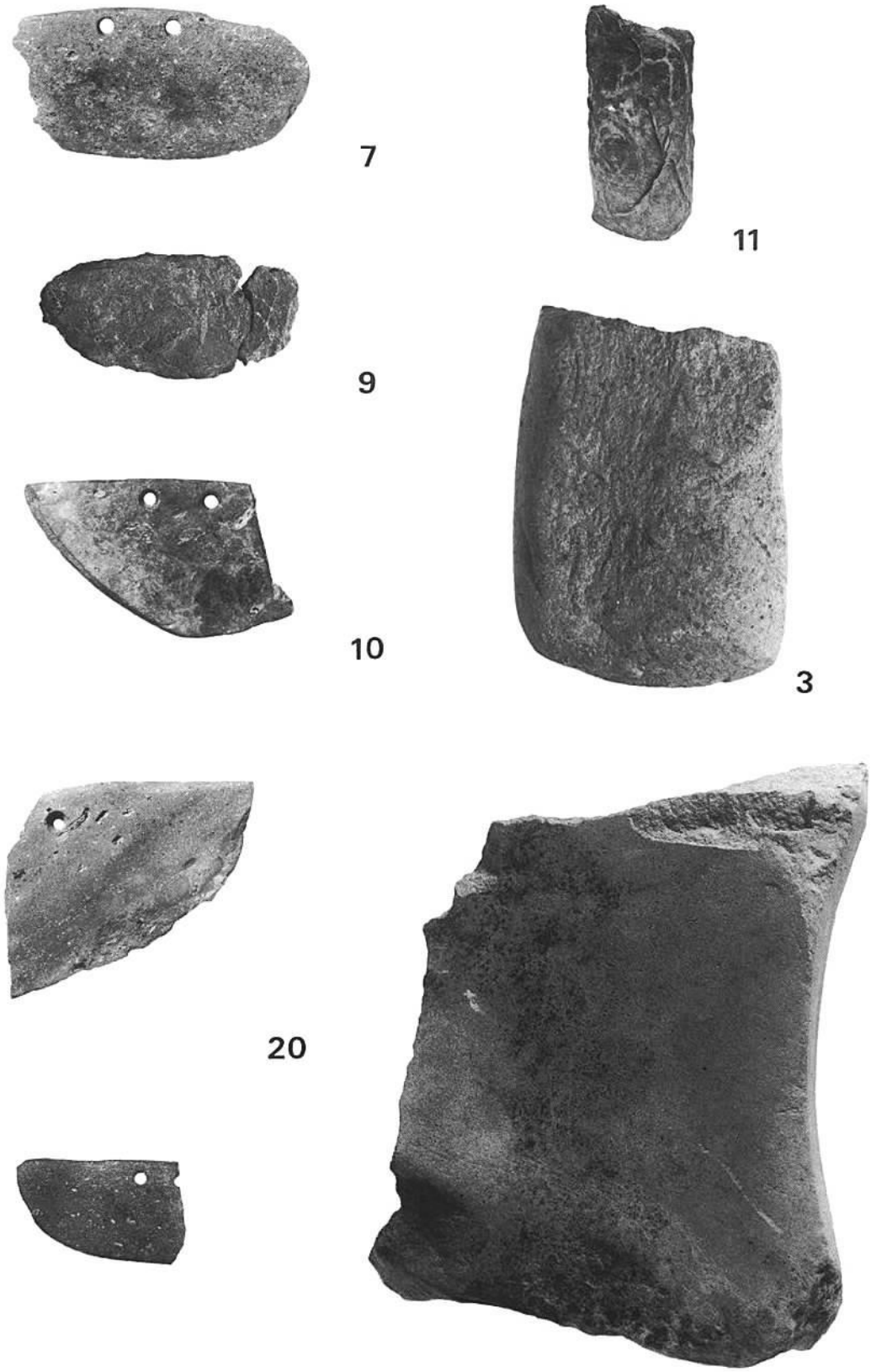
小原遺跡出土土器（数字は住居番号を示す）

7

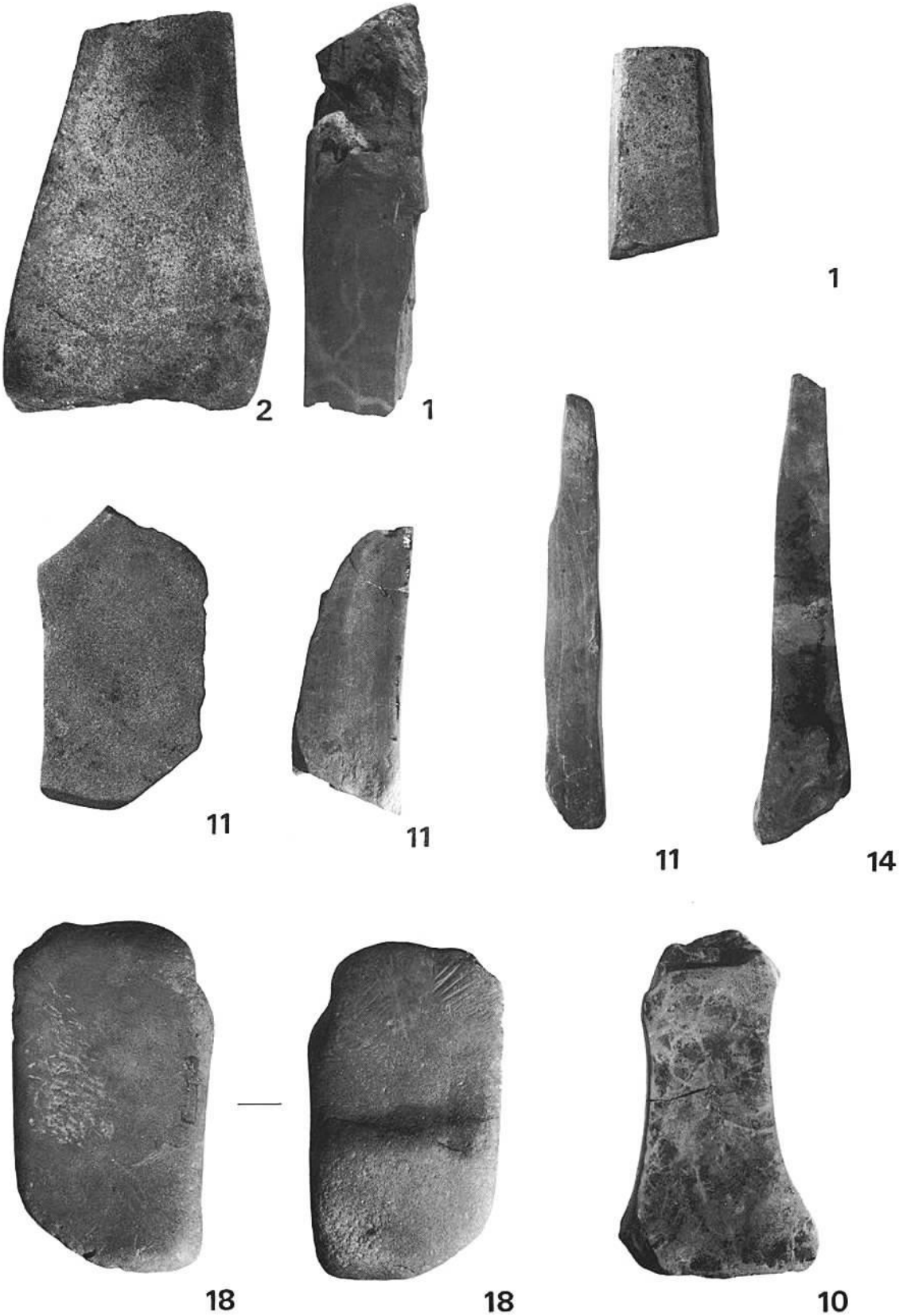
11

20

小原遺跡出土鉄器（数字は住居番号を示す）



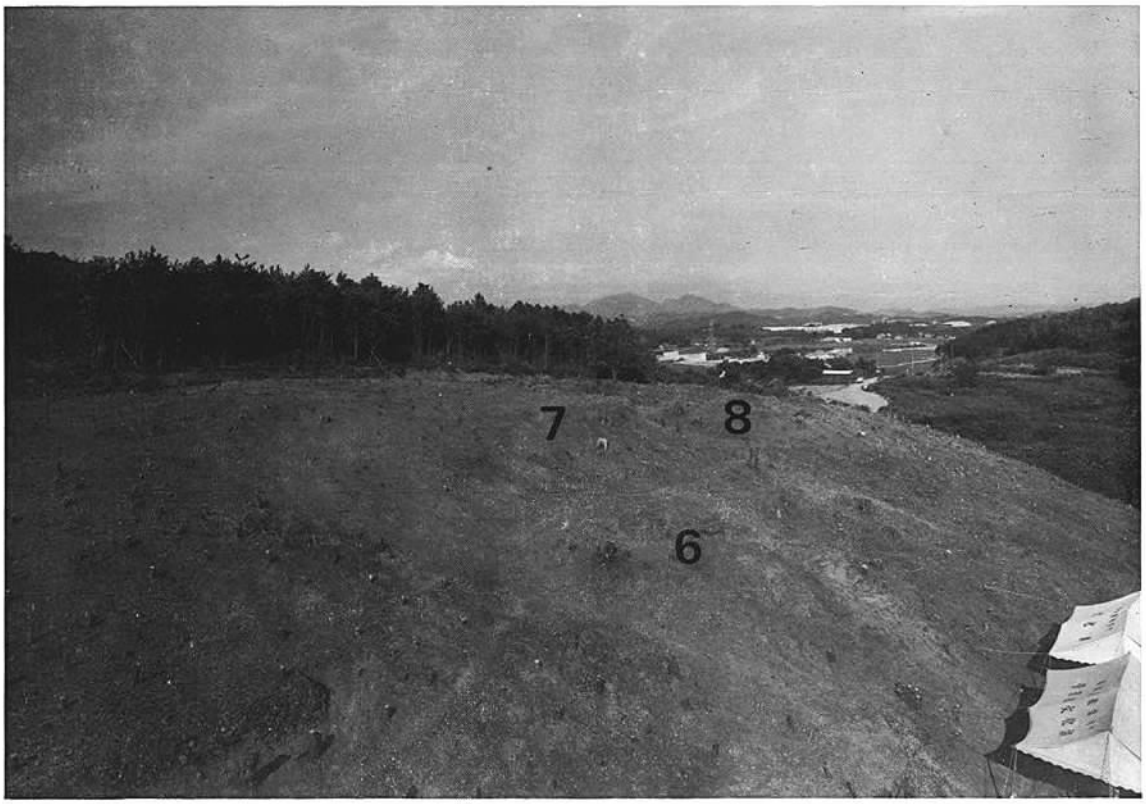
小原遺跡出土石器①（3は第3号溝状遺構出土，数字は住居番号を示す）



小原遺跡出土石器②（上段は貯蔵穴出土，数字は貯蔵穴・住居番号を示す）

(1) 小原古墳群全景（1は第1次調査，2は第2次調査地区）（南西から）

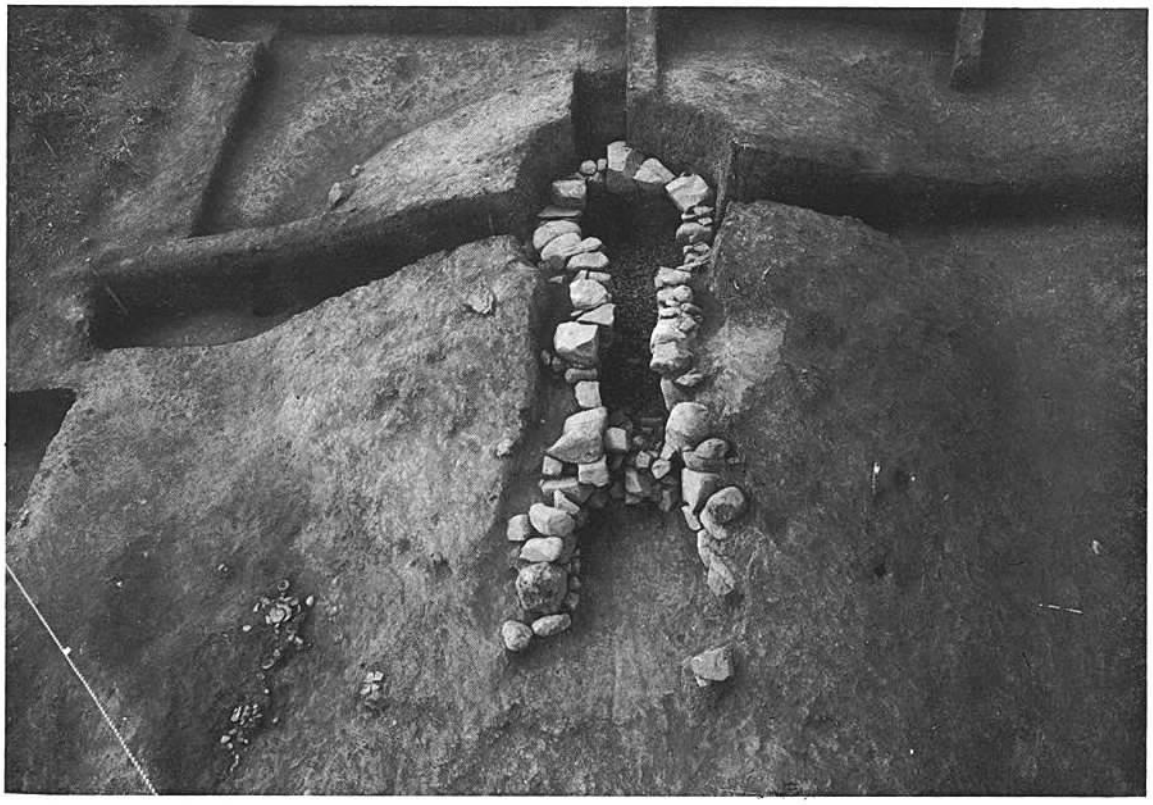
(2) 小原古墳群第1次調査全景（数字は古墳番号を示す）



(1) 小原古墳群 6 ～ 8 号墳全景（西から）

(2) 小原古墳群 6 ～ 8 号墳航空写真（西から）

(1) 小原１号墳全景（南から）

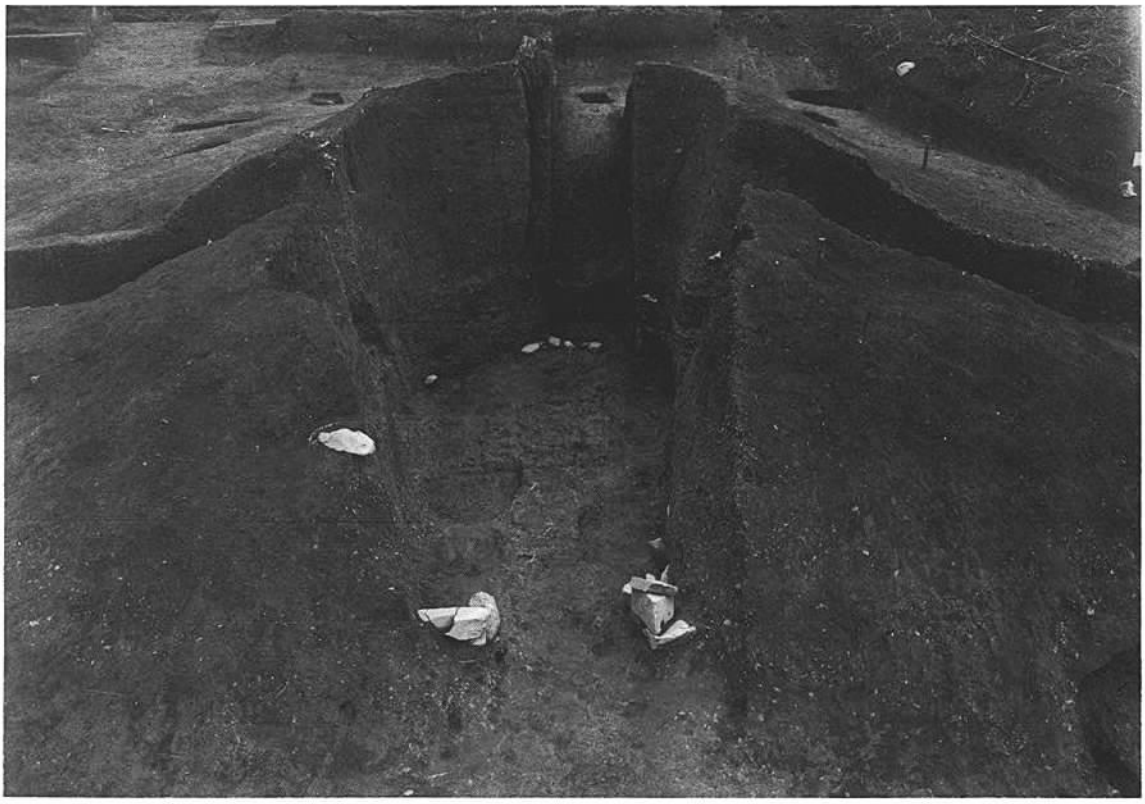


(2) 小原１号墳石室全景（南から）

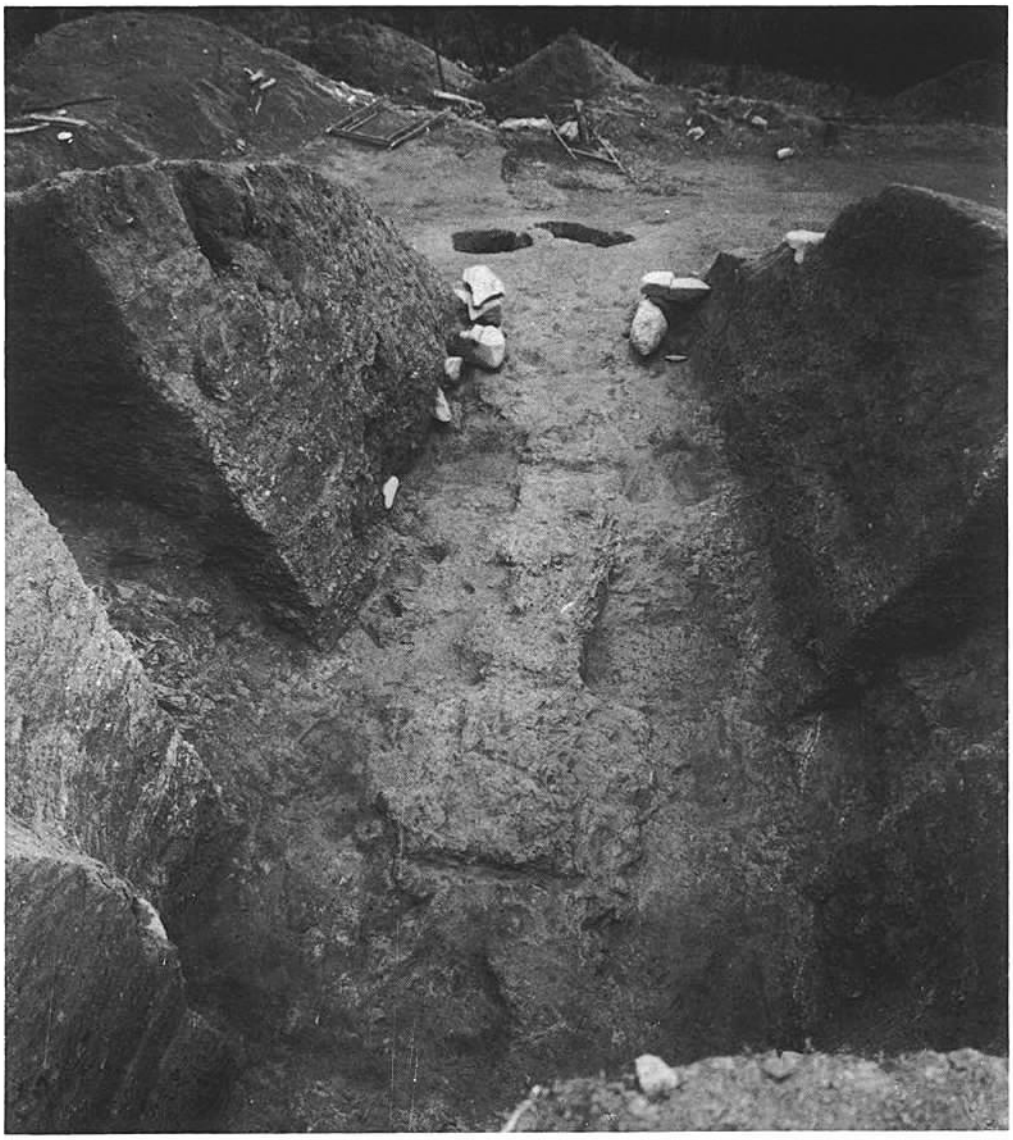
(1) 小原2号墳全景（南から）

(2) 小原2号墳石室掘方全景（南から）

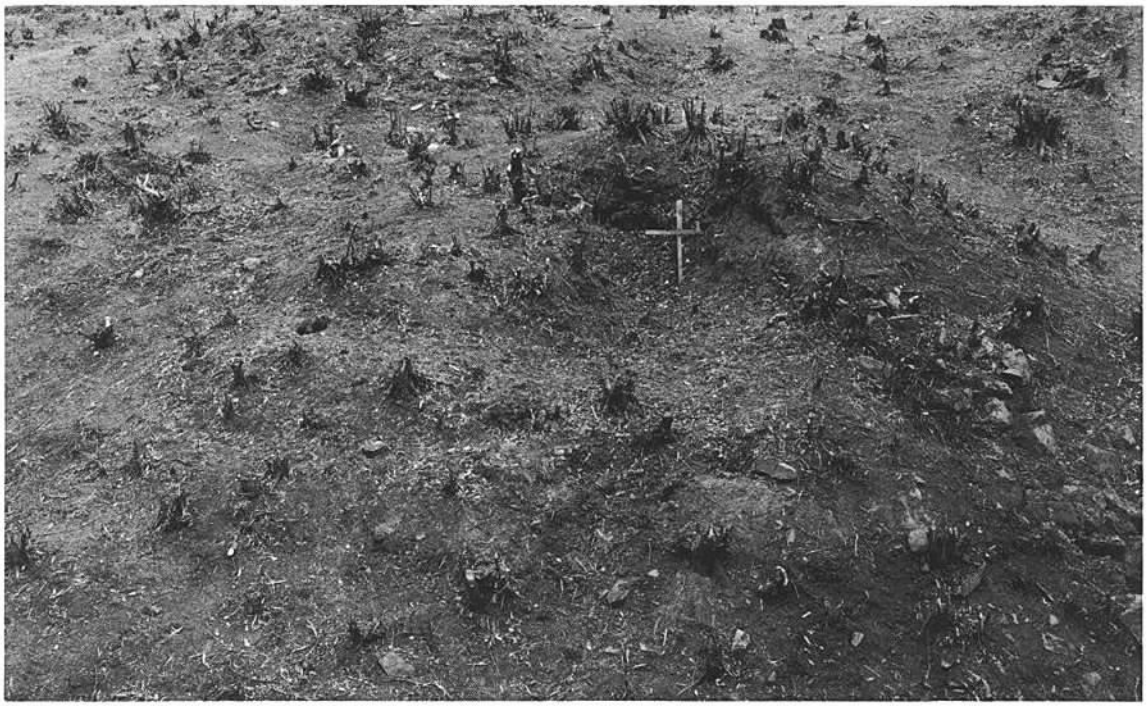
(1) 小原3号墳全景（南から）



(2) 小原3号墳石室掘方全景（南から）



小原 3 号墳石室掘方全景（北から）



(1) 小原4号墳全景（南から）

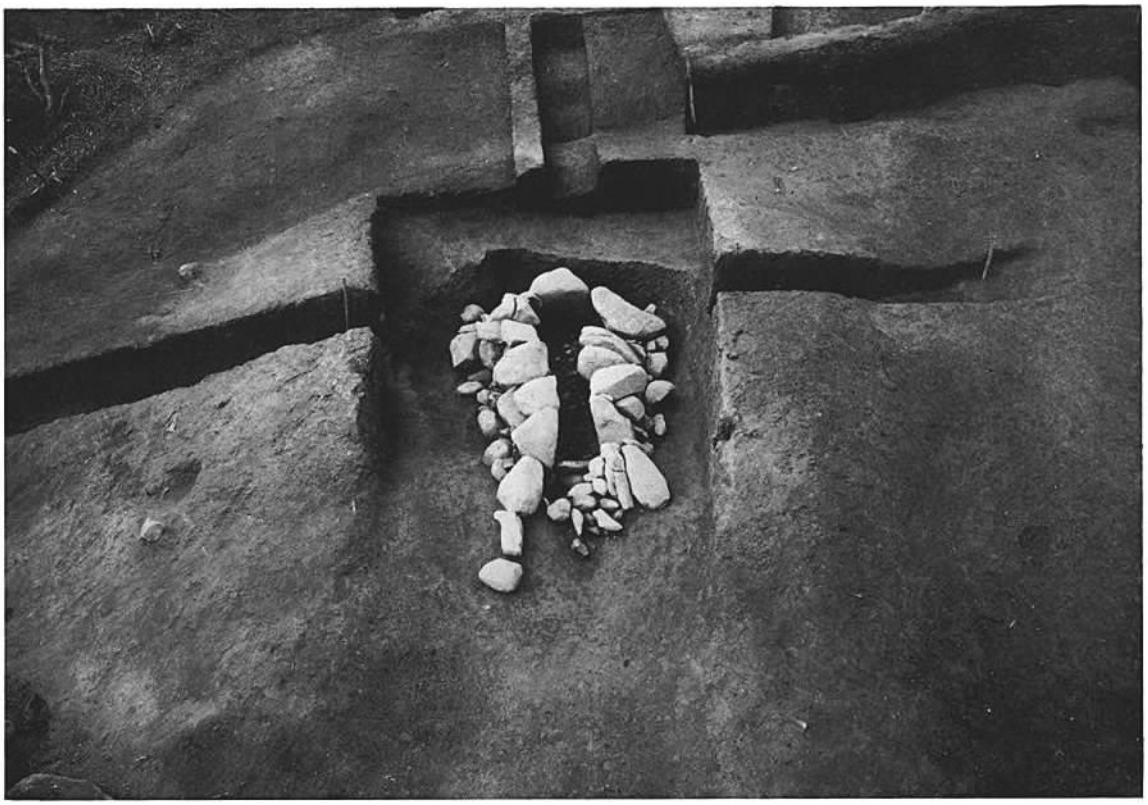
(2) 小原4号墳石室掘方全景（南から）

数字は区数を示す

(1) 小原4号墳遺物出土状態（2区墳丘）

(2) 小原4号墳遺物出土状態（3区墳丘）

(1) 小原5号墳全景（南から）



(2) 小原5号墳石室全景

(1) 小原6号墳全景（南から）

(2) 小原6号墳石室掘方全景（南から）

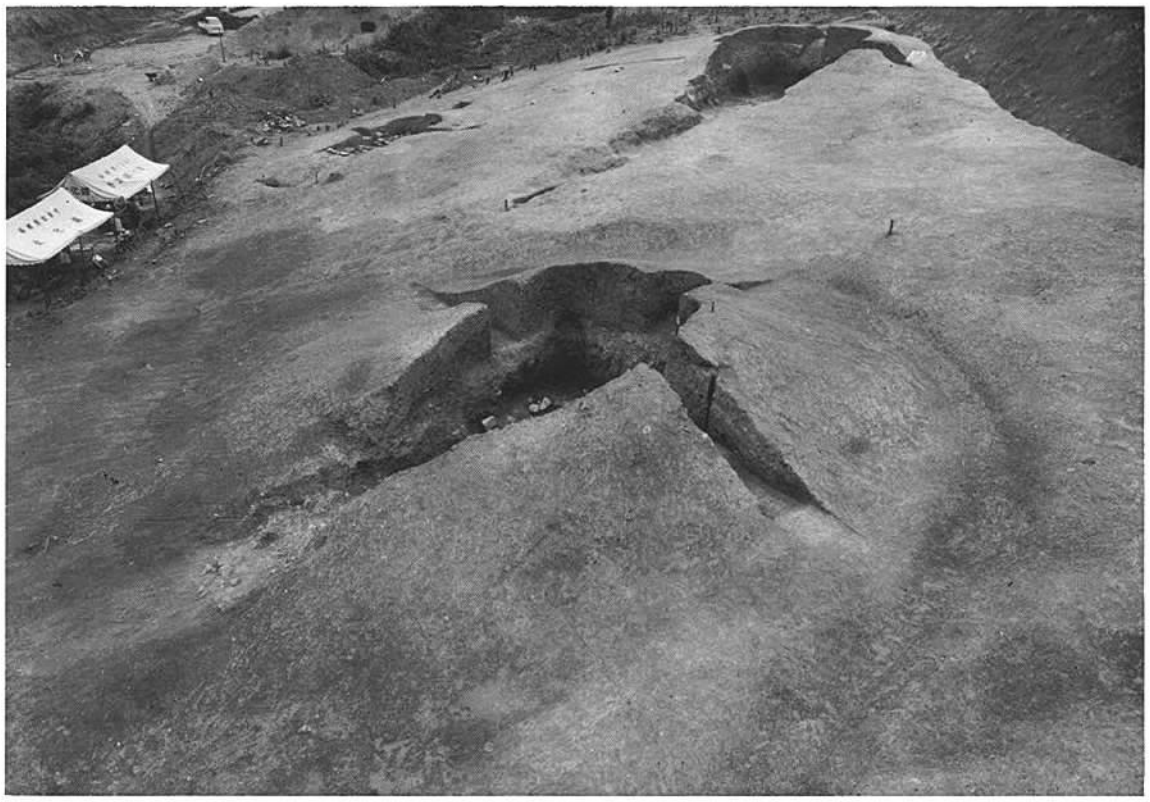
(1) 小原 6 号墳遺物出土状態

(2) 小原 7 号墳全景（南から）

(1) 小原7号墳石室掘方全景（東から）

(2) 小原7号墳石室掘方全景（北から）

(1) 小原8号墳全景（南から）



(2) 小原6～8号墳と8号墳掘方全景（東から）

小原１号墳出土土器　①

小原１号墳出土土器　②

小原２号墳出土土器　①

(1) 小原2号墳出土土器 ②

(2) 小原3号墳出土土器 ①

(1)　小原 4 号墳出土土器

(2)　小原 5 号墳出土土器

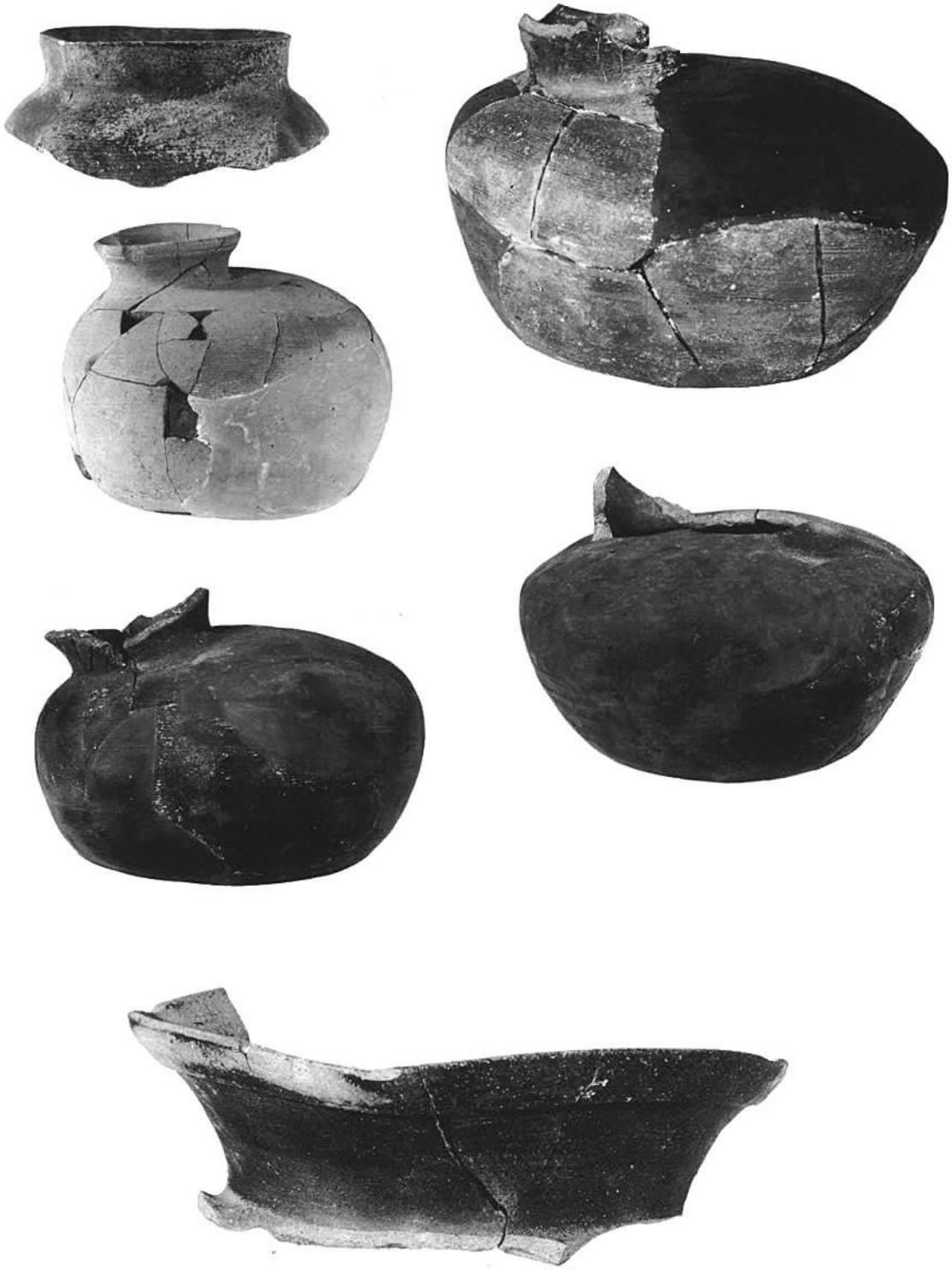
小原6号墳出土土器 ①

小原6号墳出土土器　②

小原 7 号墳出土土器　①

小原７号墳出土土器　②

小原 7 号墳出土土器 ③



小原８号墳出土土器

(1) 小原 5 号墳出土装身具

(2) 小原 7 号墳出土石器

(3) 小原 8 号墳出土装身具

(1) 小原3号墳墳丘北裾土壙群

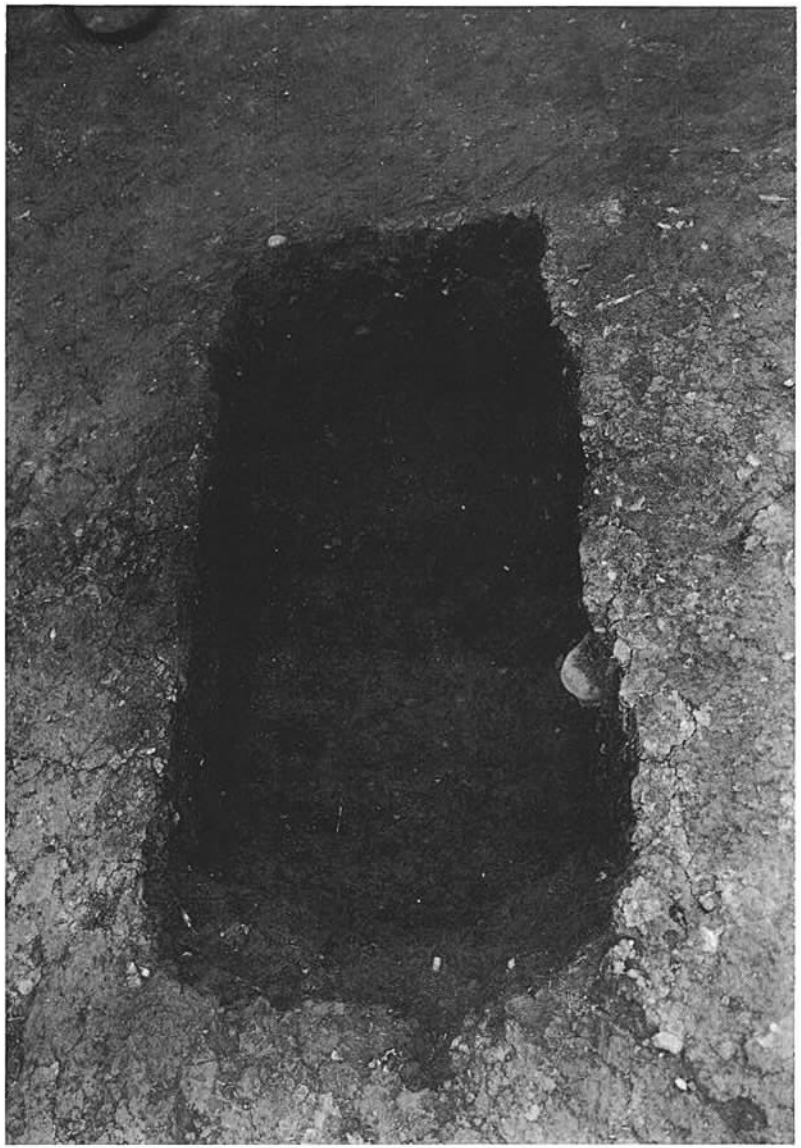
(2) 小原3号墳墳丘南西裾土壙群

(2) 第2号土壙

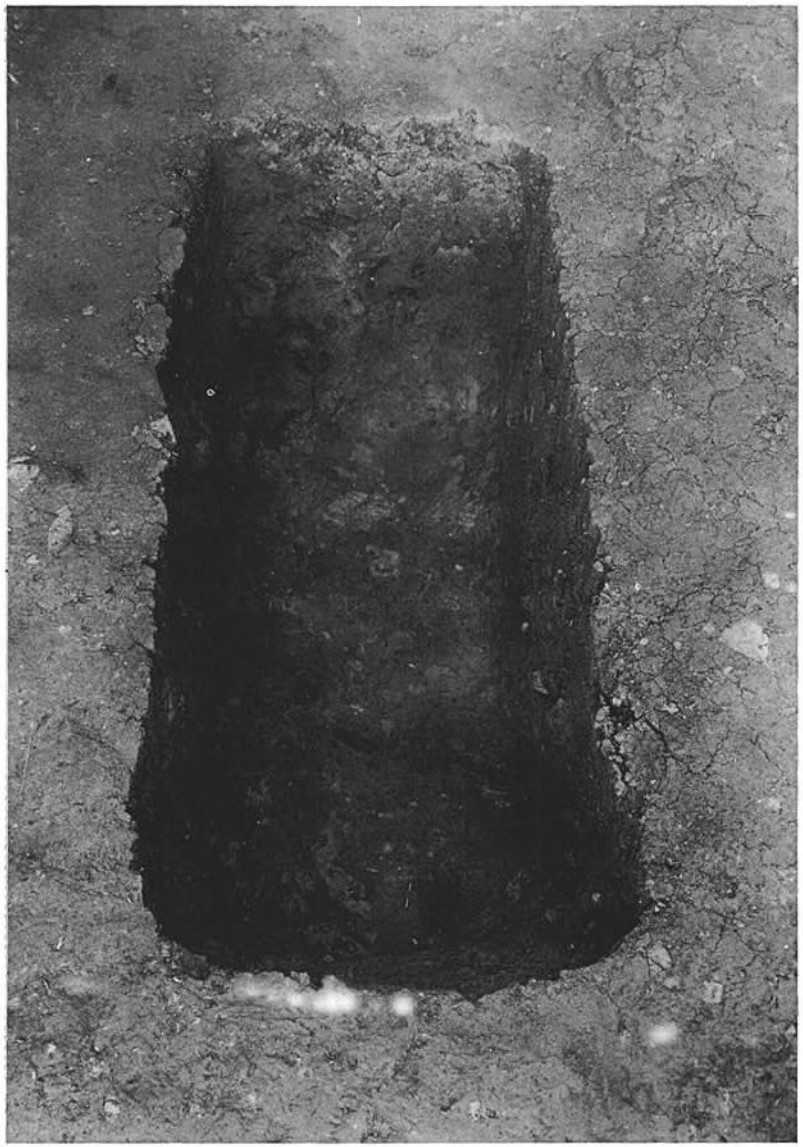
(1) 第1号土壙

(2) 第4号土壙

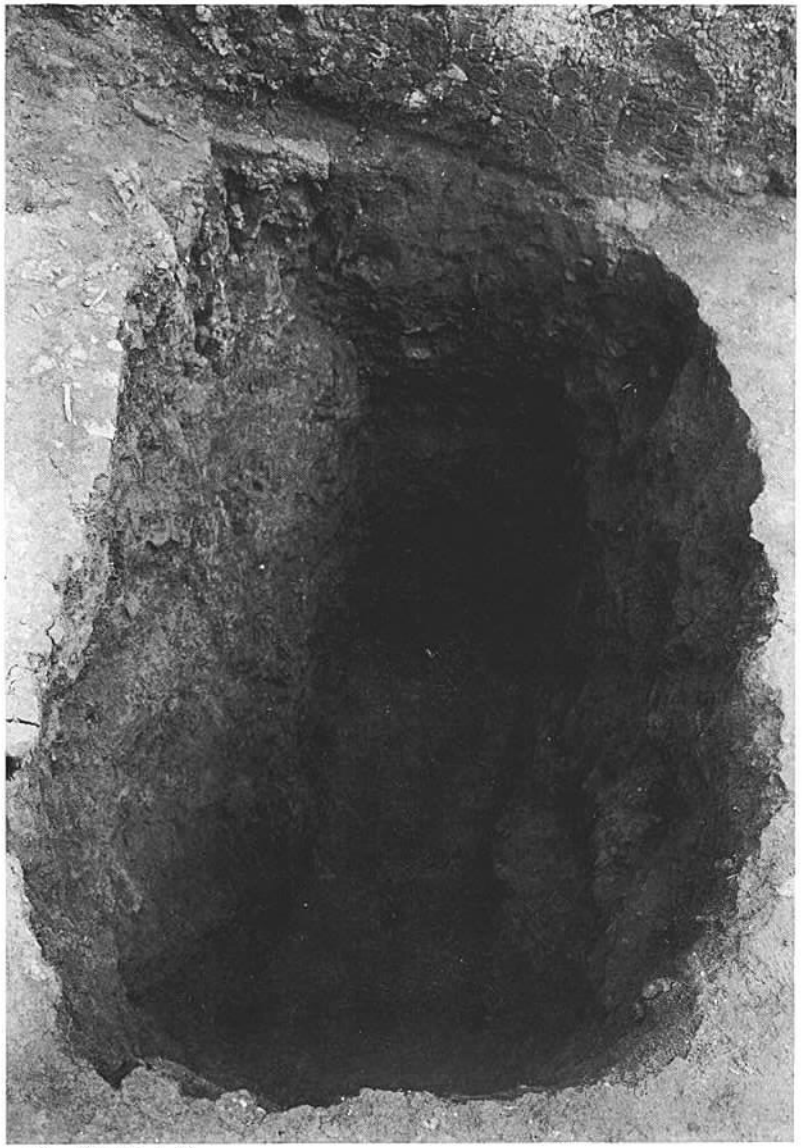
(1) 第3号土壙



(2) 第7号土壙



(1) 第6号土壙



(2) 第10号土壙

(1) 第 9 号土壙

(2) 第12号土壙

(1) 第11号土壙

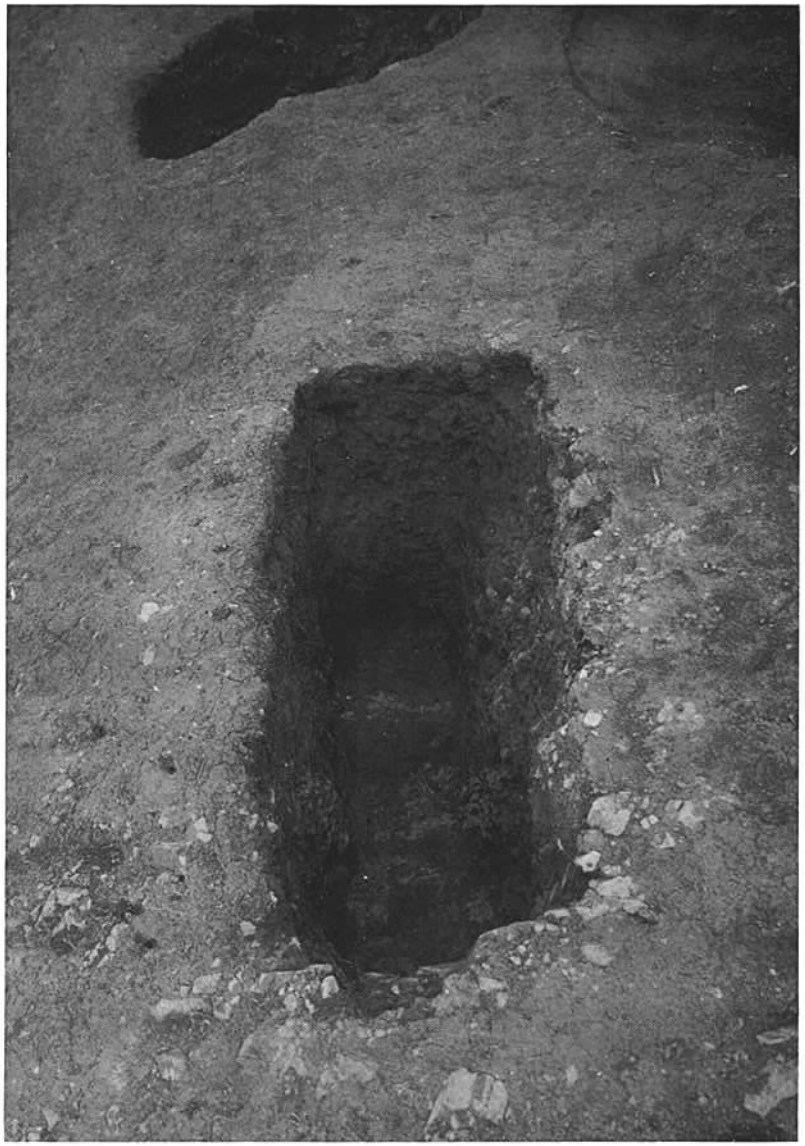
(1) 第17号土壙

(2) 第13号土壙

(2) 第15・18号土壙

(1) 第14号土壙

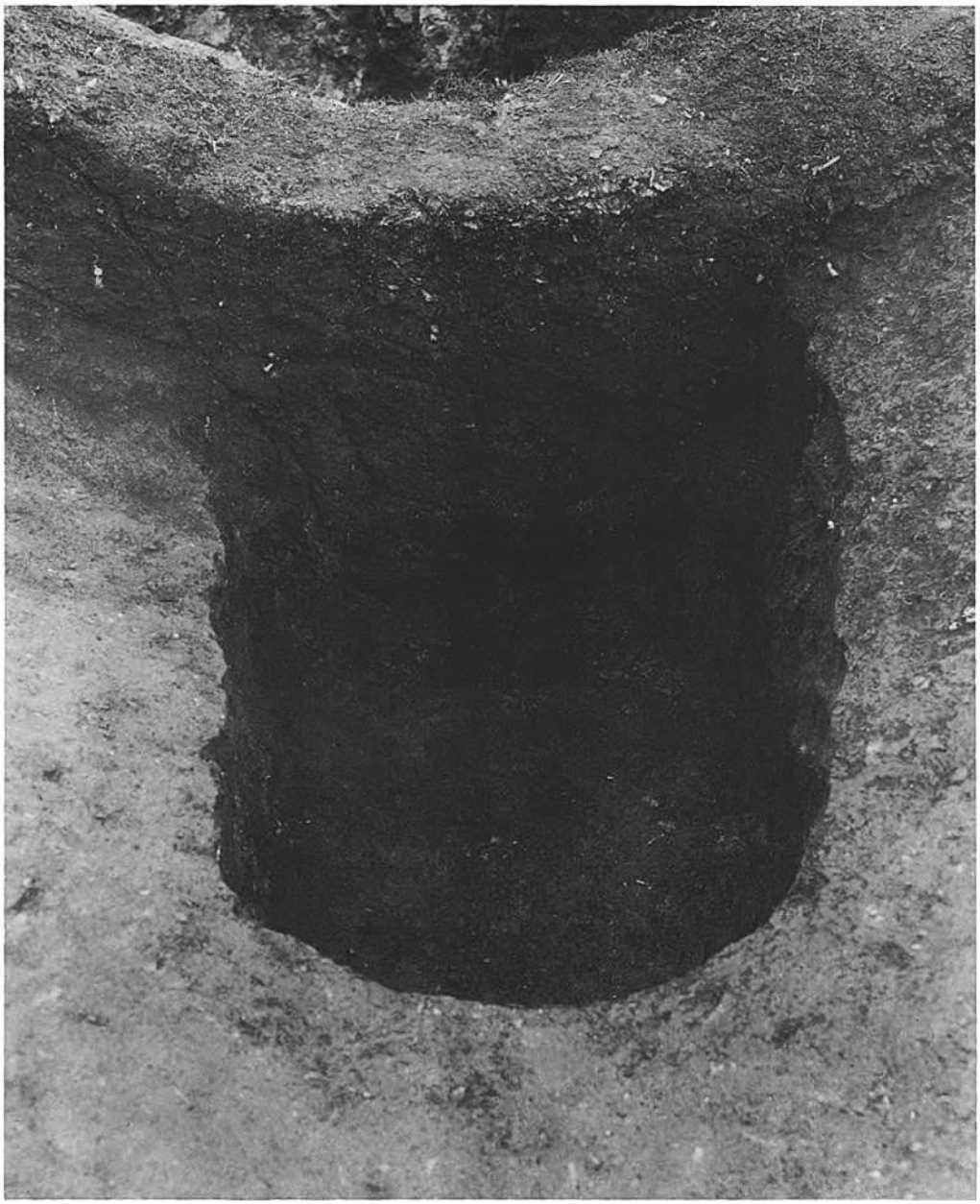
(2) 第19号土壙



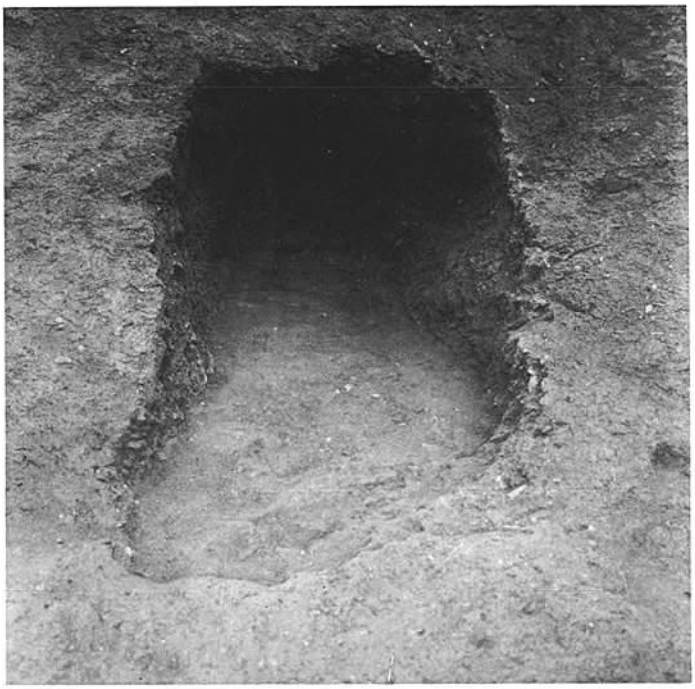
(1) 第16号土壙

(2) 第22号土壙

(1) 第21号土壙



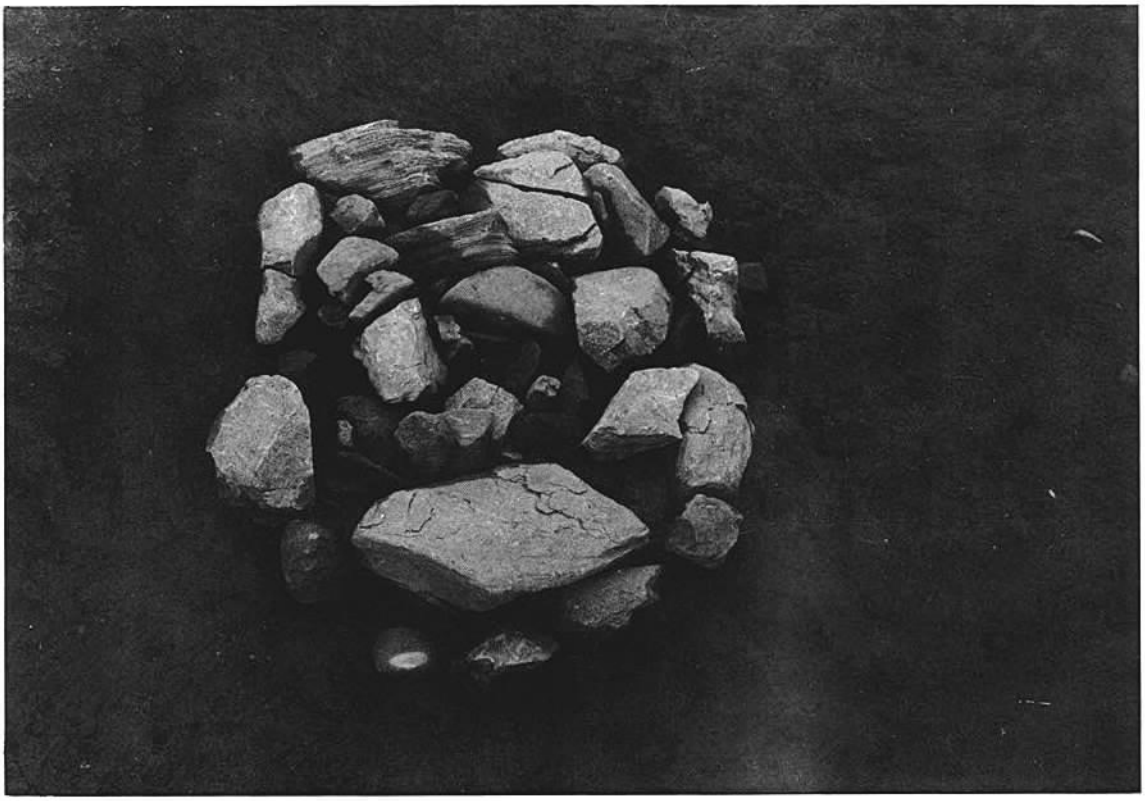
第23号土壙と３号墳の切り合い状態



(1) 第25号土壙

(2) 第26号土壙

(1) 第28号土壙



(2) 第29号土壙

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅺ―

昭和52年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町1―1

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— XI —

付　　図

1 9 7 7

福岡県教育委員会

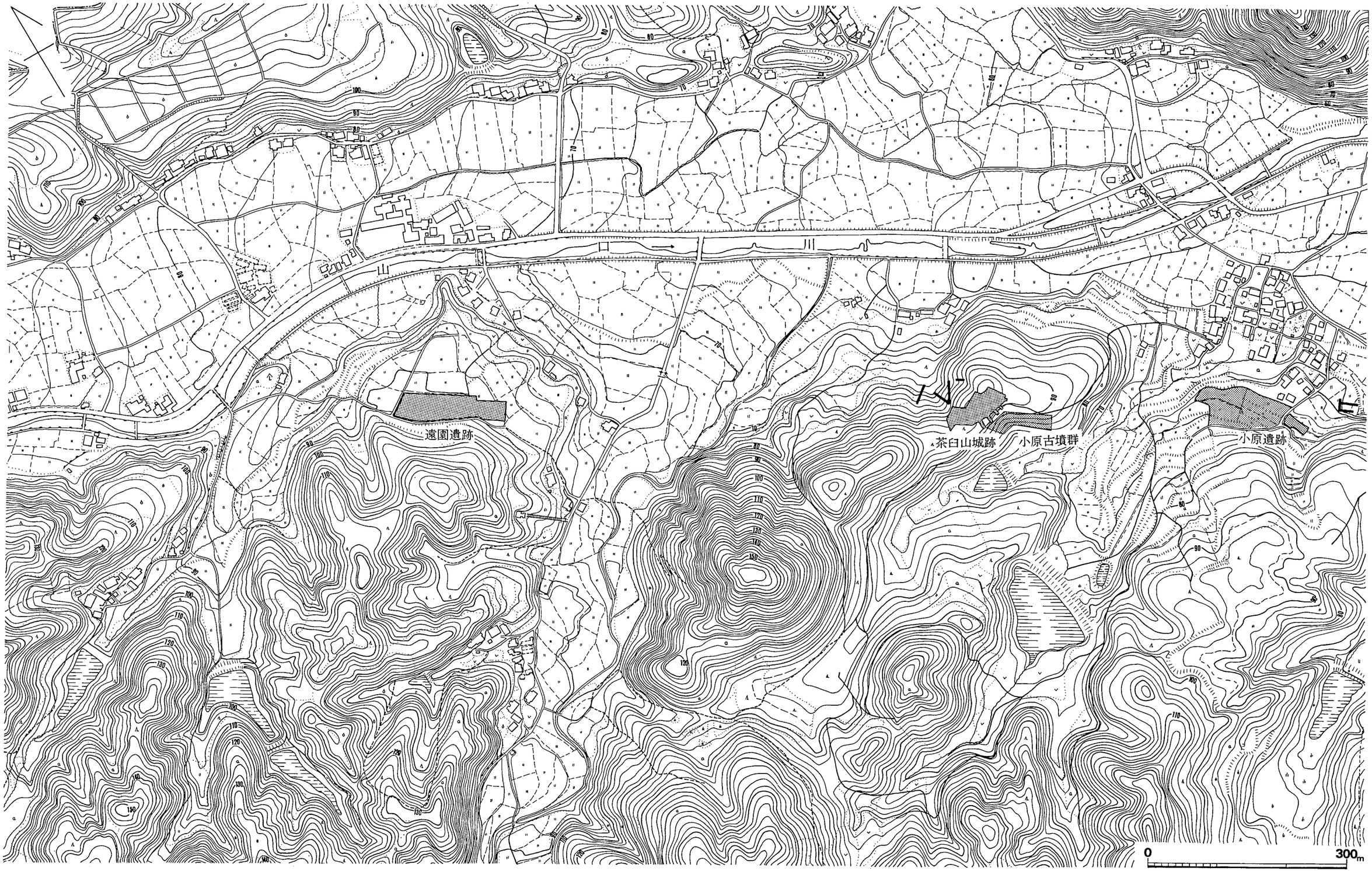


Fig. ① 遠園遺跡・茶臼山城跡・小原古墳群・小原遺跡周辺地形図

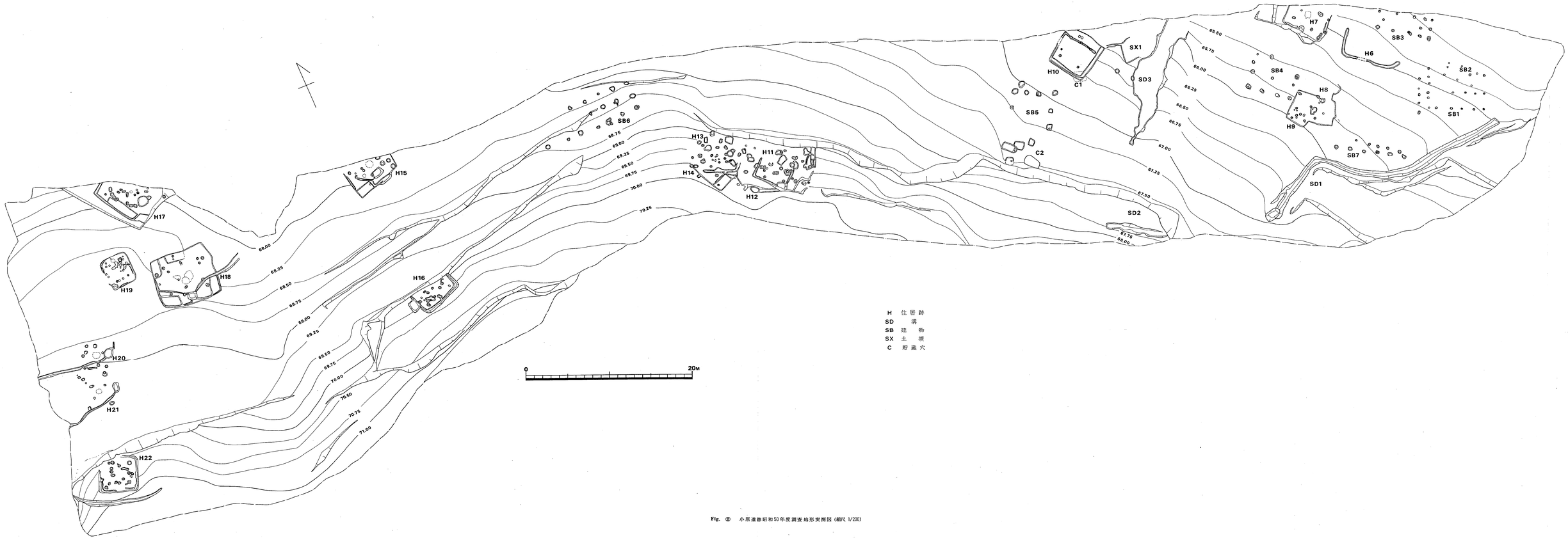


Fig. ② 小原遺跡昭和50年度調査地形実測図（縮尺 1/200）

Fig. ③ 小原遺跡昭和50年度調査遺構配置図（縮尺 1/200）

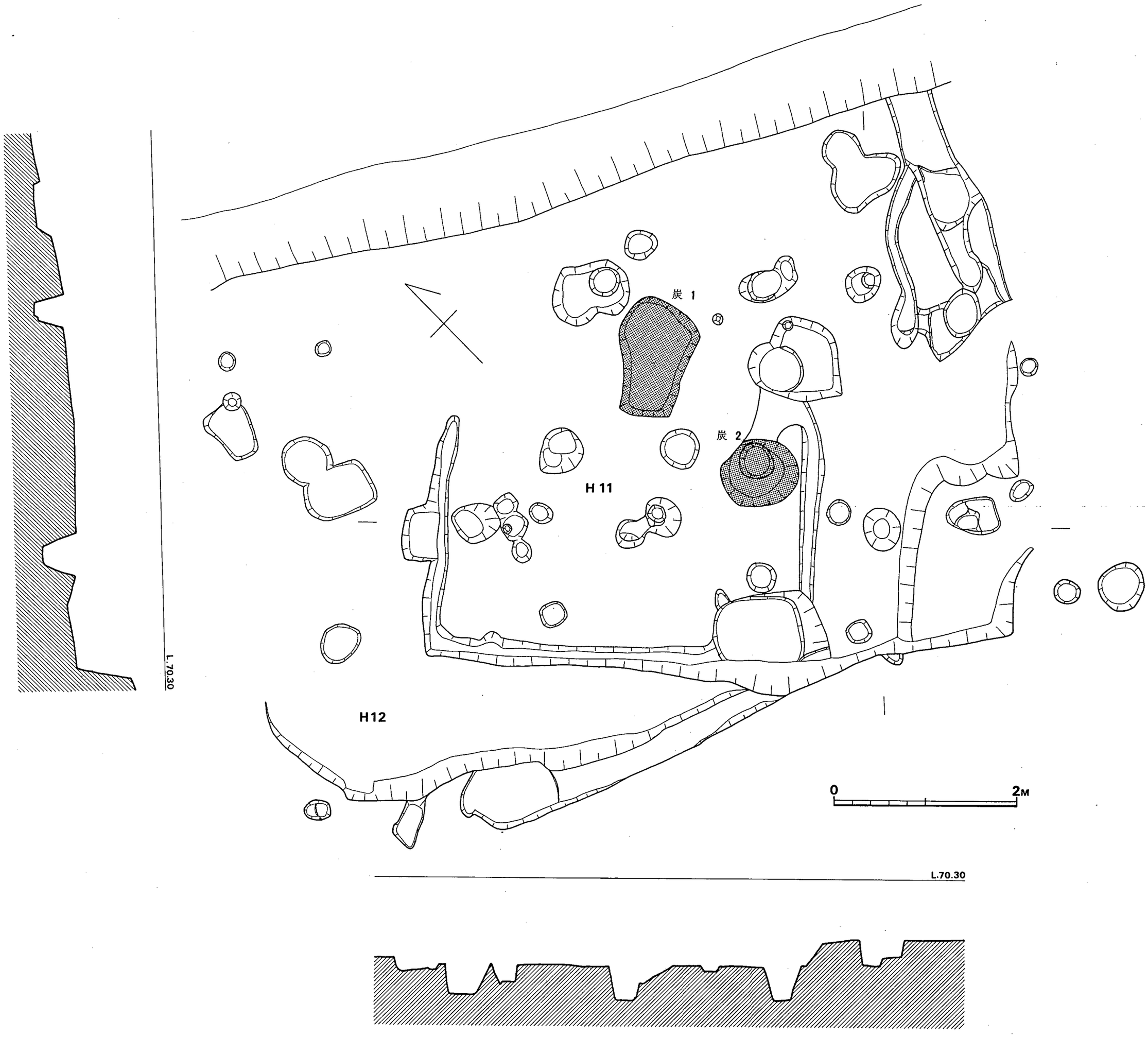


Fig. ④ 第 11・12 号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

Fig. ⑤　第 13・14 号住居跡実測図（縮尺 1/40）

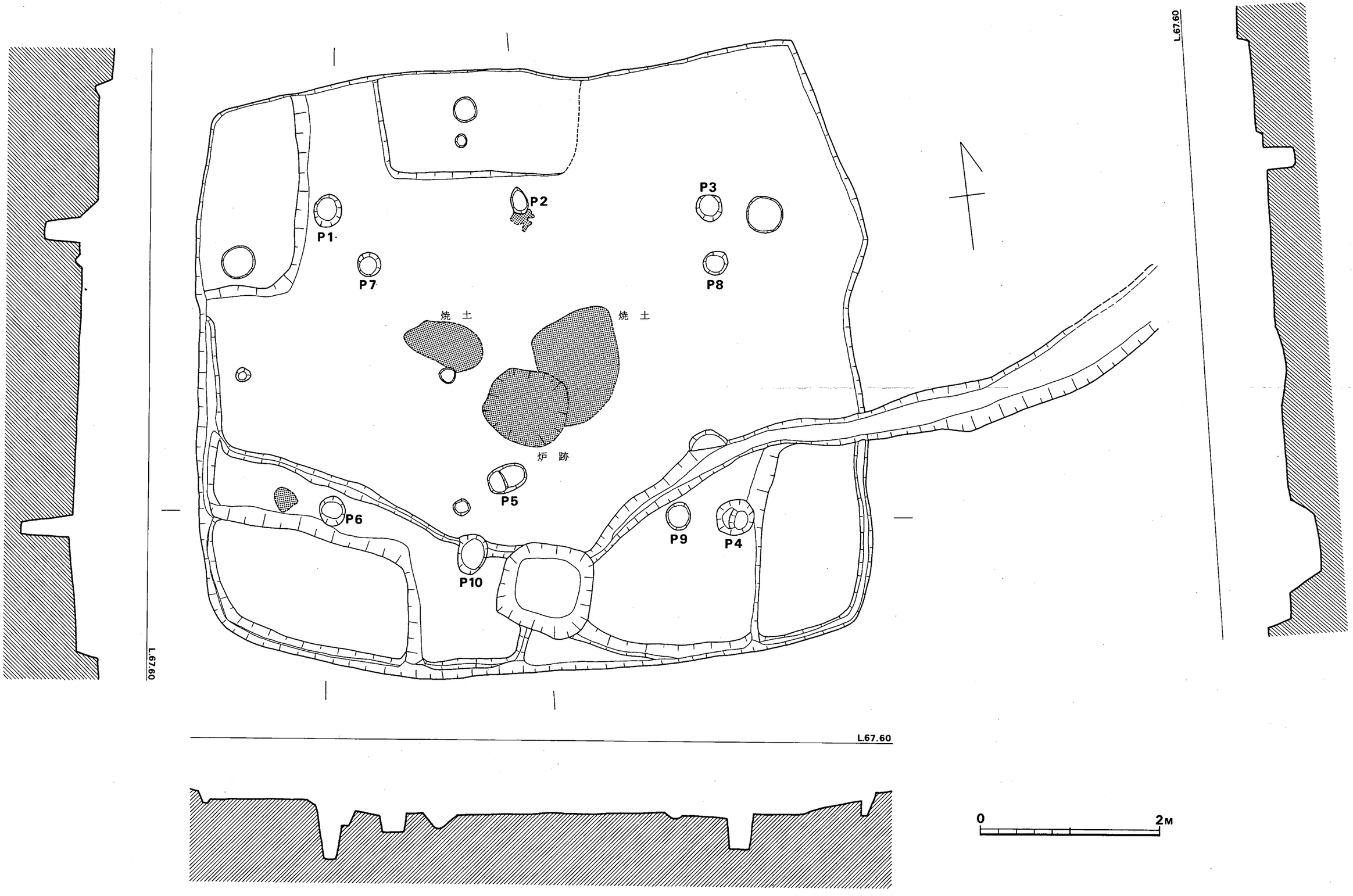


Fig. ⑥ 第18号住居跡実測図(縮尺 1/40)

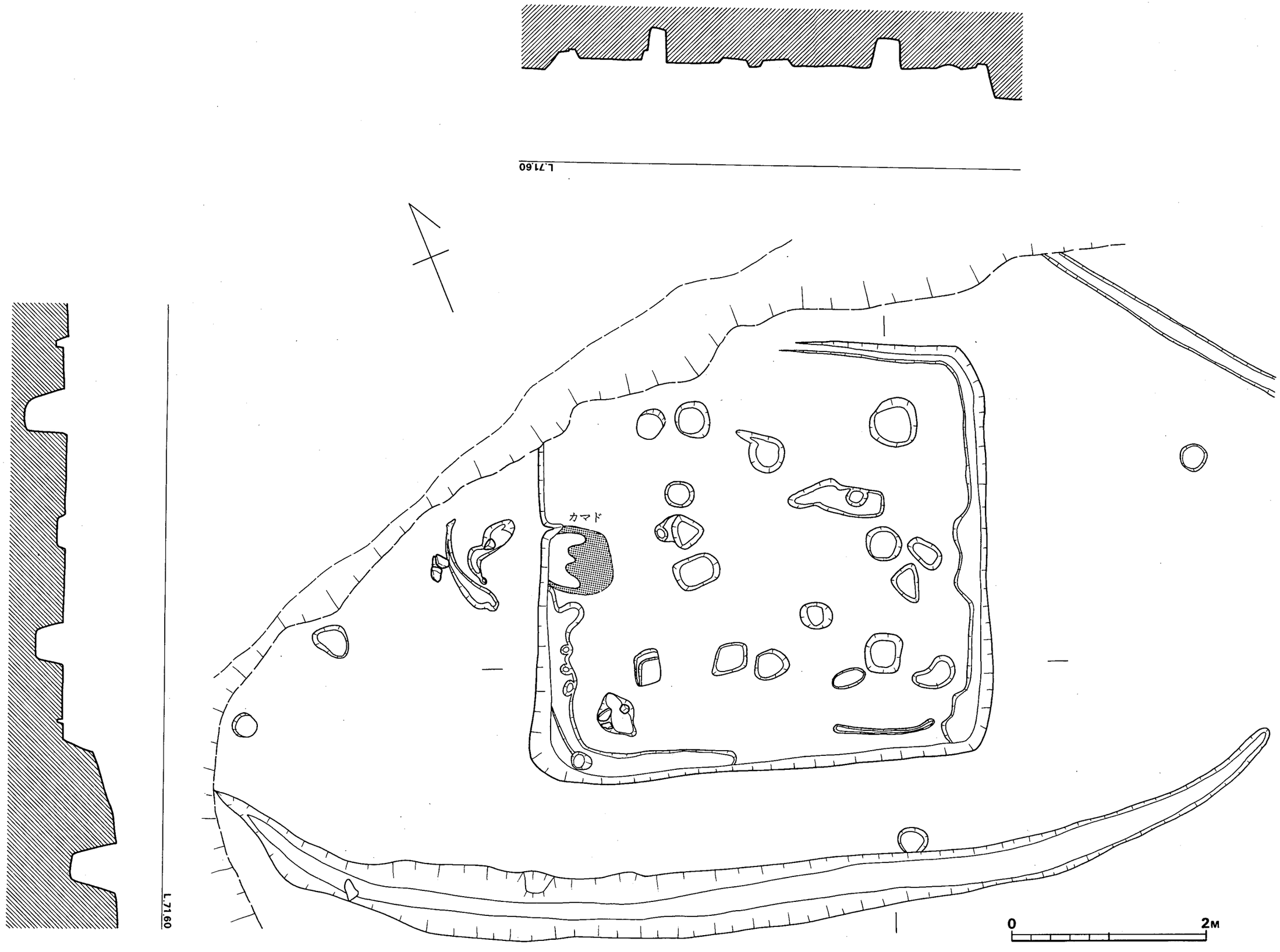


Fig. ⑦　第 22 号 住 居 跡 実 測 図 (縮尺 1/40)

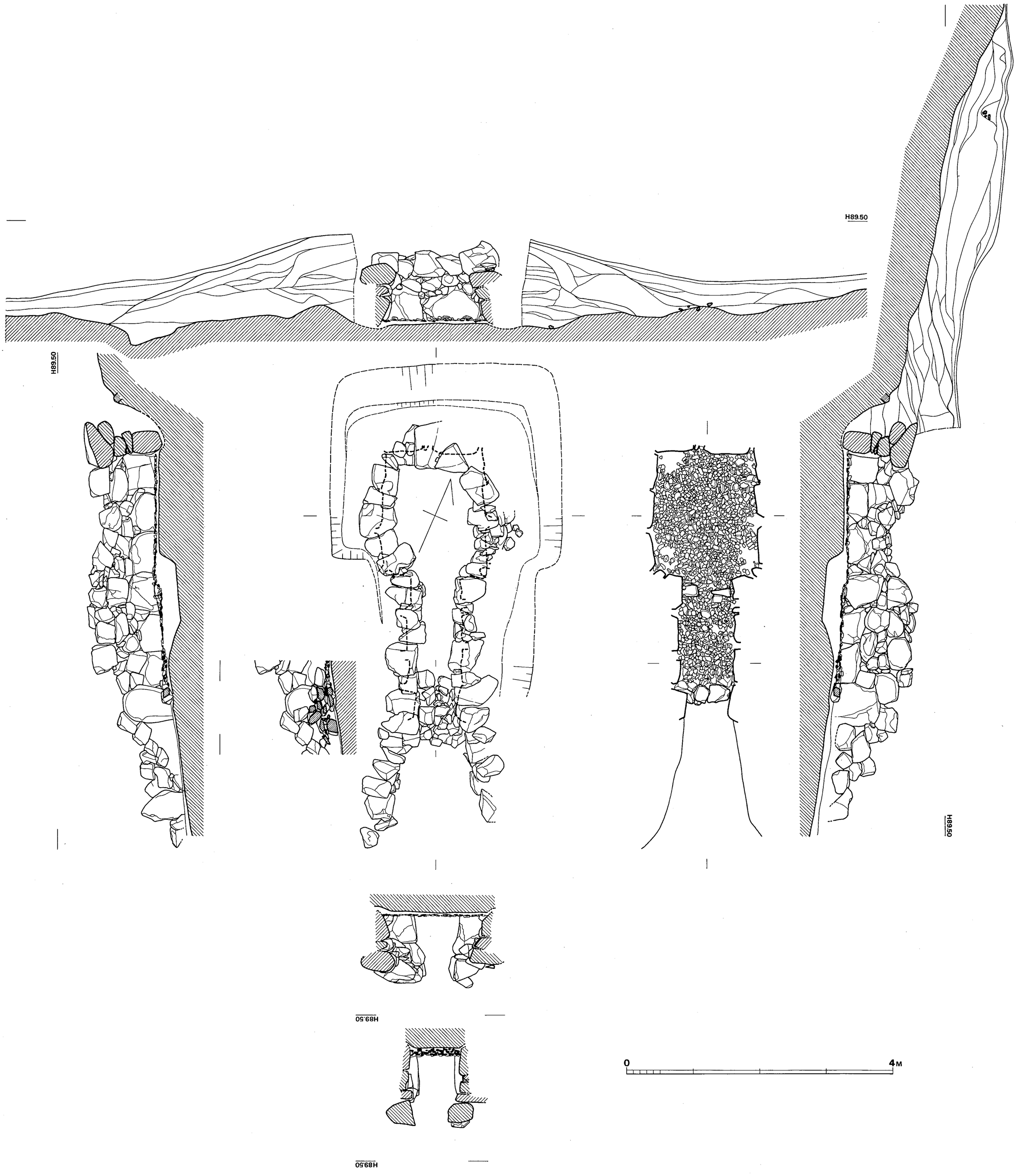


Fig. ⑧　小原1号墳石室および墳丘断面実測図（縮尺 1/40）

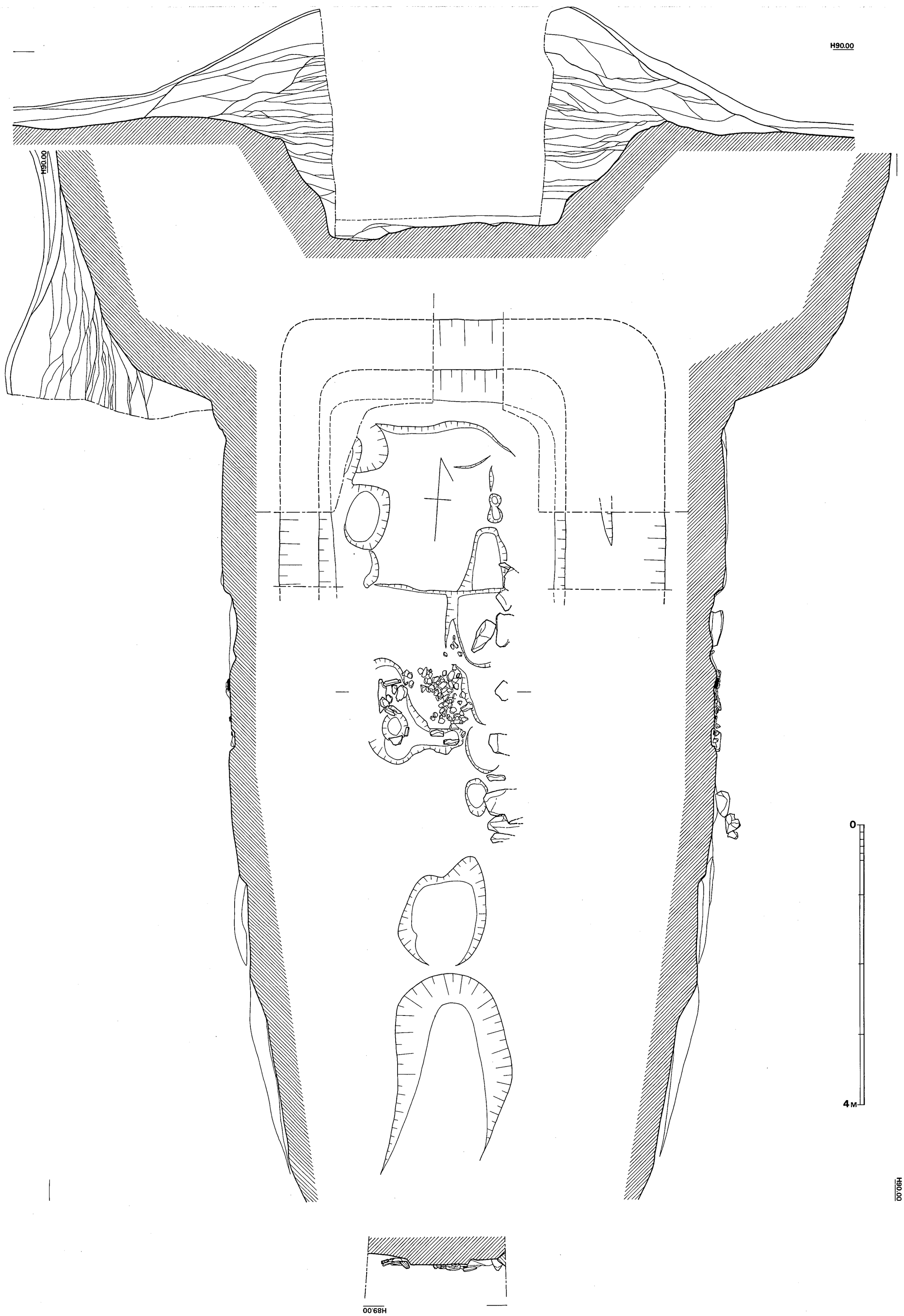


Fig. ⑨　小原2号墳石室および墳丘断面実測図（縮尺 1/40）

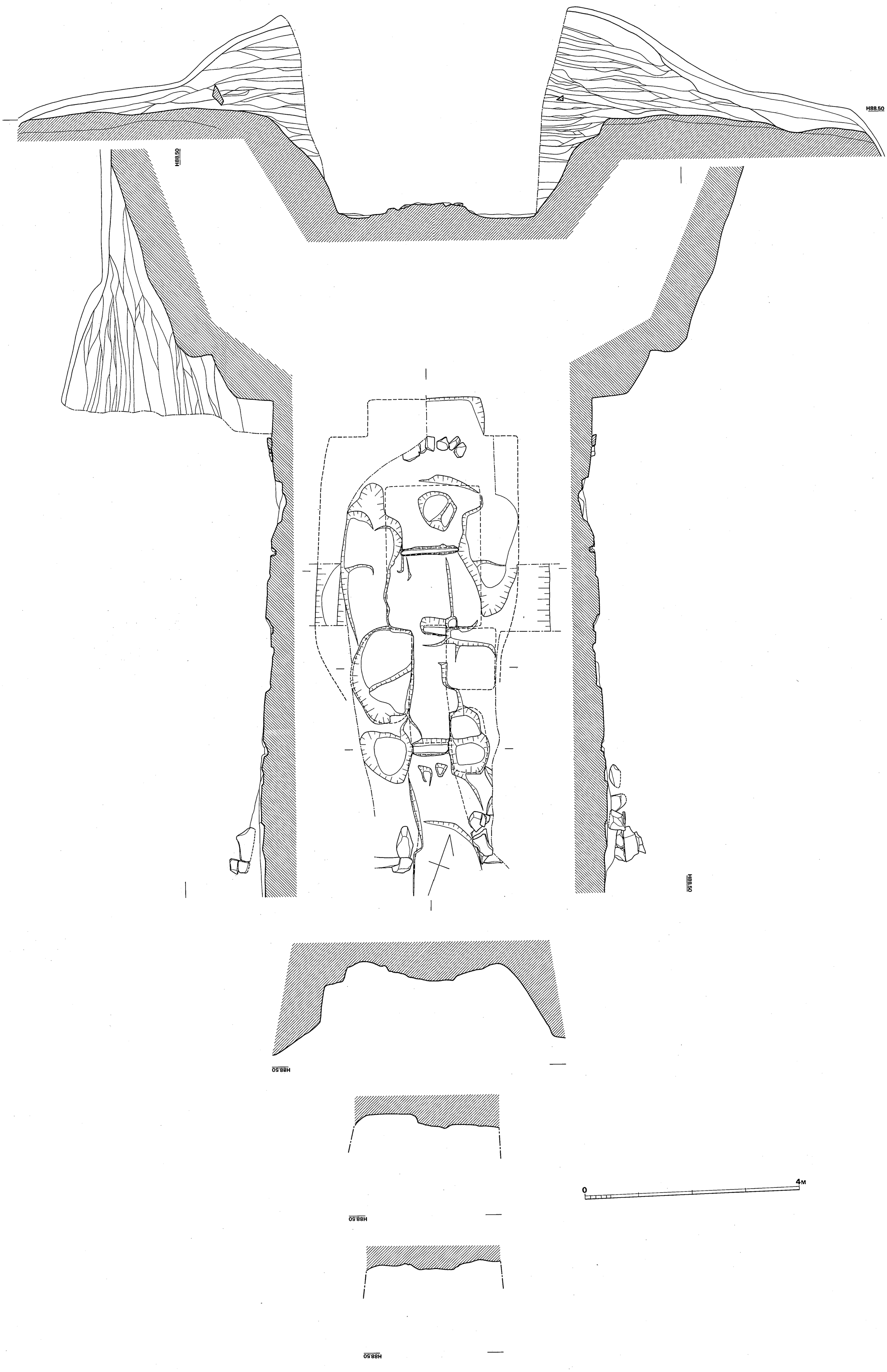


Fig. ⑩　小原3号墳石室および墳丘断面実測図（縮尺 1/40）

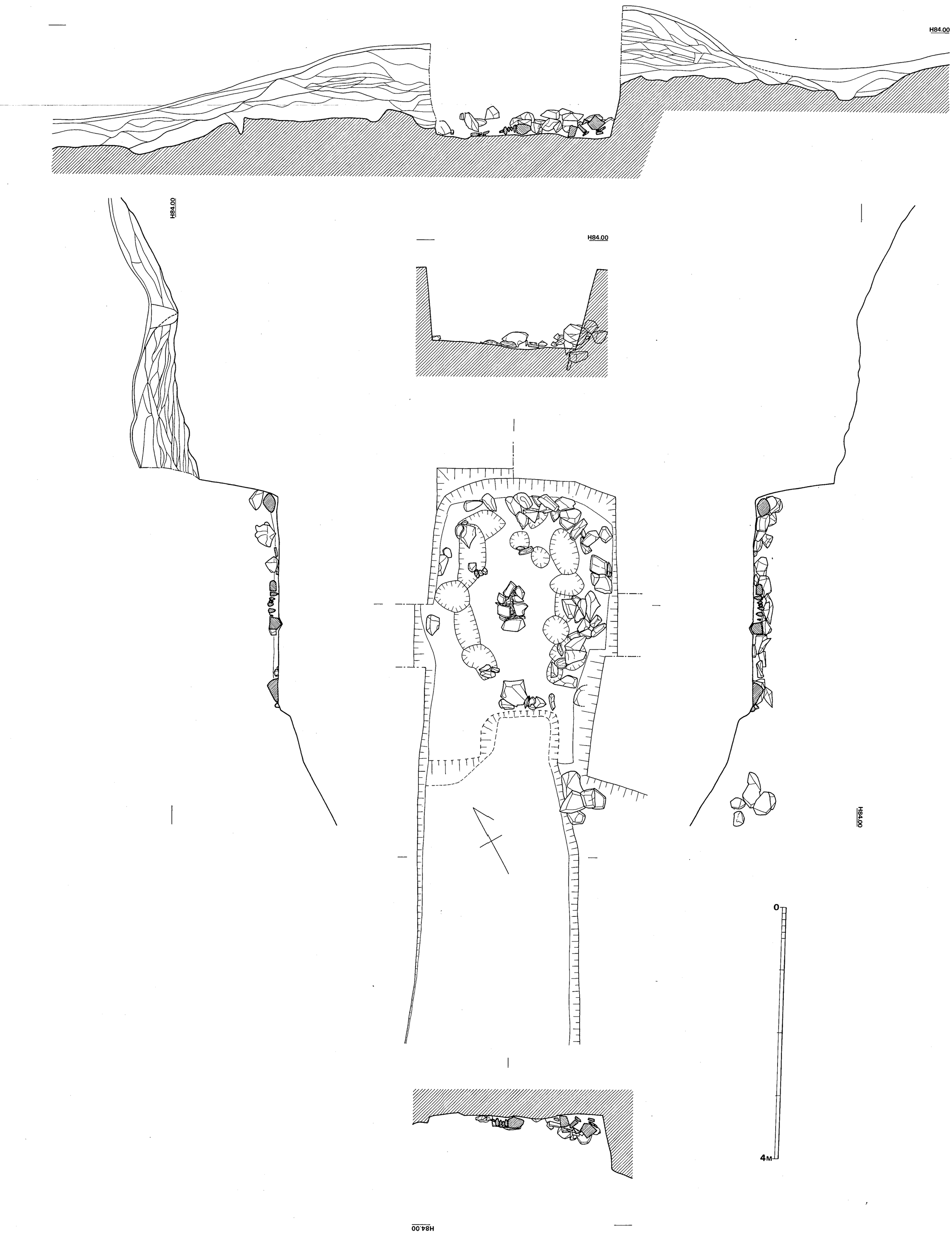


Fig. ⑪　小原4号墳石室および墳丘断面実測図（縮尺 1/40）

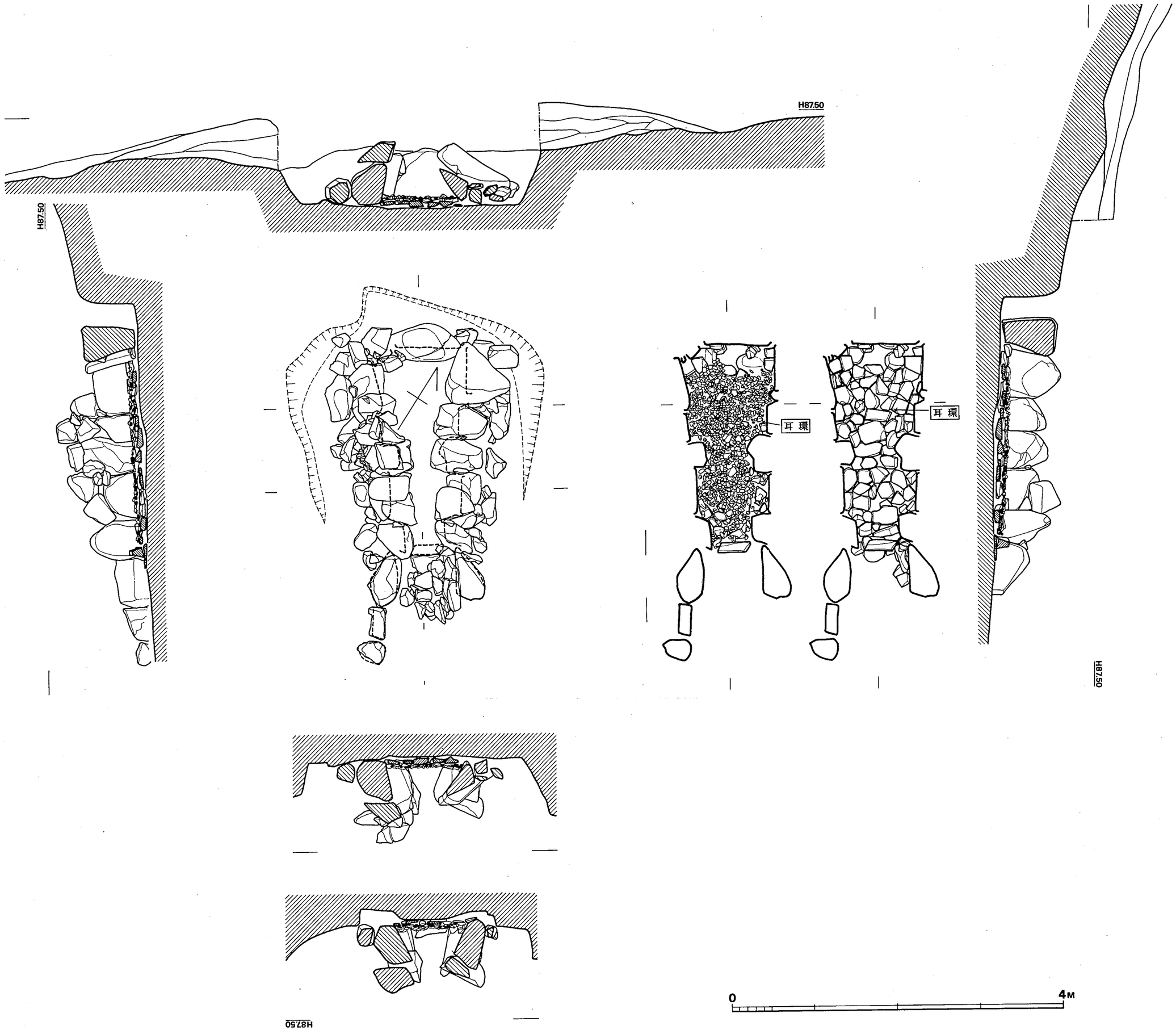


Fig. ⑫　小原5号墳石室および墳丘断面実測図（縮尺 1/40）